

砂洲の謎

アースキン・チルダース

S. Tajima 訳 ver1.0 © 2021

【前書き―この本の成り立ちと著者について】

先年（千九百二年）の十月、友人の『カルザース』が私の部屋にやって来て、当面秘密にするとの誓約のもと、この本に書かれている冒険全てについて、率直に話してくれた。それまでは、私は彼の友人たちと同じ事しか知らなかった。つまり、彼は最近ヨットによる航海を、ある『デイヴィス』氏と行い、それが彼の性格と習慣に大きな印象を与えたというものである。

私は、その探索の主旨と自分の結末の予測、そして物語自体が興味深く、生き生きと語られるのに、非常に深い感銘を受けた。

彼の物語の最後で、航海中に発見した重要な事実は、遅れる事なしに適切な当局に報告済みだと述べている。当局は、丁寧^{ていねい}に対応したものの、最初は信じる気がなく、しかしその内、諜報活動の情けないほどの貧弱さに気付いた様で、その後彼の情報を、大きな国家危機を防ぐために有効活用した―彼はそう思っている。

私が『彼はそう思っている』と言うのは、危機は疑いも無く当面回避されたが、当局が足を動かして、闘ったか否かは明らかでは無く、発見された秘密は、我が国の疑いだけでは危機回避効果が無い類のものだからだ。

例えそうであろうとも、その件は当面は収まり、また読者には明かされる個人的理由により、彼と『デイヴィス』氏は、明らかにそれで話を収めてしまいたかった。

しかし事象は彼らの決定を再考させる様に進化した。あのような危険を犯し、努力してドイツ政府よりもぎ取り、非常に素早く我が政府にもたらされた情報は、我が国の政策に本当に一時的影響しか与えなかったのである。

国家の安全が実際考慮されていないという結論に達し、私の二人の友人たちは、彼らの話しを公にしようと決意、この点について『カルザース』は私に助言を求めてきたのだ。

大きな問題は、名誉ある名前を持つイギリス人を不名誉に巻き込むのをどう避けるかである。そこで、非常に注意深く、個人が特定されない様にしないと、無実の人、特に若い女性が痛みと軽蔑に苦しむことになる。実際、本当に少しの真実と山の様な虚偽が混じった面倒な噂が広まりつつあった。

これらの問題点を比較しながらも私は、絶対に公開する方を支持する。個人的な不利益について、私は、扱いにより無効化できると考える。公共的視点からは、国民の常識に任せれば良い結果が得られるに違いない。そこで、出版が合意に至り、次の問題点は『カルザース』と、『デイヴィス』氏の取る形である。始めは、その暖かい人間性という内部から、明白な基本的事実のみを取り出し、記述するという案が示された。

私はこの方法に強く反対した。第一は、現在の噂を静める代わりに悪化させるだろうと言う点、第二は、その様な形式では物語は説得力に欠け、結局失敗となる点である。人々と出来事は分離不可能である。回避、要約、圧縮は読者にでっち上げの絵空事だと思わせてしまう。私は大胆な方法を考えていて、物語は事実をありのままに出来るだけ細かく述べるべきだと主張した。楽しませる事を考え、率直、正直に記述、より広い読者を引き寄せるのだ。匿名性さえ望ましく無い。しかし、ある用心は不可避である。

話しを短くすると、彼らは私に助力を求め、そうする事に決めた。私が本を編集し、『カルザース』は彼の日記を提供し、全ての細部を詳述、『探索』―彼らはこう呼んでいた―の全ての段階を彼の視点から語ることになった。『デイヴィス』氏は海図を持参して、私と会う事になり、カルザースと同様の作業を行う。全ての物語は、前者の口から語られ、ユーモアや間違いも、明るい面も暗い面も、起こった通りに記述される。ただし、次の様な点には制限を加える。実際の年は変更され、名前はすべて架空であり、私の依頼で、イギリス人の身元について、適切な隠蔽を行った。

さらに、これらの人々は現在我々の中で生活をしている。従って何か、軽くふれるだけとか、躊躇した書き方があったとしても、編集者を責めないで欲しい。知られていようが知られていまいが、無礼をさけるため、言い過ぎるよりは言い足りない方がいいと思う。

E.C. 千九百三年、三月

第一章 手紙

外界から閉ざされ、長い間孤立した生活をせざるを得ず、顔を合わせるのは現地人だけと言う人達が、誇りを保ち文明から脱落しないよう、毎日夕食時には着替えたという話しを読んだことがある。

私はある年の九月二十三日の夕方七時、ペルメル¹の部屋でそんな気分と多少の自意識を持ちながら着替えていた。自分の気分を、彼らの話しと比較するには時期や場所がちよいどいいと思ったし、むしろ曖昧なビルマ総督よりも分かり易いだろうとも思う。何しろ、彼は感覚も鈍り、性格も粗野になっていたかも知れないし、自然の中に一人というのは確かだ。ところが私は、まだ若くて、環境もライフスタイルもまずまずだし、有力な知人を持ち、所属すべきクラブのメンバーであり、確かで有望な未来が外務省にあると思っている。そしてロンドンの社交界の様子もわかっているのに、九月は、孤独を強いられると見えた時の苦難は独りよがりと言われようと、許されるべきであろう。

私は『苦難』と言ったが、実のところはそんなものでは済まない。殉難者^{じゆなんしや}というのは、普通、それを歓迎もしているのだが私にはもうその時期は過ぎてしまっていた。八月の中頃には皆たいそう同情もしてくれ、寂しがってもくれたのに、それがだんだん減り今はもう期待できない。

私がモーヴェンロッジパーティーに行けなかったので、皆、残念だと言ったのを知っている。仕事の都合でどうしても欠席せざるを得ないと書いた手紙に、レイディ・アシური²は丁寧にも自ら残念だと返事を下さった。それには『私たち、あなたが今どのくらい忙しいが存じ上げております。どうか根を詰め過ぎない様に。皆、大変残念に思っております。』とあった。

友達は次々に遊びときれいな空気を求め、手紙を書く約束し、ご愁傷^{しゆうしょう}さまと言って、夏休み入りした。彼らが沈んでいく船から逃げ出したのを見て、最初の一二週間はみじめな自分を楽しんでいたともいえるが、今は自分の世界は天国のさわやかな風と同じだ。

私は、残された五百万人のために、気の利いた安っぽい風刺を込めた作品を書いた。自分の立場にまつわるペーソスをほのめかし、しかし自分は十分広い心を持っているので、シーズンオフのロンドンで繰り広げられる光景や人々は知的興味を引き起こすなどともっともらしい内容だ。

¹ ロンドンの官庁街につづく高級住宅街。

² レイディは貴族の妻や娘の称号。日本語には対応する言葉がないので、このまま記す。

私は、完全に疎外^{そがい}されてしまう方がましだと思っていたが、私同様の運なのに極く当たり前のような顔をして
いる連中もいて彼らにそのかさされ、多少は体も動かした。しかし勤務時間後のボート遊びなどは、日ごろから
川遊びはやかましく、俗悪だと思っており、特にこの季節は最悪なので参加はしない。こんな状況なので新鮮な
空気の連盟には参加せず、[□]が誘ってくれた川沿いの家をシェアし、朝オフィスに通って来るというのも断った。
週末の一二回は、ケント州のケイツビーのところにしかけたが、ほどなく彼らは邸を人に貸して海外へ出かけて
しまった。結局この程度の中途半端なことでは私には慰めにならなかった。

風刺を書くのも続かなかった。多くの連中が感じる『新アラビアンナイト』に出て来るような冒険をして
みたくて、ソーホー³とかさらにその奥までも行って見た。でも暑苦しい土曜の夜のラトクリフ通り⁴の
いかかわしい酸えたようなにおいのする店に一時間も居て、隣の太った暑苦しい女が生ぬるい黒ビールを自分だけ
でなく、つれている子供にも飲ませてるのを見ればもう十分だった。

九月の最初の週には無意味な気晴らしをあきらめ、みじめだが、偉そうにはみえるオフィス、クラブそして自分の
部屋の往復に戻った。そして最も苦痛に満ちた試練、つまり自分が必要とされる筈の世界というのは、結局自分が
いなくても廻っていくのに気付き始めた。

レイディー・アシュリーが私に、居なくて寂しいと言うのはともかく、私の考え抜いたアイデアに対する、党の
[□]氏からのかなり遅くなった返事『ちょうど狩りが始まったところなので、急いで：』というのを見て、邸のパ
ティーも私が居なくても特に問題ないことを思わせた。レイディー・アシュリーが『皆、貴方が居ないので：』の
中の『皆』にアンダーラインをつけたとしても、この私のことを大して気に掛けた連中はいないのだろう。

従妹のネスタが『今頃ロンドンで焼かれているなんて怖ろしいでしょ。でも、そんなにも重要で面白い仕事を
なさっているんだから。(あの小娘め！)』と書いてよこしたのにはまいったな、傷は深くはないけれども。

これは私が親戚や知り合いの中に育てて来た無邪気な幻想、特に一昨年、去年と食事に連れて行った、あの私を
信じ、称賛した娘たちがい、私自信も信じていた架空の話に天罰が下ったようなものだ。

実際のところ、私の仕事は面白くも重要でもない。他の連中が煙草を吸っている時にはそこに居て、誰かさんは
十月一日づけで帰任するとか、十二時から二時までは昼食のため不在、他にすることの無い時には、秘密度の低い
領事館報告などの要約を、重要案件としてスケジュールに入れること位だ。

³ ロンドンの歓楽街。

⁴ ロンドンのイーストエンドと言われる地域。切り裂きジャックで名を馳せたホワイトチャペルの隣。

私が夏休みも取れないのは国際的緊張とかのためではなく――最も後から思うとこれは確かにあったのだが、――離れた国の権力者の気まぐれが、咀嚼^{そじやく}されて下級官吏に伝わり、気をつけて準備した夏休みプランを吹き飛ばしたのだ。私の場合にはあの、ホワイトホール⁵の暑さが大好きな⁵に仕事を任せるといふ小さな目論見がふいになった訳だ。

私の苦々しい思いは、ディナーのために着替えている時に気にかけていたことで満杯だった。

あと二日での死んで腐敗していく街から解放され、私の奴隷のような境遇も終わる。ところがだ、皮肉の極めと言うべきだが、どこにも行く場所が無いのだ。

モーヴェンロッジからは、皆田舎へ帰って行く時期だ。あの邸のパーティーで、誰かが婚約したという噂は、私がいらないからと言って何も問題が無いという事実を証明してしまい、聞きたくもない話だった。私が大した男では無かったために負けたという思いがして、自分が惨めな冷笑家になり下がる気がした。

その時は、未だあちこちから有ると思つて、七月に断つてしまった遅い招待を思うとあざけられた気分だ。

少なくとも一つはまだ招待に応じることでもできると思つたが、

これも考え直したらと言われたわけでもなく、こちらからお願ひするのと、幾人かの有力な奥様達からの招待競争の賞品として出かけるのとは、雲泥の差なのだ。

私の家族は父が痛風のためエクサンプロヴァンスに滞在している。そこに行くのは『苦し紛れの』手段で、そんな月並みな事はしたくない。それに彼らもじきにヨークシャーの邸に戻る筈であるし、私も故郷では有名人ではない。つまり、私は、悲嘆にくれていたのだよ。

階段を上がってくる足音を聞いてウィザーズが部屋に入つて来ると思つた。(私が、いつの間にか面白いと思わなくなったのは、住んでいるブロックの使用人たちが、夏のシーズン中にはマナーがゆるむ事だった。)

ウィザーズは勿体ぶつた顔でドイツの切手の貼つてある『至急』と記してある手紙を差し出した。私は、着替えをすませ、金と手袋を用意していた。腰をおろして封を切ると、憂鬱の中にもちよつとしたスリルと好奇心が感じられた。封筒の裏側の隅には『すまないが、もう一つ追加がある。ケイリー・ニールソンでサイズーインチ八分の三の船用ねじを二個買つてきて欲しい。亜鉛メッキしたものだ。』とある。

以下がその内容だ。

⁵ ロンドンの官庁街。国防省や外務省もここにある。

ヨット『ダルシベラ』

フレンスベルク、シュレースウィツヒ・ホルスタイン、九月二十一日

カルザース君、

きつと君は僕からの手紙に驚くだろう。何しろ最後に会ったのはもう随分昔だからね。

それに、僕がこれから頼みたいことが、きつと君の意向に合わないとも思っている。君の夏の計画は知らないし、もしロンドンに居る様なら、また鎧をつけて戦場にでいて、逃げ出せないだろう。

だから、ひよつとして、もし君がこちらまで来て一緒にヨットを楽しむ気になるかもしれないと思って書いている。それに、鴨猟も出来るだろうし。君は猟がすきだったよね。

それに、確かヨットに乗った経験もあったように覚えている。もっともこれは確かではないが。バルティック海のこの辺り、シュレースウィツヒ湾は最高のクルージングができるところだ。

特記ものの景色で、もう少し寒くなれば鴨も沢山やってくる時期だ。

僕は八月始めに出発して、オランダを経由、フリースラント諸島を通過してここに來たのだ。連れが帰らねばならず、どうしても相棒が要る。まだ船を引き上げたくないのですね。

もし、君が来られるなら、どの位嬉しいか言う必要はないよね。もし来られるならこの郵便局あてに電報をくれないか？ フリッシンゲンに上陸、あとは陸路でハンブルグというのが一番便利なルートだと思う。僕は、ここでヨットを多少修理し、君の汽車が付くまでには用意完了とさせる。

銃と、No. 4の弾薬を十分持ってきた方がいい。それにランカスターの店に寄って、僕のものを持って来てくれると助かる。オイルスキンの防水服が要るね。十一シリングの方がいい。それと

ジャケットにズボンもだ。『ヨット用』ではない方がいい。それに絵をかくなら道具一式もだ。

君はドイツ語がネイティブ並みなので、これもきつとすぐ役に立つと思う。こんなにも指図をして申し訳ないが、僕は運がついていると勝手に感じていて、君がきつと来るとも思っている。

とに角、君と外務省に榮えあれと願うよ。では。

敬具。アーサー・エ・デイヴィス

プリズムコンパスと煙草を一ポンドほど持ってきてくれないか。

⁶ 精度の高い方位磁石。当時は主として軍用。

⁷ 原本には Raven Mixture とあり、たばこの一種と思われる。

この手紙は私にとって重大事件となる物だった。もっとも、私が、これをポケットに押し込み、元氣なくクラブへの憂鬱な道へ出た時には、全くそんなことは思っていなかったが。

ペルメルでは、正装した知人たちともっともらしい挨拶をするような時節では無かった。眼につくのは、公園から遅く帰ってくる疲れた連中で、乳母車と暑苦しく汚れた子供たちがその後をだらだらとついてくるのや、田舎からでてきた観光客が、陽が暮れ行く中、ガイドブックを見てどの建物が何だと言っているのや、警官、それに荷物馬車くらいである。

それにクラブも臨時のよく知らないところである。私の属している二つのクラブとも清掃のため閉鎖され、こういう不運を天が私に特別に用意して下さったのである。

こんな時、『使用許可』されるクラブというのは、いつも妙に快適ではなく、いらいらさせる。大していい客もどこか変で、服装を見ただけでも、何でいるのかと思わせる。いつも読んでいる週刊誌は置いてないし、食事はまづ、換気なんて考えたことがないのだろう。今夜は、こういう悪意が私を抑圧するのだ。それでも、自分のどこかにかすかに光を放つ気分を感じたが、理由は分からない。

光の元がデイヴィスの手紙の筈は無い。九月の末にバルティック海でヨットに乗るだと！ 聞いただけで寒気がするな。楽しい連中が周りに居て、近くにホテルがあるカウズなら問題ないけれど。八月にフランスやスコットランド沿岸をエンジン付きヨットで航海するのはいい。でも、彼のヨットはどんな船だろう？ あんなどころまで行けたのだから、それなりの大きさはあるのだろうが、確かデイヴィスはそんなに金持ちでは無かったから豪華な装備なんて無い筈だ。

そんな事を考えている内にあの男のことを想い出した。彼とはオックスフォードで一緒だった。私の親しい仲間では無かったがカレッジは社交的で、結構彼とは顔を合わせた。頑強で元気がよく、でも単純で控えめだった。実際、自負するような能力も財力も無かったが、気に入っていた。でも人の成長期には。後で付き合いなくなる連中とも気が合うものだ。

私たちは同じ年に卒業した。三年前である。私は二年間フランスとドイツに言葉を習得するためにかけた。

彼はインド高等文官になりそこね、弁護士事務所勤めた。そのあとはめったに会う機会が無いが、彼は私を友人として扱い、絆を保っていたのは知っている。しかし私たちの道はもう分かれていたのだ。私は、今の道に意気揚々

と飛び込み、社交界に華々しく登場していらい彼とは会ってもおらず、もう共通点は何もないと思っていた。彼は私の友人たちを誰も知らないし、服装も構わず、さえないやつだと思っていた。彼はいつもボートや海につながっていたが、私の考えるヨット乗りではなかった。大学時代、彼がどこかで拾い上げたボートで東海岸の怪しい干潟を一週間ほどうろつくという、むさ苦しい案に乗りそうになったことがある。それ以外は何もなく、今は葬式のようなディナーに臨んでいるわけだ。しかし前菜を食べている時、彼について聞きこんだのを想い出した。また聞きだったかも知れないが何だったかが思い出せない。

私が食事の味を感じる頃に出した結論は、こんな事に気を取られたのを含め、すべてはアイロニーの塊であり、それ自身味を醸し出しているというものだ。

自分の楽しみにした計画の残骸と、殉教に失敗した後に、退屈などでもいいやつから十月の凍えそうなバルティック海で過ごさないと慰められるとはね！

でも私が誰もいない悪趣味な喫煙室で煙草を吸っていると、またそのことを考え始めてしまった。何があると言うのだろうか？ 私には、代案がないのは確かだ。でも、このとんでもない時期にバルティック海に身を沈めるなんて言うのは悲劇を完成させるのは間違いない。

手紙を引っ張り出し、その衝動的な響きの文章を追うと、この薄い紙がこの飽き飽きしたクラブの部屋に、吹き付ける新鮮な空気、高揚した気持ち、そして悪友気分をもたらしたのを感じた。

よく読んでみると、手紙は不吉な予兆で満ちている。『特筆すべきながめ』？ 秋分の頃の嵐と十月の霧はどうなる？ まともなヨット乗りなら今頃はクルーを解散している筈だ。『鴨が飛んでくる』？ 曖昧だ、なんのつもりだろう？ 『十分寒くなれば』？ 寒さとヨットの組み合わせなどあり得ない組合わせだろ？ 相棒が引き上げた。なぜ？ 『ヨット向けでは無い方がいい』。だってヨットで着るんだろ？ ヨットの大きさや快適さ、そしてクルーの事などまったく意に介していない。この書いてないところに何があるのか？ それに、一体何するつもりで『プリズムコンパス』が要るんだ？

幾つかの雑誌をペラペラとめくり、流行遅れで気のいい爺さんがせがむのを断りきれずに、フィフティで遊び、そして部屋に戻った。私に好意的な天が助けようとしているのに全く気付かず、しかもその不器用なやり方を煩く思いながら、ベッドに入った。

第二章 ダルシベラ

二日後に私がハンブルグ行き切符をポケットに入れ、フリッシンゲン行きの汽船の甲板をうろろしていたと言うのは、一体どういう風の吹き回しかと思うかも知れない。しかし私の気持ちを見抜いたならそれ程不思議ではない。人は私が信念で武装して、理解しがたい懺悔の旅に出たとも思うかもしれない。こんなことが私の知り合いの耳に入れば、ちよつとした噂になり、私の本当の友人たちは、ひよつとして多少後悔するかも知れない。しかし私にとっては、遠くで目立たず、好き勝手に楽しめるといふ訳だ。

実の事を言うと、手紙が届いた次の日、朝食を食べている時、まだあの説明できない光を感じていて、得失をもう一度考えて見る気になったのだ。私が気付かなかった重要な点は、デイヴィスに合流するというのは、妙な計算の無い、良心に基づく行動だということだ。彼は相棒を必要とし、本心から私に声をかけてきたのだから。私はこの理由だけで行こうかと思った。極めて結構な言い訳であり、その朝オフィスに出ると、大陸版ブラッドショー⁹で汽車の時刻を調べ、カーターに言いつけて大型のドイツの地図を広げさせフレンスブルクがどこか探させた。後の作業は私自身でやってもいいのだけど、カーターに何か仕事を見つけてやった方が良かったのだ。彼がまごまごして、いくら経っても見つけれないのも、見ていて面白かった。地図に書いてあることの殆どについて、私はそれなりに分かっている。ドイツにいた時間を無駄にした訳でも無いし、それ以降にした事、しなかった事すべて助けになる。

私は、ドイツについて、人々、歴史、発展そして未来について強い関心を持っていた。ドレスデンとベルリンにはまだ友達もいる。フレンスブルクで六十四年のデンマーク戦争を思い出した。¹⁰カーターが見つけた時には、私は何をいつけたか忘れてしまっていて、あの美しいと聞いているシュレースウィツヒ・ホルスタイン地方に行く機会があるかどうかを考えていた。

しかし、訪れるにはあまりにも条件が悪く、季節は遅すぎる、相棒はあまりにもつまらい、他にもたくさんの否定的要素があつて、もし行くならば、私の絶望を証明するためだと思った。

それでも、私には決心するに十分な理由があると思った、ズがスイスから、人を不快にするほどきれいに日焼け

⁹ ブラッドショーの鉄道時刻表のこと。

¹⁰ この結果シュレースウィツヒホルスタインはプロイセンの管理下になった。

して帰ったのを見たのが最後の一押しかもしれない。彼は言った、「やあ、カルザース、ここに居たのかい？ もうとつくにしかけたのかと思っていた。でも運がいいよ。車を走らすにはいい季節だし、雉もそろそろだからな。とにかく外は暑くてどうしようもないよ。カーター、ブラッドショーを取ってくれ。」（ブラッドショーは大した本だ。要りもしない時でも、何となく習慣となっている。季節の終わりに猟銃や釣り竿をいじる様だ。）

昼食時には、もう躊躇は無かった。私はカーターに言いつけデイヴィスに電報を打った。フレンスブルク郵便局宛だ。

『了解した。二十六日、午後九時三十四分着予定』
三時間後には返事がきた。

『大歓迎。リッピンヅル製No.8 ストープを持ってきて欲しい。』

意図不明な、危険な指示だ。内容にもかかわらず私はちよつと寒気を感じた。全く、わたしの決意はぐらつき続けていた。夕方、自分の猟銃を見て、これは雷鳥用だったと想い出した時、デイヴィスの手紙にあった自分の雑多な任務のリストを見た時など。私の役割は、絶望の末の放浪あるいは、親切な同志な筈なのに、これでは使い走りではないか。しかし、オフィスを出ると男らしく任務を遂行する事にした。

ランカスターの店で私が彼の銃の事を告げると、当然の様に取り次がれ、かなりの金額を前払いだと言われた。銃とNo.8を私の住居に届ける様指示すると、私は頼まれた煙草を買い、他人のために密輸する時にいつも感じる妙に無礼を働かれた気分になった。デイヴィスは、英国銀行かだれでも知っている店の様に言ったが、『船舶用ネジ』――大体これさえ何のことだから――を扱うケイリー・ニールソンがどこにあるんだろうと思った。

どうも重要そうだったので、とにかく店を探した。それらは『ちよつとした修理』に関するものだと思っていた。まずデパートでリッピンヅルNo.8 ストープを置いているか聞くと、出て来たのは大きな見にくい鉄製で、大きな二つの石油タンクが付いていて、燃やしたらさぞ石油臭いと思わせるものだった。情けない気持ちで金を払い、効率も悪いだろうと思ったが、電報で品物を追加してきたその使用環境を想像してみた。

私がヨットを扱う部門で船舶用ネジについて聞くと、置いてないという。しかしケイリー・ニールソンには確かに置いてあり、店はマイノリーズ¹¹にあると言う。東にとんでもない距離にあり、フレンスブルク並みで倍も面倒な場所だ。それに今から出かけても、もう店は閉まっていると言う。仕方なく、すっかり消耗して、今日の

¹¹ ロンドン塔近辺の地区。

店巡りを終え、馬車で部屋に帰りつた。夕食のために着替えるのも止め（これ自体事件だ）地下にあるキッチンに肉料理を注文、その晩、後は暗い気分、ひたすら荷作りと、遺書でもまとめるかの様に色々と書き留めた。

最後の無風の夜は過ぎた。八時に朝食をとるのを見てウィザーズは驚いたが、九時半には酷い空気の中、オールドゲイトまで地下鉄で行き、空ろな気持ちで船舶用ネジをやっとの事でチェックしていた。八分の三インチと亜鉛メッキをやっと説明、ネジをどう使うのかも分からず、信用して買って来た。

十一シリングのオイルスキンに関しては、店の者が言うにはいつもそこを紹介するとかで、裏通りにある怪しげな店を示された。店ではやたらと宝石を付けた汚いユダヤ人が取り出した、やっと人間の形の半分と分かる臭いオレンジ色の板みたいなのを前に値段交渉を始めた（始めは十八シリング）。酷い臭いに閉口して、私は十四シリングのところで手を打ってしまった。怪しげな二つの茶色の包みをもって、急いでオフィスに戻った（何しろ汽車は十二時発車だ）。一つの包みはオフィスの中の空気中にすごい臭いをまき散らし、カーターが気を利かして、私の住居に送りましようかと言ったほどだ。それは殆ど失礼なくらいに、私がそいつで何をするのかと訊いた。しかしそれはいつも酷い羨望またはプライドを傷つけるコメントをするので、放っておいて答えなかった。

私は後でプリズムコンパスを忘れたのを思い出し、マイノリーズに電報を打ち、すぐに送ってもらう手配をした。店に行ったら、サイズだとかメーカーだとか色々尋問されたいと思うと、ややほっとした。

返事に『在庫なし、測量機器メーカーに問い合わせたし。』とあった時には、不思議に思うと同時に何となく納得もした。デイヴィーの依頼の中で、コンパスは一番私を不安にさせるものだった。彼のいうのは測量機器だと分かってても、これはさらに困惑を増すものだった。

その日、最後の要約『事実を延ばし、捻じ曲げた、牽強付会な野合』を作製すると、私の予定を渡した。そして温和で、心の広い臨時の上司の^ねに挨拶をすると、彼は心から私に夏休みを楽しんで来いと言った。

七時には私の荷物と、買い込んで来た扱いにくい訳の分からない荷物の山を馬車に積み込んだ。あの怪しげなプリズムコンパスを探して、二店ほど寄り道をしたので、危うく汽車に乗り遅れるところだった。

プリズムコンパスは結局ヴィクトリア駅近くの、宝石屋みたいに目立つけど、実際は質流れ品を扱う店で中古品を見つけた。

八時三十分には私の足からロンドンの埃を払い、十時半には、既に言った通り、フリッシンゲン行きの汽船の

甲板をうろうろしていた。遠くバルト海目指して当てのない空虚な夏休みのために。

昼間の雷雨で冷やされた西風に追われ、テムズ河口を過ぎ、汽船は北海の暗い海へと出た。途中、明滅する灯台船の列を通過するが、それらは帝国の首都に通ずる海道を、睡眠中の軍隊を見守る歩哨のように見張っている。星は明るく、ケント岬からの夏の香りが汽船の野卑な臭いにかすかに入り込む。夏の気候は健在なのだ。自然は、私の苦行に付き合う気は全くないように、平然と穏やかに私の間違いをからかうつもりらしい。

抗^{あらが}えない様な平穏な気分と離脱感があり、肉体的に快適なのに気付くと、恩知らずと言われようとも、このまま退職してやろうかと思わせる。神経をすり減らしてきた都会人が単調な日常から逃れると、まずこんなもんだろう。しかし、この考えを安全にしまい込むと私は自分の意思をまず自己を中心として考えてみた。もし天気がもてば、まずまずの二週間をデイヴィスと一緒にいることになる。もし崩れる――そしてきつとそうなる――時は、私はあやふやな鴨猟を中止する。いずれにせよ、冬という事実は、ヨットを陸に上げるのに十分な理由だ。この季節に海の上を国に向かう訳には行かない。そうすれば私は残ってドレスデンあたりで何週間か過ごせる。こういう計画を腹に収めると船室にはいった。

フリッシンゲンから東に向かつてハンブルグに行き、それから北に向かつてフレンスブルクに行った。翌日の暑苦しい旅の話はここでは省略する。堤防と風車をみながら静かな運河を渡り、うるさい街を無精ひげのまま通過し、夕暮れ後には汽車はあちこの駅に停車しながら平地を進んだ。十時によりやくフレンスブルクに着き、体はすっかり硬く、節々が痛んでいたがプラットフォームでデイヴィスに、やあ！　と言っていた。

「来てくれて、非常に嬉しいね。」

「こちらこそ、誘ってくれて有り難い。」

我々二人ともやや気まずかった。うす暗いガス灯の明かりでさえ、彼はヨット乗りには見えなかった。白いズボンでも青のサージでもない。真っ白いカバーのヨット帽、陸の人間を素敵な船員に変えてしまうあの大事な小物はどこなんだ？

この印象的な制服を旅行かばんの中に、いつでも使える様にしていたのが、妙に罪深い気がした。彼は着古したノーフォークジャケット姿だ。汚れた茶色の靴、灰色のフランネルのズボン（もしかして元は白か？）そして普通のツイードの帽子だ。

握手した時の彼の手はごつごつしてペンキが付いていた。もう一方の手には包みを持っていたが、取り替えた方

がいいような包帯をしていた。

お互いに瞬間的にチェックをし合った。彼は、目立たぬよう、急いで私を精査した。昔の想定通りか確かめる様に、そして心配と多分若干の称賛を感じたのだろう。

顔はもちろん覚えていて、しかし何か違う。きれいな青い目、解放的でしっかりした目鼻立ち、あまり知的でない額もそのまま。きびきびとして速い動きも変わらない。だが、違いはあるのだ。しかし、ぎこちない戸惑いは終わり、暗い光の下で、どうでもいい事を気兼ねしながら話し、荷物を受け取るためにプラットフォームを歩いて行った。

「ところで」と彼は笑いながら言った。

「僕は今は人に見せられるような恰好じゃないんだけど、夜遅いから構わないだろう。一日中ペンキを塗っていて、やっと終わった処さ。明日は風があるといいんだが、最近はずっと静かだったのね。おい、凄い量の荷物を持ってきたね。」と私が荷物を受け取り始めると言った。

これが私の、素直にいう事を聞いてやっとここまで来て得た報酬だ。

「君が持つて来いと言ったんだぜ！」

「あ、僕はあれの事を言ったんじゃないんだ」と何かに気を取られながら言った。

「とにかく、あれは大変ありがたい。あれがストーブだね。この重さからすると、これが弾丸か。船舶用ネジもあるよね？ ま、無くても勿論、何とかなるのだけど。（気抜けて領いたが、気分はちよつと害した）でも締め紐より便利なんだ。それにここでは手に入らないんだ。あれが旅行鞆か。」と言い、心配そうに目測した。

「ま、いいさ。試して見よう。グラッドストーン型の鞆だけでは間に合わなかったんだよね？ 何しろディングーだし：ハッチを通るか、…」と考え込んだ。

「ま、とにかくやってみるさ。残念ながら馬車は無いんだ。遠くはないし、ポーターがいるからさ」
デイヴィスが私のグラッドストーンを肩に担ぎ上げ、包みを掴むと、怖ろしいほどの嫌な予感がした。

「乗組員はいないのかい？」と、私は力なく訊いた。

「乗組員？」彼は混乱したようだった。

「そうか、言っておくべきだったかも知れないね。給料を払うような乗組員は持ったことが無いんだ。すごく小さいボートだし。贅沢なのを期待してなかったよね。このところは一人で操船してきたんだ。一人雇っても役に立たなくて、単に面倒になるだけさ。」彼はこの恐ろしい事実を楽しそうに言った。私のナイーブな心配にはお構いなしだ。私は、動員されたという事だ。

「もう乗り込むには遅いんじゃないの？」と私は元氣なくいった。誰かがガス灯を消していて、ポーターはあからさまにあくびをした。

「ホテルに泊まろうと思うんだが。」緊張した一時の後、

「もちろん、泊りたけりやそうしてもいいさ。」とデイヴィスは困惑を隠そうとせずと言った。

「だが、ホテルまでこの荷物を運ぶのは得策じゃないぜ。(ホテルは皆港の反対側にあった。) どうせ明日朝ボートまで持って来なきゃならないしね。ボートは快適だよ。君は疲れているからよく眠れるさ。」

「荷物はここへ置いといて、鞆だけ持っていけば」と私は、力なく反論してみた。

「僕はいずれにしてもボートに戻らないと。陸で寝たことなんかないんだ。」と答えた。

彼は恐るおそる、しかし譲る氣がなく主張し、外交的決着に持ち込むつもりだった。胃が沈み込むような絶望を感じ、頭が麻痺して抵抗できなくなった。もうなるようになれた。

「行こう」と私は陰鬱いんうつにいった。

大荷物を担いでよろよろと、我々は線路を横断し港に着いた。デイヴィスが階段の方に先導し、草におおわれた踏板は下の方に陰氣に消えていた。

「デインギーに乗り込んでくれれば」とテキパキと言った。

「荷物を手渡すよ。」

私はびしょ濡れのもやい綱につかまり用心深く小さなボートに下りて行った。袖やズボンにヘドロの様なものがくっつくのが分かった。私が突然底に座り込み片足を水に突つ込むと「掴まって！」とデイヴィスは嬉しそうに言った。私はデインギーに何とか入り込むと指示を待った。

「ボートを岸壁に近づけて、その下の輪っかにしっかりと結んでくれ」と上から声が聞こえ、濡れたもやい綱が緩んで落ちてくると私の帽子を吹き飛ばした。

「結んだ？ どんな結び方でも大丈夫」

私がこの忌々しい作業と格闘していると、大きな暗い物が頭の上に迫ってきてデインギーの中に下ろされた。私の旅行鞆だ。それを斜めにと、ちょうど船の真ん中に収まった。

「うまく入るか？」と心配そうな声の上から降って来た。

「ぴったりだ」

「結構！」

デインギーを近づけておくため脂っぽいカベを引っ掻きながら、私は次々と荷物を受け取り、出来る限りうまく詰め込んだ。デインギーは低く低くと沈み込み、不安定な荷物の山は高くなっていった。

「受け取ってくれ」という声が最後の指示で、湿った柔らかな包みが私の胸にぶつかった。

「気を付けて、肉なんだ。もう階段の処に戻っていいよ」

私は苦勞して言う通りにするとデイヴィスが現れた。

「ちよつと荷物が多いな。大分沈んだ。でも何とかなと思うよ」と思案し、

「船尾に座ってくれ。僕が漕ぐから」と言った。

私は、どうやってこの怪物みたいなピラミッドを漕ぐのか、あるいは途中で沈没するのか、興味深々であった。

私は自分の席まで這っていき、デイヴィスは埋もれてしまった船を何度も引っ張って脱出させた。その度に全構造物が揺れ、我々は危険な位にローリングした。

どうやって彼が漕げる位置についてたか見当もつかない。しかし、最後にはゆっくりと動いて、水の開けた処へ出た。彼の頭だけが舳先の方に見えた。

我々は狭い入り江の頭の処から出て来たように見えた。後ろに大きな街の灯が見え、ガス灯で照らされた波止場の長い正面は左側にあり、あちこちに汽船の船体がうす暗く見えた。我々は最後のガス灯の光を過ぎると広い水面に出た。静かな風が吹き暗い丘が両側に見える。

「この峡谷のちよつと先に停泊しているんだ。あまり街に近づき過ぎないようにしている。それに便利な船大工も近くにいる。そこだよ、どの程度気に入ってくれるかなあ。」

私は起き上がった。我々は木に囲まれた小さな入り江に進み、小型の船のちらちらする光に近づいていた。その船のシルエットはだんだんはつきりしてきた。

「ぶつけない様にね」と舷側に近づいた時デイヴィスは言った。

すぐに彼はデッキに飛び移ると、もやい綱を結び私の側にやってきた。

「荷物を持ち上げてくれ、僕が運ぶ。」と命令した。

それほど持ち上げなくてもいいのが救いとは言え、重労働だった。他の問題が明らかになりつつあったので、あまりあてにならない救いだったが。

荷物がデッキに移し終わると、私もデッキに乗り込んだ。緩んだ肉の包みに躓くと、水が染み出ているに既に腐り始めているのが分かった。私が最後に、ヨットから下船した時のことを何となく想い出した。私の完璧な服装、

手入れされた小型ボートと良く訓練された船員、八月の太陽でワニスの輝く階段と真鍮の金具、整然とした真っ白なデッキ、船尾の天幕の下の子ケットチェア。今は、真夜中に汚い湿った肉と散らかった荷物との格闘。何というコントラストか！

苦々しさの仕上げは、今まで私がヨットについて気にする必要などなかった劣等感と無知が暴かれていくことだ。デイヴィスは私が旅行鞆を見ながらぼんやりしていると、快活に言った。

「先に下の船室を案内するよ。そしたら荷物を片付けて、寝ちまおう。」

彼は船室階段を駆け下り、私は気を付けてついて行った。パラフィン、料理、たばことタールの混ざった臭いが私の鼻を衝いた。

「頭に気をつけて」私が手探りでキャビンに入っていくと、蠟燭に火をつけながら言った。

「座った方がいいよ。その方がよく見える」

これは、嫌みをアドバイスにした様なものだ。ぶざまな格好で疑わしうに見回す姿は、まるで間抜けに見えたに違いない。うす暗い光の中で屈めた肩と頭は天井よりも床に近いように感じた。

「ね、座れば腰を曲げずに済むスペースはあるだろ（これは、その通り。私は背がすごく高い訳ではなく、彼は背が低い）」デイヴィスは安心させる様に言う。

「天井を部分的に高くしたヨットもあるんだけどね、僕は気にしないのさ。そいつはセンターボードケースだ。」¹²と私が足を延ばそうとして膝を角にぶつけると言った。

私はこのテーブルの下に隠れた、悪意に満ちた邪魔者に気付かなかった。またこれはテーブルの片方の足代わりになっている。そいつは長い三角形をしているようで、ボートの縦方向に沿って、ただでさえ狭い船室を二つに分割している

「見ての通りこの船は平底なんだ。センターボードを下ろさなければどんな浅い所でも平気で、それで天井が低い。水の深い処ではセンターボードを下ろして安定させる。だから殆ど、どこへでも行ける」

私はこれがどう役立つかわかるほど船の事は知らない、しかし理解した限りでは不安の方が増した。言葉の後の方はデイヴィスが兎小屋なみの低い滑り戸をくぐって船首に言ったときに聞こえた。彼はリップシンジルの使い古し、ガタガタになったものと思われるストローブにやかんをかけていた。

¹² 横流れを防ぐため、船底に下げる板。

「すぐに沸くよ、そしてらグロググでも飲むか¹³」と言った。

私の眼が暗さになると、廻りの様子が分かり始めたが、殆ど話すほどの事は無い。側面にクッションを敷いた長いシート、後ろ側は食器棚、その内一方は小型のサイドボードにするため半分ほどの高さで、取り付けた棚からグラスが下がっている。頭上のデッキは側面は極めて低い、真ん中辺は肩ほどの高さである。天窓のついた『馬車屋根』が船室にちよつとしたスペースを作っている。船室ドアの外側には跳ね上げ式の洗面台がある。壁の両側には網で作った棚があり、旗、海図、帽子、煙草入れ、芋の山その他雑多な物が放り込んである。

前部隔壁の向こうにはまちまちのサイズの本が詰め込まれた本棚がある。多くは逆さまに突っ込まれ、またカバーの取れた物もある。この下にはパイプ棚、気圧計そして音を刻んでいる時計がある。すべての木製の部分は白くペンキが塗られ、私ほどの偏見が無ければ、内部は魅力的で快適に見えたかもしれない。後部隔壁には何枚かの写真がピンで止めてあり、出入り口の上には若い女の写真があった。

「あれは僕の妹だよ」、私がそれを見ているとデイヴィスが現れ言った。

「さて、物を下ろすか」と言つて階段を駆け上がり、すぐに私の旅行鞆が入り口に現れた。そして無理やり押し込もうとしたが、

「どうも大きすぎるな」という言葉が下りてきた。

「申し訳ないけど、デッキの上で中身をだしてくれないか。空になれば下に押し込めるかも」

そしてうんざりするほどの荷物の山が私の身動きとれない足元に積み重なった。慣れない場所での屈みながらの仕事で背中が痛くなった。デイヴィスは下りてきて、自慢を隠さずに『寝室』（他のは『サロン』と言った）を示した。蠟燭をもう一本点けると二台の狭くて短い、毛布のかかった寝台が見えたが、シートはない。寝台の下には引き出しがありデイヴィスは、そのうち一つを私に使つていいと言った。明らかに私の衣装入れとしての特別待遇のつもりだ。

「荷物をだしたら、君の寝台に天窓越しに下ろせるよ」と言った。

「ところで、君の荷物全部をしまい込む場所がないかもしれん。もっと荷物を減らすことは出来な…」
「できなかった」と私は言った。

議論の馬鹿馬鹿しさに気付いた。二人の男が猿みたいに相部屋なのだ。議論の余地はない。

¹³ ラム酒の水割り。ここではお湯割りだろう。

「君が部屋をできれば僕も外に出られるよ」と付け加えた。

彼はこの口論で惨めなようだったが私は彼を押しつけて階段を上がり、月光が無くなりそうなか、あの忌々しい旅行鞆を開けた。いらいらして爆発しそうになりながら中身を手探りし、もうどうでもいいと感じながら、天窓から必要なものを投げ込むと後は知るもんかと思った。残りをデイヴィスに気付かれぬよう、また鞆に詰め込みベルトをかけた。そしてこの厄介者の上に座り込んで震えた。もう秋の冷え込みなのだ。

突然気付いたが、もし雨が降っていたらもっとひどい事になっていた筈だ。そう思っで見回すと小さな入り江はまだガラスの面の様、星は高くにも低くにもあり、幾つかの白い小屋の灯が海岸べりに見えた。

西にはフレンスブルクの光が見え、東には峡谷が広がり暗がりにつながっている。下ではデイヴィスが動き回り、レンチの音、何かを押し込みハンマーで叩く音が聞こえる。時々戸口から何かが放り出され水音を立てた。

私がどうしてそう思い始めたかわからない。何の理由もなしに包帯と結び付いたが、彼の顔に悲しみを見た為か。彼が別世界に生きているとはつきり気付いた瞬間のせいだ。貧富よりもっと基本的で、下らない利己主義と対比される単純な思いやりをもつ世界だ。それとも今までの経緯にまつわる得体の知れぬ、屈辱的、俗悪的瞬间でさえ忘れられないミステリーのせいだ。このミステリーは、相棒が意識的に私をミスリードして合流させた事と関係していそうだ。それとも、星や冷気が若者と精神を萎縮させたためのものか。多分、これら全部が影響したのだろう。冷酷なユーモアがこれらを纏め上げ、私が平凡な間抜けになり下がる危険性を囁いていた。

理由はともかく、私の気分は豹変した。殉教するつもりでの道化は消え、傷ついた見栄は癒された。架空の諦めの源はきれいに洗い流されたが空虚ではない。残ったのは、ファッショナブルだが取り乱した若者、露の下りる暗闇の中、ヨットにまったくそぐわない、つまらない旅行鞆に座った男。未知で奮闘を要する環境に無力な事をあまりにもよく気付いた若者。感情を害し、被害者だと思っている。しかし、恥を知り、精一杯やろうと決意した男。私は予想する。変化は大胆だが完了するには時間が要るだろう。だが兎に角この場所でこの時間に変化は生まれたのだ。

「グロッグができたよ」と下から呼んだ。降りて行っで見ると、驚いたことにあの散らかりようはきれいに片付けられていて、快適に整頓されていた。

グラスとレモンがテーブルの上にあり、パンチの芳香が前にあった臭いを消していた。私は船室の様子に殆ど感激を表さなかったがデイヴィスをほっとさせるには十分だった。彼は嬉しそうに収納用具を見せ、この浮く隠れ家の

『居心地の良さ』を自慢した。

「あれが持ってきてくれたストーブだよ。古いやつは海に放り出した。」と言った。

これは彼の、いや此処の弱点だ。ほんのちょっとした理由で、物を海に放り込むという楽しみがある。後で私は疑問に思ったが、新しいストーブもあの船用ねじ同様、『絶対必要』ではなかったかも知れない。ただこの妙な趣味を満たす以外には。我々は煙草を吸い、少し話しをし、そしてどうやって寝床へ潜り込むかという問題となった。頭や拳をさんざんぶつけ、嫌と言う程もがいたのち、何とか粗い毛布の中にくるまった。デイヴィスは素早く器用に彼の毛布にくるまった。

「快適だろ」と灯を消しながら言った。長い間の訓練の成果だろうが、寝たまま吹き消した。

私はあちこち、ちくちくし、枕は湿っていた。雫が私の額にたれていたのだ。

「デッキは水漏れしていないかい？」と出来るだけ穏やかに訊いた。

「ごめん、ごめん」と寝床から飛び起きて行った。

「露がついたせいだ。昨日大分コーキングしたんだけど、そこがうまくいってないんだな。ちょっと上に行ってオイルスキンでなんとかするよ」

「手をどうしたの」彼が戻った時、半分眠りながら、彼に感謝していった。

「大したことはない。ちょっとこの間、捻^{ひね}っただけだ」と答え、見当違いと思わせるような事を言った。

「プリズムコンパスを持ってきてくれて助かる。本当に要るかどうかわからないけど（毛布の下から）、役に立つかも知れない」

第三章 デイヴィス

私は肘と首が痛み、毛布のあちこちから入る隙間風でいらしながら不規則に眠った。寝付いて無感覚の状態になったのは全く夜が明けてからである。天窓から水が降ってきてやっと目を覚ました。起き上がり、頭をデッキに酷くぶつけ、鉛のような眼を瞬きし見上げた。

「ごめん。デッキを掃除していた。上がってきて水浴びしたら。良く寝た？」上の方から声が聞こえた。

「かなり良く寝たよ」防水布にたまった水に足を突っ込んで呻いた。

階段をよろけながら上がると海に飛び込み、悪夢、体の凝り、身体の臭いそして神経の疲れを、すてきなバルト海のなかの素敵なフィヨルドで洗い流した。短距離を力いっぱい泳ぎ戻って来たが、スムーズな黒い舷側は低い癖に滑り易くどこから上がるか分からない。デイヴィスは緩いキャンバス製のシャツを着て、袖をまくり上げフランネルのズボンと膝のところまでたくし上げ、ロープの端を掴んで私の上に手を伸ばし話しつづけた。

やり方さえ知っていれば簡単な事、ペンキに触らない事、以前付けていたタラップの事、しかし船のスピードを落とすので取り外した事を。

私が船の上に戻ると、膝と肘に黒いペンキを付けていて、彼は茫然とした。それでも、タオルを使っていると、私は不満のかけらとうぬぼれが、さらにこの透明な海で洗い落とされたと思った。

私はフランネルのズボンとブレザーを着込むと、デッキの周りを見、訓練もされず信頼もできない目でこれまで暗闇に隠れていたものを観察した。船は非常に小さく（データを記録しておくとしてトン）、大体三十フィート強、船幅九フィートで、この手の物が好きな連中が、ソレントで週末に乗るサイズだ。しかしドーバーからバルト海まで来たと言うのは、想像を絶する、肉体的努力の世界を思わせた。美しさについて言うと、スマートで美しいというのはヨットについて本質的だと思っている。だが、この船については美の対象外である。

船体は低すぎ、メインマストは高すぎる。キャビンの屋根は出来が悪く、天窓はつまらない鉄製の安物で見えるべきものではない。舵の頭や他の処についている真鍮は緑色に変色している。デッキは、カウズで見られるあのきれいなクリムム色では無く、灰色でざらざら、継ぎ目からはタールが染み出し、船首の階段は錆びている。ロープや索具は繊細なつやのある茶色——サウスシーの六月の空の青にあまりにもよく映え、絵心をくすぐる——

¹⁴ ワイト島と本土の間の狭い海。

¹⁵ ポーツマス近辺の海浜リゾート。

と比べたら悲しむべき状態だ。最近の修理も全体の改善には全く寄与していない。ペンキ、ワニスそして大工仕事の跡は見える。新しくけばけばしい旗がつけてあり、新品のロープが所々に、特に新品らしい小さいミズンマストの廻りに見える。しかし、それらは単につまらない外観を強調しているだけで、労働者階級の多少ましな女が上流階級の服装をまねようとして、じきに諦めることになるのを思わせる。

素人目にも仕上げ全体がビジネスライクで実質的なのが見える。デッキに取り付けある機器はすべて大型すぎる様だ。錨の鎖は必要以上に太い。羅針箱は中のコンパスともども、サイズも立派さも漫画的で、この真鍮だけが艶を持ち、恭しく磨がき上げられている。メインマストの後ろに二つの丈夫で汚いロープがとぐろを巻いており、船の風雨にさらされた様子の仕上げである。付け加えておいた方がいと思うが、遙か昔、この船は救命ボートで、カウンターやデッキ、そしてほかの装備を追加して、不器用にヨットに改造されたのだ。この船は、全ての救命ボートのように、チーク材による外殻二枚を斜めに合わせた構造で、非常に堅固だがルックスに関しては、合いの子の失敗作なのだ。

腹が減って、「お茶をいれたぞ」という下から聞こえて来た声でキャビンに下りていった。センターボードケースの上のテーブルに朝食が用意されていて、デイヴィスは顔を赤く、指を煤で黒くしながら熱心に動いていた。皿や食器が若干不足であったが、ベーコンの仕上がりはお世辞ではなく逸品で、かりかりとして湯気の立っているのは私のロンドンのコックをを恥じ入らせたと思う。ソファとテーブルがそこまで低くなかったなら、朝食を心の底から楽しんだと思う。身体を曲げていたため飲み込むのに時間がかかり、時々立ち上がって伸びをしたくなり、それは頭に酷い事になった。

デイヴィスが白いパンと新鮮なミルクがどんなに素晴らしいか熱を込めて語るのは、私には怪しく思われた。彼はそれをたまの贅沢、しかし煩い人に敬意を表する宴会にはふさわしいと思っ**て**いるようだ。私が控えめに訊くと「いつも陸にあがると**い**う訳には**い**かないの**で**ね」

「フリースラント諸島では大きなライ麦パンで十日頑張った」と言った。

「死にもの狂いってとこかな？」

「そうさ、だが」(まじめな顔で)「いいもんだぜ。その後、ロールパンの作り方を習った。最初はふくらし粉なしさ、だからイノーの果実塩を使った。でもあまりうまくいかないんだ。ミルクについては、コンデンスミルクでね。君も大丈夫だよね…」

私は話題を変え、彼の計画について訊いた。

「すぐに出発しようと思う、峡谷を下っていくんだ」と言った。

私はもっと具体的なものを訊こうとしたが、彼は心ここにあらずで、声は船首の方で水がたてる音とカタカタ言う金具の音に消されてしまった。

このあとは、すべての事は眼がくらむような速さで進んだ。大人しく彼を助けようと思って、デッキに出たが、彼は殆ど私を気にせず邪魔になった時だけ気が付くようだった。彼は同時にどこにでも居る。チェインの巻き上げ、ハリヤードをフックに引く掛ける、ロープを引張る。私の仕事は、皆終わってから手伝う道化のそれだった。私のヨットの知識は、それが水に浮くという事、あとは実際に役立たないあやふやなものばかりだ。

ほどなく錨が揚げられ（巨大な錆びた怪物だ！）、帆が揚げられ、デイヴィスは舵とジブの間を前へ後へと素早く動き回った。『ダルシペラ』は名残惜しそうに港に向かって挨拶すると開けた峡谷に向かった。

高地からの不規則な風を後ろに受け、最初はのろのろと進んだが、そのうち航路に出るとフレンスブルクからの風を受け、西へ向けて順調に滑り出した。船は静かな青いハイウェイを進み、その美しさは私の人生航路の始まりだった。短い形を造る力に満ち、私だけでなく他の人々にも緊張や努力を要求するものだった。

デイヴィスはゆっくりといつも自分に戻っていった。ぼんやりと過ぎしながら、突然凄まじい速さで、舵の柄を結び、離れているロープを掴む。これらが殆ど同時に起こっている様に見えた。一度消えると、突如海図を持って現れ、舵を取りながら開くのは無理と思われるのに、やってのける。

彼が元氣を取り戻すのを見ながら私はずっと廻りを観察していた。この辺のフィヨルドは幅が一マイルほどだ。港から離れると険しく立ち上がる丘を過ぎた。岩だらけで雄大という訳ではなく、姿は柔らかく低い処の緑と豊かな森が見える。小さな白い町が現れ散在する農地が見晴らせる。

私が戸口に寄りかかると――残念ながらデッキチェアは無い――舷縁とメインセイルに挟まれてちょうど反対側に見える岸は肥沃で美しいが、低く寂しく見えた。広い牧草地は緩い傾斜を昇ると、きれいに整備された森につながり、誰かの大きな邸宅があるように思われる。我々の後ろにはフレンスブルクが闇の中に消えようとして

¹⁶ 帆を上げ下げする綱。

¹⁷ 船首の三角帆。

いた。前方の景色は丘の稜線が、ある物にはつきりと、また遠くに夢見る様に見える。最後に、遠くの丘が重なる所に水の光っているのが見え、遠い海らしく、ここはまだ隔離された内海である事を示唆した。静かな田園地方と家庭的な人間の雰囲気を作り出す、あの不思議な魅力が至る処にあり、面する湾が我々の地球の大海に繋がっている。

私の視点からは別の美しさがあつた。『汽帆船』の甘やかされた乗客でも無ければ、ヨットの代理店の広告のような『近代的スクーナー』でもなく、みずばらしい小さな怪しげな出自の、情けないデザインをした船のデッキから見たこの船自身である。この船は、私の知らない困難と危険を冒して、遠く離れたフィヨルドに至る道を嗅ぎだした。たった一人の乗員に明らかな目的は無く、危険な航海にあまりにも曖昧、無関心で、サザンプトンの午後の船遊びの延長の様なのだ。

私はデイヴィスの周りを見た。彼は海図を置き、ブロンズ色の腕を舵に当てデッキの上に座っている、あるいは寝転んでいる。前方を見つめたまま時々周囲と上方に目をやる。彼は相変わらず自分の世界に居る。彼の事は昔、良く知っていたが、私は少しの間、顔を今までに無い注意をして見た。平凡なやつだと思っていたので、ろくに考えることもなく平凡な顔つきだと思っていた。あまりにも正直で子供っぽく見えて、いらいらしたものだ。

この特質は無くなつてはいない、しかし私の眼から鱗^{うろこ}が落ち始め、他の資質が見える。顎の線には頑固なまでの強さ、無謀に近づいた勇氣、目には年を経た深い洞察^{どうさつ}を見る。これまで多少面白くしかし困惑を感じた、明るい機敏性から一人超然とした熱意への妙な変化は、実は敏感でありながら平常心を保っているのだと分かった。冷たくも無ければ利己的でもなく、逆説的な率直さが不思議に人を引きつける。

顔のどこをみても誠実さがある。私は自分が賢く、まともで気の合う男を見極められると思ってきたが、深い不安が頭をもたげ、大きな間違いをして来たのに気付いた。どの位間違えたのか？一方、同じように深い安堵感を感じた。忍耐深い運命は少なくとも一人を取り戻す、私には全く過ぎた大きなチャンスを示しているのだ。

しかし、面白い事に忍耐深い運命は、ある種のいたずらっぽいユーモアもあるが、一筋縄ではいかない方法を取った。なぜなら私に来说^{いふ}たのはデイヴィスであり――どうも私なんか殆ど不要に見える――こういう世界向きではないのが分かつていた筈なのに、まるで騙すようにして引っぱり出した。しかもデイヴィスと陰謀とというのはどう考えても結びつかないのだ。

もしかしたら、こんな過去の見直しは私の居心地の悪さが増しているためかも知れない。夜の休息と『風呂から上がる』のは、鋭い角や荒れた面に馴れるには役立っていないのだ。

しかしデイヴィスは突然我に返ると、

「ねえ、楽にできてる？ 何か座る物があるかな」と言いながら舵をすこし風向き側に向け、瞬間的に手応えをチェック、風向きを見ると、下に飛び込み、上がって来た時にはクッションを二、三枚持っていて私の方に投げてよこした。私はこの贅沢に意地になって腹を立て、訊いた。

「僕が役に立つことがある？」

「おお、気にすんなよ。」と答えた。

「君は疲れてるんだよ。素晴らしい航海だよ。舳先の左手に見えるのはエッケンだと思う。」帆の下から覗き、

彼は海図を私に放り投げた。海図はちよつとでも押さえつけるのをやめると、時計のばねみたいに丸まってしまい、苦勞して広げた。私は海図を見慣れておらず、長い事放っておかれた後の、この突然負わされた責任で神経質になった。

「フレンスブルクが見つかるよね。僕たちそこにいる。」手を伸ばして細かく書き込まれた図の適当な位置を叩いて行つた。

「あのブイのどっち側を行くんだつたかな？」

私にはブイどころか、どっちが陸側か海側か分からない。彼はつづけた。

「大丈夫、この辺の深度は十分だ。あれは汽船の航路のためだと思う」

一、二分の内に我々は例のブイの、間違つた側を通過した。突然、心配な位きれいに海藻や砂が下に見えたのだ。だがデイヴィスが言つたのは、

「この辺はまともな海が無いんだよ。それにプレートは下ろしてないから」危ない事を言っている、と私は怪しんだ。

「このシュレースウィツヒの海の大部分はね、このサイズの船なら殆ど何処へでも行ける。ナビゲーションは不要、一体……」と彼が言つた時、かすかに底がこすれたのを感じた。聞いたというより、下からの感じである。

「座礁したかね」と私は静かに訊いた。

「大丈夫、突つ切るさ」とちよつと顔をしかめながら答えた。『突つ切るさ』と言つたがデイヴィスは、多少の忌々しさを見せた。これは私は彼のちよつとした奇癖のいい例だと思う。

彼は、ヨット乗りが陥る致命的な傾向、つまり人に教えたくなる気分を全く持っていない。私には海図は未知の

言葉で、最適の訓練と講義の材料となった筈なのに、無知を気にせず私に海図を放り投げた。その朝までのほったらかしが単なる習慣で無意識の不干渉と同じ類の態度だ。それに後で知ったことだが、その方の専門家で、気転が利き、手際が良く機敏なのにある種アマチュア的なあいまいさに落ち込む傾向があり、いらいら半分おかしみ半分である。

これらの特質は同じところに源があり、あらゆる種類の優しさを嫌っているのだと思う。彼とあの船がヨットやヨット乗りの表面的エチケットを完全に無視する事、例えば国旗も揚げなければ『ヨット服』を絶対着けないのも同じところに行きつく。

ヨットは、私が前に全く気付かなかった、低い緑色のところを回り込んだ。

「ジャイブするからね。舵を持っててくれ。」¹⁸ と言い、私の動きを待たずに主帆を強い力で引き始めた。私は舵取りの大雑把な方法は知っていたがジャイビングは技術を要する作業である。ヨット乗りなら、ブームがタイミング¹⁹を見て反対向きに凄い勢いで振れるのに驚いたりしない。メインセールが私と舵に絡まった。

「立ちっぱなしでジャイブしてしまった。」申し訳なさそうにコメントした。

「君はまだ慣れてないんだった。舵にすぐく敏感なんだ」

「どっち方面に舵を切ればいい？」と私は乱暴に訊いた。

「大丈夫、僕がやるから」彼は答えた。

私は、自分の立場を明確にする時だと思った。

「僕はセーリングには全くの役立たずだよ」私は始めた。

「君は僕を訓練すべきだよ。さもないと、そのうちに難破させてしまう。いつも乗員——君主が呼びかける『乗員！』——がいるだろう？ 全部自分でやるのが楽しいのかよ！」

「つまり、：朝中ずっと、邪魔しているだけだと感じたんだ」

「すまん、申し訳ない！」彼のうろたえと後悔におかしくなった。

「事实は反対なんだよ。世界最高の助けかもしれないんだ」また彼のこころはどこかに行った。我々は小さな湾の引き込み流に乗って低い海岸の裂け目に向かっていった。

「エッケン海峡だ。ちょっと覗いていくか」とデイヴィスは言い一、二分後にはちょっと難しい小さな海流を

¹⁸ 舳先を風下に向け、風を受ける舷を変えること。

¹⁹ 帆の下端につける帆桁。

漂っていた。海峡の向こうには開けた海が覗いていた。両側には小屋があり、ある物は海に突き出し、別の小屋はボロボロの木の階段で海に下りられ、あるいは小さな船着きがあった。蔦やバラが壁や小さなベランダを覆っている。一方の側の空いたところには粗雑な波止場があり、ほんとに小さな漁船が浮いている。ちよつとした商業価値があるのだろう。ちっぽけな茶店、手入れされて無い休憩所、葉の散らかったテーブルは同じように小さな観光地を思わせる。

ブロンズ色とバラ色の混じった浸み込むような色が、気候で円熟した建物の木柱や縁台、そして蔦やその後ろの木から射してきた。秋の微妙な気配が感じられる。この素晴らしい海道を広い海にでるまで下っていった。バタついていた船の帆は一杯の風を受け静かになった。

「この辺でいいか」とデイヴィスは放心したように言い、「またここから戻らないと」。

帆はまた向きを変えた。

「ここに錨を下ろして止まってみないの？」私は文句を言った。じらせるような景色が広がろうとしていたのだ。

「もう見るべきものは見たんだ。この風があるうちに捕まえないと」

デイヴィスにとって、いい風があるのにそれを無駄にするのは拷問なのだ。錨をおろしたり、上陸したりしてられないのだ。彼にとって『陸』は劣った要素に過ぎず海へ出るための中継点、必要品の供給所としてのみ意味がある。

「昼飯をたべよう」フィヨルドへ帰る道に戻ると言った。

冷やしたドリンクや、サラダ、白いナプキンと気の利いた給仕と言った過去の光景が私をからかった。

「タンが右舷のソファアローツカーに入っている。ビールは床下の隙間ビルジの中だ。²⁰僕は、あのブイの処を通過させてくる。先に始めてくれ。」運命の声が言った。

私はぶつきらぼうに言われたとおりにした。しかし、換気が悪く窮屈な姿勢が私の機能を麻痺させたに違いない。私が右舷のロッカーを開け、手をのぼし、粘りのある物体を掴むとそれはワニスの瓶^{うっど}だった。情けない気分で、体を引つ込め、ボートの分かり難い船尾とカウンターボードケースの鬱陶しい角と戦いながら反対側を探した。

様々なサイズの缶詰がかび臭い暗闇の中にあった。使わなくなった秘蔵品のポスターの切れ端の様に切れなかった紙に消えかかった文字が、スープ、カレー、ビーフ、瓶詰肉そして他の隠れた珍味を表していた。私はタンを

取り出し、ロッカーの臭いに蓋をするとビールを探した。確かに床下はビールをダメにしない。多分。四つん這いになって蓋を引つ張り、ビールをどろどろするバラストの中から取り出すと、もっと取り出しやすく、湿度の低いワインセラーの方がいいと思った。

やっと手に入れた酷い香りの肉の塊をくらくらし、落胆しながら見つめた。

「うまくいつてるかい？ 缶切りは壁にぶらさがてる。皿とナイフは食器棚の中だ」とデイヴィスは叫んだ。四の五の言わずに仕事をつづけた。皿やナイフはすぐ見えた。船は風上に向かっていたので食器棚は下向き加減である。掛け金を外すと中身は、愛する私の胸に飛び込んできて床にガチャガチャと溢れだした。

「よく起こるんだ。気にすんな。壊れ物はないんだ。下りていくからね」と上から声がした。そして『ダルシベラ』を自分に面倒見させて下りてきた。

「デッキに出るよ」私は言った。

「どうして、エッケンで気楽にランチを食べないんだ。そうすればこの伏魔殿ふくまでんのピクニックにならんだろ？

ヨットはどこへ向かっている？ 斜めのテーブルでどうやって食うんだ？ 僕はワニスと泥だらけだ。食器は足元を埋める、しビールがひっくり返る！」

「船が傾いている時にはテーブルにそいつを置いていちゃいかんのだよ」デイヴィスは努めて平静を保ちながら言った。

「だが、問題は無い。ビルジに流れ込むさ。」（灰は灰に、土は土に、これだな）

「デッキにでているよ。僕が用意を完了するから」

私は爆発を後悔した。我慢ならない挑発の結果なんだが。

「真つすぐに、船が進む通りだよ」私がこの大混乱を後に、ズボンのほこりを掃い手すりにワニスを塗りながら上がって行く時デイヴィスは言った。舵の結びをほどき、行きたい方に進ませた。

フィヨルドの鋭い角をまがり、広くて真つすぐな水上を昇っていくと、常に新しい美が現れた。怒り狂った気持ちもこの景色で癒された。赤い屋根をした村が左に見え、右には水辺のちかくに蔦の生えた廃墟めいそうがある。瞑想めいそうにふけているような牛が草むらに見える。前方には白い渚が両岸に見える。岸に向う坂には気が繁り、所々、暖かい赤い色の砂岩の崖で遮られ、緑の芝生に覆おおわれた小さな溪谷が次々に見える。

私はつまらないむさくるしさを忘れて楽しんでいた。舵の大人しそうな振動、汚い主帆に跳ね返される風、デイヴィスが持ってきてくれたランチー私が食べるのを一人で見ていたーこれは懲こらしめの後の喜びといったと

ころか。

後で風が収まって動かない空気に変わると、彼は大きなメインセールとジブで忙しくなった。だが私は頭脳と体を甘く新鮮な異国の空気に浸し、満足して居眠りをしていた。ぼんやりと峡谷の作る崖の端や涼しそうな白い砂がゆつくりと過ぎるのを見ながら。

第四章 回想

「起きろ」

私は眼をこすって、自分がどこに居るのかと思った。クッションを敷いても、本式のベッドになった訳ではなく、苦しく伸びをした。夕暮れだった。ヨットはガラス面のような水面に静かに横たわり、夕暮れ後の光で色づいていた。薄い上空の雲が空の殆どに広がり、雨の気配がした。我々はフィヨルドの真ん中辺にいらしく、暮れて行く中、岸が遠くに陰しく見えた。前の方は視界は急に消え灰色の空虚の中に消えている。全くの静寂である。

「今夜はゾンダーブルグに着けない」デイヴィスはいった。

「じゃあ、どうするの？」私は目を覚まさせながら訊いた。

「この辺適当な処に錨を下ろす。フィヨルドの口のところにいるんだ。僕が引つ張っていくから舵をたのむ。」彼はぼやけた木や崖を曖昧に指した。そしてディングーに乗り込み、とも綱をほどき緩んだロープを掴んでから気の進まないヨットを櫂を短く漕いで引つ張り始めた。あの脅迫するきようはくような灰色の空虚と、夜には知っている場所に居たいという自然な気持ちで、私の気持ちは改めて暗くなった。夢の中ではモーヴェンロッジに居て、雷鳥を何羽も獲ったあとお茶をのみ、また鮭が琥珀色をした水の中を跳ねてこはくいろいる。そして、それが今は：

「水深を図ってくれないか？」²²デイヴィスの声が櫂の水音と共に聞こえてきた。

「鉛はどこにあるの？」私は叫び返した。

「いいよ、もうこの辺だろう。錨…、錨を下ろす事はできるかい？」

私は急いで前に行き、寝ている怪物を持ち上げようとした。持ち上がる前にデイヴィスが上がつてきて器用に動かし、錨はチェーンを引きずり水の中に落ちて行った。

「ここなら問題ないだろう」と言った。

「ここはオープン過ぎるのじゃない？」²³

「あっちの方向だけオープンさ。もしあっちから吹いてきたら場所を変える。でも雨だけだと思う。帆を仕舞おう」真夜中に『場所変え』―変えるってどこへ？―が必要となる見込みにせかされて、もう一つの目まぐるしい動きが始まり、私は可能なかぎり効果的に加わった。しかしデイヴィスの落ち着きは、多分、伝染するようで、下の

²¹ 泥炭地を流れる川の色。

²² 原文では take cast of the lead で、水深を測る事。cast of the lead は鉛の塊とも理解できる。

²³ 風の影響を受けやすい処の意。

小さな隠れ家は、明るく灯がともりほどなく料理の匂いに満ちると、早く下りてこいと呼び続けた。

こういう特殊なヨット操作は腹の減る仕事だと分かった。新聞紙に包んであつてもステーキの味に変わりは無く、日中のちよつとした出来事は玉ねぎのフライとポテトチップスで消滅した。デイヴィスはやたらと張り切っていた。客への最初のディナーだ。彼は眼に見えぬプライドで、あの汚れたビールの墓場からではなく、どこかの隙間からドイツのシャンペンを取り出し、我々は『ダルシベラ』に乾杯した。

「イギリスからの航海の事を話してくれないかな」と私は訊いた。

「君は興奮するような冒険をして来たんだろ。海図があるからさ、始めようぜ」

「僕たち先にかたづけないとね」と答え、私は巧妙に彼の極く少ない『継続命令』を聞かされることになった。煙草は吸わない、食後の無駄話は始めない――面倒くさい仕事を終えるまでは。

「そうしないと、絶対に終わらない」と賢く意見を陳述した。しかし我々がようやく煙草にありつくと、その種類はえり抜きのもので、ドイツ、オランダ、ベルギーの港で仕入れ、それらは網棚の中にいれてある汚らしい箱にしまつてある。という訳で話が始まるまで大分寄り道をした。

「僕は話がうまくないからな」と言いながら、

「実際、そんなに話す事がないんだよ。我々――モリソンと僕――はドーバーを八月六日に出発した。オステンドには順調に着いた」

「そこで何か面白い事があつたんだろう？」私は考えながら――八月のオステンド何だよ――言った。

「面白い！。汚いところだぜ。そこに二、三日いたんだ。ブイに引っかかつてボブステイ²⁴をもっていかれたんだ。僕たちは汚い小さなドックに足止めさ。陸に上がってもする事なんかないしね。」

「それで次は？」

「スヘルデ²⁵の東までは順調だった。でも阿保みたいにオランダを運河と川経由で行く事にしたんだ。河口を航行している時は楽しかった。潮汐と堤防は恐ろしいもんだ。内陸に入ると情けない話さ。閘門の通行料を取られる、スクイト²⁶にぶつかり、臭い運河を引っ張られていくだけさ。今日みたいな平和な夜はないぜ。いつも河岸に繋がれているか、引かれていく。人がすぐ側を通るし、あのガキども。あいつら忘れるもんか！ オランダに巣くつた

²⁴ バウスブリット（船首から伸びる棒）を下方へ支える綱。

²⁵ アントワープを通りフリッシンゲンで北海にそそぐ川。

²⁶ オランダの小型平底ボート。

伝染病だ。石だの泥を外国のヨットに投げつける以外何もすることが無いんだ。」

「ヘロデ王²⁷が必要だ。政治的に幼児殺しを正当化できるやつがね。全くだ！ 内陸を通過するためにクルーが要るんだ。ガキを張り倒してスカル²⁸に気をつけるためにな。この手の船は海か、海岸べりの邪魔が入らないところに行くに限るな。それでアムステルダム²⁹の後は…」

「ずいぶん飛ばしてしまったんじゃないの？」と私は口を挟んだ。

「そうかい？ えーっとね、ドルトレヒトからロッテルダム²⁹の間は、何もないな。タグボートの群れがうじゃうじゃしていて、舳先の削り続けた。フェヒト川²⁹でアムステルダムに行つてーやつと、ほっとしたんだーそれからまた北海に出た。天気は静かで蒸し暑かったな。でもやつとましになって、ゾイデル海³⁰までは快速でリーフ³¹で行けたよ。本箱に手を伸ばして昔の元帳かなにかを取り出し、ページをめくった。

「それは、君の航海日誌かい？ ちょっと見て見たいな。」と訊いた。

「つまらないよ。もし読めたとしてもね。風とその動きが短く書いてあるだけだ。」ページを急いでめくった。

「君が僕たちのログを書いたらしいじゃないか。僕は描写ができないけど、きみならできる」

「ま、あまり乗り気じゃないんだけどな」と私は言った。

「他の海図がいる」彼は二枚目のさらに汚れぼろになったのを取り出した。

「ゾイデル海を航行している時は快適だった、少なくとも北側のほうはね。そしてあの島の廻って北にでた。

フリースラント諸島だ。東に百二十マイルほど伸びている。最初の二つ、テッセルとフリーラントがゾイデル海を囲んでいる。あとの島はオランダ、ドイツの国境だ。

「これは何だい？」海図のかなりの部分に散らばっている点線の囲みを指していった。そのため海図が読めなくなっている。綺麗に引かれた海岸線と数字の並びは、込み入った、曲がり交差する線とで上書きされている。

「全部砂さ」デイヴィスは熱心に言った。

「そこがどのくらい素晴らしい場所か分からないだろ。何日も誰にも会わずに探検できるぜ。これが航路だよ。

27 ベツレヘムで男児全員を殺害したと言う話がある。

28 片手で持つ小さなオール。

29 ユトレヒトからアムステルダムに続く川。

30 現在は堰き止められ消滅。残った湖はエイセル湖となった。

31 強風に対処するため帆の一部をたたむこと。

酷い記入の仕方だね。この海図は殆ど使えない、だけどだから面白い。町も港ともなく、島の上には村が一つか二つだ。もし店に用があるならね」

「すごく侘しいところらしいな」と言った。

「侘しいなんてもんじゃない。単なる巨大な砂の堤防さ」

「危なくないのかい？」と私は訊いた。

「全然。そこが我々の浅い喫水の平底船の出番だ。何処へでも行けて座礁しても全く問題ない。こういう仕事に最適なんだ。それに見かけだつて悪くないだろう、ね」と物思わしように訊いた。多分私はちよつと躊躇したんだろう。彼は言った。

「僕は、見かけは重視しないんだ」

彼は後ろに寄りかかり、私は、初期の『別世界移行』症状を認めた。葉巻を点けたが、また点け直す——これが興奮した時の癖——葉巻は、完全に忘れ去られたようだ。

「座礁してしまう話だけだね。それは危険な筈だよ」としつこく訊いた。

彼は立ち上がりマッチを探し始めた。

「全く問題ない。どこでリスクを取るか、どこはリスクを取れないか知っていればね。いずれにしても何もできんよ。海図は単純にみえるだろう？（『単純！』と私は思った）でも潮が半分満ちればこの堤防は皆水の下さ。島や海岸線は殆ど見えない。皆低くて同じように見えるんだ。」

『素晴らしい場所』のこの図像的表現に息を飲んだ。

「もちろんリスクは時にはあるさ。どこに錨を下ろすかは気をつけないと。土手の風下は大体オーケーだ。でも潮の流れは航路では強くてね、もし強風が吹いていると……」

「航路案内は付けたことないの？」と私は言った。

「案内だつて！ 面白いのはね」——そこで突然止めて——「一度案内を頼んだ事がある。あとで……」妙な笑いで続けたがすぐに消えた。

「それで、」と私はまた別世界にいきそうなので催促した。

「彼は岸に衝突させてくれたよ、もちろん。大したガイドさ。天気はどうか。彼は立ち上がり気圧計、時計、半分閉めた天窓を見、階段を一、二段上がると頭と肩を数分の間外に出した。興味深い一連の動作である。

外に風の音は聞こえなかったが『ダルシベラ』は寝ながらも動き始めていた。不安な夢でも見ている様に、

微かに海を感じさせ、ゆっくりと横にゆれ、時々軽くジャンプする。

「どんな感じかね？」ソファアールから訊いた、そして繰り返した。

「雨がくるな。」戻りながらデイヴィスは言った。

「それに多分風も。でもここなら十分安全だよ。南西の風だ。もう寝るか？」

「まだ君の航海の話が終わってないよ。パイプに火をつけて残りを話してくれ」私は言った。

「分かった」と思ったより簡単に合意した。

「テルスヘリング島の後、――西から三つ目の島だ――僕は東にのろのろと移動したんだ」

「僕？」

「おっと忘れてた。モリソンはそこで帰らなければならなかったんだ。居なくなつて酷く残念だったがね、あの時はもう、君を誘おうと考えていた。一人でも問題無かったさ、でもこの手の仕事は、二人と一人じゃ全然ちがうのさ。プレートはものすごく重くてね、壊すといけないから、実際使っていなかったんだ」

「テルスヘリングの後？……」私は彼の記憶を進めた。

「オランダの島伝いに移動した。アーメラント、スヒールモニコフ、ロットム（皆とんでもない名前だな）、³²時には外側、時には内側を廻った。多少淋しかった、しかし大冒険だし面白かったね。海図には参ったが、航路ばかりが心配だった」

「あの辺の水域は地元の小舟だけしか使わないんじゃないの？ 海図があてにならないのはそのせいかな」と私は口を挟んだ。デイヴィスは海軍省が彼のドン・キホーテみたいな船、そしてとりとめのない詮索のために時間を無駄にする気があると思っていたのだろうか？ だが彼は乗って来た。

「あれは皆、問題無い。でもどの位の愚行か考えても見ろよ。しかし、話しが長くなる。退屈するよ。もう寝る時間だから手短に言うかね、僕はボルカム島へ行った。最初のドイツ領の島だ」彼は砂丘がひしめいている中程にある角の取れたひし形を指した。

「ロットム――この妙な小さい島――には家が一軒しかない、東の端のオランダの島だ。オランダ本土はここで終わっている、反対のエムズ川のところだ」海岸の荒涼とした空洞を示した。そのあたりは泥、難破とか退屈などという言葉を連想させる名前ではばれていた。

「いつの話した？」私は訊いた。

「今月の九日頃だ」

「それって、僕に電報をくれる、ほんの二週間前じゃない！　すごく早くフレンスブルクに行ったんだね。ちょっと待って、別の海図が要る。これが次のやつか？」

「そうだけど、そんなの要らないよ。僕はただちよつと先にードイツの島のノルダーナイだけどねーに行つて、それからバルト海に直行する事にしたんだ。いつもそこに行つて見たいと思つていたんだ。ナイトがファルコンでやった様にさ。³³ だから僕はアイダー川³⁴に向かい、シュレースウィツヒの西海岸から川と運河を進んでキールに行きバルト海に出たんだ。そこからさらに北に向かつてフレンスブルクの北側に着いた。そこに一週間いて、そして君が来た訳さ。さて寝るぞ。明日最後の航海をやるからね！」

彼は無理に快活そうに話しを止めて、急いで海図を丸め上げた。最初彼の航海について話したがらなかったのは、気分が乗つたため少しの間忘れられたが、この最後にはつきりと戻ってきた。

私は、彼が『胆の据わつたコリント人』³⁵型の海洋冒険譚を語りたがらないのは、それがアマチュアのヨット乗りには侮辱^{ぶじよくてき}的なだけではないと確信していた。そして私は理由が想像できた。彼のフリースラント諸島からバルト海までの単独航海は無謀な計画だ。危機的な事態があつたはずだが、それらに触れるのを避け意識的に無視したのだろう。もしかすると、自分の蛮勇を恥じていて私にそれを無視して欲しいのかも知れない。

無経験で『ダルシベラ』の生き方に免疫の無い知人、彼に礼儀上も実利上も信頼される必要があるのだ。この結論に達すると私はますます彼が気に入った。しかしもうちよつと踏み込んでみたかつた。

「午後昼寝をしてしまつて、」と言ひ、

「本当の処を言うとおのベッドに入りたくないんだ。辛くてね。それにね、君は話しの最後を急行列車みたいに飛ばしてしまつた。あの部分、シュレースウィツヒの海岸と、アイダー川と言つたつけ？　もっと長いんだよね」

「うん、距離は大体七十マイルくらいだと思う。直線距離で」彼は屈みこんで床から葉巻の灰を掃除しながら低くいつた。

「直線距離で？」私はさらに踏み込んだ。

「じゃあ、どこか他にいつたの？」

³³ E.E. Knight は The "Falcon" in the Baltic という本を書いた。この作品はナイトの本の影響を受けている。

³⁴ アイダー側と運河で北海からバルト海に出られる。

³⁵ 16世紀に使われた、冒険家への称賛を表すことば。

「一回停泊した。一晚ね。風を孕んだ航海とは関係ないんだ。しまった、君の上のところの隙間を埋めるのを忘れてた。雨が降りそうだから、すぐにやっておかんと。君は寝ろよ」

彼は消えてしまった。私の尽きない好奇心は開いた隙間のせいで閉ざされた。夜じゅう私の額に落ちる大粒の雨漏りは運命のように無慈悲で止むことがないと思うと、異端審問いたんしんもんの拷問室ごうもんしつを思わせ、直近の未来の方を心配する事にした。

私はベッドに入った。練習のせいで多少上達したと感じたが、この環境が要求する曲芸師には程遠い。ハンマーを叩く音が止むとデイヴィスは私が棚の上に体を伸ばした時、つまり寝台に潜り込んだ時に下りて来た。

「あのさ、」と彼は自分の寝台に潜り込み暗くなると言った。

「君は、こういう種類の事が好きになると思うかい？」

「ここくらいきれいな場所があるなら、」私は答えた。

「多分ね。でも時々上陸して歩きたいと思う。もちろん天候次第だろうけどね。この雨（頭の上に雨粒の音が聞こえ始めていた）でももう夏は終わりじゃなければいいけどね」

「航海には問題ないさ。酷くなければね」とデイヴィスは言った。

「影響の少ない海は沢山あるんだ。季節はじきに変わるけど、鴨が来るぜ。寒くて荒れた天気程あいつらにはいいんだ」

私は鴨のことも寒さのことも忘れていた。急に荒れ模様の天候の中の射撃室を思い『ダルシベラ』は落第だと考えたが、これは後日修正されることになる。

「射撃は好きだよ、でもヨットに関しては良い天気の時だけだし、太陽といい景色を見たいね」と言った。

「景色ね」と彼は反射的に答え、

「君は僕が人跡未踏のフリースラントの海岸なんかをうろつくのは妙な趣味だと思っていないかい？　そういうのはどう思う？」

「嫌だね。」私はすぐにきつぱりと言った。

「バルト海に来て嬉しくなかったかい？　君が話したところと反対の筈だぜ。あそこで他のヨットを見たことなんてあるの？」

「一艘だけ、」彼は答え「おやすみ」といった。

「おやすみ」。

第五章 北風を待つ

その夜は全く何も私の眠りを妨げる物はなく、若さの柔軟性と自然の力に目をみはる。時々、微かに雨の叩く音と風が小さい船体を蹴る音を聞き、蠟燭の灯でパジャマと長靴のデイヴィスの幽霊がぼんやりした強大なランタンを持っていてる夢を見た。だが幽霊は階段を上がって消えてしまい他の夢が続いた。

私の耳に、五十ものトロンボーンが出すような警笛^{けいてき}が鳴り、電気ショックを受けた様に完全に目を覚ました。

音楽家は私の寢床の隣に、笑いながら荒っぽく、やる気満々で霧笛を口にあてていた。

「これが『ダルシベラ』流さ」彼は私が片肘で起き上がるといった。

「驚かし過ぎなかったよね。」と付け加えた。

「マッティナータ³⁶の方が冷たい水をかけられるよりましさ。」と昨日の事を思いながら言った。

「いい天気で素晴らしい風だ！」彼は答えた。

私の今朝の感覚は昨日の同じ時間に比べたら極めて陽気になっていた。身体は柔軟になり頭はすっきりしている。身に染みる風さえ喜びをそこなうことは無く、私は、指をスムーズで魅惑的^{みわてき}な砂の上に見える薄青、あの透明な青、妖精のはかなさと天使の純粹を持つ、氷の中心にしかない完璧な色の中に埋めた。

再び太陽に向くと、風を感じ森は浜辺から囁いて来る。もう一度最後に下を見ると、無骨な錨の錆びた牙が砂の柔らかい腹に刺さり『ダルシベラ』の獲物から引き抜こうとするちっぽけな努力を無視していた。

天国と地上をつなぐ錆びた綱に掴まってあの小さなブルジョア女の舳先に戻り、コンデンスミルクとちよつと古くなったパンに負けない食欲で朝食に戻ってきた。

一時間後、我々は『ダルシベラ』の旅支度をすませ、昨日の灰色の空虚に乗り出し、今は雨に洗われた空気にくつきりとした遠くの丘に囲まれ、風に鞭うたれる青い広がりの中にある。

大層期待していたのだが、開けた海に出た最初の航海を楽しんだと言う振りはできない。私はあの前方跳躍^{ちようやく}のスリルは感じ、風下側の舳先^{へきさき}で泡が歌う唄も効き、海と空の眼のくらむようなハーモニーも見た。しかし、感覚的な気持ちよさは心配で帳消しになってしまった。ヨットは静かなフィヨルドにいる時よりもずっと小さく見えた。泡の立てる音は非常に近くに聞こえ、船尾の波の作る波頭は非常に高い。

航海の新米は船員の考えに必死にしがみつく——効率的で分別のある男達、特有の専門用語と服装、潮の流れと

³⁶ イタリアの歌曲。

風の話す言葉。私がこのプロフェッショナルな要素を持つていないのは仕方ない。

デイヴィスは彼の愛する舵棒を掴みながら座っていると、彼なりの優れた能率の好きを見せ、全くこの環境にくつろいでいる。しかし見れば見る程アマチュアだと感じさせる。片手と（多分）片目で海水のかかった半分閉じかかったデッキ上の海図と格闘している。彼の無頓着^{むとんちやく}を想い出した――彼のかざらない話し、バルト海への冒険航海、そして彼の無口が引き起こす疑惑。

「どこかに記念碑が見えないかね？」そして私が答える前に続けた。

「もう一つ先の岩礁か」彼は舵棒を離すと再びパイプに灯を点けた。ヨットは急に向きを変え、瞬きする間に風が帆に飛びつき、大きな音をたて、張り出し棒が引つ張られ、帆の頭を持ち上げる。今度は倍の力で甲板に向かう。しづきが私の眼に飛び込み、訳の分からない音で茫然となった。デイヴィスは帆脚索³⁷を引くと暴れる小さな船をなだめた。船は落ち着いて波と遊び始め、彼は帆を短くしパイプを吸った。

一時間後に狭いアルス海峡が視界に入り静かなゾンダーブルグが島の海岸上に陽を浴びているのが見えた。そしてドウツブル堡壘³⁸が高くそびえている。ここは六十四年にプロシャが二つの広い地方をもぎ取る前のデンマーク軍の最後の橋頭保だった。

「錨を下ろすのは早いが街にはいきたくない」舟橋^{しゅうきょう}の一部が我々のために開くと言った。だが私は陸を歩くと言って譲らず、必要品を買い『静かな投錨地』³⁹まで移動できる時間までに戻る条件で上陸した。そんなにも妙な気持ちで足の下に陸を感じたことは無い。一部には軟禁からの解放、そして旅行中の自己責任感、特に小さい船で海に出たものが感じるノーザンブリアの一番汚い港も魅力的にする安心感だ。

そして私は今魅力あふれるゾンダーブルグに居る。木彫を施された深い軒を持ち、きれいに手入れされた年月の洗礼を受けた家々、金色の髪をしたヴァイキングを思わせる男たち、赤い頬をし、頭頂がとがり大きな唇の平凡な顔の女。チュートン人の見かけの下、ゾンダーブルグは芯までデンマークだ。

橋を渡り私はドウツブルに登った。あの英雄的防衛の記念碑があちこちにあり、そこからは『ダルシベラ』が入り江の銀色のリボンの上に小さな船体と細いロープを見せている。その船を見て必要品の買い出しがあるのを想い出した。

³⁷ 帆桁を制御するロープ。

³⁸ 多数の船を浮かべて橋としたもの。

³⁹ イギリス北西部。ここでは現在のマンチエスター近郊の港を指すと思われる。

そこで私は急いで旧市街に下りて行って、始めて社交界にでる娘のように恥じらう、可愛い年寄りの女性から卵とパンを値切り、ドイツ語が分からないと言って愛国者の振りをし、吊りズボンを履いた彼女の息子を呼び話しかけ、イギリスのトロール船の乗員から拾った、たどたどしい英語が殆ど役立たずなのを楽しんだ。

デイヴィスは私が船に戻った時にはお茶を入れていて、デッキのうえで飲み、そして安全な入り江に移動した。それは大層な名前の割には内陸の川程も広くはなく、虹色したクラゲが我々は海の航路を進んでいるのを示した。この辺りは潮の満ち干がなく、海岸を泥で汚すこともない。ここには緩やかな砂利の岸壁があった。緑色のイグサが生えそろう、白樺しらばの木は水際まで育ち明るい苔に覆われ金色の葉と赤いキノコの中に根を下ろしていた。

デイヴィスは上の空だったが私がデンマーク戦争の話をすると火が付いた。

「ドイツは怒涛の大国だよ」と彼は言った。

「今に戦争をする事になるかも知れない」我々が錨を下ろしてから起こったちよつとした出来事がこの会話の印象を深めた。

我々は夜明けに日陰の水際に忍び寄った。そこは船底が下の砂利に着く位の深さである。向かい側のアルゼンの岸に、小さな記念碑の尖塔が葉の多い窪地から空に向かってくつきりと見えた。

「あれはなんだろうね」と私が言った。それはデインギーでいけば一分もかからない距離にあり、錨を下ろした後そこまで漕いでいった。粘土質の土手がハリエニシダとイバラに続いていた。枝をちよつとかき分けていくと、灰色のゴシック風の細い石碑が現れ、浅い浮き彫りの戦闘シーンがあった。プロシヤ軍は船上陸しようとし、デンマーク軍が荒々しく抵抗している。うす暗くなる中、刻んである文字を読み取った。『アルゼンの侵略と襲撃により雄々しく戦い死去した人の名譽と記憶を刻む』。私はドイツ人の戦碑への思いを知っていた。アルザスの戦場にも同様の碑があり、ドウツブルでは午後に見て来たばかりだった。しかし、場所、時間、あるいは状況かも知れないがこの碑には特に心を打つものがあつた。

私は殆どデイヴィスを見なかった。彼が眼を碑文から我々が来た道とその先の海に移した時、眼は光り、涙で溢れていた。

「ボートで上陸したんだと思う」半分自分に向けて行つた。

「うまく行つたのかなあ。heldennuthigってどういう意味なのかね。」

『英雄的に』

「Heldennuthig gefallenenとあつたね」全てのシラブルを発音しながら小声で言った。ワートルローの話を読

む小学生のようだった。

我々の夕食時の話は当然の様に戦争のことになった。海戦の話をしている時デイヴィスは海戦物が好きなのだと気付いた。私はこれまで本棚に並んでいる物に注意した事が無かったが、見ると、海軍年鑑と何冊かのぼろぼろの航海事典の他には小型船での航海に関するものが何冊かと大きなつづれた本が押し込んであり、さらに棚の上にもおいてあった。注意して見るとマハン⁴⁰『ネルソン伝』、ブラッシーの『海軍年鑑』と他になにかあった。⁴¹

「これは非常に面白い主題だよ。」デイヴィスはマハンの『海軍力の影響』（二冊本）を引っ張り出して言った。夕食は指で黒くなったページをめくりながら要点を話している内に、冷めてしまった。彼の話しはすごく熱心だが明確では無い。私はちょうど知的に傾聴するのに必要な知識を持っていて、腹がすいていたけれど彼の話を聞くのは楽しかった。

「退屈させてないかい？」と突然言った。

「そんな事はないよ、でもちよつと肉を見た方がいいだろうね」と私は言った。

それらは大きな声で、様子を見ると何分か悲鳴を上げ続けていた。現われて来た時には、放っておいた結果を明確に示していた。その陽動作戦はデイヴィスを動揺させ、私がその話に誘いを向けても遠慮して乗って来なかった。

散らかった本棚の航海日誌が気になった。デイヴィスが食器類を持って船首に行った時、私は日誌を引っ張り出しページを繰ってみた。短い記録で一杯で暗号みたいな略号、風、潮と現在のコースが主の様だ。ドーバーからオステンドまでの航海はたった二行しかない。『7 p.m. 航行中。風 W.S.W. 穏やか。ウエストヒンダー 5 a.m. オステンド岸外 7 p.m.』スヘルデには何ページかの非常に技術的、断片的記述がある。オランダ内陸部には軽蔑的な要約があり、冷淡に風車その他を記録している。子供たち、ペンキ、運河の臭いに辛辣な言葉を浴びせている。

アムステルダムで技術的内容が再び現われ、きびきびした感じで記録されている。フリースラント沿岸に至るにつれ、記述は細くなる。この辺は機嫌がいい事が分かる。そこ此処で自然の様子を古風な言い方で苦労して書くようにしているが、しかし私の見る限り、有能で観察眼の鋭い作家でも難しいと思う。時々陸に上がるが、大体は半マイルほど砂の上を歩き、店員とか漁師と話すだけだから。

しかし、そんな軽い息抜きは稀だ。奇怪で気の滅入る名前の航路や浅瀬の記述が殆どで、センタープレートや帆、

⁴⁰ Alfred Thayer Mahan. アメリカの海軍軍人、歴史家。

⁴¹ Thomas Brassey により刊行された年鑑。

そして風、ブイに『流木止め』、潮汐とその夜の『寝台』などが付記されている。『ケツジング』は頻繁な楽しみで、『座礁』は殆ど日常である。

読むのが大変で、私はページを急いでめくった。後の方も見て見たかったのだ。雨の小さい文字が突然無くなった処が目についた。九月九日の終わりの部分だ。『ケツジング』と『流木止め回避』はいつも通りの細かさで記録されている。日誌は三日とび、そして続く。

『九月十三日 風 W.N.W. 吹き始め。バルト海行き決定。4 a.m. 出航。E.S. からウエーザー河口まで近道。ホーヘンボーン砂洲手前で投錨。九月十四日ー無。九月十五日ー4 a.m. 航行中。東風 穏やか。コース南西。四マイル。北東北、十九マイル。ノルデピープ 9.30. アイダー川 11.30』

この事実だけの記述は『航路』については極めて特徴的で、昨晚私が感じた好奇心ー彼は何か避けようとしてゐるーについては満たされと言うより、拒否されそうだった。しかし、ページが正に十三日の前で切り取られていた。ページの残った部分は何も残らなくなるくらいに丁寧に切り取られている。しかしデイヴィスは偽装は下手くそで子供だつてページが無くなっているのが分かる。九月九日夕方の少しの記述（ここでページが終わり）だけが残ったのだ。

私はデイヴィスと呼んで、日誌にを『手を加えた』という海事法に反する深刻な違反があるところからかう処だった。しかし私は止まった。理由は分からない。冗談が敏感なところに触れて失敗する気がしたのかも知れない。

彼に無理やり白状させる、あるいは告白の偽装か失敗か、私はどちらも避けるデリカシーを持っていた。彼は簡単すぎる獲物なのだ。それにほんのちよつとした間の出来事でもある。日誌を戻すと、私が日記をつけるという約束を思い出し、この時から一冊をそれに当てる事にしたのだ。

我々が葉巻に火を点けようとした時、オールが揚げる水音と声を聞いた。船体にぶつかる音がし、デイヴィスは顔をしかめた。ペンキに傷がつく時のいつもの反応だ。

「コンバンワ、ドチラニイカレルノデスカ」と我々がデッキに上がると言った。結局ゾンダーブルグから漁船に戻る途中の快活な漁師だった。ちよつと話して見ると、我々は助けねばならぬ気の狂ったイギリス人という事だ。

「ザトルップ⁴²に来ませんか。漁船は皆すぐそこを廻ったところにいます。宿屋にいい飲み物があります」と彼らは

42 シュレースウィツヒホルスタインの海辺の村。

言った。何も反対する理由が無いので、我々はデインギーでついて行った。港の角に沿って回り込むと村の灯が見えた。何隻かの漁船がその前に錨を下ろしている。

我々は宿屋まで一緒に行き、なかなかのコーヒーパーンチという飲み物の紹介に与^{あず}かった。煙の中にいる漁船乗りは我々には気を利かせてドイツ語で、彼らはデンマーク語で話していた。

デイヴィスははすぐに彼らと仲良くなり私が羨むほどであった。彼のドイツ語は全く粗製で奇怪な語彙^{ごい}としておかしなアクセントだ。しかし船員のフリーメイソン気分あるいは彼の個人的魅力が、彼にも聞いている物にも直感を働かせた。

私は、こう言う海にまつわる集まりでは話について行けないが、デイヴィスは私の事を『我が友^{マイナーフロイント}』と呼び続け、努めて私を親類の様に扱い、皆の話に巻き込んだ。

私はすぐに退屈な仲間もどきだと見破られた。デイヴィスは時々私に話させたが、錨を下ろす適地と鴨の事に熱心だった。今も覚えているがシュライフィヨルドとかいう処での鴨が話題になっていた。私は全く放っておかれたが、言葉の少ない眼鏡をかけて高い帽子を被っていた男―たった一人の陸の男らしい―に救われた。私の方に向かって暫く煙を吐き出していたが、彼は私が結婚しているか、その予定があるか訊いた。しかしこの後は彼も黙ってしまった。

我々がこの居心地のいい飲み屋を離れたのは十一時ちよつと前だった。デインギーまでみんなついて来た。漁船の友は、全くの善意で自分達のボートで送ると言って聞かなかったが、ボートに余裕が無いのは明らかで、バケツ一杯の捕った魚をデインギーに乗せるまで我々放そうとしなかった。鱗がついた手とやたらと握手して、瞬く星の中で寝ている『ダルシベラ』に漕ぎ戻った。

デイヴィスは風を嗅ぎ、軽い風が葉を動かしている木の天辺^{てっぺん}をチェックした。

「まだ南西風だ、雨も降る。だけど北に変わる筈だ」と言った。

「そいつはいい風になるのかい？」

「どこに向かうかによりけりだね。」ゆつくりと言い、

「僕は連中に鴨の事を訊いていたんだ。一番いい場所はシュライフィヨルドらしい。ゾンダーブルグの南十五マイル位、キール方向に行ったところだ。案内人が湾の口の処に住んでいて何でも教えてくれると言っていた。でもあまりお勧めではなさそうだった。北風が要るんだ。」

「僕はどこに行ってもいいよ」と私は自分の言ったことに驚いていた。
「本当かい？」急に明るい声で答え、それからわずかに様子が変わり、
「この辺が本当に楽しいという事かい？」と言った。

勿論そういう意味だ。我々がキャビンに行く前にあの小さな灰色の記念塔を見た。その細い塔はアルゼンの海岸の窪地から柔らかな光と影にくっきりと見えた。その夜は九月二十七日、『ダルシベラ』の三日目である。

第六章 シュライフィヨルド

私はこの最初の頃の日々を細かく書いたことを詫びるつもりはない。あの細かい事柄を、地球の隅のこの魅力ある土地と海の色のおかげによくおぼえているのだ。汚かるうが美しかろうが、全ての細部に意味がある。言葉の切れ端もリンクとなり、すべての気分の変化も良い事や悪いことにつながる。全く些細なものが、秋の休暇を私の経験した最も重要な仕事に変えてしまったのだ。

この変化にはさらに二日が必要だった。最初の日は南西の風が続いていて、アウグステンブルグフィヨルドをデイヴィスいわく、『強風での適切な対応の練習』のために航海した。

あの気持ち悪いオイルスキンの活躍する日だ。硬くて臭い中に閉じ込められ、気が滅入るくらい動きにくい。全く私にとって試練の日であり、入り江の激しい波が休みなく襲いかかり、私が頼んだので、デイヴィスは私を休ませたりしない。

前方と後方に我々はタッキング⁴³した。入り江に突っ込んだり出て来たり、リーフィン⁴⁴グとアンリーフィン⁴⁴グ、時には雨にうたれ、時には日差しの中、しかし呼吸する間も考える間もない。

私は御し難いロープと格闘した。言う事を聞かせられれば奴隷で、負ければ暴君だ。這いまわり、伸びあがり、緊張し、私はデッキ上を苦勞しながら動き廻った。デイヴィスは帽子を被らず落ち着いて私の動きのミスを監督していた。

「今度は舵を取って強風の中を風上に進めるんだ。地上最高のスポーツだぜ。」

私はあのデリケートな技術の微妙な点と取っ組み合いをした。眼を鍛え、手をすりむき、そして頭脳を麻痺するまで没頭させた。デイヴィスは少しの間ロープを手なづけ私の耳にこの技術の微妙な不思議さを叫んだ。

メインセールの前縁のそわそわする震え、風を待つジブの微かなカタカタ音――風に飢えているサインで、もっと風を食わせる。船体の大きな傾きと揺れ、鼻ではなく頬で風を感じること、マストの天辺の旗の鈍角の具合――風の強すぎるサイン、風上に向かって戦わず、臆病に風下に下がっている時。

デイヴィスはスコールが来た時の対応法を教え、それに打ち勝った時、いかに強味を有効に使うか――ビロードの手袋に包んだ鋼鉄の手、それが言う事を聞かせる名人の舵取りだと言った。

⁴³ 舳先を風上に向けての方向転換。

⁴⁴ 風が強くなって来た時に帆を縮めること。

また速度を出す帆の最適な組み合わせを話した。私はさらに沢山のものを理解しようと奮闘した。こんなこと知っても仕方ないと思っていたものを、今は必死になって覚え込んだ。

言うまでもないが、景色など楽しむ暇はなかった。我々が突っ込んだ木の生えた入り江では風と波しぶきからの少しの解放となったが、水深測定とセンターボード操作が待っていた――二つの複雑で大変な作業だ。デイヴィスの難解な航海法の追及は安全な潮流の無い処でもうんざりする程である。

「出来るだけ近づこう、錘を持ってスタンバイしてくれ。」これが彼の方式だ。

私は錘の投げ込みミスをし、緩んだ紐にだまされ大量の水を袖に流し込み、初心者がこの技術で犯す他のあらゆるへまをやり、砂は船体の下で白くなり、とうとうデイヴィスが残念そうに船をそらせて叫ぶ。

「用意、センタープレート落とせ」

私はあの悪魔的な仕掛けまで走っていく。『ダルシベラ』の装備で最後まで酷く嫌った唯一の部分だ。そいつは不快な性質があつて下げるとキャビンの床にチェーンを伝って大量の水をまき散らす。

私の仕事の一つは雑巾でそれを塞ぐことだが、食堂にいてガラガラと絞殺されるような音を聞くのは、相当に不快なものだ。一分ほどで入り江を離れ、フィヨルドの短い小さな波の上に舳先が進んでいく。水しぶきと雨の中を傾きながら反対側の岸のどこかを目指す。

我々の目的地については、もしあつたとしても私は何も知らなかった。フィヨルドの北の端、我々が向きを変えるちよつと前にデイヴィスは自分の考えを話し始めた。私は激怒しなくなった。その時舵を握っていて、私に必要なのは適切なガイドで、突然のジャイブを避けないと生死に関わると思っていた。デイヴィスは内部の論争を声に出して続けるかの様に、これ以上北に行くのは意味が無いと言う一方的な主張をした。鴨、天気そして海図が考慮されていたが、私には得失が分からなかった。私が知っていたのは突然方向を変え南に『斬り抜けた』という事だけだ。夕暮れ時にはアルス港の木や草地に囲まれた同じ静かな水辺に戻った。素晴らしい静寂が騒動のあとに続いた。傷を負いよれよれになって私は油の染みた監獄から抜け出し、そんな日の後に訪れる喜びを味わっていた（まだ完全とは言えなかったが）。快い疲れと満足した痛みで心は輝き、缶詰の牛肉でも神の食物と感じ、天界のポップかコーヒー豆で作られたかの様にネクターを飲み、ホーマーの言う幸せな神さえ知りそうも無い、最高に贅沢な香と匂いを嗅いでいた。

次の三十日の朝、嬉しそうな『北西風』という叫びで、私は震えながらデッキに上った。日の出前に、雨で硬く

なつた帆布を張り、我々は自由になつた。曇つていて、不安定な日だったが昨日の荒れ狂つた艱難の後では静かなものだつた。我々はゾンダーブルグを通過して引き返し、遙か南西に見える微かな薄緑の線に向かつて進みだした。小事件が起こつたのはこの航路の途中で、大したものでは無かつたけど私の目をひらかせることになつた。

舳先の少し先の方をマガモの群れが横切つた。くさび型の陣形をなし、首を伸ばし翼を羽ばたかせていた。

たまたま私が舵を握り、デイヴィスはコースを下で確認していた。私は彼を呼び、漁の可能性を議論し始めた。デイヴィスは気乗りしていなかつた。

「ザトルップの連中は懐疑的だつたぜ。」彼は言つた。

「鴨は沢山いるさ。だがよそ者には猟銃は難しそうだと僕は理解したんだ。この国は文明的でね、野性的じゃないんだよな」

彼は私を見た。私は明快な意見を持つていなかつた。ある意味それは野性的とはとても思えなかつたが、鴨にとっては十分野性的な場所だと思つた。

我々が通り過ぎてゐる浜辺は沼地で仕切られてゐる様に見えた。もっとも後ろは広大な平原のようだ。例えば我々が見たような美しい場所でなくとも、私は途中でまた見たいと思つていた。彼の失望させるような曖昧さは實際以上にもつといらいらさせた。何と言つたつて、彼は狩猟を約束して私に弾と猟銃を持つて来させたのだ。

「悪天候が鴨猟には要るんだよ。」と言ひ

「しかし彼らにとって我々は間違つたところにいるんだ。北海ならばね、あのフリースラント諸島の中の……」

彼の口調はおずおずとして物を問いたげで、私はすぐに受け入れがたいプランを仄めかしていると感じた。プランの性格が見え始めてきた。彼は一語か二語どもりながら『野生』と『誰も邪魔をしない処』とか言い、私は遮つた。

「バルト海を離れたくないんだよね？」

「離れて悪い理由があるかね？」とコンパスを見つめながら言つた。

「おい、ふざけた事をいうなよ！」と私は怒り始めた。

「僕たち、十月にここだ。夏は終わり天気は悪くなつた。僕たちだけがこんな船で海にゐる。まともな連中は皆冬に備えてこのサイズのヨットは陸に上げている時期だ。でも、ラッキーにも結構なクルーズ場所を見つけたんだ。安全なフィヨルド、大して手間のかからん鴨撃ち。時間を無駄にして北海まで危険を冒し（あの引きちぎられた日誌を想ひ出した）、君のあの物凄いうろつきをやらなくてもいいだろ」

「そんな長くないよ。」デイヴィスは譲らずに言う。

「一部は運河だし、他もちょっと気を付ければ安全だ。結構安全な停泊地もあるし。それに必要ないんだよ……」

「何を考えているだ？」私はいらいらして割り込んだ。

「まだここで獵をやっていないんだよ！ この秋にイギリスに帰る気は無いのかよ？」

「イギリス？」と彼はつぶやいた。

「僕はどうでもいいね」

再び彼の曖昧なところが神経に触った。我々の間には何か見え超えられない壁があった。それに結局私はここで何をしているのだ？ 小さな汚ないヨットに閉じこもり、完全に自分の環境の外にいて、一週間前までは全くどうでもいい男と一緒にいて、そいつはうんざりする謎になっている。

即効性の毒薬のように私がロンドンを離れた時の古い病的気分が急速に戻って来た。私が学び、見聞きしたものは苦しんだ事のみを残して消滅した。私はこの航海を突然終えてしまう事を言い出しそうになっていた。だがデイヴィスはこれを予測していた。

「本当に済まない」彼は言い出した。

「全く自分勝手な事を言ってしまった。自分が何を言っているのか分からない。こんな話に乗ってきて、君は本当に頼りになる。それに比べると僕は、残念ながら、非常識極まるとんでもない男だ。もちろんここはヨットに乗るのに最高のところさ。景色とか何かは見えていないんだけど。鳴の事をここで訊いてみよう。君の言う通り、ちよつと準備して先に行くだけで獵は出来る。もう近くの筈だ――あそこが入り口だ。舵をとってくれないか？」

マストに猿の様に上って行っき、横棒の処から陸地を見渡した。私は『謎』を見上げて、私が言わなかったことを運命に感謝した。誰も彼の、あの率直な性格には抗^{あらが}えないと思った。だが、私が妙に感じたのは、同じ船で苦勞している割には、親しみの進展が相当遅いことである。私にはまだ彼の性格がいつ変わり、この奇行がどこで始まったかの手がかりが無かった。それに彼もまだ私を測りかねているのだらうと想像した。さもなければ私はさらに彼を追い詰めて、理解できていない彼の行動の秘密を白状させるべきだったらう。しかし、光は遠く無く射し始める事になる。

私には彼が言った入り口は全く見えなかったが、それは不思議ではなく八十ヤード⁴⁵ほどの幅しか無い。

⁴⁵ 1ヤードは役0.9メートル。

しかしそれは三十マイルものフィヨルドに繋がるのだ。

あつという間に我々は海の波でゆすられ始め、沼地と牧草地に挟まれた海峡が現れ、エッケンの様に広い湖の様になった。我々は入り口に近いところに錨を下ろした。近くには後で非常によく見る事になる型の船の一群が停泊していた。帆のついたはしけであり、テムズで運行している物に似ている。舳先が切り立ち船首が高い船で五十トン程度、二本のマスト、リーボード⁴⁶、非常に軽いスパ⁴⁷で、長い先の曲がったバウスプリット⁴⁸を持つ。(今後『ガリオット』という事にする。)

それ以外の人間の生活を示すものは一軒の白い家のみである――案内人の家であり、海図にある――北側のフィヨルドの口に近い。お茶を飲んでから案内人を訪ねた。

咆哮^{ほうこう}を立てているストープの前に、部族長の様に悠然として太った赤ら顔の男が、良く動く豊満な息子の嫁さんらしい女と何人かの頬の赤い子供達に取り囲まれていた。その男はかれた大声で歓迎してくれた。ドイツ語だったが、我々を見ると途端におかしな片言英語に切り替えた。その言葉には大したプライドと風格がある。

我々は自分達の事と、目的を話したが、その間ビールと敬意を表すべく鳴らし始められた巨大なオルゴールが手厚くもてなしてくれた。言うまでも無いが、私はすぐに正体が見破られ、聞き役に徹した。

「うん、うん、大丈夫」彼は言った。

「鴨は沢山いる。だがとに角ビールを飲もう。そして船を移動する、船長。あそこに泊めておくのはまずい。」
(デイヴィスはびっくりして立ち上がったが、制せられ、ビールに戻った。)

「したらまたビールを飲んで鴨の話をする、いや鴨を殺す、その方がいい。したらまたビールを沢山飲む。」これは想定していなかったクライマックスだ。それに幸先もいい。

そして計画はすべて実行された。ビールの後、我々のホストは嫁さんに、毛糸の深い靴、コート、マフラーに毛糸の帽子で武装され、輝く眼が見えるだけで顔は隠れてしまった。この様に装備してドアの外に出、大声でハンスと銃を呼んだ。頬骨が高く、柔らかい顎ひげの体のかい不格好な男が仕事場から出てきて我々と優しく握手した。一緒に船着き場まで行くと案内人がにこやかな毛糸の塊の様に待っていて、我々が『ダルシベラ』を他の船に近い岸の先の方の係留地に移動している間、しゃがれ声で指図をした。

46 船体の両側に付けられる回転可能な装備で、ヨットのキールに相当。

47 帆を支える部材でマストやブームのこと。

48 船首につけられる棒。

我々は銃を持って戻り、軽食が続いた。我々が出帆した時は丁度夕暮れであった。沼地を抜け、^{よど}池の縁に戦略的位置を占めた。ハンスは駆り立て役に送られ、結果は立派なマガモと三羽の鴨だ。皆、案内人が撃ち落としたのは確かだ。ハンスの息子としての本能と親父さんが無意識のうちに自分に有利な場所を選んだためか、単なる偶然かは分からない。しかし、とにかく狩猟部隊は勝利をもって凱旋^{がいせん}したのだ。

ビールと音楽で前の様に祝い、親父さんは太った両膝に孫を抱いて、賑やかに国自慢と満足した自分の生活をしゃべった。

「ビールが沢山、肉が沢山、金も沢山、鴨も沢山」が大まかなところだ。

ただの空想かも知れないが、デイヴィスは笑い転げて陽気だったが、実の処宴会の外にいる様に見えた。天の神がここまで大盤振る舞いしてくれていると言うのにな。実用的な情報は私が引き出した――詳細な時間、天気、良さそうな狩場と、ある種の連中との上手い付き合い方の抜け目ないヒント。

彼がどう思おうとも、私はあの親父さんに温かい親しみを感じた。彼は我々が今年最後のクルーズをしたものと思っていた。そして、こんなにも遅くまで海の上にいるなんて気がおかしく、地上に住めてビールを飲み音楽もあるのに、わざわざ『こんな小さな船』に住み込んでいるなど、よほどの酔狂だと思っていた。

私は、デイヴィスが、後で雷の様な非難のほかに何と云うかと思いつながら、北海の事を訊いて見たかった。

しかし、すべてうまくいっていたので、彼に優しくしておこうと思ってそれは止めた。フリースラント諸島の事はもう、途方もなく馬鹿げた話だった。私は永遠の友情をあの爺さんと家族に誓った後、『ダルシペラ』に漕いで戻る時にさえ何も言わなかった。

デイヴィスと私はあの夜、いい友達になった――というより、私が友達になった。つまり、私は彼が空のパイプを啜え、目的も無くマハンの本をいじっているのをそのままに、寝てしまったからだ。夜中に一度目を覚ますと、何となく、彼は隣の寝台を抜け出し暗いキャビンの中で夢を見ているという気がした。

第七章 切り取られたページ

私は決められた計画に障害が起きたという心配した気分で見えなかった（十月一日）。私がデッキにでると理由が分かった。『ダルシペラ』は霧に包まれ、静粛で、じとじとし、近くに停泊している『ガリオット』の幽霊のような船体だけしか見えなかった。

その前の晩には何もそんなに近くなかったので、船は夜中の内にそこまで引つ張られてきたのだろうと思い、夜中に一度チェーンがゴロゴロ言って、ぶつきらぼうな声で起こされたのを想い出した。

「今日はとても無理だな」と震えながら私は朝食を用意しているデイヴィスに言った。

「霧が晴れないと何もできませんよ」デイビスはもう諦めきった様子で言った。その朝食は楽しみにならなかった。

湿り気はキャビン全体に入り込み壁や天井に細かな露をつけた。私は沐浴を恐れたが、残念でもあった。うす暗い光のせいでテーブルクロスがいつもより汚く見え、食器などもくすんで見える。ベーコンはどこか失敗した様で玉子立てが無いのも情けない。

デイヴィスは彼のいつもの手拭方式で、洗うために物をかき集めていたが、デッキに足音がすると、誰だろうと思う前に海用ブーツが階段に現れた。オイルスキンを着込んだ小さな男の防水帽がキャビンに屈みこんでいて、灰色のひげの中からデイヴィスはに愛想よく笑いかけた。

「また会ったね、船長」とドイツ語で静かに言い、

「今度はどこへいくんかね」と訊いた。

「バーテルス！」とデイヴィスはは叫び、飛び上がった。屈みこんだ二人の男、若いのと老人は父と息子の様に顔中が笑顔になった。

「どこからやって来たの？ コーヒーでもどう。ヨハネスはどう？ 昨日の晩来たのはあんたなのかい？ また会えてうれしいね。」（不器用な外国語を分かり易くしておく。）

その小さな男は引き込まれて、私の反対側のソファに座った。

「りんごをカッペルンに運んだ」⁴⁹と彼は静かに言った。

「これからキールに行き、女房と子供のいるハンブルグに向かう。これが今年の最後の仕事だ。もう一人じゃないんだね船長」彼は水の滴る防水帽を脱ぎ私のほうにもっともらしく会釈をした。

⁴⁹ シュレースウィッヒホルスタイン州の町。フレンスブルクの南東数十キロメートルにある。

「忘れてた！」デイヴィスは入り口の下の方に膝をついていて、客に気を取られていた。

「こちらは『我が友』^{マイナーフロイント}カルザースだ。カルザース、こちらは私の友人の、ガリオット『ヨハネス』^{シツファー}の船頭バーテルスだ」

一体、デイヴィスの謎に終わりは無いのか？あの突然の愛想は最後の言葉を口に出す時には声からも態度からも消えていた。彼は心配そうに客と私を見つめ、彼の意思に反して、あるいは気転の無さでうまく行かないのが分かっている二人を紹介している様に見えた。

彼がカップをがたがたさせて冷たいコーヒーを注ぐと、何かの化学実験かの様になってしまい、そこでやめると、もう少しお湯を沸かそうとか言いながら、船首の方に逃げてしまった。この時私はこの船乗りと一緒に、

気まづかったが、この穏やかな小さな男は初心者でも分かり易かった。彼がオイルスキンのコートを脱いだ時、彼の襟がきれいに下向きに揃い、よく体に合ったフリース⁵⁰ジャケットを来ているのを見て、船乗りというよりどこかの町の素朴な服地屋だと思った。

私たちはこの霧と昨晚のカッペルンからの航海について当たり障りのない話をした。カッペルンはフィヨルドの南に十五マイル程いった処らしい。

デイヴィスは船首から戻ると、私がびっくりするほどの異常な親切さを示した。じきに話す事が無くなり、私の向かいに座った男は、デイヴィスにした様に、父親の微笑みで親しそうに話した。

「船長一人きりでは無いのは結構。彼はいい若者だよー全くいいやつだ！息子みたいと思うよ。だがちょっと勇敢過ぎて、無謀だ。だから友達が一緒なのは心強い」

私は領き笑った、しかし内心では、面白いどころでは無かった。

「どこでお会いになったのですか」と訊いた。

「ひどい天気のとんでもない場所さ」と重々しく行ったが彼の眼は愉快さで輝いていた。

「でも彼は君に話さなかったのかね？」低く意味ありそうに言った。

「ちょうど間に合った。全く！何を話していたかね？ライオン並みの勇気と猫のすばしこさだな。溺れるとは思わない、だが酷い場所で、とんでもない……」

「何を話していたの、バーテルス？」沸いたやかんを持ってきてデイヴィスは言った。

私が答えた。

「君が彼とどう知り合ったか訊いていたんだ」

「北海でひどい目に会っている時、助けてくれたんだ、そうだよ。バーテルス？」と彼は言った。

「当然なことさ、」バーテルスは言った。

「だが北海はあの小さな船の行く処じゃないよ。船長。何度も言ったろう。フレンスブルクは気に入ったかね。いい街だろ？ 大工のクランクさんは見つかったかい？ 小さいミズンマストを取り付けたんだな。

舵はひどくなかったが、とに角アイダーまでもってよかったよ。だがあれは頑丈でいい船だ、あの小さいやつはね――それで無かったら……」

彼はくすりと笑い、デイヴィスに向かって、言う事を訊かない子供にするように首を振った。

これが私が必要と思う会話の記録のすべてだ。私は、単に話しが終わるのを待っていた。今度こそ事実を明らかにしてやると決心し、逸らそうとしている話に決着をつけるのだ。デイヴィスは友人にコーヒーを無理やり薦め、顔色を変えずに話しを続けた。応対は親密なもの、彼の態度で私と二人つきりになりたいと思って居るのがはつきり分かった。

この小さな船長の話しスキッパーの骨子は、我々は『オストゼー（東海）』にいる限り大丈夫だけど冬にどこいるべきか探す時期だという親身な警告である。彼自身はキール運河を通じてハンブルグへ行き、暖かい炉端で健全な市民として快適な冬を過ごすので、我々も彼の例を見習ったらということだ。

彼は最後に我々を『ヨハネス』に招待すると言い、丁寧なさよならを言うと言った。霧の中に消えて行った。デイヴィスは彼をボートのところまで送ると、すぐに戻ってきて私の向かい側のソファに座った。

「彼のいう意味は何だい？」私は始めた。

「話すよ、」デイヴィスは言った。

「全部話すよ。君に関する限り、これは告白なんだ。昨日の夜何も言わないと決心したんだ、だがバーテルスが現れた以上全部バレてしまうと確信した。ずっと考え続けてきたんだ。助けてくれる事ができるかも知れんが、君次第だ」

「始めろよ！」と言った。

「この間フリースラント諸島の事について何を言おうとしたと思う？ 君が僕の航海について訊いた時は話さな

かった、ある事が起こったんだ。」

「ノルダーナイの近くだな」私は言った。

「どうしてそれが分かった？」と彼は言った。

「君は偽装が下手くそでね、続けて。」と言った。

「そう、君は正しい。そこで、九月九日に起こった。ぼくがあの時に行っていた事は話したよね。でもこれは話したことがない。僕が鴨猟について、二の人々に訊いてたら、ボルカムの漁師が大きなヨットがあの辺に居ると言っただ。ドールマンというドイツ人が持っていて、猟も沢山やっている。僕にも多少教えてくれるかも知れないと思った。それで、ある夜のヨットを見つけたんだ。聞いていた形から違いないと思った。それは『はしけヨット』と呼ばれる五十から六十トン、オランダのガリオットみたいに浅い海用に設計されているんだ。リーボードが装備されていて、あの妙な丸い船首と四角い船尾を持っている。

今僕たちの近くに泊まっているガリオットに近いんだ。時にはイギリスでもあの種のヨットを見るけれど、テムズのはしけを真似たものばかりだ。

その船はあの型のクリップパー⁵¹だね。スマートで全体がワニスが塗られ金色に輝いている。エムズ河口を一日探検してきて、日暮れところにその船の処に来た。その船が停泊していたのは……

「ちよつと待って、海図を見よう」と遮った。

デイヴィスは海図を探しだし、我々の間の机から、テーブルクロスをどけ、朝食の皿など脇にだらしなく寄せてから広げた。これは彼が後片付けを延期した二回の内の一回で、事態の重大さと緊急性を物語っていた。

「ここだ、」とデイヴィスは言った。私は新たな不思議な気持ちでその長い島の連続、平行した海岸線、混在する浅瀬、岸、間に走る航路を見た。

「これがノルダーナイだ。ところで、その西の端にはテルスヘリング以外でオランダ、ドイツに関わらずたった一つのまともな港があるんだ。あの一連の島中でたったひとつだけ。大きな街もある。ドイツ人が夏に海水浴に行く観光地だよ。

そして『メデューサ』、これがその船の名前だけど、それはリフガットという停泊地にいた。ドイツの旗を揚げ、僕はすぐ近くに錨を下ろした。後でその持ち主を訪ねようと思っていたからね。でも殆ど止めようと思ったんだ。

⁵¹ 快速帆船とも訳され多くの帆とマストを持つ帆船。

僕はいつもスマートなヨットには気後れするし、僕のドイツ語も駄目だからね。

でも、結局気を取り直し、夕食後、暗かったが船のところまでディンギーで漕いで行つてデッキにいた水兵に声をかけた。自分が誰か名乗つて、船の持ち主に会いたいと言つたんだ。水兵は不愛想な奴で、長い事デッキの上で待つていた。どんどん居ずらい気分になりながらね。やがて船員がやつてきて階段をおりてサロンに通された。

これの後では、ひどく豪華で―ビロウド張りのラウンジ、絹のクッションとかまあそういうものだ。夕食がちょうど終わった処で、ワインと果物はテーブルに置いたままだ。ドールマン氏はコーヒ―を飲んでいたな。何とか自己紹介すると……

「ちよつと待つて、どんな人だった？」

「背が高く痩せた奴だ。礼装していてね、五十位かな、多分。灰色っぽい髪と短い髭だ。僕は人の様子はうまく話せないぜ。高い、はちきれるような額で、そしてなんかある種の……。でもまずは事実を先に話してしまつた方がいいだろう。僕に喜んで会つていゝとは言えないな。それに英語が話せなく、僕は内心相当氣まづかつた。でも目的があつて来たので、とに角行つたんだから訊こうと思つたんだ」

ノーフォークジャケットとさび色のフランネルのデイヴィスが『豪華』なサロンで、礼服を着た冷ややかなドイツ人に話しかけているというシーンは想像しただけで面白い。

「僕に会つて相当驚いた様だつたね。『ダルシベラ』が来るのは明らかに見ていて、あれは何だと思つていた。

僕は早い内に鴨の事を訊いたんだが、彼はすぐに僕を黙らせて、この辺では駄目だと言つたんだ。スポーツマンの妬みかと思つたね―分かるだろ。

でも、僕は間違つた処に来てしまつたのが分かつたから、すぐに帰る事にしてこの不快な面会を終わりにしようとした時、多少打ち解けて、ワインを薦めるとその後、極めて友好的に話し始めたんだ。僕の航海と今後の計画にすごく興味を持つていた。終いには、僕たちは結構遅くまで話したんだが、氣持ちは楽ではなかつたな。彼は僕を新種の動物みたいに、ずっと値踏みしていたよ。（そのドイツ人にどんなに同情を感じたことか！）

僕たちは、十分友好的に分かれ、僕は漕いでヨットに戻つた。次の日早く、東に向けてのんきに行くつもりだった。「だが次の夜明けに水兵がやつてきてドールマンから朝食に來たいとの伝言を持ってきた。かなり面食らつてしまつたけど、無礼はしたくないので『了解』と言つてしまつた。そしてやつて来て、次は僕が出かけ、結局そこに三日も錨を下ろしていたんだ。」随分と突然の話した。

「何をして過ごしたの？」三日間も何処かに停泊するなんて、日誌から知つていたが、彼らしくない。

「昼食とか夕食を一度か二度―彼らと。と言うべきだったね」急いで付け加えた。

「彼の娘がいつしよだったんだ。最初の晩は出て来なかったけどね」

「どんな感じだった？」私は彼が先に進む前に訊いた。

「うん、いい娘のようだったよ。」が特に気にしていないという感じの、慎重な答えだった。

「そして、結局僕と『メデューサ』は一緒に航海したんだ。それでどうなったか、今は、ほんの二言三言だけ言っておくね」

「彼の提案だった。彼はハンブルグまで航海するので、僕も『ダルシベラ』⁵²でエルベまでは一緒に行き、もし好ければ船用の運河にブルンスビュッテル⁵³で入って、キールからバルト海に抜けるという案だ。

僕は自分で決めたまじんとした計画は無かったが、東に向かって島と海岸を巡りながら、ずっとゆっくりしたペースでエルベに行こうと考えていた。

彼は、鴨猟のチャンスが無い事、そして別の理由も挙げて、僕に思いとどまらせ、彼の提案にこだわったんだ。

とに角、僕たちはエルベのクックスハーフェン⁵³までは直行することで合意した。風も良く、朝早く出帆すれば大体一日、六十マイルの距離だ。

「計画はやっと三日目、九月十二日の夜になってまとまった。話したと思うが、天候は長い暑さが続いた後に悪くなった。まさにその日は西から風がかなり強く吹いていて、晴雨計は下がったままだ。私は、勿論、天気がすごく悪ければ一緒には行けないと言ってあったよ。しかし彼はいい天気を予想し、航海は容易といって結局僕の根性を焚きつけたのだね。どうだったか想像できるだろ。僕は単独航海が見かけより簡単だと言ったのかも知れない、もちろん自慢はしないけどね。その手のものは嫌いだし、注意すれば安全なのだよ……」

「うん、続けて」と言った。

「結局僕たちは次の朝六時に出発した。それは危険そうな天気の日だった、風はWNNW、しかし彼のヨットは帆を上げ僕のヨットが続いた。僕は二リーフを縮め、開いた海に出、~~WNNW~~に~~WNNW~~向け海岸沿いに五十ノット⁵⁴先の外エルベ灯台船を目指した。見る通り、こういう航路を取ったんだ。（彼は船のコースを海図で示した。）彼のヨットに取ってこの航海は何でもない。安全で強力な船だ。家みたいに頑丈で先頭を切って行った。最初のうちは

⁵² シュレースウィッヒホルスタイン州のエルベ川河口の町。

⁵³ エルベ河口の港、川を挟みブルンスビュッテルの対岸。

⁵⁴ ノットは海でのスピードの単位であるが、ここでは距離を指していると思われる。

簡単について行けた。僕の乗っている処には強風が吹き付け、波が高いので凄く忙しい。しかし、何かもつと良くない事でも無ければ大丈夫だろうと思っていた、でも同時にくっ付いてきてしまつて馬鹿だったとも思った。」

「ワンガーオーゲ島の沖まではすべて問題無かつた。最後の島で、ここだ。だが風は本格的に強くなった。僕は半分は諦めてここ、ヤーデ川⁵⁵に入ろうかと思つた。しかし、恥だと思つて巻き揚げ、最後のリーフを縮めた。」

（簡単な言葉で、気楽に話されるが、静かな海でこの作業を見た事があり、この状況では背筋が凍る。）

「そこまでは僕たちは大体一線に並んでいた。しかし僕の短くなつた帆で遅れてしまつた。それはもちろんどうでもいいんだけどね。コースは知っていたし潮も読んでいた、それに天候は悪かつたが灯台船を見つけるのに問題ないと思つていた。計画変更はもう出来ない。ウェーザー河口は右側にあるが、一帯全部風下側で分らない土手だらけだ――見ればわかるだろ。」

僕は『ダルシベラ』で互角だつた、だが何度も危うく騙されそうになつた。僕はこの辺だつた。大体灯台船から南西六マイル程の処だ。突然僕は『メデューサ』が右前で帆を巻き上げているのが見え、僕が追いつくのを待っている様に見えた。

僕が追いつくとその船は風上にコースを取り、しばらくは並走した。ドールマンは舵輪を縛りつけ、屈みこんで怒鳴つた。僕に分かるように非常にゆつくりと、そしてはつきりと、

『私の後について来なさい。――外海は君の船には荒れすぎている。――砂の上の海をショートカットする。――六マイル短くなる』

「僕は舵をとるのに精一杯だつた、しかし彼の意味がすぐに分かつた。前日の夜、海図をよく研究していたのだ。ワンガーオーゲとエルベの間の湾全体は砂で航行が邪魔されるんだよ。ギザギザの砂の塊はクックスハーフェンから始まつて、北西十五マイル位続きシャルヘルンと呼ばれている島まで突き出して終わっている。西からエルベに行くには、この島の外側を回り込んで行く。シャルヘルンの外の灯台船のところで曲がつてね、そして言わば引き返すんだ。大きな船はもちろんこの航路を取る。でもこの砂の中を所々、航路が横切っているんだよ。まさにフリースラント諸島の後ろみたいに、浅くて曲がりくねっているんだ。」

それで、これを見て見ろよ。砂の塊を横切つてクックスハーフェンの近くまで来ているだろう。『テルテ』と呼ばれている。入り口の処は一マイルほどの広さだが途中ホーヘンホルン礁の辺りで二つに分かれる。そして浅く

55 ファーレル付近で北海にそそぐ川。現在は浚渫され消滅した模様。

て非常に複雑になり、何か他の名前のただの潮の流れになる。

天気の良い日か、沖に向かう風がある日に僕が行ってみたい航路なんだよ。悪天候で海が荒れている時に一人で行こうなどというのは、どうしてもそうせざるを得ない時以外、馬鹿げた行動だ。でも、言った通りドールマンはそれを提案して僕を案内すると言うのだ。」

「僕は、この考えが気に入らなかった。自分でやってみたいんでね。馬鹿と見えるかも知れないが、あの海域は僕には難し過ぎると言われたのが癪にさわっていた。実際その通りなのだけだね。でも、ショートカットすると数マイル近くなるし、シャルヘルンの外側でのたうち回る必要も無い。そこでは二つの潮流がぶつかっているんだ。僕は完全にドールマンを信頼していた。それにいいチャンス逃がす方が馬鹿だと感じていたのだと思う。躊躇した。だが結局僕は領いたんだ。そして手を挙げて、あの船はまた動き始めた。

その内にあの船はコースをずらし、僕はついていった。君、以前僕が案内をつけた事があるか訊いたよね。あの時だけなんだ。」

彼はつらそうに包み隠さず話していたが、体を後ろに投げ出し一息継いだ。今までの緊張を多少ともほぐす時だ。私は、別のデイヴィスを見続けていた。五歳年をとり、深い感情、さげすみ、情熱そして頑固な目的追及意識で震えている。より厳格で広い視野を持つ、私の世界の上位の存在だ。

私の興味はさらに強まったが、彼が機械的に煙草をパイプに詰め、マッチを何度も擦こすって火を点けるのを、殆ど恐る恐る待っていた。私は謎が何であれ、それは詰まらないものの筈がないと思った。彼は自身の感情を押さえつけ、半分立ち上がり、時計、気圧計と天窓を見、そして続けた。

「そのうち、僕がテルテ水道の頭に違いないと判断した処にやって来た。廻りでは砂に当たる波の音が聞こえるが、まだ深すぎて見えない。水が浅くなるにつれ、もちろん海のことだよ、水道は短く切り立って来た。風はさらに強まった――暴風というべきだろうな。」

「僕は『メデューサ』の航跡通りに操舵した、しかし腹の立つ事に、あの船は僕より大分早く進んでいるのに気付いた。勿論、彼が先導すると言うのは、当然、速度を落として僕の船との距離を保って行くと思っていたのだ。彼はクルーに帆をチェックさせるか、斜桁⁵⁶を下げるとかすれば簡単にできた筈だ。それをせず、出来る限りの速度で進めたのだ。一度スコールの時に、完全に見失い、再度少し見えた事があったけど僕はもう自分の舵で、でき得る

56 船首に付けられる三角の帆。

限りし尽くして、案内が逃げ切ろうとすつ飛んでいくのには付き合いきれないと思った。

そこまでは大丈夫だったが、全行程の最大の難所に急速に近づいてた。そこはホーヘンホルンの岸が航路を遮っていて水道が分かれるところだ。

海図上では、君にどう見えるか知らない、――水路のの曲がりくねりが追えるので、多分、地図を見るみたいに簡単と思うだろうね。しかし始めてそんな処へ行つて見ろよ（ブイなんか無いんだからね）、目で見たって何も確かには分からない。礁^{しやう}が高くて乾いている、天気も良い、水が低くて静かなどという時以外はね。こういう時なら水深を測り、コンパスを見ながら一歩一歩と進めるんだ。僕はそのうち碎ける波が前と両側に、壁の様に立ち上がって来るだろうと完全に分かっていた。あんな天候で水路を感じ取るなんて不可能だよ。水路を知らないといけない、さもなければ案内を雇え。僕は案内がいたつもりだが、彼は自分の遊びをやっていたんだ。」

「僕がだましましたし進めている時に、もし舵をとる奴がもう一人いたら自分の馬鹿さかげんにそこまであきれなかったと思う。だが、僕はすぐそこにある難所に立ち向かわねばならないのが分かっていた。自分の決めたルールを破って、この途方もないショートカットに入り込んだ間抜けな自分を呪った。単独航海で絶対避けるべきことをやってしまっていて、自分を裏切っていた。」

「僕が自分の危険に気付いた時は、向きを変えて開けた海に迫りつくには全く遅すぎた。砂の湾の中、風下側で動けず、大きな潮が僕に襲いかかってくる。瓶の中に閉じ込められていたのだ。ところが、あの潮の流れが、ほんの少しのチャンスだった。僕は時間が分かかっていて、今大体満潮の三分の二と知っていた。つまりあと二時間は潮が満ちて来る。そのため、僕が着いた頃には礁はみな水の下のだ。前にも増して見つけられない。しかし、もし僕がよい場所を進めば、僕はその上を行けるかも知れないと言う意味でもあるのだ。」

デイヴィスはうんざりして机を叩いた。

「くそ！、あんな偶然を信用しようなんて、思い出しても吐き気がしそうになるね。阿保な都会人が、休日に酔っぱらって乗るようなもんだ。結局僕が予想した通り、波の山が水平線にきれいに見えてね、雷の様な音を立てて僕を巻き込んだんだ。」

僕が最後に『メデューサ』を見た時、障害物に突進する馬並みに突っ込んでいった。僕は急いでコンパスであの船の大体の位置を測っておいた。丁度その時、あの船は風上に向いて、舷側が少し見えたと考えた。だが水の山で見えなくなり、僕は舵を取るのに必死だった。

その後、あの船は砕ける波頭にできる白い霧の中に見えなくなった。僕は出来得る限りをやったが、もう航路から外れていた。僕はそれが水の様子で分かり、礁に近づくともうそれは水面すれすれで水路の痕跡も無い。

何もしないで乗り上げる訳にはいかない。だから、特に何か期待してというより本能以舵を取るのを止めたんだ。つまり、礁の端に沿って行って出口を探すんだ。すぐに横波に捕まってジブが吹き飛んだ。だが縮めた帆が持ちこたえて勇敢にも立ち直った。僕は持ちこたえたが、でもほんの数分にすぎない事も分かっていて。センタープレートが上げてあるので、礁に向かって怖ろしく速く横滑りした。」

「僕は吹き飛ばされて半分眼がみえない、しかしすぐ前に突き出している砂嘴さしの向こうに、突然割れ目のような物があるの気が付いた。この砂嘴を避けるためさらに風上に向けた。しかし切り抜けなかった。あつという間にその上を走っていき酷い音を立ててぶつかり、跳ね上がり、またぶつかって引き裂かれ深い水のなかだ。僕はその後何分か何がおこったか分からない。そこは水路らしかったが非常に狭く、いたるところで波が立っている。ちゃんとした操作もできない。舵が最後にぶつかった時に駄目になったんだ。僕は角ごとに身体をぶつけて、暗い路地を命からがら逃がっている酔っ払いの様なもんだった。そんなに長くは続かない。最後にどこかにぶつかり、こすりつけ、バンバンという音を立てながらそこで止まった。これが案内された航海の終わりだ」

「それで、状況はね、実際の危険はあまりないんだ。」

私は彼のいつもの言葉を聞いて目を剥いた。

「つまりね、運よく水路に飛び込んだというので救われたんだ。そのあと僕は一マイルほどの砂地を進んだ。丁度僕の後ろ側にあり、それが強風の防波堤になったんだ。勿論水に埋もれていて、波は沸騰したせっけん泡みたいだったからね。でも海の力は消されたんだ。ダルシーはドスンボタンやっていたが、そこまで酷くないんだ。満潮の近くで、半分潮が引けば船は水の上高く、乾いてしまうしね。」

「いつもやるように、ディングーで小錨を引いて、次に潮が高くなった時、浮いて居られるところまで動かせばよかった。問題は僕は腕を怪我していて、舵以外にもディングーに穴が開いていた事だ。損傷は最初に外側の端にぶつかった時発生した。そこには大きなうねりがあつて、衝突した時、船尾に引いていたディングーはとも綱に引つ張られヨットの船尾の上に乗り上げたのだ。」

僕は片腕を出してそれをどけたら、舷縁に挟まった。ディングーはひどく損傷していて使えなく、僕は小錨が引つ張れない——これは僕には何の事か分からなかったが、口を出さずにいた。

「それに僕の腕はひどく痛んで、横棒や帆をたたむのもできなかった。ま、いずれにしてもバタバタ言い、

がたがたしていてもならなかったが。舵も直さないといけなかったしね。しかも陸からは何マイルか離れている。勿論風が収まればすべて難しくない。でもそのまま、あるいはさらに強まるとすると前途多難だな。この手のストレスには限界があるんだ。それに他の事も起こるかも知れなかった。

「実際、バーテルスが現れたのは本当に幸運だった。彼のガリオットは一マイル程先、水路の上の方に停泊していた。スコールの合間の晴れ間に彼は僕たちを見つけた。好漢おむこのようにボートを漕ぎだした。彼と息子だ。すごい力で漕いだと思う。僕は彼らを見た時すごく嬉しかったーおっと、正確では無いな。僕は怒り狂っていて、自分にうんざりし、恥かしく、あまりにも馬鹿になっていて、助けは要らないなんて言っただ。でも彼はさっさと飛び移ると、仕事を始めた。あの小さい鼠ねずみみたいなやつは鬼のような仕事師だぜ。三十分も経たないのに帆をたたんで、錨を外し錨綱を五十尋57ほど引っ張っていき深い海に落とし、船を移動した。

それから水路を引っ張ってー風下側でこれは容易だったーそして自分達の船の近くに泊めた。もう暗くなっていたので僕は彼らに飲みものを差出し、お休みと言ったのだ。その夜は暴風が音を立てていた。しかし場所は充分安全で停泊用の杭もあった。

「すべての事件は終わった。僕は夕食後、これについて冷静になって考えてみた。」

第八章 理論

デイヴィスはあの緊張が解けた時の、ほっとした感じが続いているかの様に、寄りかかり深いため息をついた。私も同様に緊張がほぐれていくのを感じた。海図は我々が指を離すと勝手に丸まった、そして問いかけるようだった。

「どう思うかね？」

私は彼の言葉を整理して見た。興奮するにつれ、とぎれとぎれになり、話が端折られてしまっていたからである。

「ドールマンはどうしたの？」と私は訊いた。

「そうだ」デイヴィスは言い、

「彼はどうしたんだろう？ あの夜はそこまで考えなかった。あまりにも突然でね。最初から絶対確かなのは、あいつはあの日、わざと僕を見殺しにしたと言う事だ。残りの何日かを繋ぎ合わせて、簡単に言うかね、

バーテルスが次の日に現れ、風はまだ強かったけど、『ダルシベラ』を日中の引き潮の時には水上に出る安全な場所に移動し舵の様子をみたんだ。船尾の、下部ねじ止め板が引きちぎられていてラフに応急修理をした。他に多少壊れていたけれどそれ程の問題では無かった。ジブが無くなったのは、スベアが二つあるので問題ない。ディンギーはその場では修理不能で僕はデッキに縛り付けて置いた。

「バーテルスはその時りんごをブレーメンからカッペルン（このフィヨルド）に運んでいて、あの砂中の水路に天候から避難していたんだ。あの日はアイダー川に向かう事になっていた。そこから、言った通り、バルト海へ行ける（川と運河で）。もちろんカイザーウィルヘルム船舶運河經由エルベルトが最短だ。アイダールートは古いルートだけど彼はりんごの一部をアイダーの河口の町、トニングで何とかしたいと思っていた。両ルートとも

キールでバルト海に出る。知つての通り僕はエルベに向かっていた。だが前日のしくじりで延期した。そして計画を変更したんだー理由はすぐ話すよーそしてアイダーに向けて『ヨハネス』と一緒に行く事にし、そのルートを取った。次の日、東から晴れ始めて、彼と競争していった。分けなく勝ってトニングで分かれ三日後にはバルト海さ。そのあとちょうど一週間後に陸に上がって君に電報を打った。つまりね、僕はあいつはスパイだという結論に達したんだ。」

話は極めて静かにそして突然終わり、僕は驚き、言葉を失ってしまった。

「僕は君に電報を打ったーあいつはスパイだ」

この二つの考えの結び付けがその時私を最も仰天させた。一瞬の間、私はロンドンのクラブの陰気な豪華な部屋に

戻った。デイヴィスの読みにくい殴り書きを理解しようとしていて、休暇のつもりで入念にその提案を批判していた。休暇だとき！ この問題の行き付く先は何だ？ 天窓から入ってくる冷たく不透明な濃霧の中、私の想像は疑問と恐怖の霧で一杯になった。

「スパイ！」私はぼんやりと繰り返した。

「どういう意味だ？ どうして僕に電報をよこした？ 何のスパイ——誰の？」

「どう結論付けたか話すよ。」デイビスは言った。

「『スパイ』は正確な表現では無いけれど、何か極めて良くないものだ。」

「彼は意図して僕を座礁させたんだ。僕の性格は疑い深くない、だがボートや海の事は多少知っている。僕は彼がそのつもりなら僕の近くを航行できた事を知っている。二日目にあの砂地を出た時あの海一帯を見ている。海図をまた見ろよ。ここが、示した通り、水道を遮っているホーヘンホルン礁だ。二つの部分で出来てるだろ。最初は西で次に東だ。テルテ水道は二つの枝に分かれてその周りを回っている。この辺りの水道と同様、両方の枝は広くて深い」

「さて、航行中僕はどちらの近くにも行っていない。最後にドールマンを見た時彼は礁に真っすぐに向かって舵を取っていた筈だ。この辺の点だよ。水道の北の枝から一マイル以上離れてる。南の枝からだ二マイルある。話したけど、僕はコンパスを使いながら行つて行つた。だけど前には礁に当たる碎けた波だけだ。どうやって通過したらいい？ そこに幸運が舞い込んだ。僕は二つの水道について話した、つまり礁を回るもの、北に向かう一つと、南に向かう一つだ。だけどよく見ると西ホーヘンホルン礁の真ん中にもう一本ある。狭いけど広がって行くやつだ。狭くてその前の晩、僕が海図を調べた時には気が付かなかったんだ。僕が必死で時間稼ぎをしながら、礁の端の部分を手探りしていた時、知恵も無く迷い込んだのがそれだ。

僕は何も分からずに入って行き、この細長い開いた海に出た。目的も無しに横断し、『東』のホーヘンホルン礁の端に出たんだ。これは僕には全く出来過ぎた結果なんだ。今からみると、百対一という確率で僕は礁の外側に行つてはいけない場所に突き当たり三分以内に分解してしまつたらうね。

「じゃあ、ドールマンはどうして行けたのかね？」と私は訊いた。

「可能性どころでは無く確かだがね、」デイヴィスは答えた。

「僕を充分誤誘導した処で、北の水道に再び戻ったんだ。僕が最後にあいつを見た時、『思った』時、船首を風上にし、舷側が見えたと言ったのを覚えている？ そこにちよつとした幸運があつたんだ。彼は北向きに向けたんだ——

あの時ぼんやりとそう見えた―そして僕がその礁まで来ると、避けるためにどちらかに向きを変えないといけないよね。当然彼と同じく、北に向けるべきだ。でもそうしたら終わりだったな。一マイルも礁に沿って行かないと北の水道には出られない。そこに着くはるか前に礁にぶち当てられていたろうね。でも、実際は僕は南に回ったんだ。「何故？」

「そうせざるを得なかったんだよ。僕は右舷のタックしていて、横棒は左舷だ。北に向けるにはジャイブしなければならぬが、そんな危険は犯せなかったのだ。暴風が吹いていた。僕は瞬間的に流されてしまう。殆どそんな事は考えなかった。だから舳先を南に向けて回ったんだよ。僕は全く知らなかったが、中央の水道は僕の左舷側なのだ。距離は大体二ケール⁵⁸だ。すべては最初から最後まで運だった。」

私は陸の人間の想像力を基に、この危険なシーンを再構築し、考えてみた。事実に関しては海図とデイヴィスの言う話しは十分分かり易い。だがまだ半信半疑だった。デイヴィスが彼の案内人を『スパイ』と言うと、彼の思考経路を本当にミスリードしてしまう気がした。不注意で、船団から離れ、今回の様に大惨事からかううじて逃れただけでも知れない。私がこの点を思いつきのまま指摘してみたがデイヴィスは私の意見などを待つ気はなかった。「話を全部聞いてからにしてくれ、」と彼は言った。

「僕が最初に彼に会った時の話から始めるよ。最初は熊みたいに無礼で石並に冷たかった。だが突然友好的になったんだ。私をひどく扱った後の彼の話し方が見える。モリソンが帰ったあとともに話せる人物に会っていなかった。僕は自分の航海にすごく熱心で、鴨のことではちよつと信用できないと思つたが、あの男はスポーツマンだと考えた。僕は極めて遠慮なく話した、少なくとも僕の下手なドイツ語で可能なかぎりね。この二週間の航海のこと、島に入ったり出たりする水道を調べている事、どの位この航海に興味を持っているか、潮と風の関係、潮の流れとかね。難しさについても話した。ブイの位置の変更、イギリスの海図のでたらめさとか。彼は出来る限り僕から引き出そうとしていた。こういう事件の後考えると、彼の質問の適切なことが良く分かる。」

「次の日とその次は頻繁に会った。同じ事が続いた。それに僕の計画もある。言つたけれど、僕の考えではオランダ海岸を調べたようにドイツの海岸も探検するつもりだった。彼の考えは―何てことだ、僕には今は簡単にわかる！―僕を締め出すことだ。あの海域から完全に追い出す事だ。」

だから鴨などいらないと言つたのだ。だからバルト海の航海と、そのの獵場を薦めたんだ。それに、そのために

エルベに直行する提案をして、しかも僕に同行すると固執したんだ。僕をきれいに、そこから立ち退かせたいのだ。
「あいつは立ち退かせたいのでは無かったよ」

「確かに、しかしあの後は推量だ。つまり僕はいつ彼が、もう少し徹底して僕を溺れさせようと決心したかは分からない。あの悪天候は計算にいれられない。でもやって来た時は僕の鼻面を捕まえていたがね。でも僕を完全に追い出すとして、エルベ灯台船に行った時素晴らしいチャンスがあった筈だ。多分突然思いついたのじゃないかな。そして衝動的に実行した。僕だけならば大丈夫だった。だからあのショートカットは彼の天才的アイデアなんだ。全て条件が揃っていた――風、海、砂、潮流。彼は僕が死んだと思っているだろう。」

「でも乗組員がいる。彼らはどうなんだ？」と私は言った。

「それはまた別の問題だ。僕を待って、最初に帆を広げた時、もちろん彼らはデッキにいた（二人だと思う）。帆を引っ張っていた。でも僕が『メデューサ』に追いついた時は、再び風上向きを変えていてコースに乗っていた。でも誰もデッキにはいなくてドールマンが舵を握っているだけだった。だれも彼の言う事を聞かなかっただろう。」

「彼らはその後、君を見たと思う？」

「多分見て無いね。天気は非常に悪いし、ダルシーは小さいからな」

すべての事件の矛盾が私には理解できなかった。誰がデイヴィスを殺したいんだろう？ それに控えめで単純なデイヴィスが何故、誰かが自分を殺すなんて想像しなければならぬ？ 彼は病的な妄想には取りつかれない。何かもつともな理由が必要だ。

「続けて」と言った。

「彼の動機は何だ？ ドイツ人がドイツの海岸を探検しているイギリス人に会う。彼を止めようと思う。消し去ろうとしさえる。こう考えると君がスパイと思われるよな」
デイヴィスは顔をしかめ、

「でも彼はドイツ人では無いよ」と興奮していった。

「イギリス人だ」

「イギリス人？」

「僕は絶対そうだと思う。最も、それほど根拠があるわけじゃないが、彼は英語が分からないふりをしていると思う。それに一言二言僕に話させようとする以外、決して話したことも無いけれどね。彼のドイツ語は、僕にはネイティブに聞こえるが、僕には判断しきれない」デイヴィスは溜息をついた。

「その点について、僕は君のような人が要るんだよ。君ならすぐに分かった筈だ、彼がドイツ人で無ければ。僕はもつとこう、何と言うか……」

「一般的印象かね？」と言った。

「うんそうだ、その感じだな。彼の雰囲気とか仕草なんだ。僕たち外国人とはかなり違っているよね。それに彼の様子だけでは無くてさ、――特に、クルージングとか海とだな。殆ど僕に話させたのは本当だよ、それでも――何と説明したらいいか？　僕たち外国人同士では出来ないような感じで、お互いを理解したんだ。彼は僕が、あの小さい船でこんな遠くまで来たのを、ちょっと気が狂っていると思う振りをしたんだ。だが誓ってもいいが、彼はこの気持ちを僕と同じ様に理解していたね。沢山僕に細かい事を訊いたけど、全部正しい音がしたんだ。言っとくけど、これは全部後で思ったことだからね。前はそんなこと気にもしなかった――僕はシャーロック・ホームズ型の人間じゃあ無い――そのあとあんな事が無ければ……」

「しかし、まだはつきりしないな」と私は言った。

「もう少し彼がイギリス人だと思えばつきりした理由は無いの？」

「絶対とは言えなけれど、あと一つ、二つあるかな」デイビスはゆっくりと言った。

「彼が帆を上げ僕を呼んでショートカットを言った時、彼が何と言ったかラフには話したよね。正確な言葉は思いつけないが、『abschneiden』と言った――『durch Watten』と『abschneiden』だ。（かれらは土手の事を『watts』って言うんだ）。単純な単語で彼は風の中、聞こえる様に大声で叫んだんだ。僕は彼の意味がわかったよ。だが同意する前に、話したけど、ちょっと躊躇したんだ。彼がもう一度前に進み始める時南の方を示してね、それから手でメガフォンを作って『Verstehen Sie?』砂の中を突っ切る。ついて来い！』後の二つの言葉は全くの英語でね。今でもあの言葉が耳に響いている、そしてあれが彼の自国語なんだ。もちろん、その時は何も思わなかった。多少の英語を知っているのは分かっていたから。いつも発音を間違えていたけれど、相手が疑ってなければ簡単にだませるだろ。言うまでも無いけど、その時だよ僕が細かい事を気にし始めたのは。僕は陰謀を暴くのと悪天候の時に小さな船を操るのを同時にできるとは言わないがね」

「それにもし彼が君をあの世に案内するならね、君と分かれる前に出来たよな。他に何かない？　ところで、あの娘をどう思ったの？　イギリス人に見えた？」

十分親しくなければ、女の事について二人の男は遠慮なしに話せない。そしてこの日まで、この話題は我々の間でどんな形でも話題になった事はなかった。これをするのと最後の日になりそうだった。私はデイヴィスが鎧を

着こんで、それに対応するだろうと予想できた。彼は急いでこの鎧を着けていた。私は彼がいかに不器用に鎖帷子くさりかたびらを装着する様子を見て、多少残忍な気持ちにならざるを得なかった。私達は同じ歳である。今は笑ってしまうが、彼の焼けた肌が赤くなるのを見ながら自分が年を取り歓楽に超越している気分だったのだ。ゆっくりと彼の判断を述べた。

「イエス、彼女はそう見えた」

「彼女はドイツ語しか話さなかったのだよね？」

「もちろん」

「よく会ったの？」

「沢山」

「彼女は…（どう言おうかな？）」「彼女は君が一緒にエルベに行つて欲しいと思った？」

「そうらしかった」不承不承デイヴィスは、自分の味方のマツチ箱を掴みながら、認めた。

「だけどね、あの娘が、何が起るか知っていたなんて思うなよ」と突然痼癬かんしゃくを起こした。

私はあれこれ考え、不思議に思った。こんなにも虚飾のない男を料理するのは簡単なのが分かっており、タイミングの悪いからかいは封印ふういんし、これ以上訊くのはとてもできないと思った。

この妙な事件には逆流を感じ、その深さと強さを深刻に考え始めた。私はこの男のことを未だ知っているとは言えないし、自分も分からない。その内何か事件が起こつて、お互い完全に信頼することになると確信していたので、彼に無理やり続けさせない事にした。

私は本来の問題に戻った。ドールマンは誰で、動機は何かという事だ。デイヴィスは苦勞して鎧よろいを脱いだ。

「これは確かだと思うが、」と言った。

「ドイツに雇われたイギリス人だと思う。ドイツのために働いているのは、彼がああ海域に長い事いて、すべて熟知している点からも分かる。もちろん、非常に寂しい処だ、しかし彼はノルダーナイ島に家を持っているんだ。彼と、関連する事柄というのはある種の連中にはよく知られているのだ。彼の友達というのに合ったことがあってね、どう思うかな。海軍将校だ。三日目の午後だった。『メデューサ』のデッキでコーヒーを飲んでいて次の日の航海の話をしていた。海の方から小さいランチが音を立ててやってきて側によせ、この僕が言つた男が船に乗つて来た。ドールマンと握手をすると僕の方を睨にらみつけたな。ドールマンは我々を紹介した。魚雷艇ブリッツの指揮官のフォン・ブリューニング中佐と言った。彼はノルダーナイの方を指さし、そこに船があつた―低い灰色の鼠

というところだ——二マイル程先のローズに停泊している。その船は、あの付近の漁業の保護をしているというのが分かった。」

「彼がすぐ好きになったよ。彼は本当にいい男だと見えた。それに素晴らしい将校さ——あんな風になれたらと思うやつだよ。あのさ、僕はいつも思っていた……だがそれは昔の話で、いつか話すよ。彼と少し話して、僕たちに関する限り非常にうまく行った。でもそんなに深い話をする前に、彼らだけになりたいらしかだったので、僕は間もなく去ったんだ。」

「彼らだけになったのかい？」と私は、何気なく訊いた。

「あ、フロイライン・ドールマンドールマンさんは、もちろん居たよ。」とデイヴィスは、彼の鎧を感じながら解説した。

「彼は、あの人達を良く知っていたそうだった？」と私は気楽な感じで訊いた。

「うん、非常によく知っているようだ」

ちよつと手がかりを感じ、私の感じやすい対抗相手に、女を武器にする必要を感じた。しかし機を逸してしまった。

「あれが彼を見た最後だ。話した通り、次の日の夜明けに航海にでたからね。それで、僕の話して来たことで何か考えがある？」

「ラフな考えはある。もう少し続けて」私は言った。

デイヴィスは立ち上がり両方の手で勢いよく海図を広げ、自分の仮説を熱心に始めた。

「二つの確かな点から始めるとね、」彼は言った。

「一つは、僕はあまりにも知ろうとし過ぎていたため、沿岸から『動かされた』。もう一つは、ドールマンは何か企んでいる。見つけ出す価値のある何かをね。それで、」論理的で、明確に言おうと、びっくりするほどの努力をしながら、一息継いだ。

「それで、海図を見ると、いや先にドイツの地図を見るといい。縮尺が大きいから全部見える」

本箱からポケット地図を取り出して広げた。

「これが、中央ヨーロッパに広がる、この大きな帝国だ——野火の様に拡大中の帝国だ。人々、富、それにすべての面でだと思う。彼らはフランスやオーストリアを蚕食して、ヨーロッパの最強の軍事力となった。僕はもつとこの方面の事を知っていたらと思うんだが、だが僕が心配するのは海軍力だ。彼らにとっては新規だが、強化中で、皇帝は一生懸命になっている。彼は素晴らしいやつで、誰も彼が正しいことがわかる。植民地を持っていない、我々みたいに、獲得せねばならない。海軍力が無ければ獲得も維持もできないし、かれらの貿易の保護もできない。」

最近は、海を制するのが『目標』だよ。言つとくけど、これは僕が考えたんじゃないよ」彼は純真に付け加えた。

「みなマハンとかあいう連中が言っている。今の処ドイツは小さな海軍しか無いが非常に優秀だ。それに急いで建造している。それが、その…」彼は武力の縮小とかスピードの話に移ったけれど、私はちゃんと聞いていなかった。

彼はすべての軍艦を知っているようだった。私は話を基に戻した。

「ドイツを新たな海軍力と考えると、」彼は再開した。

「次は、海岸線はどうかという事だ。非常に妙な状態だ。デンマークで二つに分断され、殆どの部分はバルト海に面しているが、そこは実際的には内海だ。出入口がデンマークの島に遮られているからな。ウィリアムがキールからエルベまで運河を作ったのはこの遮断を回避するためだ。でも戦争になれば簡単に攻撃されてしまう。海岸線でもっとずっと重要なのはデンマークの西に位置し北海に面しているものだ。言わば、そこでドイツは頭を外に出せる訳だ。そこで彼らは我々やフランス、つまり西ヨーロッパの二つの強力な軍勢力と対峙できる。そこに大きな港や豊かな商業圏がある。」

「すぐに分かるが、その後ろにある大きな国と比べると、その海岸線は情けない位に短い。ボルカムからエルベまで直線距離で七十マイルだ。シュレースウィツヒの西海岸を加えても百二十マイルだ。フランスとイギリスの海岸線と比べて見ろよ。どんな長さの海岸線だって重要になるだろう？ それでは、どんな海岸線かという事を考える。この小さな地図でも一目で分かる。あの波線を見るだけで、浅瀬や砂洲だらけだ。陸地の百分の九十までを遮断し、あとの十は大きな川が流れだすところを遮断しようと頑張っている。今度は各部ごとに見てみる。三つに分かれるのが見えるよね。西から始めると、最初はボルカムからワンガーオーゲまで、五十ちよつとマイルだ。そこはどう言う具合だ？ 砂地の島の連続で砂だらけだ。オランダ国境にある西端のエムズ川からエムデンまで、――

大した広さでは無い。それ以外に沿岸の町は無い。第二の部分だ。三つのおおきな港のある深い湾がある――ヤーデ、ウェーザーとエルベ――ウィルヘルムスハーフェン（彼らの北海の海軍基地）、ブレーメンそして

ハンブルグに繋がる。湾の合計の広さ二十マイル少ししか無い。砂の土手があちこちに散らばっている。第三の部分。シュレースウィツヒ沿岸だ。六から八マイルの砂の土手の後ろで望み無しだ。大きな街は無い。アイダーという程々の大きさの川だけ。三番目の部分をちよつと除けておくとする。僕は間違っているかも知れないが、この話を考えていくと、主としてほかの二つの部分に注目したいね。ボルカムからエルベまでの七十マイルの土地、半分は河口で半分は島々だ。僕が『メデューサ』を見たのはそこだ。そしてそこが彼のせいで僕が探検し損なった海域だよ」

私はもちろん明瞭な仮説を立てて見た。

「砦とか海岸防衛施設があるのでは？ 彼は君が知りすぎると思ったのかも知れない。ところで、勿論、彼は君の海軍の本を見たよね？」

「その通り。もちろん僕も最初にそれを考えたさ。でもあり得ないんだ。全く説明にならない。まず始めに、砦は無く、最初の部分、島にもあり得ない。エムス防衛のため何かがボルカムにはあるかも知れない。しかしそれはありそうも無く、そもそも、僕はボルカムを通してノルダーナイにいったんだからね。何も防衛すべきものが無いよ。もちろん第二の部分、大きな川がある所は話しが違う。ウィルヘルムスハーフェンや

ブレマーハーフェン、エルベ河口のクックスハーフェンの周りには砦や地雷原があるかも知れない。僕はそれらをどうこうする気は無いがね。そこに入っていく、どんな汽船だって僕と同じに観察できてしまうからね。個人的には僕は船に乗りっぱなしの方が良くて、陸にはあまり行かない。おい、何てこった！（デイヴィスは後ろに寄りかかって嬉しそうに笑った）僕がそういうスパイに見えるかい？」

私は、安っぽい雑誌に出て来るあのロマンティックな紳士、タイピンに似せたカメラ、コートの襟に忍ばせたメモそして鞆の中の様々な変装用具を想像してみた。私はその手の楽しみに接した事はないが、笑わざるを得なかった。

「この海岸線だがね」とデイヴィスは始めた。

「戦争の時はどんなにちよつとした部分でも重要だという気がするね。砂地とかも含めてね。最初に大きな河口を考えると、もちろん敵に攻撃されたり封鎖されたりするだろうね。ちよつと見ると、主たる水道だけが重要だと言いかも知れない。平時時にはこれらの航路は秘密にしておく必要がない。ブイや灯台が普通の道みたいに置かれて、世界に向けて開かれている。膨大な運行情を抱え、海図が整備され、何百万ポンドの交易が掛かっている。

その航路が通過する砂を見るとね、見せた通り水路の網がはしり、殆どの部分は潮流に隠れ、多分小型漁船とか平底船の連中、あのガリオットのバーテルスみたいな連中しか知らないと思う。」

「戦争の時は大変な物がこれに掛かっていることを思うとね、防御、攻撃ともだ。潮が満ちた時は海が十分深く哨戒艇しょうかいていとか小型魚雷艇ぎょらいていが動ける。しかしそれには良く知っておく必要がある。そこで、もし僕たちがドイツと戦争するとなると、どちら側も砂と河口を前線として使える。僕たちの側からすれば、小さな魚雷艇（駆逐艦じゃないからね）は、暗い夜中にヤーデからエルベまでのラインを突破してその船を攻撃、破壊できるだろうね。

しかし、問題はね、我々の艦隊の中にこの水道を知っているやつなど一人もいないだろうという事だよ。そこに出入りする沿岸貿易船は無い。ヨットもない。イギリスのヨットにしても最もありそうもない猟場だ。だけど、

僕はそんな事を思いついてしまったんだ。そして、普通にその辺の水道を探検する筈だったんだ。」

話が外れてきたのに気が付いた。

「それに島々だけだね。認めるが、最初はかなり悩んだ。砂が沢山あり、同じ種類の面白い水道があるけど防御や攻撃の価値のある物は無いのだよ。なぜ、外人がぶらぶら好きな様に航海してはいけないのかね？ ま、でもドールマンはそこに本拠地があるし、それは何か訳があると思うけど。そして気が付いたんだ。フリースラント諸島も河口に隣接していて、同じ条件に当てはまるとね。そして、小型艇の最高の攻撃基地になると思ったのだ。夜、見つからずに、エムズ川からヤーデ川そしてエルベ川へと、皆の防御線の中を移動するみたいに行けるぜ。」

「そして再びここだ。僕たちの知らない処。地元のガリオットは沢山行き来しているが、外国船は皆無だと言いたい。時々外国のヨットが島の間を、天気の悪い時の避難場所を探して手探りするくらいだ。それも安全にいったら全く幸運という訳だ。もう一度言うけど、僕はそういう処が好きで、ドールマンは僕を追い出した。彼はドイツ人じゃないけれどドイツ人と生活し、ドイツ海軍軍人とも付き合っている。彼はあの沿岸に棲みついていて、どこでも良く知っている。彼は僕を溺れさせようとした。さあ、どう思う？」

彼は僕を長いこと心配そうに見つめた。

第九章 署名した項目

私の全く経験した事のない話で、それは易しい質問では無かった。海について知っている訳では無く、その事件の起きた場所など、私が全く知らないところだった。

他にも、多分デイヴィスよりも困難な点がよく見えた。彼は趣味に熱中していて危険な冒険をしながら一人で考えた来たからだ。しかし、私は彼の物語と理屈（読者には理解されなかったのではと心配だ）に強い影響を受けた。力のこもった粗野なところ、態度からの印象、ほとぼしる熱意、突然のはにかみが作りだす魅力は私には描写しきれない。私は彼の冷静な判断を熱狂した若者の気まぐれと分けるため、その男の子供の部分を見ようとしていた。もちろん彼の難破騒ぎを幻覚だといって否定するつもりは全く無い。彼の澄んだ青い目と、信ずるに足る単純さを見れば、それは馬鹿げていると分かる。

明らかに、彼は私に助けを求めている。それは事実についての私の意見に影響を及ぼしたかもしれない――彼があの性格でなかったならば。しかしあの男の魅力と企てに抵抗することは『救いようのない想像力欠如の間抜け』となるかもしれない。良いにせよ悪いにせよ、彼に付き合おうと決めた。私が決めたのだ。そこで私が難しさを口に出した時には、我々が行く事は分かっていた。

「二つの点がまだ僕には分からないんだが。」と言った。

「一点は、最初に、君は、なぜ『イギリス人』があの海域を監視していて侵入者を排除しようとしているかについて説明していない。二番目は君の考えでは十分の動機が見つけれられない。君が言うあの水道の航行には意味がありそうだ、だが十分な動機では無い。君は、彼が君を溺れさせようとした言う――これは深刻な告発だ。十分な動機が必要だ。でも、僕は調査を要する重要な事件だという事は否定しない」デイヴィスの顔は明るくなった。

「僕は、我々がさらに見つけ出すまでは、かなりの物を、喜んでそのまま信じておくよ」

彼は飛び上がった。そしてその前も、それから後もした事の無い事をした――キャビンの屋根に頭をぶつけたのだ。

「一緒に行くという意味かい？」彼は叫んだ。

「まだ頼んでもいないのに！　そうだ、戻ってすべての事に白黒つけたいんだ。僕は行きたいことが今、はっきり分かった。君にすべて話してしまい、ものすごくほっとしたんだ。そして、沢山君に頼らなければならぬんだ。だから僕はずっと偽善者の気がしていた。どういって謝るべきか？」

「僕のことは気にしなくていいから。素晴らしい時間を過ごした。僕は四の五の言わずに行くよ。だけど僕は、

君が一体何をする……」

「分かった。でもまず全てを話させてくれ——つまり、君について。僕は自分だけではなにもできないと気が付いた。あの船を普通に操作するのに二人必要と言う意味じゃない。だが、この種の仕事、もし君が『したいならば』だ。それに僕はドイツ語がまともに話せない、それに何処から見ても鈍い男だ。もし僕の推論——君によると——が正しいなら、それは、今までに無かったな鋭い知力を要求する事態だ。だから僕は君の事を想い出した。君は賢くて、ドイツに住んだことがありドイツ語が堪能だ。それに僕は……」とやや氣まずそうに付け加えた。

「君が沢山ヨットに乗っていたのを知っていた。でも、もちろん僕は君にどんな航海となるか話しておくべきだった。小さな船でクルーなしとね。僕は君があんなに速く電報を返してくれたので恥ずかしく思った。それに君がやって来た時に——そ、その——」デイヴィスはちよつとどもつて、僕の気持ちを傷つけない様、躊躇した。

「もちろん、君の期待に反したと言うのに氣付かない訳に行かなかった」これが彼のひねり出した繊細な要約だ。

「だが、君は、本当に良く解釈してくれた」急いで付け加えた。

「しかし、どういう訳か、僕は計画を話すことが出来なかった。来てくれただけでも十分有り難いのに、突飛な計画で君を悩ませるなんて。それに自分でも確信が持てずにいたのでね。こいつは込み入った話だ。これには理由がある。理由はまだ……」僕を心配そうに見た。

「うーむ、込み入ったままだ」

私は、僕を信頼し始めたと思ったが、それは消えてしまった。

「僕は確信をもてずに馬鹿みたいになっている」彼は急いでいった。

「しかし君が状況に順応して楽し始めたのを見て、計画は自分の中でどんどん具体化してきた。フリースラント諸島の鴨猟だとかはまやかしたかった。君を引っ張り出し、時間を稼ぐための馬鹿なおとりだった。しかし、君は当然反対した。昨日の夜、僕はすべてを止めてしまつて、ここで出来るだけいい時間が過ぎるようにしようと思つた。そしたらバーテルスが現われた——」

「ちよつと待て」私は割り込んだ。

「君はここに来る時、彼が現れるかもしれないと思つていたの？」

「そうだ」とデイヴィスは有罪を認めるようにいった。

「かも知れないと思つていた。それですべて明らかにになり、君も来る！僕は何という馬鹿だったんだろう」

彼が話しを終えるずっと前に、この何日間の意味を理解した。そして、僕が理解できなかった沢山の小さな出来事の意味がはつきりした。

「頼むから、謝るなんてやめてくれ！」と私は抗議した。

「僕も君に話せた筈の事があるんだ。その気だったらね。それに君が自分で言う程馬鹿だったなんて思わない。

僕は丁寧に面倒を見ねばならない患者と同じだ。僕が反発して全てをぶち壊さなかったのは偶然なんだ。例えば天気、そしてほかの些細なことのせいなんだ。それに、僕がなぜ君の治療を受けて見ようと思ったか全く知らない」

「僕の治療？ 一体何を言ってるんだ？ 君は十分寛大で——」デビスは言った。

「まあ、それはどうでもいいよ。それに他の視点があるが、それも、もうどうでもいい。問題に戻って、君の行動計画を話してくれよ」

「こうだ」とすぐに返事が返って来た。

「キールから運河で北海に戻る。目的は二つ。一つ目。あの水道を調査しながら河口と島とを通過してノルダーナイに戻る。僕が出発したところだね。もう一つはドールマンを探す。彼が何を企んでいるか探り、決着をつける。二つの事は重複するかも知れないが、まだ分からない。彼とあのヨットが今どこに居るかも知らないしね。しかし、あの同じ海域にいると思うし、ひょっとしてノルダーナイに戻っているかもしれない」

「かなり微妙な問題だな」私は、可能性を想った。

「君の考えが正しいとして、スパイをスパイするのは……」

「そうじゃあないんだ」デビスは憤然として言った。

「誰でも自由にあの海域を航行、探索しても構わないだろ。君はそう思っていないんじゃないか？」

「不名誉なことをしでかすなんて思っていないよ」私は急いで説明した。

「君の言う意味で海は誰にでも開かれていると思う。僕が言いたいのは、君の想定外の事が起こり得るという話だ。あの水路の辺りには、単に航路上のもの以上の何かがあるに違いない。そしてその場合僕たちは、本当のスパイになるんじゃないかね？」

「結局のところ……忌々しい！」デビスは叫んだ。

「もしそうなってしまったら、仕方ない。僕はこう見ている。あいつはイギリス人で、もしドイツのために動いているなら反逆者だ。そうになったら僕たちはイギリス人として告発しなければならぬ。スパイせずに出来ないなら、スパイする権利があるだろう、もちろん責任は自分達にあるがね——」

「それよりも事態は深刻かもしれないよ。君を殺そうとしたのだからね」

「そんな事は構わない。僕は復讐とか何かで頭に血を昇らせるほど馬鹿じゃない。安物の小説みたいだね。でも、あいつがドイツ人の振りをしていると思うと平静ではいられん。それにどんな企みをしているかと考えるとーそのため、誰でも消そうとする程の企みだぜ。僕は海が好きだ、それに彼らは家に帰って油断していると思う」彼は、脈絡なく続けた。

「海軍省の連中も目を覚まさないとな。とに角、僕に関するかぎり、あいつにまた会うのは自然なことだ」
「全く」私は同意した。

「君は友達ときよならを言わずに別れた。彼らも会えて嬉しいと思うだろうね。話は沢山あるし」

「ぼ、僕はー」デイビスは『彼ら』という語で、しおれて静かになった。

「おい、今はもう三時だぜ！ こんな時間になってしまった。それに霧が晴れ始めていると思う」

私は驚いて我に返った。現在に、涙を浮かべている壁に、色褪せた櫂^{もみ}の机に、酷い朝食の散らかりにー目に見える私の誓いの表象だ。急速に迷いから覚め始め、デイヴィスが戻って来て、機嫌よくいった。

「キールに向けてすぐ出発する気はあるかい？ 霧がはれて、風は南西からだ」

「今かい？ 夜中の間ずっと航海することになるよ」私は抗議した。

「そんな事はないよ。ついていけばね」とデイヴィスは言った。

「でも七時には暗くなる！」

「しかし、ほんの二十五マイルだよ。もちろん最高の風とはいわんよ。でも殆どの距離をクローズホールド⁵⁹で行ける。晴雨計も下がっている。このチャンスを利用しないと」

風についてデイヴィスと議論しても仕方ない。結論は昼食抜きの出帆だ。速く駆け抜けていく蒸気の中を蒼い太陽がちらちらする中、シュレースウィツヒのきれいな景色が現われては隠れ、陽に照らされては曇り、あてにならないご機嫌取りたちにさよならを言っている様だった。

僕たちの錨のからからする音を聞いてバーテルスが『ヨハネス』のデッキに現れた。眼をこすり首にまいた灰色のマフラーを巻きつけながら、ちよつと下宿の小母さんが朝の牛乳を、服を着ながら受け取っている様で、可笑しかった。

⁵⁹ ヨットが風向きに帆走する時、船首を出来る限り風向きに近づけること。

「僕たち、出発するよ、バーテルス」とデイヴィスは自分の仕事をしながら言った。

「キールでまた会えるといいね」

「いつも急いでいるね、船長！」とその老人は頭を振りながら言った。

「明日まで待った方がいいよ。天気は怪しいしエッケンフィヨルドを出る前に日も暮れる」

デイヴィスは笑い、まもなく彼の指導者の悲しそうな小さな身体はもやの中に消えた。

あの日は妙な晩だった。間もなく日は落ち、すべてが私を取り乱すの手ぐすね引いて待っていたようだった。最初は、まともな昼食の代わりの大急ぎのお茶、それから船首に座って、真っ暗な中、灯油にまみれ吸い込みながら、側灯に給油という始めての、そしてやりたくない仕事。最後に、夜中の濃い靄もやの中で、危なっかしく揺れる我々の小さな頼りない船で感じる、神経をすり減らすあらゆる心配。

ある意味、私がフレンスブルクで旅行鞆の上に座り込んでしまった時と同様の精神的危機を通過していった訳だ。主たる問題についてはもう悩まなかった。私は『ダルシベラ』の船上で、良し悪しの結果に関わらずもうサインをしてしまったのだから。しかし、私は先走ってしまった。今後の見通し、この計画での自分の立ち位置、詰まらない反論を黙らせる証拠が欲しかった。

始めてでは無いが、笑いの感覚が助けになった。私がロンドンで自分勝手に創り出した悩み。巧妙な招待を手際よく勘案し、自分の重要さを見せつける気品を持って罫に足を踏み入れるということ。平穩な事務官僚が新聞記者に拉致されるように、手際よく誘拐されたしまった私。純真で思いやりのある友達が首謀者に変貌したこと。

私を賢いと言い、部屋に閉じ込め平然と、策略のためドイツ語を使えと言っている。そして公海でちょっとした諜報活動を計画。

このユーモアにロマンスが続く。ベールに顔を隠しているが、私にはローブがさらさらするのが下の泡の中に聞こえる。私はそれがスパークリングワインのグラスを僕に手渡し、飲んで楽しくなれと言ったのを知っている。不思議なことであるが、その味は唇に触れた時には分かっていたのだ。ソーホーのボヘミアをまねたバーで飲んだ粗悪な混合物では無い。モーヴェンロッジで飲んだはずの、けばけばしいが気の抜けた飲み物では無い。最高に純粹なビンテージで太古からの靈感をもたらすものだ。それは様々な形を取り、僕よりもはるかに優れた頭脳を刺激するが、その本質は変わらず、危険な道を行く楽しさなのだ。そこ此処で私は事態を具象化し気分を保とうとした。おおよその処うまく行っただけと思うが、沢山の抜けがあった。

現実世界では、私はすきま風にひりひりしている。風はメインセールに静かに吹き続け、怖ろしい波頭が空虚の中から立ち上がり、冒険を称賛するように低く、スリリングに囁いた。魔法は極めて強力だったが、実際のところ、最初の夜の航海は恐怖で一杯だった。確かに最初は大丈夫だった。デイヴィスが予測した様に霧が晴れ、バルクポイント灯台を見ながらキールフィヨルドに安全にたどり着いた。我々が船尾で、ゆったりとパイプの明かりを灯して、棚上げしておいた問題に戻ったのはこの時だ。何しろ我々は噴火に追われる様に、大慌てでこの冒険に飛び出し、議論はまだおわっていないかったのだ。私は、さらに若干の事実を拾い上げた。しかし疑いを捨ててしまった訳ではない。デイヴィスはドールマン一家に会ったのは彼らのヨットの中だけだ。父と娘はそこで生活していた。ノルダーナイの邸宅とそこでの家庭生活は、一度入港したとは言え、デイヴィスは知らない。それに、彼はハンブルグに居る義理の母親のことを漠然と聞いている。街に着いたら合流すると言っていた。ここでちょっと注意すべきだが、ハンブルグはエルベからずっと上流、河口の街クックスハーフェンから五十マイルも離れている。

あの死への航海の前の日に決まった、正確な予定では、二艘のヨットは夕方クックスハーフェンで合流、川と一緒に上る筈だった。そして、通常ならばデイヴィスはブルンスビュッテル（五十マイル先）で分かれるのだ。そこはバルト海への船舶用運河の西の終点だ。少なくとも、それが彼の最初の予定だった。しかし、二つのものをまとめると、私はこの頃、こう思い始めた。つまり、彼は自分でも気付かない内に、気持ちが変わって、ハンブルグどころか世界の果てまで『メデューサ』について行こうとしたのではないか。この動機は、彼の好みや原則に反するとは言え、島めぐりや航海という生活を諦めさせる動機と同じものではないか。

しかし、その点に関しては彼は完全に口を開かない。私が結論できたのは、ドールマンの娘に繋がるあの妙な逆流が彼に非常な苦痛を与え、判断を曇らせ注意を散漫にしまった、しかし彼は忘れるか無視しようとして今のコースを取っていると言うことだ。

私が引き出した事実はいくつかの重要な問題を提起した。今頃までには、彼もヨットも生き残ったというのが知られていないか？ デイヴィスは知る筈がないと思っている。

「彼はクックスハーフェンで待つか、ブルンスビュッテルの閘門で訊くかできた筈だ」と言った。

「でもその必要が無かった。事故は確かだった。もし僕が外側の土手にぶつかり、出られなくなったら、ヨットは三分で分解してしまっただろう。それは百対一でそうなった筈のものだ。その場合、バーテルスは絶対に僕が見えない、見えても助けに来られなかった。誰も僕を助けられない状況だ。それに彼らが、僕の生存を知っている

ことを示すものは何も無い」

「彼ら？」私は訊いた。

「『彼ら』とは誰のことだ？ 我々の相手は誰なんだ？」

もしドールマンがドイツ海軍省の正式なエイジェントならば——いやそんな事は無い。若いイギリス人の殺害が近代的で友好的な文明国政府に黙認される訳が無い！ しかし、彼がそういうエイジェントでは無いとすると、すべての推論は成立しない。

「僕はね」とデイヴィスは言った。

「ドールマンは自分の考えでやったんだと思う。でもその先は分からない。それに今の処、それはどうでもいいだろう。生きていようが死んでいようが、僕たちは悪い事は何もしていないし、恥ることもない」

「僕はどうでもいいとは思わないな」私は文句を言った。

「誰が僕たちの復活に興味を持つか、どう僕たちは動くか、あけつひろげにか秘密にか？ できるだけ近づかない方がいいと思わない？」

「近づかないという点についてはね、」デイヴィスは前の帆の間から風上を見ながら

「僕たちは船用運河を通って行く。それは公共の道と同じで誰でも君が見えるんだぜ。そのあとはあまり難しくない。ま、そこに着くまで待てよ！」彼は低い満足した笑いを浮かべたが、昨日だったら私は背筋が寒くなっただろう。

「ところで、思い出したんだが」と彼は付け加えた。

「キールで少し止まって、かなり必要品を買い入れないとね。岸には寄りたくないんだ」

私は何も言わなかった。十月に七トンの船で岸に寄らない！ 何を考えているんだか！

九時ころにその場所を通過しキールフィヨルドに入った。そして風上に向けて、七マイル、キールのあるその頭へと体力勝負が始まった。これまでは興味と興奮が私を支えて来た。デイヴィスに何かあった時、私には全く何もできないという気のとがめはあったけれど。

私の心配は興奮が収まる頃に始まった。デイヴィスが頻繁にキャビンに戻って寝ろと言ったので、とに角下におり、ソファに鉛筆と日記を持って丸まった。突然デッキの上でバタバタ、ガタガタいう音がして、私は床に滑り落ち始めた。

「何があったんだ？」私はパニックになって叫んだ。デイヴィスはキャビンの戸の処に屈んでいた。

「何も」と暖めるために手をこすりながら言った。

「進路を変えるだけだよ。双眼鏡を取ってくれないか？ 前に汽船がいる。ねえ、もし寝る気がないんならスープでも作ってよ。海図を見る」

私が汽船にどの位近いのか、今ヨットはどうしているか心配している間、彼は時間をかけ慎重に調べていて気が気では無かった。

「誰も舵を取っていなくても大丈夫なんだよね？」と訊いた。

「一分くらいは大丈夫さ」と目を上げずに言った。

「二―一・五―一―南西、西に並んだ光―マッチある？」

彼は二本擦って、また上に昇って登って行った。

「僕がいなくていいんだね？」私は後に向かって叫んだ。

「大丈夫。でもやかんを掛けたら来てくれ。フィヨルドを行くのはきれいだぞ。風もいい具合だ」

彼の脚が消えてしまった。私がノートを書き終え、ストーブの上で熟読すると楽天的な運命論を感じた。私がデッキに上がり、『きれいな航行』を見ている時も楽天的だった。きれいな眺めというのは霧に包まれた 船舶の群れだったけれど。汽船、小型漁船そして帆船がフィヨルドの制限された道から再び解放され、不吉な赤、緑そして黄色の眼が開いたり、閉じたりまたは明るくなったり暗くなったりしていた。

その間にも岸や停泊灯が私を幻惑し、スクリューの立てる音が、遠くに聞こえるロンドンの咆哮のように空気を満たしていた。実際、我々がフィヨルドを突進するために回ると、私が無作法な小母さんで、混んだ夜のストランドをスカートを押さえながら走っていく気分だった。

デイヴィスの方は街をうろつく小僧で、馬の腹の下をジグザグに通り抜けて平気でいるという風だ。そしてずっと、静かな講義をつづけた。もし気を付け、ルールに従い、パイプでも吹かせれば、夜のセイリングも単純で簡単であると。我々がキールの特徴の空中に吐き出される熱い光に近づくと、巨大なキラキラ光る塊が流れの中央に錨を下ろしていた。

「軍艦だ」と彼はうっとりして言った。

我々が街の外に錨をおろしたのは一時だった。

第十章 彼のチャンス

「おい、デイヴィス」と私は言った。

「一体この旅はどのくらい続くのかね？ 僕の休みは一ヶ月だけだよ」

我々はキールの郵便局で斜めのテーブルに立ちながら、デイヴィスは真面目に彼の手紙を書き、私は力なく自分のを見ていた。

「何てこった！」とデイヴィスはうろたえ始め

「あと三週間しか無い、考えても見なかった。延長は無理だろうね？」

「僕の上司に頼む事は可能さ。でも返事をどこに宛ててもらうのかね。僕たち、宛先を残さない方が安全だよ」と私は言った。

「クックスハーフェンがある」デイヴィスは思案したが、

「しかし近すぎるな。それに――僕たち、上陸地に縛られたくないな。こうしよう。『ノルダーナイ、郵便局』それから君の名前、ヨットの名前は書かない。僕たち、手紙を取りにそこに行けるかも知れないからね」

その時くらい我々のこの気楽な冒險姿勢が私を驚かせた事は無い。

「そうやって手紙を受け取っているのかい？」私は訊いた。

「何、僕は君の様に重要な手紙なんてないんだ」

「でも、何を書いたんだ？」

「素晴らしい航海を楽しんで、家に向かっているとところだね」

これには笑ってしまい、私も同じことを書いて家に宛て、デイヴィスの友達でスポーツ好きの奴を探していると付け加えた。私の上司宛てにも書いた（私の行動の重大さに気付いていない）。ドイツで重要な仕事のできたので、延長可能かと書き、返事を同じ宛先に頂きたいと付け加えた。そして荷物をかついで仕事に戻った。

ディンギー二回分の必要品を『ダルシベラ』に運搬させた。主なものは暖房と明かりのための石油の大きな缶二つと一袋の小麦である。予備のロープと滑車もあった。ドイツ製の素晴らしい海図、葉巻と沢山の奇怪なブランドのソーセージ、肉の缶詰それに他の細々したものだ。これらの一部は後に、私の相棒の要求で単に荷物投棄に役立っただけであるが。衣類は私の大事な関心事であった。フレンスブルクで大分整理したつもりだが、私の衣装箱の中は、まだ不適切なものが多く、私は既に二足の染み一つない白のフランネルを回復不可能にしてしまっていた。

（「海に放り投げることができる」とデイヴィスは期待を込めて言った。）

そこで、私はこの国の海用ブーツを買った。木の底でフェルトの裏地がついている。そして我々二人は沢山の粗い毛糸の衣服（地元の漁師が着るもの）、ズボン下、ジャージ、ヘルメットと手袋を買った。皆、石油の染みや錨の泥と調和する色を選んだ。

その夜、我々はバルト海を最後に見て、軍艦や、冬眠のために係留された遊んでいるヨットの横を通り抜けた。フィヨルドの素晴らしい海岸に立つ邸宅は銅色の木々に囲まれ、我々の頭上で、だんだん暗く、かすんで行った。我々は最後の岬を回り、輝く色電球の列に向かった。帆を下ろし、巨大なホルテナウ閘門の下に着いた。これらが、こんなにも小さな船のために開くとは信じがたい光景である。

しかし開いたのだ。重々しく荘厳に、そして我々の小さな船体は最大の軍艦を通すように設計された閘門の中に入って行った。暑い八月の日曜のバウトラー閘門⁶⁰を思い、一月前には自分がいらした伊達男で煩いロンドン子のなかで押し合い、汗だくになっていたのは本当かと思った。

頭上には電気の光があった。しかしマントを着た男が我々に声をかけ船長を呼ぶまでは全くの静寂である。デイヴィスははしごを駆け上りその男と一緒にいき、ポケットに書類を突っ込みながら戻ってきた。その書類は私の目の前にある。Konigliches Zollamt⁶¹というスタンプの下に、料金・税金十マルク、重量分四マルクとあり、帝国のタグボートが艦船『ダルシペラ』（船長A.H.デイヴィス）をホルテナウからブルンスビュッテルまで、カイザーウィルヘルム運河経由で牽引とある。素晴らしいではないか！

私はこの黄色の文書を見ると、偉大な閘門の荘厳な礼儀に赤面してしまう。王国税関の静かな官吏は、たった十四シリングで、何とも油断のならない小さな毒蛇を帝国の腹の中に向かい入れているとは、知る由もない。

「安いよね」とデイヴィスはは僕のところに来ると言った。

「ヨットも蒸気船もトン当たりの規定料金は同じなんだ。僕たちは明日朝四時に沢山の他のボートと一緒に出発する。バーテルスも居るかもしれないな」

以前の静寂が支配したが、見えない力は働いている。内側ゲートが開き我々は広い池に入って行った。そこには帆のついた大小さまざまな船が横並びにつながれていて小艦隊を作っていた。岸の空いた場所に結び付け、我々は

⁶⁰ イギリス、テムズ川上流、メイデンヘッドにある閘門。

⁶¹ 「王国税関」の意。

夕食を取り、葉巻を啜えて外に出て『ヨハネス』を探した。その船は多数のガリオットに挟まれていた。船長は取りすまして、下の赤々と燃えるストーブの前で眼鏡をかけ聖書を読んでいた。シュナップスの瓶と小さな硬い梨を取り出すと、デイヴィスは彼の外れた予想を無慈悲になじった。

「天気は良くなかったな」が彼が救いたい若い友人に、甘やかすような笑顔で言ったすべてだ。その夜分かれる前に我々は、明日朝、小艦隊が運河を引かれてゆかれる前に『ヨハネス』の横に結び付けることにした。

「カールが両方の舵を取ってくれるよ、キャビンの中で暖かくして居ればいい」と彼は言った。

計画は早朝雨の中、実行されたが、かなりの混乱もペンキ剥がれも無しという訳には行かなかった。騒々しい小さなタグボートが我々をグループに分け、『ヨハネス』の大きな舷牆げんしょうの陰に隠れて我々は黒い虚ろの中に引っ張っていかれた。我々の現在地からの景色の変化は、日が明けるまでは分からなかった。『ダルシベラ』からの視界は皆無である。主桁まで上らないと岸の向こうに広がるホルスタインの靄もやがかかった灰色で色彩の無い広大な土地は見えない。

柔らかなシユレースウィツヒ海岸の景色はもう過去のものである。冷たい刺すような雨が新しい場面への転換を示していた。ドラマを完成させる最後の一筆の様である。

二日間かけて我々は偉大な運河をゆつくりと上った。これはドイツの二つの海を結ぶ戦略的リンクである。幅が広く真つすぐで大きな築堤を持ち、夜には電灯で照らされ、明け方ロンドンの多くの大通りよりも明るくなるまで続く。大きな軍用船、裕福な商人、沿岸貿易船の区別なく新興の大国のシンボルであり、有能な政治家と技術者により管理され、海運時代に向けて帝国を前進させる原動力である。

「素晴らしいね！」デイビスは言った。

「彼はいいやつだ。皇帝はね。」

カールはもじやもじや頭の体の頑丈な少年で十六歳位、『ヨハネス』のクルーのすべてだ。船長が綺麗な分、汚い恰好である。私は彼の見かけを構わない若さに、ある種の羨望を感じた。私よりもはつきりと能率のいい相棒で、いったいどうやって、二人きりでこの不格好な船を操れるのか、私にはどうも理解出来なかった。

冷淡な位、鈍感に雨が降り、寒い中、彼は『ヨハネス』をタグボートに引かせながら長い灰色の広がりの中を操っていく。我々とバーテルスはデッキに上がることなく、快適に、時には彼のキャビン、あるいは我々のキャビンで固まっていた。話題が後者の暖房方法となり深刻な状況が見えて来た。我々はようやく理にかなった解決法に

たどり着き、台所のレンジを居室に移し、リッピンジルストーブをキャビンのテーブルの前に移動、暖めるだけでなく料理も可能とした。家具としては大きすぎ、石油の臭いは気の滅入る欠点だが結局、デイヴィスが言う通り、大事なのは快適さで、綺麗さは二の次となった。

デイヴィスは長い間バーテルスと相談していた。彼の船は、まさにあの海域向けなので、我々の目的地を庭のようによく知っていた。

彼の若い相棒は実生活の中に生きていると感じた時を、私は忘れないと思う。彼は我々の目的地も都市中の女王ハンブルグ、そこを見るまで死ねない処と思っていたのだ。

「遅すぎるよ」彼は心配した。

「北海を俺ほどよくは知らないだろう」

「大丈夫、バーテルス。全く心配ない」

「心配ないだと！ ホーヘンホルンで嵐のなか、舵をぶっ壊して、動けなくなっていたのは誰だい。あの時は単に運が良かっただけだぞ」

「うん、でもそれは僕のせいでは…」デイビスは自制した。

「俺たちは家に帰るからね、あそこには何も無いよ」バーテルスは悲しそうに言った。

「相棒がいるので、いいかも知れないな」彼は最後にこう言った。だがいつも私を疑い深そうに見ていた。

デイヴィスと私については、友情は急速に深まった。私には今だからよくわかるが、彼がこの調査の個人的側面について決して語ろうとしない点が障害となり、これが越せない壁となってもいた。一方、私は自分の人生や興味について語った。一ヶ月前にこんな細かく自分を見つめるのは不可能だったと感じながら。そして、私は彼の性格の本質を理解したと思う。とにかく海が好きで、内向きの愛国心と結びつき、それは闘う肉体的表現として外に出る機会をうかがっている。自分の限界にひどく敏感に生まれた人間で、その火に油を注ぎ続けている。私は始めて知ったのだが、彼は若い時に海軍に入り損ね、これが彼の最初の挫折だった。

「何をやってもうまく行かないんだ」と彼は言った。

「色々やってみたが、いつも役立たずのアウトサイダーだ。僕に出来るのは小さな船でうろつく事だけ、それも今まではただの無駄だった。きっと君には僕がどう感じているか分かんたろうが、始めて役に立つ気がするんだ」

「君みたいな奴なら色々チャンスがある筈だよ、こんな偶然に頼らなくともね」と私は言った。

「でもあるんだからいいだろう？　ただ君のいう意味はわかるよ。僕みたいな奴が何百人もいるんだ。海岸線、砂洲、クリーク、潮の流れ、岩礁を熟知している連中を僕も沢山知っている。ただの経験なんだ。

何か、僕たちを使って予備軍を作るべきだ。一度やろうとしたけど立ち消えになって、誰も気にしてない。その結果はどうだ。戦争になるかも知れないのに、我々の予備兵をかき集めても今の艦隊をやっと埋められるだけだ。漁師、民間船員、ヨット乗りとか、ばらばらにしたままへまをやっている。でも彼らを束ねなければ、植民地も含めてね。もし戦争になれば、なりふり構わぬ志願兵募集、無目的な金集め、狼狽、混乱、無駄だらけになるのは当然だ。僕が思うには、もっと先を見て適正な連中すべて、何年か水兵訓練をさせるべきだね。陸軍？　うん、どちらか選択させるんだね。僕は陸軍の事は知らないし、興味も無いけど、人が言うのを聞くとそれって海軍ほど重要なのかい？　イギリスは海洋国家だぜ。海で育ち、海で生活する。もし制海権を無くしたら食っていけない。その点で海で繋がっているだけの我が強大な帝国同様ユニークなんだ。ブラッセイとかデイルク、⁶²『海軍年鑑』なんか読んでみるよ、無関心と自惚れをぶち壊さないとけない。国民のせいじゃないよ。ずっと長い事安全、金持ちになって、どうしてそうなったかを忘れてしまったんだ。でも政治家の石頭は許せない。給料をもらって自分の見たいようにしか見ない『政治家』だつてさ。アメリカ人にABCを学んで来い。過激な民間人に蹴とばされ殴られて来い。嘲笑^{あざわら}われて痛みを感じるほんの何人かが眼を覚まし、仕事をし、指導し、そしてまた蹴とばされるまで寝られるんだ。全く、何てこった！　我々カイザー見たいな奴が必要なんだ。蹴とばされるのを待たずに働き、未来を見つめるんだ」

「我々も改善はしているよね」

「もちろん。しかし、常に坂登り競争なんだ。準備が無い。イギリスの政治家は二国標準⁶³を…」

彼は、ここではスペースの都合で書ききれない、突っ込んだ話しを始めた。これは私達が後になって話した沢山の似た会話のサンプルで、いつもドイツとの比較に発展した。

彼の漠然とした毒舌は、私や外務省は範疇^{はんちゆうがい}外で、私の知恵と外務経験に甚大^{じんだい}な敬意を持っていた。私は自分の『要約』や煙草、舞踏会としてディナーを思うと、恥ずかしくて仕方なかった。

しかし私はドイツの事を確かに少しは知っていて、彼の飽く無き質問に多少の権威を持って答えることはできた。私がドイツの今の世代とその指導者の知恵と力によって素晴らしい覚醒^{かくせい}を話す時には、うっとりして聞いていた。強い愛国心、沸騰^{ふっとう}している工業活動、そして最も強力なのは近代ヨーロッパを形作る力と植民地帝国への夢、

⁶² チャールズ・デイルク、イギリスの政治家。

⁶³ イギリス十九世紀末の、第二、三位の国の海軍力を併せたよりも更に大きな海軍力を整備するという方針。

陸軍国から海軍国へと変貌する力についてだ。

イギリスは広大な植民地の資源に大きく支えられ、それを危うくする訳には行かない。一方、かの指導者たちの知恵はドイツ人のおぼろげな本能に、進む方向を示し、未来を提示する。我々の今の貿易の競争相手、未来の海軍のライバルは成長し強化され、機会を待つ。イギリスの強大で繊細な帝国のネットワークの未来の隙をね。そしてイギリスは外部からの刺激に、薄物うすものをまとったように敏感、貿易が命という輝く島だ。毎日食べるパンさえ航行の自由に掛かっている。

「我々は準備ができていない」とデイヴィスだったら言うだろう、

「我々はドイツの進む方向を見ていない。北海には海軍基地はないし、北海艦隊もない。海軍のまともな船は北海で活躍するには喫水が深すぎる。それに一番の馬鹿はヘリゴランドをやってしまったことだ。北海沿岸を制することが出来るどころだ。もしオランダを併合したらどうなる。そんな話が無かったかな？」⁶⁴

それについたは私は汎ドイツ主義政党の肥大した野心、終わりの無いオーストリアとスイス併合の策略―直接的でまぎれもないイギリスへ、そしてオランダへの脅威―について話した。

「でも、僕には責められないな」とデイヴィスは言った。あの愛国心にも拘わらず、彼の中には民族的な感情はかけらも無いのだ。

「僕には責められない。一番重要になってきたライン川がドイツ領では無くなってしまいうからな。河口はオランダでイギリスの反対側に素晴らしい港ができる事になる。僕たちは征服だの併合だの話す資格がないね。世界中でやって来たからな。だから彼らは完全に妬むねた権利がある。彼らに僕たちを憎ませろ。それで気が付く、それが本当に重要だ。」

この話の中では、二つの異なる精神の稀に見る接触があった。私には調子のいい一般論を語るのは難しく無い。しかし今までそれを実用にと落とし込むなどと言う低級な事は考えた事もない。私はいつもお節介で心配性な連中を嫌って来た。かれらは煩いくせに無知を装い、永遠に哀れなペシミズムを叫び続けるだけだ。

その私の精神がデイヴィスのそれに直撃され、ショックで目覚めた訳だ。少なくともここには尊敬に値する物がある。彼がよく聞く専門用語を使い、どもりながらの言葉に（時に、彼が興奮している時最高に不思議な効果を生む）ジャーナリストや議員の常套句じょうそうくが混じったのは確かだが、これらはつまらない事故に過ぎない。彼はこの海の

⁶⁴ 1890年にイギリス、ドイツ間でヘリゴランド・ザンジバル条約が結ばれた。これはアフリカでの植民地の権益争いを調停するもの。

魂とも言うべきものから非常に深い確信を得たのだ。安楽椅子批評家と、日焼け潮焼けした熱心な活動家とは全く別のものだ。個人的なつらさに耐え、手段に渴望^{かつぼう}し、苦難を忍び、自分の努力を偉大な目的、イギリスの海洋覇権^{はけん}に捧げているのだ。彼はまさに風と潮のしぶきからインスピレーションを得ているのだ。彼は舵棒と親しく付き合い、自分の方向をその力を借りて操作してきたのだ。

彼の話を聞くのは、綺麗な空気が閉じたクラブの部屋に音を立てて流れ込んで来たようである。クラブでは皆極めて能率が悪く、無能で決まり文句を言いふらし、常套句をぶつぶつ言い、そしてどこかに消え何もしない。

我々の政策と戦略に関わる議論では、ビスマルクとロドニー⁶⁵であった。国家と海軍を掌握し、我々の空想は時折とんでもないところまで飛んで行った。実際には我々は七トンのヨットに乗った、二人の単に若い男に過ぎず、水路測量と警察捜査を勝手に面白がっているだけであるが。

もつとも、デイヴィスは決して疑いを持たず、一度始めたら、彼は目的を、子供っぽい信念と粘り強さで追い続けた。これは『彼のチャンス』なのだ。

第十一章 探検者たち

二日目の午後遅く、我々の艦隊はエルベのブルンスビュッテルに到着し、内側の池に並んだ。大きな船は怒っている赤ん坊の様に泣きながら静かに閘門の中に入って行った。その間にデイヴィスは私に船を任せ、オイル缶とミルク差しを持って急いででかけた。

制服を着た職員が船から船へと岸に沿って進み書類に確認のサインをしていた。私は料金のレシートを持って上がって行き、彼はそれに無造作にサインをした。そして立ち止まり頭を掻きながらつぶやいた『ドウルツイベラ』。

「それが名前か。イギリス人？」彼は訊いた。

「そうです」

「小型レジャーヨット、これだな。君に問い合わせがあった」

「誰から？」

「大きな荷物用ヨットの友人からだ」

「ああ、分かった。ハンブルグに向かった船ですね？」

「いや、違うね船長。外洋に向かったよ」

彼は何を言いたいのだろうか？ 何かにひどく面白がっている様だった。

「いつでしたかねー三週間前位？」私は何気なく訊いた。

「三週間前？ 一昨日だよ。ちよつとの時間の差で会えなかったのは残念だね」彼はくすりと笑ってウインクした。

「彼は何か事付けでもしませんでした？」と私は訊いた。

「訊ねたのは女性だよ。」にやにやしながら囁いた。

「あつ、本当」相当馬鹿馬鹿しそうに答えた。しかし非常な好奇心を隠して。

「その女性は何『ダルシベラ』の事を訊ねたのですね？」

「大変だったぜ。中々満足しなくてね。私が台帳を調べている間覗き込んでいたよ。『すごく小さい船』と言い続けてね、『名前は全部ここに書いてあるのですよね？』と言っていた。小さなボートで雨の中、漕いでいくのを見送ったよ。事付けは無いよ。あんな悪い日にフロイラインが一人で外に出るなんてね。アッハ、危なくは無だよ。波の中を引き潮を横切っていくのは中々見ものだった」

「ヨットは川を下っていったのですね？ どっち方面へ？」

「分からないよ。ブレーメン、ウィルヘルムスハーフェン、エムデンー北海のどこかな。君には遠すぎる

ところだ」

「それでも無いかも知れませんが」と勇ましく言った。

「アッハ、あの船で追うのかい？ ハンブルグに行くのじゃないのかね？」

「予定を変えられますからね。会えなかったのは残念だし」

「二度よく考えた方がいいよ、船長。ハンブルグだって可愛い娘が沢山いる。でもイギリス人は何をするか分らん。グッドラック」

彼は笑いながら次の船に行った。デイヴィスはじきに缶と腕一杯の黒い、ライ麦パンを持って帰ってきた。大型船は通過し、小艦隊はすでに閘門に押し合いながら入り始めバーテルスは痺れを切らせていた。

「あれは十日も掛かるぜ」我々が、フジツボの様に『ヨハネス』の横にくつつきながら、群れについて行くと、彼は言った。我々は閘門が空になる数分間、バーテルスと話していた。

カールは帆綱を巻き上げ機に引っ掛けると、わき目もふらず、物凄い勢いで回していた。彼のもじやもじや頭を反らし、汚れた顔に汗をかきながら。そして閘門のゲートが開いた。バベルの叫び声、滑車の回る音、ヨットのマストなどのキーキーいう音、そして我々全員はエルベ川の汚い中に分かれていった。

『ヨハネス』は風と潮を受けて航路を決め川の真ん中の方へ向かった。とうとう握手をして、バーテルスは不承不承ロープを解き我々は滑りながら離れて行った。

「良い航海を！ 良い航海を！」

悲しそうに見送る訳にはいかなかった。強い潮流が我々を引っ張り外に押し出したからだ。前檣帆フォースルを張ってようやく浅い湾に出られ錨を下ろした。ようやく彼の事を考える暇ができたが、彼の船も他の船も陰気な東の方の影になっていた。

我々は滑らかな青い泥の斜堤に揺れながら近づく、それは海藻が生えた堤防に繋がっている。その背後には平らな暗い湿度の高い土地が広がり、向かい側二マイル先には、夕暮れで殆ど見えないが、同じ様な岸の線が見える。この間を水嵩みずかさの増したエルベが流れている。

「地獄を流れる三途の川」バルト海の港を思い出すと私にはこう見えた。

私はデイヴィスが錨を下ろし次第、聞いた事を話した。本能的に、聞いた人の性別を、あの職員がした様に最後まで隠して。

「『メデューサ』が昨日ここに来たのか？」彼は遮り、

「外洋に向けて？ おかしいな。なぜ彼は川を上る時に訊かなかったんだ？」

「彼女だよ」私は、忙しくデッキの上を掃きながら、そっけなく職員の話しを受け売りした。

「これで帳消しだな」と話しを終えた。

「下に行つてストーブを付ける」

デイヴィスは停泊灯を取り付けていた。私が最後に見た時には彼は未だ作業中で、でも動かず、ランタンを左の腕に挟み、右手でステイと半分結んだ紐を掴んでいた。彼の眼は下の川を見続け、妙な表情をしていた。半分勝ち誇り、半分まごついてゐる。彼が戻つて来て話した時、難しい議論に結論を出すところらしかった。

「とに角、『メデューサ』がノルダーナイに戻つたと言うことだ。それが重要だ」と言つた。

「多分」と私は合意し、

「でも僕たちが知つてゐる事をまとめてみよう。第一に、これまで会つた連中は僕たちを全く疑つてゐない」

「彼は自分の考えだけでやつたと言つたろう」とデイヴィスは割り込んだ。

「第二に、彼も疑われてゐない。もし彼が君が言う様に、この辺で知られて無いなら」

「知られてるかどうか僕には確かめようが無い」

「第三に、彼はハンブルグから戻る時に君の事を訊いた。三週間も後に。どうも彼は君を処理してしまつたとは思つてゐない様だ――どうも彼は君を処理つもりだつたのではない様だ――彼は娘も送つて来たんだから。状況を考えると変な動きだよな。ひよつとして、すべては間違いかも」

「いや、間違いじゃ無いね」と半分は自分言つた。

「でも彼があの子を送り込んだのかい？ 彼の部下を送ればいいだろう？ 全く、乗つてゐなかつたのかも知れない」

なる程これは新しい視点だ。

「どういう意味だい？」私は訊いた。

「ハンブルグに着いた時、彼はヨットを下りた筈だ。何か他のよからぬ仕事でね。彼女は帰る途中で、ここを通過……」

「分かつた、個人的に知りたいだけということか」

「それは、考え過ぎだろう」

「あの娘はクルーだけ連れて一人で帰るかな？」

「彼女は海に慣れている――それに一人じゃ無いかも知れない。義理の母親がいたろう。――でもそれは我々の計画には何も影響しないよ。明日の朝、潮流に乗って出発だ。」

我々はいつもの夜よりも忙しかった。必要品をしまい、ロッカーを整理、そして動きそうなものを固定した。

「ちよつと節約しないと」とデイヴィスは我々が筏で難破している様な事を言った。

「オイルを買うためにどこか上陸なんてしたくないからね。」これはデイヴィスのお気に入りの台詞だ。

潮流の無いバルト海はとうの昔に去ったので、寝る前に航海の条件を考慮する様言われた。強い流れが船の横を過ぎて行き、十一時にパジャマの上にオイルスキン（何と言う組み合わせ）を着て予備錨つまりケツジを繰り出すため外に呼び出された。

「ケツジオフって何だ？」我々が、再び寢床にもぐった時、訊いた。

「座礁した時、君は――でもすぐそうなるよ」

私は明日を考えて覚悟を決めた。

いよいよその時が迫って来ていた。十月五日、八時、我々の最初の肉体労働が待つ海に向け川の上を進んでいた。河口まで十五マイルのところだ。テムズの下流の全くつまらない河口の様に、茶色の荒涼としたところだ。だが景色などどうでもいい。灰色の空からは南西の風が吹き出し、常にいつ帆を縮めようかと思わせる。潮は力をまし、我々の流れる速度は潮流の強さを証明しており、ブイが見えてきた。汚い泡のなかで揺れるのを上の方に見ながら通り過ぎた。最初は私は殆ど気付かなかった――水面は静かで、ブイも道の里程標の様にいつも通りに見えた。岸の北側は急速に遠ざかり、『川』は深い水が広大な河口沿いにあるだけである。幅は三―七―十マイルと広がっていき、開いた海に繋がる。

「海に出たんだ」私は叫んだ。

「一時間かかった！」

「やつと気が付いたかい？」デイビスは笑いながら言った。

「十五マイルあると言ったじゃない」私は文句をいった。

「そうだよ。岸沿いにクックスハーフェンに着くまではね。しかし、海と言っていいよ。でも右舷のあの辺は皆、砂洲だけだな。見ろよ！　いくつかはもう見える」

彼は北を指した。注意して見るとブイの外側の線のところに、あちこち盛り上がりがあり、水に見え隠れして

いる。一、二か所では白い筋や円形の泡が見え、そんな円形の一つは滑らかな紫色の瘤で、寝ているクジラの背中の様に見える。私はデイヴィスの眼が何もない水平線を眺めるのを見て、例の魔法にかかってしまったと思った。彼はそれらを旧友の顔に新しい意味を見出す様に、熱心にチェックもしていた。彼の熱意の一部は私にも伝わって来て、身体が震えるようなスリルを静めていった。保護者のような陸地は、まだそこにあり気を静めくれる。しかし切り離しは急にやって来た。潮流が我々を巻き込みながら下り、帆の張りが助け、クックスハーフェンの外に間もなく出た。街は大きな堤防の下に沈み込み、幾つかの家の煙突だけが見える。

それから一マイル位で、海岸が鳥の爪先の様にとがり始め、堤防は長く低い、何門かの大砲だけが突き出ている砦の様になった。そして突然防砂堤と砂地の南側に沈み込んだ。

我々は開いた海に飛び出し、障害物の無くなった風がその事をはっきりと示した。ヨットは小さな波に浮き上がり、また沈む。しかしわたしの最初の印象は海の静かさである。風は水平線から水平線へと気ままに吹いていた。

「砂地だらけじゃないか。僕たち、その陰にいる」とデイヴィスは言い、手で左側の海を熱を込めて差し示した。

「これが、僕たちの獵場だ」

「それで、何をするのかね？」

「スティッカーズガットを見つける。ブイの近くの筈だ」

大きな赤いブイと書いてあるブイがじきに見え始めた。デイヴィスは左側をのぞき込んだ。

「センターボードを上げてくれ、頼む」彼は他に気を取られている。そして続けて、

「そこに着いたら、双眼鏡を取ってくれ」

「いや、要らない。分かった、帆のところへ来てくれ」これが次の言葉だった。

彼は舵の柄を波立ち、色の変わった沈み込んだ砂地を覆う水面に向けて風下に切った。小さな波がぱちぱちやいつている『寝ているクジラ』が我々の進む先にあった。

「深さを測る準備をしてくれないか？」とデイヴィスは丁寧と言った。

「僕は帆を何とかする。もう前進できない角度だ。準備！」

風は真正面に吹いていて三十分ほど、僕たちはどんどん短くなるタッキングを繰り返し、じりじりと前進し、西側にある浅い海に向かう水道の曲がりくねった窪みに入っていた。

私はもつれた紐の間に膝をつき、漠然と何か非常に際どい事が進行中と感じながら、錘をせせと操った。

ぶつかり、水を浴び、だんだん小さくなる水深を叫び、自分の仕事の重要さを感じていた。

デイヴィスはは聞いていた風が無かったが平然とタックを続け、舵、帆を操り、海図を見て、見ていると目が回りそうだった。これほど頑張っているのに、非常にゆっくりとしか進めないようである。

「駄目だ、潮が強すぎる。賭けるしか無い」とうとう彼は言った。

「賭けるって何を」何の事だろうと思った？ タックの周期が突然長くなり、水深は小さくなるのに気付いた。暫くの間はうまく行って、多少は進んだ。そして今までより長いスパンを進んでいた。

「二・五―二―一・五―一―たつた五フィート」私は、心配してあえいだ。

水の色は濃く、泡だらけになっていった。

「もう構うもんか」デイビスは大声で考えた。

「渦が出来ている。これを利用しない手はないぜ。―用意、三角帆を戻せ」

だが遅すぎた。ヨットは舵に殆ど応じない。停止して、のたうち、擦りながらかなり傾いた。デイヴィスは

メインセールをすぐに下ろした。私はもつれた紐のなかで、風下側にうずくまっていたが、それが半分ほど

蔽い^{おほ}被さってきて、恐怖と無力さを感じた。私は、まわりついていた帆の中から這い出し彼がマストの処に夢見心地で立っているのを見た。

「引き潮じゃあ、あまりうまく行かなかったな。だけどケッジを使ってみるか。予備錨を引き出している間、ロープを繰り出してくれ」

稲妻のようにデインギーのとも綱をほどき、予備錨と彼を放り込むと五十ヤードほど水深の深いところまで漕ぎ、錨を放り込んだ。

「よーし、引っ張れ」彼は叫んだ。

私は引っ張り、ケッジオフの意味を理解し始めた。

「ゆっくり！ あまり力を入れすぎるな」デイビスはデッキに飛び乗りながら言った。

「動いている！」私は勝ち誇ったように言った。

「ロープがね。でもヨットは動いていない。錨を引っ張っているんだ。ま、いいさ。船は流される事はない。昼飯にしよう」

ヨットは動きを止め、廻りの水は見ている内に下がっていった。すねたような波が船の横を叩き、私の感覚が散漫になっていたとは言え、全く危険は無いことに気付いた。我々の周り全部の水面は次々と変化して行き、

あるところは白く、あるいは黄色っぽくなり砂の広がりが見え始めた。右側近く、我々が通過した水道は濁った川のようになっていた。私はその流れがエルベ川の方に速く引いて行くのをみて、なぜあんなにも進みがのろかったのか理解した。デイヴィスは、既に下に行つて、非常に機嫌よくいつもより豪華な昼食を用意していた。

「静かなもんだろう？」と彼は言った。

「もし、座つて昼食したいなら、座礁するに限る。それにどうせ、ここで他と同様に仕事ができるからね。すぐ分かるよ」

殆どの陸の人間同様、私は座礁について完璧な偏見を持っていた。私の師匠の、呑気な常識外れの行為には相当怒りを感じたものだ。昼食後、湾の大きな海図を持ち出し、一緒に見ながら次の何日かの仕事を決めた。しかし、この細かい点を記して、普通の読者を飽きさせる必要も、教科書とする読者に、詳細を書き記すスペースもない。どちらの読者にも概要図で十分である。大きなスケールの一部を示せばその海域の詳細な例となるはずだ。ヤーデ、ウェーザーとエルベによる広い流れが砂洲を二つの主たるグループに分けているのが見えよう。これの最西端は外形が対称で、鋭角を持つ三角形であり、とがった鉄の爪のようである。半島から飛び出した木の柄を想像してみたい。もう一つは土手による巨大な堆積物でその基盤はハノーバーの海岸にあり、その二つの岸は、まずまず綺麗で平らである。北西に面する三つ目は海の力によりリボン状に切り裂かれ、深く侵食された窪みがあり内部に向けて触手が打ち込まれたようである。

全体は逆さまにした田の字、あるいは粗製されたフォークの様で、その三つの危険な先にスカルホルン礁、クネヒト砂洲、テーゲラーフラットがある。これらの砂洲以外にも北風にあおられて、沢山のまともな船が破壊されて来た。これと似たような形でホーヘンホルン堤があり、ここでデイヴィスは難破したが、これは上部と真ん中のフォークの間にある。

我々の仕事とは、この槍や爪、その間を分岐する水道を調べることだ。私は一般的な用語で『水道』を使うが、実際にはそれらの様子はそれぞれ酷く異なり、ドイツ語で様々な名前と呼ばれている。Balje、Gat、Loch、Diep、Rinneとかである。ここでは私は二つに分類するだけに留める。どんな潮の状態でも、何時でも水があるものと、水が無くなるものである。後者については、引き潮時に完全に無くなるもの、部分だけ無くなるものを含める。

デイヴィスは、後者を一番よく調べる必要があると説明し、我々の主たる関心事である。と言うのは、それらは『通過可能ルート』であり河口の間をつなぐものだからだ。海図では小さな「」字の列で示され、これは水道を維持す

るための、固定された柱あるいは材木の形をイメージしたものだ。

印はもちろん決められた記号に過ぎず、実際の『固定柱』とは全く対応しない。実際は遥かに数が多くまた複雑であり、大きなスケールの図でも描ききれない。水道の取るコースも同様で、詳細な蛇行は記録できない。ヨットが居るのは、これらの潮が切り替わる所の一つの端で、ステイッカードッグと呼ばれるところだ。クックスハーフェンから我々を通ったルートの西の方を追えば、場所を間違えることはない。

デイヴィスが言うには、ここは、あの忘れられない日に『メデューサ』が誘導した、『ショートカット』の最後で最も混みいった部分だ。そしてそこは彼も到着出来なかったところだ。

議論は終わり、デッキに出た。デイヴィスはノートを抱え双眼鏡とプリズムコンパスを持ち、やっとその用途が明らかになった。水道の曲がり具合を海図に書き込むためだ。これが我々が浮かび上がった時私が見たものだ。

第十二章 イニシエーション

ヨットは自分で掘った桶のような物に支えられ、数インチの水に囲まれている。堀の中にいるようで、傾きは僅かである（底のビルジキールが小さいため）⁶⁶。

何マイルもすべての方向に砂の砂漠が出来ていた。北は地平線まで続き、青い点に見えるノイウェルク島と灯台だけが見える。東側も無限に続くように見えるが、汽船の煙がエルベ川が流れていることを示している。南の方向は鉛筆状のハノーバー岸まで達している。西側のみ、持ち上がった輪郭が海の痕跡で破られている。そこでは活気のある、這うような白い筋が見え、北西のある点で混乱して入り混じる。そこからは水音が聞こえ、沢山の蛇がシューシューと音を立てている様である。

私はそこを砂漠と呼んだが、全く面白くないと言う訳では無い。色について言えば、一番高く風で乾燥したところは明るい黄褐色をして、まだ濡れている所は茶色か深い紫を見せ、綺麗な底に泥がパッチの様に見えるところではスレートの灰色である。そこかしこに水たまりがあり、風は叩いて水紋を作るだけである。貝や海藻があちこちに散らばっている。我々のすぐそばから、あの北西のシューシュー音を立てているところに向かって、小さな水道が曲がりくねり始めている。澱み、どろどろしたどぶの様に一フィートの深さ程度の水で、予備錨を沈める深さもない。錨爪はその突起部を恥ずかしくも無く持ち上げ、馬鹿にしている様だ。どんよりした、厚い空の中で風は、逃げた獲物をに絶望して吠えている様に、船の艦装に叫ばせ、全体に非常なわびしきを感じさせる。

デイヴィスはは少しの間、辺りを嬉しそうに見回し、横棒の偵察し易い位置に登り、水道に沿って双眼鏡をあちこち向け覗いた。

「かなり良く杭がうつてあるな。」デイヴィスは考えるように言った。

「だが一本か二本は随分はずれている。うわあ、あそこは危ない曲がり角だな。」彼はコンパスで方向を測り、幾つか記録し、砂の上に元気に飛び降りた。私が思うには、これが彼の好きな唯一つの『上陸』方法であろう。我々は、あの使い難い海用ブーツで行ける限り早く走りだし、水道のコースを西に辿った。潮が満ちた時に航行する道の偵察である。

「こういう場所を知るにはね」とデイヴィスは叫び、

「水の低い時に見るに限る。土手は乾いているし、水道は一目瞭然だ。あの杭を見て見ろよ。」

⁶⁶ 船底の両サイドに長手方向に伸びるひれのような支える部材。通常左右に一つずつ装備さえる。

彼は立ち止まり、馬鹿にしながら指さした。

「全然、外れているじゃないか。多分水道が動いたんだな。それに大事な曲がりのところにしか無い。もし、潮が満ちている時、あれをガイドだと思ったら座礁だな」

「でも非常に都合がいいよね」と私は述べた。

「おい、何を言っている」と彼は笑い、

「僕たちは調査しているんだ。この水道を間違ひなく航行したいのだよ。次回はそうするからな」

「彼は止まり、コンパスで測定しノートに記録した。そして走り出し、次の測定点で止まった。

「見ろよ、」彼は言った。

水道は深くなりつつあった。少し前までは殆ど水が無かったのだ。

「流れ込んで来ているだろう？ 潮が満ち始めたんだ。――注意して、西側からだ。つまりウェーザー側からだ。

僕たちは分水嶺を超えたわけだ。」

「分水嶺？」私はぼかんとして繰り返した。

「そうだ、僕はそう呼んでいる。この位大きな砂地だと、丘が並んでいるようなもので、平地を分けるんだ。そう見えるかも知れないが、完全に平らという事はない。必ずどこかに一番高い点、あるいは稜線があるんだ。砂地を通って行く水道は、もちろん、いつも一番低いところで稜線をこえる。水深が低い時、そこは普通乾いており、だんだんと両側の海に近づくにつれて深くなる。

一方、満潮の時、すべての砂地が水面下になれば水はどこへでも行ける。しかし、引き潮の時はこの稜線の両側に流れていく。そして水道は二つの中心、あるいは、僕の言う分水嶺から反対向きに流れる川になる。

だから、引き潮が終わって満潮が始まると、水道は二つの方向から中心に向かって流れてきて真ん中でぶつかる訳だ。ここでは、エルベとウェーザーが二つの水源だね。この流れは東に向いている。潮が満ちているのは時間からわかるから、分水嶺はことヨットの間にある」

「どうして、それがそんなに重要なのかね？」

「理由は、流れが強いので、いつ正しい流れを失い、悪いのに当たるか知るため。それに稜線部は引き潮時に航行する時、際どいところ。そして稜線部をいつ超えたか知りたいため、こんな処だな」

我々は大きな干潟で遮られるまで進んで行った。これの方が水道よりもずっと大事そうに見える。しかしデイヴィスはちよつとばかりよく観察しただけで、馬鹿にしたように行った。

「これは行止まりだ。向こうに、あの砂の盛り上がりが見えるだろ。あそこまでだ」

「でも杭が打つてあるよ」土手の上にうなだれている杭を、指しながら注意した。しびれた指を偽杭に向け振った。「そう、あそこで間違えるところだ。昔削ったところに泥が貯まったんだよ。杭は偽ものだ。これ以上先にいく時間が無い。満ち潮が速い。ここで見える処の方角を測定しておくから」

この偽干潟は西の方に見え始めた幾つかの内の最初のものだ。膨れ上がりそれまで分割していた砂の間に手を伸ばし、隣と繋がっていく。この間、遠くにあった水音は近づき、大きくなってきた。雷のような音がその中にとどろき始めた。我々は風に背を向け『ダルシベラ』の方に急いだ。水道の中の水が急いで流れ、高さを増していた。「ちょうど、反対側を調べる時間がある」我々が船のそばに戻るとデイヴィスは言った。

私は自分達の基地に、道を無くすことなく戻れて喜んでいた。その朝やってきた方面に小走りで行き、水たまりの水を跳ね飛ばし、出来立ての小川を飛び越えていった。小川は潮が満ちるにつれその母水道から網目を通して水を盗んでいる。観測が終わると、我々は侵入してくる潮を避け高い部分を遠回りした。最後は水は脛の深さまであり、かき分けてヨットに戻った。

私は船によじ登ってほっとした。遠くの方から、私を馬鹿にして、今日の処はこの位にしておくという声が聞こえる気がした。それは、何世紀も前の別の人生の私の声だ。東と西からの水のシートが砂漠を覆いつくし波の舌をだし、合流し溶け合った。

私はデツキの上で容赦無い海の襲撃に窒息していく砂の最期を見ていた。最後の砦は破壊され、襲撃され圧倒された。騒乱音は沈み、静かになり、海は勝ち誇る様にすべての広がり覆いつくした。これまで、人を馬鹿にした様に静かだった『ダルシベラ』も眠りから覚め、ぶつかって来る波に震えた。そして、頑張って船を突然水平に引っ張り上げ、ぶつかり、じれて伸びをし、この生意気な侵入者を征服し従わせた。

じきにロープがピンと張り、鼻がゆつくりと向きを変えた。船尾はまだぶつけていたが、だんだん力が弱まる。突然、船は自由になり錨が引き留めるまで舷側を風に向け漂い、錨の風下に移動し気楽に、勝ち誇ったように揺れている。機嫌のいい小さな奴！ 心の中では砂も海も同じように友達なのだ。単に昔からの恋人と新しい恋人が彼女を得ようと命を懸けて闘い、その騒ぎの中で酷い目に会々と、かんしゃく癇癪を起して反乱を起こす。

我々は急いで、お茶を一杯飲むと帆を上げ、西に向けて出発した。再び『分水嶺』を過ぎると強い潮流に出会った、しかし進行方向は今度は北西なので我々はタッキングをせずに進めて、潮流に抵抗できた。

「センタープレートを一フィート程下ろしてくれ」とデイヴィスが言った。

「我々はこの航路を知っているからね。それに風下に流れるのが少なくなる。でも普通は引き潮の時は、センタープレート無しで行く。もしプレートを出したまま座礁しようものなら、溺れさせられるべきだな」

私は始めて我々の調査がどんなに大切か分かった。杭は我々の右側にあるが、それは枯れた葦だ。水道の広さは全く分らない。何艘もトップ⁶⁷を失い、上昇する水で全部のみ込まれてしまっている。

我々が水道が終わり偽干潟のあった処に着いた時には私は完全に場所を見失った。フォークの根本を構成する、高く、比較的平らな砂を越し、ばらばらな土手の迷路に入って行った。それは上側と真ん中の突起のじょうご型の隙間を遮るものである。これは海図で知っていた。しかし私の眼には深さが増すにつれて濃い緑になり、陰気で怖ろしく、白い牙を見せている開いた海しか見えない。水道はまだ曲がりくねっているが、広く、深くなり、波は長く、高くなった。

デイヴィスは方向を知っており、取るコースに自信をもっていた。

「深度測定」と彼は言った。

「コンパスはもうじき役にたたなくなる。次の杭が見つかるまで砂の端を見つけないで進もう」

「今夜は何処に錨を下ろすつもりなの？」私は訊いた。

「ホーヘンホルンの下、懐かしき昔のためにね」

一部は目視で、殆どは測りながら、新たに杭の群れが現われるまで、隠れた迷路の一番外側の細道をそろそろと進んだ。これらは私にはちんぷんかんぷんであったが、彼によると二つのグループに分けられる。その一つを我々はある距離の間辿っていたが、それもととうなくなり、風上に向かってまた次の探索を始めた。

夕暮れが近づいていた。ハノーバー湾の線は、決してはっきりと見えなかったが、今は全く見えない。不吉な盛り上がりがこの小さな海の下に走っている。私はデイヴィスの楽しい趣味に付き合うのを止め、身体を動かす事にして、これから起こる怖れを消そうとした。海の上に錨を始めて下ろす恐怖が一日中、私の意識下にあったのだ。

「水深測定、すぐに！」彼はようやく叫んだ。私は一・五尋と測った。

「ここが土手だ。ちよつと距離を取ったら泊めよう」と言った。

67 デッキ上の構造物や艀装と思われる。

「ここだ！」一分後に彼は命令した。鎖が音を立てて走って行った。『ダルシベラ』は急に動きを止め、元気に北海に対面し、夜は更けていった。

「やれやれ」主帆を仕舞い終えると、デイヴィスは言った。

「安全で快適。素晴らしい砂の湾で深さ四尋、誰にも邪魔されず、貸し切り状態だ。金の請求も、車も通らなければ、何の心配も無い。あの馬鹿げた文明も近くになくて、バルト海の入江よりもましだね。一番近い海岸から七マイル離れている。ノイウェルク島からさえ五マイルある。灯りをつけ始めたぞ」東の方に小さな光が見えた。

「大丈夫だろうと思うけどね」と私は言った。

「でもどこかに防波堤でも見える方がいいね。天気が悪そうな夜だし、下の砂の塊もどうもね」

「砂の盛り上がりは問題無い」デイヴィスは言った。

「外から迷い込んできただけだ。防波堤についてはね、君の周り皆、それだ。ただ隠れているだけだよ。

前の方と右舷は西ホーヘンホルンで、南西方向に回り込んでいる。石で出来た岸壁と同じだよ。北の方で波が音を立てているのが聞こえるだろ。あそこだぜ、この間難破しかけたのは。僕は入り込んだ小さな水道はどこかその辺の筈だ。

左舷側半マイルには東ホーヘンホルンがある。僕たちが今いるこの湖を抜けて、僕が持っていかれた処だ。船尾から一マイル行くとこの砂地の本体だ。フォークの一番上の腕だね。つまり、僕たちは閉じ込められているんだ。海図を覚えているよね。そいつは、簡単……」

「海図なんて、いいよ！」私は怒り出した。もっともらしい快適話しの連続で、惨めな神経に触ったのだ。

「おい、よく見ろよ！もし何か起こったら、もし強風が吹いてきたらどうなるんだ！ここで震えて景色を眺めていても仕方がない。下に降りるからね！」

下で『短い不快な経験』をすることになったが、恥ずかしいけれど、私は探検の目的を忘れていた。

「どのスープを飲みたい？」デイヴィスは数分間の暗い沈黙のあと、恐る恐る言った。

この単純な言葉が、長い技術的な解説よりも、遥かにうまく状況を改善した。

「ねえデイヴィス」と私は言った。

「僕は良く言っても、臆病な野良犬だ。僕を気にかける事はないよ。でも君は今まで僕が会ったヨット乗りやどんな乗員とも違う。どんな事でも、無頓着で平然とできる。君は僕をいつか、深海の呪いで叩きのめすか、

手かせを掛けると脅す方がいいと思うよ」

デイヴィスは眼を大きく開いて、僕が彼みたいにこういう錨の下ろし方に慣れていないのを忘れたのは、彼の責任だと言った。

「ところでね、」と付け加えて、

「強風だけど、その可能性はあるんだよ。晴雨計はどんどん下がっている。でも大丈夫。潮が高い時でさえ、海の流れはね…」

「分かったから、また始めるなよ。君はすぐにホテルにいるより安全だって証明するんだろ。夕食にしよう。それもすごく豪華なやつに！」

夕食は順調に進んだが、コーヒーを入れている時に、ゆっくり揺れていた船体がローリングを始めた。

「こうなると思った。」デイヴィスは言った

「前もって言うておくつもりだったんだ。潮が風と反対向きに満ちてきているんだ。でも安全だから…」

「潮流が収まれば、もっと静かになると言っただけだよ？」

「そうなるさ、でもちよつと荒れたように感じられるかもしれない。潮流っていうのは妙なんだ」と彼は、余りまともでは無い連中に言い訳するように付け加えた。

彼は船の揺れに簡単に合わせながら、日誌を付けるのに忙しかった。私は自分の日記を書こうとしたが集中できない。すべての未固定のものが音を立てている。缶が金属音を、食器だながガタゴト、ロッカーは空虚な呻き声を上げた。小さな物が暗い隠れていたところから滑り出し、床の上で酔っ払いの様にグロテスクに動き回った。ここはゴブリンのいる森の中か？

マストは風の吹くたびに悲しい鳴き声を上げ、セッターボードはしゃっくりをし息が詰まったようだ。頭の上では別の悪魔の群れが解き放たれたようだった。デッキとマストは、この音の指揮者であり共鳴装置であった。

ロープの端のカタカタ言う音をハンマーの叩く音に変え、帆綱がバタつきマストに当たる音をマキシム機関銃の銃声に変えた。全ての騒音は周期を持っていて、合わさると気が狂いそうなリズムを持った演奏となった。

「そろそろ寝るとするか」とデイヴィスは言った。

「十時半だ」

「何だと！ こんな時に寝るの？」私は叫び、

「我慢できない。何かしていなきや。散歩は無理かな？」
私は苦々しく、半分錯乱した冗談を言った。

「もちろん、出来るよ。ディンギーでちよつと揺れるのが気にならないなら。」とデイヴィスは言った。
私は性急な提案をちよつと後悔したが、引つ込みがつかなくなり、窮余の処置が必要だった。デッキに出て、ステイに掴まりグラグラしながら下を見て、そしてディンギーを見た。それは側の海の中にコルクの様に揺れ動いていた。デイヴィスは權とオール受けをセットした。

「飛び降りろ！」と彼は言い、自分が正気に戻り、ボートを掴むと、我々は夜の中に漕ぎだしていた。大きく曲がり、被さってくる波の隙間と隙間を揺れながらである。

デイヴィスはこのウォールナット製の殻からを優しく扱い、波を斜めに滑りながら波頭を超えて行つた。彼は殆ど自分の力を使わずゴールを目指して潮に乗って行つた。突然動きがとまった。暗い斜面が夜の中から不気味に迫つて来てディンギーは静かに浅い渦の中にいた。

「西ホーヘンホルンだ」とデイヴィスは言った。我々は飛び出し柔らかい泥の中に立った。ディンギーを一、二フィート引つ張り上げると土手に上つた。そこは硬い湿つた砂地だ。風は吹き付け声をかき消した。

「僕の水道を探して見る」デイヴィスは怒鳴つた。

「こつちだ。ノイウェルクの灯を右の船尾になる様に」

我々は風に噛みつかれながら、屈んで大股にあるいた。土手から離れた、波の碎ける音が聞こえる方に向かった。

マシユー・アーノルドの詩の一節、⁶⁸『世界の露わな小石』が頭の中に走つた。

『岸から七マイル：』私に浮かび始めた。

『仮りの島の上の海鳥のように慌て、

荒れ狂う潮に囲まれ、海に叩かれ、

夜中に風の強まる中、

頼りにならない隠れ家からも離れ』

時が来たと思つた。自分の弱さを克服するのは今しか無い。風を受けて前に無理やり進むと、気の触れた陽気さが身体中から溢れた。ほんの一分かそこらの間だったろうが、デイヴィスが私を掴んだ。

⁶⁸ 彼の詩、Dover Beach の中の一行。これ以下、この詩のパロディーの趣がある。

「そこを見て、僕の水道だ！」彼は叫んだ。

地面は下がって坂になり、速く流れる川が目の前で光っていた。我々はそれに沿って北に進んだ。どぶの様な裂け目にぶつかり、海藻で足を滑らせ、細かい塩水の霧で眼が見え難くなり、海の波が立てる雷鳴のような声に耳が聞こえなくなりながら。

川は広がり、白く荒くなり、集まって衝撃を強め、砕け散って乳白色の暗闇となった。我々が右側に向くと、発酵した匂いのする白い泡をかぶった。背を風に向け塩水を眼から払いのけ、向き直ると我々の辿った道は逆巻く波に遮られていた。デイヴィスの声が私の耳に響き、指が海の方を指しているのが見えた。

「ここは――大体――僕が――始めに――衝突した――ところだ。――北西の風より――酷い。――こんなの――問題――じゃない。――戻――ろう」

我々は風を背に受け、波頭に沿って走って戻った。私は時間の感覚も方向も見失っていた。水際を斜めに進む内に川が出来、もう一つの海が我々を遮った。再び我々はあの、氣を触れさせる風の牙の中にいた。そして、光の点が左側に揺らめきちらついた。それを見ながら回り込んだ。

何か鋭いものに躓いた――ディンギーの縁だ。我々は逃げられる世界を一周した訳だ。あの夢の国を――悪夢の国というのが私が覚えているものだが。

「君も漕がないとだめだな。風が強まった。船の鼻をちよつと上に向けて――知ってるだろ！」

我々はよろめきながら進み、櫂は時々波に阻まれ、時には波頭の泡を叩いた。

デイヴィスは舳先で、

「引け！」「そのまま！」と時折言った。

私は、彼のオイルスキンの背中に水が叩きつける音を聞いた。

「そして、弱い黄色い灯が波の合間に見えた。

「力を抜いて！ 船に來させろ！」

『ダルシベラ』の斜櫓が怖ろしく巨大になり私の頭の上を突き刺した。

「ちよつと戻る！ 二漕ぎ程だ。櫂を船に放り込め！ ジャンプ！」私は持ち上がる船体を掴み、どさりと乗り込んだ。デイヴィスははとも綱を掴んで続き、乗り込み、ディンギーは船尾に回り込んだ。

「もう、あれは大丈夫」とも綱を結ぶと彼は言った。

「もうローリングは無いよ。潮も大分引いた。」

私はもうどんなにローリングしても気にならかったろう。ようやく臆病が治った。それで助かった。寝台から飛び出して濡れたオイルクロースを着込むのは、気の滅入る一日の始まりだったのだ。

「寝ていていいからね」と彼は言った。

「水が引くまではどうせ何も出来ないんだから。この海では絶対、錨は上げちゃあいけない。来て廻りを見ろよ。水が引き始めているだろう」

デッキの上で、安全のため、止め具に掴まってうずくまりながら続けた。

「風は北西に変わった。ずっと強風だった、それに海はいまが最悪、――一番潮の高い時だ。これより悪い事は無いからね」

私は、目にするものに覚悟ができていた。――周り中荒れた海、砕ける波が作る混沌、これが我々がいる夢の海の状態だ。これらを静かに、多少得意になって眺めた。『ダルシベラ』は嵐にいつも通り、斜檣を海に突っ込み舳先に緑色の水をまき散らしながら、頑固に向き合った。

信頼と愛情の波が私に満ちて来るのを感じた。あの大きすぎる錨とケーブルの重さと嵩をいつもうつつとおしく思ってたが、それらの意味を理解した。ワニス、ペンキそして全く汚れの無いデッキ、真っ白い帆は、思い出したくない過去のにやけた不条理なものとなった。

「今日はどうするの？」私は聞いた。

「土手の内側に居て、どこでも膨らみがあつたら良く気を付ける。砂のバリアーがあっても、それは沢山あるから。この辺だけでも十分することはあるよ」

我々は朝食を酷い環境で取った。そして煙草を吸い砕ける波の叫びが少なくなるまで話した。砂の表面が見え始めたところで、我々はミズンとヘッドセールだけで出発した。私は抜けにくい錨をどう上げるか学んだ。

その場所で回転し、昨日の夜前に横断した場所の上を風に押され飛ぶ様に東に向かった。どんどん引いて行く波のなか、新しい土手が現われ群島のようなのである。

我々は、深度を測り、観測しながら、丁寧にその中や周りを進んだ。場所が許せばそこまで近寄り、さも無ければディングーを使った。

私は、この様な航海でどこにリスクがあるか理解し始めた。海の膨らみが突き抜けている場所や風が長くて深い水道に沿って吹き下ろしている時は、いつでも我々は十分気を付け余裕を見なければいけない。

「ああいうところで座礁しちゃあいけない」デイヴィスは良く言う。

最終的に我々はスタイルサンドまで、再度、別のルートで横断した。そして疲れた一日の後、荒れているエルベ河口から流れ込む増水点より少し手前の、東の限界付近の窪みに錨を下ろした。夜は静かで潮が引くと完全に静止して、新鮮な風が軽い小波を船の横に送って来た。

第十三章 仕事の意味

その後の十日間は我々の仕事を邪魔する物は何も起こらなかった。陽が明るい間から暗くなるまで、航海、あるいは投錨し、座礁、あるいは浮かんだまま、晴雨、風の有無にかかわらず、我々は河口を調査した。また、陸とは全く連絡もしなければ、殆ど近寄ることもなく、水道の網目をぬっていく練習もした。それは労働と、自然からの保護のない危険な生活である。荒れた秋の天候がルールとなる勝ち目の少ない闘争でもある。風は南西と北西の間を変化し、ただ二日だけこの辺りでは安全な方向である東から穏やかに吹いた。風の向きを見て調査する方向を決めた。強く北方向ならば、内側の取り囲まれた部分、穏やかならば端の部分であるが、急に強まったときはどこであれ一番都合のいい処に急いで移動した。

時には広大な孤立した砂地を歩き廻り、時には一日限り広がる、浅い海を飛ぶように航海した。また再度グレートクネヒトを囲む深い溝の廻りを非常に注意して這いまわった。それらは生体の静脈のように複雑で潮の還流が血の様に流れ、調査の必要があった。

我々はまた、引き裂く潮流や逆流によるめきながら進んだ。それはフォークと突端の間の航路に、ウェーザーの大きな流れに寄生して発生する。

天気の良い日に、私はデイヴィスの最初の冒険現場を、土手が乾き水道が見える昼間に見ることができた。

読者はそれを海図で見て、ある程度までは理解出来るであろう。私は、眼で見た証拠として、無邪気な外国人に、これ以上の致死的な罣は無いと主張する。最も容易な条件の時でさえ、北西から近づくと正しいコースを確認するのは困難である。

毎日新しい興奮を経験したので、いつが一番つらい時であったか、はつきりと言えない。特にデイヴィスが危険に面しているなどという事を認めない習慣を持つので猶更である。しかし、十日が一番酷い経験だと思う。その時、些細な計算違いのため我々は危険なポイントに座礁してしまったのだ。

ただの座礁は、もちろん、日常仕事である。いつも繰り返される質問はいつでもうまくやるか、あるいはリスクを犯すかである。この時は我々はそうなってしまったのだ。満潮がやって来た時風下側の水辺にいて、舷側に風を受けていた。風は危ない海の水を、一三マイルのほど漂流させながら力を蓄え、一ロビン・バリエを経過して送って来た。それは、上で話した通り、深い静脈の一つで我々の風上に静かにしていた。クライマックスは夜の十字頃に起こった。

「船が浮かぶまではなにもできない」とデヴィスは言い、彼は静かに煙草を吸いながら、擦れて出来た歪みを継ぎ合わせていた。彼がいうには船はチーク材を二重に組み合せてあるので、考えられるあらゆる場合にも耐えるとのことだ。

船はその夜、確かにとんでもない試験に直面した。そこは硬い、弾力の無い砂地で船はそこで、持ち上げられては落ちるといふ酷い痙攣^{けいれん}を起こした。最後の三十分、私は最も耐えがたい緊張を強いられた。私は怖ろしくてキャビンに居られずデッキに出てしまった。エネルギーを与えられた海水のシートが船全体を持ち上げ、そして船の竜骨を砂地に叩きつけたのだ。船は震え、私は何回も破壊されると思った。しかし、実直な作業で造られた、あの強靱^{きやうじん}な皮膚は試験に耐えたのだ。最後のどしんという音の後、船は自由を獲得し錨を見つけ問題無く浮き上がった。

全般的に見て、我々は殆ど間違いを犯さなかつたと思う。デヴィスは仕事に大して最高のやる気を持っていた。毎時間、時には毎分問題が発生したが、彼が対応できなかったことは無い。問題が難しくなるほど冷静になる。

彼は訓練され身に着ける技能とは別の本能を持っている。彼の場合と類似な例を考えると、これは完璧なガイドや斥候^{せこう}に最も欠けているものだ。彼は砂地が見えず、触れないところでも、その匂いを嗅ぎつけるのだと思う。

私については、海は不可欠のものでは無かつたし、これからもそうだ。それにも拘わらず、私は人生に対して強くなり、より厳しく、タフになり、まずまず機敏になった。兵隊が一年以上の行進とパイプクレイ⁶⁹よりも実際の戦争で一週間の間に学ぶ方が多いのと同様だった。気晴らしから完全に切り離され、野営から別の危険な野営へと移動し、生きるために、ある程度は自分の筋肉と知恵を頼り、急速に仕事を学び、ある機敏さを身に着けたのだ。

暗い中でもロープの操作ができ、スコールの中を無駄なく何とか風向きに進め、位置を測定でき、そして風と潮の関係を予見できる様になった。

我々は普段は誰にも会うことは無いが、時々砂の中をタッキングして通る『ヨハネス』の様なガリオット、そして一、二回、その様な船の一群が水道に錨を下ろし潮を待っているのを見た。彼らの喫水は、積載時には六、七フィートである。我々の船はセクタープレート無しで四フィートである。我々の観測では彼らの喫水の平均を基準とした。つまり喫水が六・五の船がいつどの様に航行可能かを確認したわけだ。

69 兵隊が革を白くするのに使った。

我々の動機について更に一言、二言記述しておく。前に言ったように、デイヴィスは戦時には、この全ての海域は小型の独立攻撃船には理想的な狩場と確信している。砂地を通りハンブルグ、ブレーメン、ウィルヘルムスハーフェン、そしてドイツの中心部に至る三本の海道を見ると彼の考えは正しいと思う様になった。それらは山岳地帯の隘路^{あいろう}を突き抜けるハイウェイの様で、百人ほどの勇猛な人数があれば、軍隊を阻止できる。つまり、地上戦の場合、山岳地帯に勇敢で有能な国民を配置し、詳細な小道や乗馬道の知識を持つ少数の人数を、軽装で機敏^{きびん}に動かす訳だ。そのようなゲリラがどの位優位であるか想像出来る。敵の軍勢は、ぬかるみを、大人数で、ゆっくりと『地理を知らずに』に進まざるを得ない。彼らがどの様に強力さで圧倒する敵に壊滅^{かいめつ}的打撃を与え、全ての決定的な戦いの後長い間、準受動的抵抗を長引かせる事が出来るか考えて見ればいいだろう。強力な侵略軍は敵の戦術、国情を研究し、知略と機動性により敵軍の戦意を低めて始めて征服出来る。この様な対応関係について、行きすぎてはいけないが、この種の戦い方は海戦に於いても対応するものがある筈だと言うのは否定できない。

デイヴィスの熱意はこの重要性について妥協することがない。浅い海域での小型艦艇は、彼の視点では重要な役割を担い、これは戦争が進展して最終段階に達した時さらに重要さを増すと考えている。

「重量艦隊もいけどね」と彼はよくいう。

「しかし、両軍が拮抗^{きつこう}していたら、何か月後には何も残っていないかも知れない。お互いに破壊しあい、戦勝側の提督^{ていとく}が凱旋^{がいせん}する軍艦さえ残らないかもしれない。本当の戦いはそれから始まるのだよ。その時こそ、浮かぶものは何でも徴用され、自分の命などコインの表裏にしか思わなく、自分の海を知り、船が操れる者には素晴らしい機会が訪れる。小型船がこの海域で出来る事は十分明確だ。でも良し悪し両面がある。我々の場合を考えるとね、例えば、荒海では船隊に敵わない。それから飢餓^{きが}や侵略という問題がある。その場で降伏何て言うのはあり得ない。半分の糧^{りょう}食^{しょく}で生き残り、回復そして建造する。しかし時間が要る。その間に、我が方の海岸や港が危険になる。防御のために、港に沈める何百万トンという船や機雷のため港が使えなくなるのだ。それらは固定されている――完全に受動防御だよ。要るのは小型ボートだ――刺す蚊^{しゅうめい}だよ――大群だ――哨戒艇^{しょうかいてい}、偵察艇^{ていさてい}、魚雷艇^{てい}だ。地元の人間で構成される有能な不正規軍だ。彼らは自分のやり方で出来る。それに彼らの活躍を考えて見ろよ！ あそこには、正にここみたいな場所がある――この半分程でも無いが、似た海域だ――マージー河口、ディー、セヴァー⁷⁰ン、ウォツシュ、それから最高のテムズとそれを囲むケント、エセックスとサフォークの堤防だ。しかし、我が

⁷⁰ マージー川、ディー川はリバプールの、セヴァーン川はブリストル、ウォツシュはイギリス東海岸の幾つかの川の河口で北海に面する。

海岸を僕が言う様に防衛するには――全く何の用意できていない――何も無いのだよ！ 小型の魚雷艇も造っていないければ、運用もしていない。『高速駆逐艦』など、こういう仕事には全く向かない――長すぎ、航行できなず、殆ど喫水が深すぎる。必要なのは頑丈で簡単な船、喫水が浅く、攻撃には外装水雷⁷¹だけを使うのだ。タグボート、ランチ、小型ヨット――危機の時は何でもいい。成功は知恵によるので、腕力でも複雑な機構でもないのだ。彼らは頻繁に殲滅^{せんめつ}される。しかしそれが何だ？ もし組織化されれば適切な人員には困らない。だかどこにそんな組織がある？」

「荒波の中、最高の連中をそろえ、そしてこんな湾岸を攻撃あるいは封鎖する事を考えて見ろ、砂が全てだ。国にいる連中にこんな海域に即席で対応させる事なんて無理だ。海軍の連中は学ぼうとしない。だが、何てことだ！ 世界最高の海軍だぜ――勇氣、胆力、それに他すべて。何でもやって見て、時には不可能を達成する。だが彼らの船の喫水は深い、そしてこの手のものは訓練しない。」

デイヴィスのこの議論は終わりが無い。だが私は、彼がこの湾岸の知識を実際に役立てようと、心の底から願っているのを知っている。どこでどうするかはとも角、やって来る戦時に、『最高の活躍』をする、最も魅力的な戦場がここなのだ。私には、彼の考えの概要しか描けない。私は飛び跳ねる波と潮流の泡を耳に浴びながら聞き、非常に深い印象を持った。そして、この仕事に彼が気質として持っている元気が私にも出て来たのだ。

しかし、日が過ぎて行き、何も気になることが起こらないのを見て、我々の探索に関しては、どうも間違った方針かも知れないと、どんどん強く感じ始めた。何も怪しいものは見つからず、ドールマンの陰謀の動機となりそうな、はっきりしたものも見つけられていない。私は気が短くなってきた、もっと速く西に行って見ようと思っていた。デイヴィスははまだ彼の推論にこだわっていたが、彼も同じ気持ちを持ち始めた。

「この砂の中に隠れている水道に係している筈だ」彼はしつこく言った。

「でも君の言う様に、残念だが、どうも謎の中心が掴めない。誰も僕たちがしている事を全く気にしない。まだ僕の思う様に、河口を調べつくしていないけど、西の島の方に行ってみよう。全く同じ内容だが、同じ様に重要だと思う。何か手がかりが掴めると思うよ」

そして、少なくとも私には、時間の問題もあった。延長が得られなければロンドンには二十八日に戻ることになっているが、現在の我々の進行状況は遅い。しかし私はこの点を真剣に問題にしたとは、本心から言えない。

⁷¹ 長い竿の先に爆雷をつけたもの。

もし我々の企てに何か価値があるとすれば、公務など霞^{かす}んでしまう。政府の機構は私がいなくても回る。言い訳は立つし、その結果は何とかなるだろう。

その間、我々のたくましい小さな船は更に汚くなった。天候にさらされ、ワニスは痛み、デッキは灰色に、帆は汚れていった。キャビンの天井はストローブのため、さらに煤汚れた。しかしたった一つの美点、つまり機能を完全に果たす点は変わらなかった。他に比較するものも無く、その船は私の家となった。私の身体はあの狭い環境に適応し、味覚や習慣はあの飾りの無い質素さに慣れた。

しかし、水と油は少なくなり、我々に上陸して物資を補給する必要が生じた。

第十四章 島での最初の夜

沈みゆく太陽の下、ピンクや淡黄色になった砂丘の低い線の一つの端に白い小さな村がある。それは大きな四角い基台を持つ灯台の周りに詰め込まれていて、これがフリースラント諸島の東端の島、ワンガーオーゲである。ここには十月十五日の夕方に到着した。

我々はここを最初の上陸地に決めていたが港が無く、浅い一マイルもの砂地が海岸となっているので、満潮の時にわざと座礁させた。こうすれば、補充しなければならぬ水タンクとオイル缶を運ぶ労力が減る。

我々の三マイル南にはフリースラントの平らな土地のつくる線、何本かの木、風車が一つか二つそれと教会の塔が僅かに見える。

その間の浅い海はすでに引き始め、干潟が幾つか姿を表している。そのうち一つは我々が東から辿って来た狭い航路にある。これは島と並行に西に伸び、その半マイル程先には、三艘のガリオットが投錨している。

夕食が終わる前にヨットは水面より高くなり乾いた。食後デイヴィスは缶とタンクを持ち、私も何か持って

行こうとしたが、彼は私を船に残らせた。と言うのは普段とは違う長い困難な日であったので、疲労困憊していたのだ。その日は午前二時に始まり、貴重な東風が吹いたのを使い、エルベからヤーデまで一度で砂の上を抜けたのだ。我々の様な遅いボートでは、二回の潮の干満の間でようやく可能な距離である。我々は完走できたが、休みなしの警戒と極端な肉体的緊張を強いられた。

「煙草を吸ったら、錨を海岸に出してくれ」とデイヴィスは言って、

「それから、航行灯に気をつけていてくれ。それを頼りに戻ってくるから」

彼はボートからおり、海用ブーツのザクザクいう音が暗闇に消えて行った。それは星の多い、霜を含んだ空気の夜だった。葉巻に火を点けストープの灯近く、ソファアに寝ころんだ。葉巻は間もなく短くなり、私は航行灯のことを気にしながら、うとうとした。一度起き上がり、半分あけた天窓越しに覗き、それが安定に灯っているのを見て、再び横になった。

キャビンのランプはオイルが不足していて赤い芯が残るだけであったが、私はそれに注ぎ足すことも出来ない程眠く、ランプは消えてしまった。私は葉巻の吸いさしに火をつけ、考え事をしながら眼を覚ましていようとした。私とデイヴィスがそれ程長い時間離れたいたのは始めてだった。しかしお互いに干渉しない様にしてきたので、我々の仕事の第二ステージの最初の夜に、何か起こると言う突然の予感がなければ、私は特に何も感じない筈であった。

突如船の外に音が聞こえ、水溜まりを歩く男の水を跳ねる音がした。すぐに眼が覚めたが「君かデイヴィス？」と叫ぶのを止めた。彼では無いのが瞬間的に分かったからである。忍び寄ってくる男の足音だ。すぐに、別の足音が聞こえたーブーツが砂を歩く音だー今度は私の耳のすぐ側、船体のすぐ外にいる。それからさらに幾つかが、小さく遠く、船尾に聞こえた。私はゆっくりと起き上がり天窓から覗いた。微かな光が下から反射し、ミズンマストとバンプキン⁷²の間で揺れていた。その光はステイに取り付けてある航海灯のものでは無い。うろついている奴はマッチを擦って船尾に書いてある名前を読んでいると思った。彼の好奇心はどの位強いのだろうか？ マッチが消えると足音が聞こえ始めた。そして、強い声がドイツ語でいった。

「ヨットの中人！」

私が静かにしていると

「ヨットの中の人！」とやや大きな声で言った。すこし間を置いてブーツが引つ掻き、舷縁を手で掴むと船体が揺れた。訪問者はデッキの上にいる。私は下におりソファアに座った。彼がデッキの上を素早く、敏捷^{びんしょう}に歩いているのが聞こえる。最初は前に歩き船首の処、そして止まり真ん中の階段あたりまで戻った。キャビンの中は全く灯りが無いが、手すりを確かめながら階段を降りて来る靴音が聞こえた。次の瞬間には戸口で二本目のマッチをつけるだろう。ここは外より暗いに違いない？ 航海灯の小さな灯が天窓で反射され見えていたが、それが消えてしまった。私は見上げ、全く馬鹿な真似をしてしまった。もう少しでその訪問者と顔を突き合わせ、多分話をしよう。しかし、こういう仕事には不慣れで泡を喰らってしまった。考えたのはデイヴィスの出かける時の言葉で、戻る目印が無くなり、潮は満ちて、大荷物を抱える中、砂の上を迷ってしまう事だった。

私は思わず立ち上がり、テールにぶつかりストーブをがたがたさせてしまった。大股の足音と階段を掴む音、しかし遅すぎた！ 私は何か湿った脂っぽいものを掴んだ。引っ張る音と粗い息遣いの後、私の手には大きな海用ブーツが残り、その持ち主は砂の上に飛び降り走った。私は飛び出し、ボートの外に飛び降り目くら滅法、音に向かつて追った。彼はヨットの舳先を廻り、私も同様に斜檣の下に飛び込んだがステイがあるのを忘れていて頭をいやと言う程打った。強靱^{きやうじん}さとサイズは『ダルシベラ』の誇りである、ロープとブロックは私の気合を無くすには十分だった。私は息を継ぐと、また追いかけてみたが、あの見えない男は遙か遠くに行ってしまった。私は重いブーツを脱ぎ、それを持って、靴下のまま走ったがすぐにザルガイで足を切ってしまった。追跡は望み無しとな

72 ヨットの船体から横に飛び出す短い棒材。

り、最後に流木に躓いたら、つま先の余りの痛さに腹ばいになってしまった。

びっこを引きながら戻り、行動的冒険者としては、全く情けないスタートを切ったと思った。私には何も得るものが無く、失ったものと言えば沢山の息と皮膚をちよつと、そして自分が何処にいるかさえ確かではなかった。ヨットの灯は消えていた。それにワンガールオーゲの灯台を頼りにしても、船を見つけるのは容易ではなかった。錨を外に出しておらず、潮が満ちたらどうなったであろうか。それにデイヴィスはどうやって船を見つける？

何回も情けなく歩き回った後、星の灯りを頼りに船の影を見つけようと、適当な距離毎に寝ころんで見た。

この方法がようやくうまく行き、安心して卑下しながら船に乗り込み、航行灯を再点火しケツジを引っ張り出した。妙なブーツは階段の足の処にあったが、調べても何も分からなかった。十一時を過ぎ、引き潮を過ぎていた。

デイヴィスはディンギーを使わずに船に戻るつもりで、時間をギリギリに見積もっている。しかしようやく彼は、極々当たり前に戻り、荷物ですっかり疲れてはいたが、陸に上がった話して一杯だった。デッキの上にいる時から話し始めた。

「なあ、訊かれた時に何と答えるか、僕たちもつと良く相談しておく必要があるな。僕は静かそうな店を選んだんだが、でもそこは宿屋もやっていて、皆、ピンク・ジンを飲んでいた――いつもと同じ、皆、友好的だよ。だけど質問の嵐だった。僕はイギリスに戻る途中だと言った。いつもの通り、ボートが小さすぎとかね。僕は、ゆっくりしかも、あちこち止まって調べるのに、何か他の理由が要ると思った。だから鴨の話をしたんだが、あれに時間をつぶす必要なんかないよ。話題があまりよくなかった。早すぎると言うんだ――嫉妬だと思うが。でも二人の奴が話し始めてね、ガイドに雇われないかと言った。彼らの小舟を用意するとも言って地元の人連中に助けてもらわんと全く話しにならないそうだ。全くその通りだろね、でも非常に厄介になりそうだ。そこから抜け出し――」

「ちようどいい」と私は遮った。

「僕たち、あのボートだけにする訳にはいかないよ」そして私の経験話を話した。

「フム！ 誰が見なかったのは残念だね。あのステイム！」（彼の私の無器用さを言及する気転。）

「どっち方向に逃げて行っただ？」私は曖昧に西を指した。

「島の方じゃないの？ あのガリオットの誰かな？ 三艘が水道の中に錨を下ろしているだろ。灯が見える。ボートが漕ぎ出す音を聞かなかった？」

私は、探偵としては全くどうしようもなく不適格だと説明した。

「でもすごく良くやったと思うがね」デイヴィスは言った。

「もし君が最初に彼に気付いた時叫んだら、もっと分からなかったよ。それにブーツがある。これは後で役に立つかも知れない。錨は下ろした？　じゃ下に行こう」

我々は、次の潮が満ち、『ダルシベラ』の廻りを柔らかに叩き、何事もなく持ち上げるまで、煙草を吸い、話をした。

勿論、僕は何でもないことも知れないと反論した。来た男は単なる普通の泥棒かもしれない。誰もいないヨットはいい獲物だから。デイヴィスはこの可能性を頭からはねつけた。

「連中はドイツでは、ああじゃない」彼は言った。

「オランダではね、気に入れば何でもやる。それにランタンを消したのも気に入らない。もし離れている時は時間稼ぎになるからね」

それは私もだった。細かい点でのへまにも拘わらず、この事件は歓迎だった。我々の仕事の目的は、見掛け倒しでは無いという最初の証拠だと思ったからだ。次のポイントは訪問者の目的は何かという事だ。もし探すとして、何を見つけるつもりだったのか？

「海図だよ、もちろん。我々の訂正やノートが書いてある。そして航海日誌だろう。密告するつもりだ」と言うのがデイヴィスの即断だった。私は、水道の件については彼ほど確信していなかったので、あの大事な海図についてはぬるま湯だった。

「つまるところ、君がよく言う様に、僕たちは何も犯罪を犯していない」と私は言った。

しかしなお、我々が何をしているかを示す海図は、ただ一つの船にある証拠となり得る。それは、我々を拘束するか、単なる若い変わったイギリス人が、獺（鴨撃ち銃が証拠）と遊びのため航海している以上の事を話すかもしれない。

我々は海図を二セット持っていた。ドイツ語版と英語版である。我々は前者を探索の為に使い、もしその必要があれば、航海日誌と一緒に隠すことにした。私の日記については、いつも身に着けていることに決めた。それから海軍関係の本がある。デイヴィスは私のよく知る顔つきでそれらを見廻した。

「沢山ありすぎるな」彼はコックが、増えすぎた子猫を前にし、運命を決める様に言った。

「よし、海に捨てよう。もう古くなっているし、僕はもう覚えてしまった」

「でも、ここでは駄目だよ」私は彼が、その気になって延ばした手を見て言った。

「潮が引いたら見つかってしまう。実のところ僕はそのまま置いて置いたらいいと思う。前、ここに来た時あつて、ドールマンも知っている。もしその本無しで、ここへ戻ったとなると、不思議に見えると思う」
本は生き残った。

イギリスの海図は、まあ、殆ど役立たずだが、イギリスヨット乗りが持つべき物なので、証拠として我々の輝ける無実を証明するために保存しておく。全く、何もかも嬉しくなるくらいに無頓着だと思わざるを得なかった。七トンのヨットは沢山（地上に）隠れていないし、本格的捜査には打つ手が無い。もし、この湾岸に隠して置く秘密があり、我々がスパイだと疑われたならば、官憲、つまりあの不審者の訪問と警告を防ぐものは無い。もし我々が無害で疑われる理由が無いならば、驚いたとしても、あの不審者には逃げ出す理由はない、もちろんそれが最良だと思つたら別だが。

ここまで来たところで我々は、仮定の話しで混乱してしまつた。不審者というのは誰のエージェントなのか？もしドールマンだとすると、ドールマンは『ダルシペラ』が無害だと知っていたか、そして放り出したのに戻つて来ると考えていたか？もしその場合、彼はまた暴力手段に出るのか？我々二人とも、ラックの上に縛つて入れている鴨撃ち銃を見て、笑い出し、馬鹿みたいな気がした。

「知恵の戦いだ。猟銃ではない」と私は意見を述べた。

「地図を見よう」

読者はこの稀に見る海域のおおよそについて理解していると思う。ここでは『本土』⁷³というのはプロシア領で東フリースラントと呼ばれる地域である事のみを注意しておこう。

それは短い平らな半島で、西はエムズ河口に遮られ、その先はオランダ、東はヤーデ河口に面する。低地で広い部分が湿地や荒地であり、町は殆ど無く、特に北側には皆無である。海岸から離れた処に七つの島がある。

ボルカム島は円形だが、それ以外はやや半月形をした、削られた紐状である。幅は殆ど一マイル以下で両端が細くなっている。長さは平均で六マイル、ノルダーナイが六マイル、ユイストは七マイルで、小さなバルトラムは二マイル半しかない。これらの間、そして本土の間にある砂洲について、三分の二は干潮時には海面上にあり、残りは干潟群となる。この分布は北海が島の間を揺れ動く、自然の力によって決まる訳だ。

干潟は川で出来た砂洲に挟まれていると想えばいい。川は危険な土手で遮られ、満潮時に海がその上に水をそそ

⁷³ 現在は干拓が進み、ヤーデ川は消滅、地形も異なる。

ぎ、砂をすくいだし、深いプールとなったものだ。これが扇状となり、閉じ込められた水が溢れると東西に分岐し、島を取り囲み、間に挟まっている平らな部分の上に広がる。しかし、この流れから離れると、水流は方向を決める力が減り、島は干潮時の水道に完全に包囲される訳では無い。島の背後の大体中間付近には『分水点』があり、これは十二時間の内、五ないし六時間だけ水に覆われる。喫水の非常に浅いボートでさえ、島の背後を航行するにはタイミングを見ないといけない。航行可能性については北海の水先案内人は次の様に簡潔にいう。

『この島々の間および本土を分割している水道は、島々とエムズおよびヤーデ間、我が国の小型船に、その通行可能な時に交通手段を与える』島々については、標識灯や灯台についての記述のみで他は無視されている。

海図をみれば見る程、私は分からなくなった。どの島も何件かの家と教会があるだけの、単に砂の土手だ。この何も無い処に共通な、何らかの活動を示す言葉は時々目にする『海水浴場』だけで、夏に街から多少の海水浴客がやって来るのだろう。勿論、ノルダーナイはこういう意味で目立つが、楽しく結構な海水浴場があると聞いているその街でさえ、一年の内何ヶ月かは活動が無く誰も居らず、商業的には重要では無い。

一方、誰も本土の海岸では何も出来ない――単調な堤防の連続で、所々ちつぽけな村があるだけだ。ぼんやりとこれらの村の名前を眺めていると殆どが『シール』――この辺りにふさわしい、人を寄せ付けない言葉だ――という語で終わっているのに気付いた。カロリンシールとかベンザーシールとかだ。シールは下水とか水門という意味だが、この場合後者の事だろう。と言うのは、これらの村は背後の低地からの排水を集める水路の出口にあるからだ。水門あるいは閘門は、満潮の時は海面下となる時期があるため必要である。外側の砂を見ていると、それらを横切り排水路に向かった杭の位置を示す線があるのに気付いた。これは各村に潮汐を利用した水路があることで、明らかに流れにより削られたものだ。

「僕たち、その辺も調べるの？」と私はデイヴィスに訊いた。

「その必要は無いだろうな。そいつらはこのちつぽけな場所に繋がっているだけで地元のカリオット向けだろう」と彼は答えた。

「君の言う魚雷艇とか哨戒艇の可能性は無いの？」

「ある特定の潮時には可能だろうね。しかし、その辺りに価値があるとは思えない、ドイツの艦艇の最後の隠れ場所という以外はね。どの港にも繋がっていない。待て！ ノイハルリンガーシールとドーナマーシールの堤防には小さな印がある。こいつはちつとした埠頭かも知れん、でも用途は何だ？」

「僕たち、一、二か所は行つて見たら？」

「そうだな、でもこの村の辺で遊んでいたくないな。もっと外側に遥かに重要な仕事がある」

「この海岸はどう思う？」

デイヴィスは前と同じ理論を話したが、その熱心さと迫力に私は以前にも増して感心してしまった。

「この島の連なりを見ろよ」と彼は言った。

「これは明らかに昔の海岸線だ。海の力で裂けてしまったんだ。これらの背後は巨大な潮汐港みたいだ。三十五×五マイル、これが潮汐港への侵入を防いでいる。完全に喫水の浅い軍用船向きで、熟練の航海士が要る。隙間に入ったり、出たり、端から端へと素早く動き回れる。一方の端がエムズ、他方は大きな河口だ。完璧な魚雷艇基地になる」

私は同意した（いまでもしている）が、肩をすくめた。

「それじゃ、同じやり方で調査するんだね？」

「うん。でも非常に気を付けながら。僕たちはいつも島から丸見えだよ」

「晴雨計は何て言ってる？」

「長い事高気圧を示している。霧が出ないといいがね。この辺は霧が多いので有名で、天気がいいと言うのはどこでも、彼らには良くないのだよ。あの隙間を調べるので無ければ、風が吹いた方が有り難いね。あの隙間で海岸からの風があると大変だ。明日朝六時半前。今日の事があったので、今後、僕はサロン側で寝ることにするよ」

第十五章 ベンザーシール

我々の航海での決定的な事件が急速に近づいていた。それに至った経緯を思い起こすと、読者が我々の視点に全く同意してくれるか心配しながら、私は日記から次の三日間の抜き書きを示すのが一番適当と考える。

【十月十六日】(○…○) 起床。ヨットは水上、高位置)

昨日投錨していた三艘のガリオットのうち一艘のみ残留。

今朝は自分の番で、暗礁伝いにワンガーオーゲまで歩く。村の半分は砂に埋もれ消失。土地を強化しポンペイの様な破滅を防ぐマラムグラスのやぶで整然と囲まれている。⁷⁴

親切な雑貨屋が、知りたい事すべて教えてくれたが、それは非常に少ない。島は予想通り、殆どが不毛、小数の漁師と、夏に僅かの海水浴客がある。季節過ぎで売上は少ない。しかし、本土との間、ガリオットや小舟を使つての商売はある。これらのある部分は、本土の『：シール』から来る。

「港はあるかとの」私の問に、「泥の穴さー」という、馬鹿にした笑いが帰つて来た。(彼は、ここに住み着いたので、ここで生まれたのでは無い。) 彼が言うには、島をリゾート地にするため、改良計画があると聞いたが、あてにならない憶測だろうとの事。

大男の不審者がヨットに再度現われる。荷物で制圧寸前。デイヴィスが外出中に、猟銃で鳥を狙う。最も小さい種類のコシギらしい物を捕獲。大きな音を立てたので、我々の動機が純粋な事を印象づけられるといいが。

一時に錨を上げる。投錨中のガリオットを通過する時よく観察。船尾に『コーモラン』とある。他の点では通常の船と同様。デッキ上は無人。

午後は夕方まで、ワンガーオーゲとスピーカーオーゲの間の隙間であるハーレを調査。波は堤防の外側で大きく波頭を崩していた。穏やかな日であるが、近辺の景色は極度に寂れている。二つの島の植生無しの地点は酷い不毛地帯である。醜い標識塔以外は難破船の木材の破片が目につく程度。最も奇怪なのは、ワンガーオーゲの北側に、実際に水中から突き出ている教会の塔で、侵食作用の驚きの結果である。ようやく見える程度の本土には、

74 沿岸の砂丘に生える草。

一つのはっきりしたランドマークがある。地図から判断すると四マイル内陸のエッセンスの教会の塔だ。

日は短くなっている。日没は五時ちよつと過ぎで、一時間後には杭やブイは見えなくなる。潮も今現在は扱いにくい。

（私は技術的内容は省略するが、今後、読者は、潮流の時刻表が重要な事に気をつけて頂きたい。）

朝は満潮だった。夕暮れは五時から六時の間。この時がちょうど黄昏時。

夜ムシエルバルゲまで深度測定しながらそろそろ移動。スピーカーオーゲ内側に沿う水道の支流で深さ二尋の処に投錨。外海の波の影響は無いが、強い潮流と風向きがぶつかり、ローリングや有り。ちょうど帆を下ろしている時、ガリオットが西に向かつて通過。暗すぎて名前はみえない。後で、錨灯が水道のかなり上流で点灯するのを見た。この日。小型のドイツ砲艦を見たのが大きな点である。海岸沿いにゆつくりと西に向かう。ハーレの辺りの水深調査中に、四時半過ぎ。デイヴィスはすぐにブリツと確認。フォン・ブリュニング中佐の船だ。我々は、彼が『ダルシベラ』を見たかどうか考えたが、何も気にしない様に、ゆつくりと航行継続。

我々は、この島に来た時、あの船に出くわす可能性を想定していたが、実際に出会いかなり興奮した。醜い、くたびれた小さな船で灰色に塗装され、一本煙突である。デイヴィスはは前部乾舷が低いのを馬鹿にする。彼ならダルシーに乗り組むと言う。彼は寸法と武装について熟知している（ブラッセイの本による）。百四十フィートx二十五フィート、四・九インチ砲一門、三・四インチ砲一門。マキシム機関銃（旧型）x四
そのまま就寝。非常に寒い夜。

【十月十七日】

今朝は晴雨計が酷く下降し、非常に落胆。南西の風となり、大分暖かい。いざこに出発、スピーカーオーゲの背後の『分水界』の上の潮流でタック。昨日見たガリオットが同じこと実施。しかし我々が接近前に錨を上げたので、再び、確認不可。

デイヴィスによると『コモラン』だと言う。日中殆ど完全に見失う。日中はオズマーエー（ランゲオーゲとスピーカーオーゲの間の隙間）を調査。アザラシや海鳥にむけ、おぎなりに発砲。

(航海上の詳細は略)

夜、我々は内側の停泊地に向けて急いで戻っていた時に大きなミスを犯す。これまでにした事の無いもの――潮汐が最高な時の座礁だ。ランゲオーゲ東の砂洲の南、ルートフラットの端にしっかりと平らに座っている。辺りが暗く、間違った杭に騙^{だま}された。ケツジ失敗。午後八時、完全な砂のアラト山上に在り。呪うべき杭の一、二ヤードの処。不注意者をおびき寄せるため、正に頂上に設置してあった。

風が強く吹き始めるが、これは大きな問題とはならない。南西、北西側の堤防が風よけになる。座礁する筈だ。

翌朝六時十五分に浮上する事を期待。しかしそれを確実にするため、ヨットを軽くする。バラストの一部をディンギーに移動。重く油まみれで真っ黒い鉛の塊の移動は、大変な仕事。サロンの中は地獄、デッキは炭鉱、我々は煙突掃除夫並み。投錨完了でこれ以上出来る事なし。

【十月十八日】

起床時、南西の半強風。風の助いで六時に安全に浮上。ディンギーは鉛の錘のため、沈没寸前。ディンギーからのバラストを戻すのは一番の労働だった。ディンギーを舷側に付けデイヴィスが飛び移る(危うく永久に沈めるところ)。バラストを取り、チャンスを見てバラストを一個づつ縄の輪に通し、揚げ綱に引っ掛けデッキに移す。最初は不安定だが、そのうちに容易になる。バラストを元に戻し終わったのは九時前。汚れ、注意を要する仕事だった。全てをパズルの様に組み合わせる要があり、さもないと床板が閉まらない。

作業後にデッキに戻り、ブリッツをスピーカーオーゲの内側一マイル半先、スキルバリエに投錨しているのを見て驚く。強風を避け、満潮時にオズマーエーから入ってきたのであろう。デイヴィスの意見では、九フィート十インチの喫水を持つあのサイズの船として、うまい操船である。満潮の深さは十二フィート以上では無い筈だから。何艘かの漁船も入って来ている。二艘のガリオットも水道のかなり上流にいた。『コモラン』がその中にいるかは不明。

土手が水で覆われていない時は我々はより静かに停泊できる。上陸し、長い距離を、コンパスとノートを持ち、急いで歩きルートに達する。二時に戻ると晴雨計が見える位の速さで降下中。

我々の南西にある本土の村、ベンザーシールへ、夜の満潮時に航海することを提案。この『シール』のつく村にく機会があるとしたら、いいタイミングだと思われた。デイヴィスは、かなりぬるま湯的。しかし状況がそう

させた。三時半、黒い、もくもくした雲がスピーカーオーゲに侵入、猛烈なスコールとなる。これが通過すると、十分程、完全に静かになり全空が雲の輪で渦巻となった。その後冷たいふわっとしたものが北西から打ち付け、急速に向きを北東に変え、そこに停止して酷くなり続けた。

「南西から北東―最悪の展開だ」とデイヴィスは言った。

この東への天候の変化は全状況を変えてしまった（これはよくこの様になる）。このためルートフラットが風下になり、深い干潟のオズマーエーは風上となる。スピーカーオーゲに妨げられるも、風と海により潮の移動がある。我々は突然移動を迫られ、ミズンを揚げる。数分の内にハリケーンとなり、風上に向けてビート⁷⁵するのは問題外だ。風下側に進むしか無くデイヴィスはベンザーシールに方向を取る危険を避け、ヤンス砂洲の十分背後へ進んだ。私の錨を上げる時のウィンチ操作のへまにより、結局ベンザーシールへ行く事になった。錨のチェーンは四十尋の内三十尋が下りていた。顔に叩きつける^{みぞれ}霏で視界が妨げられ、動きに混乱し、ケーブルのともない張力を忘れ係柱⁷⁶から緩んでいる部分を外しそのままにしてしまった。

その時、ウィンチのドラムには一巻きしか無かったが、通常の天候ではこれでも十分だ。しかし、最初のレバー操作でロープは滑り始め、瞬間の内にパイプをうなりを立てて通り外に落ちてしまった。足で止めようとしたが、ヨットが強く引つ張られバチンという音が下で聞こえ、ロープの端が消えていくのを見た。ヨットは風に吹かれ船尾方向に動いた。私は叫び、それでも畳んであった前檣帆^{フォースル}をすぐに揚げるだけの知恵はあった。デイヴィスは船をすぐに手なずけて、南西に向かった。私は船尾に行き、彼は冷静でいつも通りだった。

「問題無いさ。錨にはブイが付けてある」と彼は言った。（エルベを離れて以来、錨にブイのついた紐を付け、チェーンが滑り船外に落ちた場合の非常対策がしてある。同じ理由でチェーンの端はデッキ下で永久固定していない。）明日戻ってきて拾い上げる。今は無理。風と海が荒れすぎていいから、いずれにしても錨を放棄する処だ。ベンザーシールに行つて見よう。ここでは、ケツジもできない」

興奮する航海だった。いわば国を横切るのだ、杭の打つてない分水点を越えて。我々はその朝歩いたので、方向は分かつていた。ずっとシヨール水道を通つて、くぼんだ海域では波が碎けていた。間もなくベンザーシールの杭を

⁷⁵ 風上に向けZ字に進むこと。

⁷⁶ 下ろした錨を繋ぐ柱。

見つけたがミズンと前檣^{フオアスル}だけでも航行は速すぎ、風上に向けて速度を押さえる必要があった。水道はまだ浅すぎると思われた。我々はセクターボードを半分下げ、風上に向け、一番大変な時、船のなすままに任せた。しかし、最後には、予想よりも早く進める必要になり、それにも拘わらず我々は風下側に押され日は暮れかかっていた。

五時十五分まで頑張り、波と増して来る潮で殆どみえなくなっている杭を、何とか左に見ながら水道を急いで上った。

デイヴィスは舳先^{へさき}に立ち、腕で指示を出した―左、右、又はそのまま―私は端から端まで放り出され、波頭で叩かれながら、舵と格闘した。突然我々の右側に堤防の様な物が、海に見え隠れしているのを見つけた。突風の中、いきなり岸が現われ、岸壁の上で男達が叫んでいた。デイヴィスは左腕を猛烈に振り回した。私は舵を左に

思いつき切り、静かな水に入った。もう数秒で我々は二つの木製の棧橋の隙間に突っ込むところだった。内側には小さな四角い港があったが、廻す場所が無く帆を下ろす時間も無かった。デイヴィスはケツジを放り投げ、それのようにやく地中を噛むと、我々の運動量を殺し斜檣^{しゃしょう}が岸壁に衝突するのを防いだ。男がロープを投げ、我々は岸に付けた。男は仰天していた。

我々が天から降って来たと思ったのは、住民だけではなかった様だ。彼らは非常に親切だったが、外から海難救助がやって来ると内心思っていたようで、多少の失望を感じたようだ。皆、帆を畳むなど、こちらが恐縮してしまう位に助けてくれた。制服を着、眼鏡をかけた男が現われて、皆を脇にどかせた。税関職員だという（この馬鹿馬鹿しい、泥の穴で税関だ！）。彼は濡れて、散らかり放題となったキャビンに入り、インク、ペン、それから巨大な申告用紙を取り出した。我々の積み荷、乗組員、最後の出発港、行先、食料、携行品そしてさらに全てを申告せよとのことだ。

積み荷なし（観光）、船長・デイヴィス、乗組員・私、最後の港・ブルンスビュッテル、行先・イギリス。携行する蒸留酒は何だっけ？ ウィスキーを提示、塩は？ セレボスの缶と湿った皿の分を提示、コーヒーは？ 等々。

ロッカーを捜査、猟銃をチェック、寝台をはがした。その間、我々の航海目的の証拠であるドイツ製の海図と航海日誌は、完全な物証であり、見つけてくれと叫んでいたが、彼にはどうでも良かった。（ルートから慌てて出帆した時に、用心するのを忘れていた）

巨大な用紙が、満足するまで書き込まれると、彼は突然人間に戻った。おしゃべり好きで喉が渇いている。勿論我々は接待をした訳だ。彼はだんだん、我々が粗末な衣服で、海水と垢まみれなので、二人の奇矯^{きぎょう}で金持ちの貴族だと

気付き始めた様だ。高位の官僚が対応すべきなのだ。彼は我々のクッションを彼の家で乾かせとしきりに言うので、追い払うために合意した。腹も空き、服を着替え、身体を洗いたかった。ようやく彼はおしゃべりを終えて引き上げ、航海日誌と海図を隠した。しかし今度は郵便局長の制服で、夕食を終える前に戻ってきた。闇と泥の中から、我々とクッションを呼び出し、波止場近くの家に案内した。そこに着くまでに、小さな川に架かっている小さな橋を渡ったが、水門があり、考えていた通りだった。

彼は、獲物を彼の妻に見せ、おかみさんは高名な客人にかなり取り乱し、クッションを恐れ多く受け取った。それから我々は宿屋に案内され村の住人に展示され、鴨と天気の話をした。（誰も我々をまともに信じず、自分がこれほど陰謀から、かけ離れていると感じた事は無い）

我々の友人は、取り留めの無いおしゃべり男であったが、この馬鹿馬鹿しく小さな港は極めて重要だと言った。この港に入るのは主として、ランゲオーゲの郵便船と潮を見ながら出入りするガリオットの様である。それに内地の積み荷や製品を積んだはしけもあるらしい。港は十二時間の内五時間の間、五から七フィートの深さである！シェンケル氏は、泥の上に座っている我々の船まで、送りながら話し、ようやくここに居る。

デイヴィスは港の臭いがすると言って寝られない振りをしたが、ここからどうやって抜け出すか心配していた。陸の連中は北東の強風が吹いているし、水道はタックするには狭すぎなので帆を使うのは無理だと言った。私にとってはどんな港であれ二週間も海にいた後では充分ほっとするものである。潮汐や錨の事は考える必要が無く、ぶつけることも揺れることも無い。明日は、新鮮なミルクだ！

第十六章 フォン・ブリューニング中佐

長く快適な眠りの後、十九日の十時、外からのデイヴィスの話すドイツ語に、私は起こされた。

パジャマのまま、外を見ると金モールの海軍帽と長いレインコートを着た男と、岸の上で話していた。彼は短く刈り込んだ赤褐色のひげを蓄えた、鋭利でハンサムな男で、愉快そうだった。新鮮な空気の中、雨が降っていた。彼らが私を見ると、デイヴィスは言った。

「お早う、カルザース。こちらはブリッツのフォン・ブリューニング中佐だ。―あれは『我が友人』マイナーフロイントカルザースです」(デイヴィスは語尾変化が全く出来ない。)

中佐は私に顔中で笑いかけ、私は整えて無い髪で会釈をした。その間、一瞬、私は冒険は単なる夢で、自分が全く、むさくるしい間抜けに感じた。私は寝台から飛び降り、彼が去って行くのが聞こえ、デイヴィスが船に乗り込んできた。

「我々十二時に宿屋でおしゃべりすることになったよ」と彼は言った。

ブリッツの動力カッターが今朝の潮に乗ってやってきて、宿屋で買物をしている時にフォン・ブリューニングに会ったと言う。それに『コモラン』も入港し、近くに繋いである。従って後者が我々を監視していたというのはほぼ確かだろう。そしてブリッツに連絡、両方の船は我々が必要品補給のため、ベンザーシールに閉じ込められた機会を掴まえたのだろう。

これまでに何が起こったのだろうか？ 多くは無い。フォン・ブリューニングはデイヴィスに心から驚いた感じで挨拶し、昨日、ランゲオーゲの背後に停泊していたのは『ダルシペラ』では無いかと思ったと言う。デイヴィスは、我々はバルト海を発って、島に立ち寄りながら、家に帰る処だと説明したと言う。

「彼が船にやって来て航海日誌を見たいと言ったら？」

「見せるさ」とデイヴィスは言った。

「結局、隠すなんて馬鹿らしい。今日、宿屋で何を話すか、憂鬱ゆううつだね。僕の得意な事じゃない。」

我々は大事な計画を突然変更する覚悟を決め、最初に日誌と海図を本箱にもどした。それには方角と航路それから簡単な航海データしか書いてない。デイヴィスにとって、それは苦勞して得た重要な秘密で、嘘をつくのがどんなに難しく気に入らなくとも、そうすべき物だった。私はその価値については冷静だったが、二人とも同じことを心配した。

もし我々が賢そうに振る舞い、調査していたという事実を隠そうとすれば、この後の話しは相当厄介^{やっかい}になるだろう。我々はフォン・ブリュニン^{フンニグ}がどの位知っているか分からない。『コーモラン』がいつ監視を始めたのか？ ワンガーオーゲにいたのは確かだが、河口にいて、鴨を全く撃たなかった時かも知れない。あるいは、もっと知っているかも知れない。ドールマンの企み、デイヴィスの脱出、そしてその後の我々の動き。これらを我々は知らない。一方、冒険はデイヴィスの熱狂的趣味だというのは知られている。九月に彼はまったく隠そうとしなかったのだから。

辻褄^{つじつま}を合わせておくのが安全だろう。朝食のあと、『コーモラン』についてもっと調べて置こうと決めた。それは港の反対側の泥の上に座っていて、二人の頑丈な船員に話しかけた。一人は『郵便』と書かれたジャージを着ており、もう一人の男は岸壁に立っている、無表情なフリースラントの地元民の中でとりわけ目立っていた。彼らは皆、我々を海の骨董品^{こつどうひん}でも眺める様に、もっともらしい顔で見おろしていた。

双子（という事がわかった）の彼らは非常に優しい大男で、我々をおしゃべりに郵便ガリオットに招き入れた。我々が知りたいという話しに持っていくのは容易だった。そして素晴らしく興味深いことを強いフリースラント訛り——十分了解できた——で話しはじめた。

彼らは『コーモラン』の事をメンメルトボート⁷⁷又は『海難処理』ボートと呼んでいた。ノルダーナイの西にあるユイストの西端のさらに先の海には、大昔のフランス軍艦の残骸があるらしい。それは、各種努力にも拘わらず、未回収の金塊を積んでいる。今、サルベージ会社がそれに取り組んでいてメンメルトに隣接する砂の土手の仕事を請け負っている。

「あれが監督のグリムさんだ」水門の上の橋を指して二人は言った。（私は『グリム』⁷⁸という事にするが、彼の様子を的確に表す。）航海士のジャケットを着て、尖った帽子を被った男が欄干に寄りかかっていた。

「彼はここで何をしているのかね？」と私は訊いた。

彼らが言うには、その男は難破船の仕事は海が荒れると不可能なので、しょっちゅう岸に上がったたり、海に出たりしている。彼はウィルヘルムスハーフェンからガリオットで荷物を持ってきているらしい。会社の機材や必要品は皆そこから持ってきている。彼はタグボートの元船長で地元アウリッヒの出だという。

⁷⁷メンメルトはフリースラント諸島の一つ。

⁷⁸ドイツ名の Grimm は英語の grim（厳格、冷酷、等の意）と同じ音を持つ。

我々は砂の土手をぬけた、水道が引き潮の時どうなっているか見にいきながら、この情報について話し合った。

「九月にこの話しを聞かなかったか？」と私は訊ねた。

「全くだね。僕はユイストには行かなかった。ドールマンに会わなければ行ったと思うが」

「いったいどういう意味だ？ どう我々の計画に影響するのか？」

「僕たちがすれ違ったら、彼の靴を見よう」デイヴィスはこれだけ言った。

水道は、今は単なる排水溝でほんの僅かな水しかない。およそ北東に流れ、柳の木の植わった堤防が四分の一マイル程続いている。北東からの風は相変わらず吹いていて出帆は不可能だった。

村に戻ったが、つまらない侘しい小さなところだ。我々のは橋の上でグリムの側を遠田。暗いひげの無い陰気な男で靴をはいていた。宿屋に近づきながら、

「未だどうするか決まっていらないよな？ どういう事にするかね？」どデイヴィスが言った。

「全く決まってる。でもどうやったらいいか分からない。様子を見ることにするかね。十二時過ぎだ、遅れない方がいい」私は言った。

「君に任せることにするよ」

「分かった、やって見る。君に頼みたいのは普段通りでいる事と、必要ならば、一つだけ嘘をついて欲しい。

ドールマンが君にしかけた罠のことだ」

次のシーンはこうである。フォン・ブリーニング、デイヴィスと私はコーヒーと、キუნメルをテーブルの上において、港と海を見おろす汚い宿屋の食堂で向き合っていた。デイヴィスは一杯のマッチ箱をテーブルの上に置いていた。中佐は我々を心から歓迎してくれ、私は、すぐに彼が気に入ったと言わねばならない。

これはデイヴィスがそうだったのと同じだが、怖ろしくもあった。彼は正直な眼をしていたが、同時にぞっとするほど賢いそれだ。

私はデイヴィスに、彼が最後に『メデューサ』のデッキ上でドールマンに会ってから、全く何も妙な事が

無かった様に、遠慮なく、自然に話し、聞くように念をおしておいた。彼は、始めに、ドールマンー共通の友人であるーの事を訊くことにしておいた。そして彼と一緒にエルベへ向かった事が話題になったら、危機を切り抜けた騎兵のように嘘をつく。これが、沢山ありそうな難しさの中では、明確で重要な必要事だった。デイヴィスは彼の責任を大慌てで果たし、質問した時、私を怖ろしがらせるほど赤くなった。しかし、私は彼の困惑は他の原因により説明されると考えた。

「ドールマン氏はまだ、出かけたままだと思います」とフォン・ブリューニングは言った。（デイヴィスがブルンスビュッテルで言ったことは正しい）

「またお会いに成りたいのですかな？」彼は付け加えた。

「はい」デイヴィスは短く言った。

「彼は出かけたますが、彼のヨットは戻っていますよ、確か。ドールマンさんもね。」

「フム！ あれは素晴らしいボートですね」デイヴィスは言った。

我々のホストはデイヴィスを観察しながら言ったが、デイヴィスは情けない状況であった。私はチャンスだと思い、無情にも言った。

「僕たち、少なくともドールマンさんは訪問できるよ」とフォン・ブリューニングに意味ありそうに微笑みながら言った。

「フム！ 彼はじきに戻るのでしょうか？」デイヴィスは言った。

中佐は葉巻に火を点け、時間をおいて答えた。

「多分」と言い、何服か煙を吐いてから

「それ程長く出かけたことはありませんから。でも貴方は、最近私より良くお会いになっていますよ。最後にお会いした次の日に、エルベまで一緒だったのではありませんか？」

「ああ、途中まで」とデイヴィスは不注意に言った。

「あの後会ってないんです。先に着いて、僕を抜いてしまったので」

「置いて行ってしまったという事ですか？」

「もちろん、僕は負けてしまって。僕は帆を巻いていて、それに――」

「思い出しました、風が強かったですから――全く凄い風だった。心配したんですよ。で、どうされましたか？」

「まったく順風でした……いや順風ではありませんでした……」

「何とまあ！ あのヨットですか」彼は窓の方に頷いていった。そこには『ダルシベラ』のマストが控えめに天空を差しているのが見える。

「あれは素晴らしいボートですよ」デイヴィスは立腹して言った。

「これは大変失礼！」とフォン・ブリューニングは笑いながら言った。

「私の信頼が揺らぐことをおっしゃらないで下さいな。あの船でイギリスに帰るんですから」私は口を挟んだ。

「とんでもない。私はただ、あの日シャルンホーンの辺りは海が荒れていたからと思っただけです。順調だったという事ですね？ デイヴィスさん」

「シャルンホーン？」後の言葉中の慣用語が分からず、デイヴィスは言った。

「いや、我々はそちらのコースじゃ無いんです。砂を横断してーテルテを通して」

「テルテですか！ 北西の強風の時に！」中佐は驚き、微笑むのを止め、見つめた。（これは本当の驚きだ。私は確信する。この事は未だ何も聞いていない。）

「ドールマン氏は航路をご存知でした」とデイヴィスは頑固に言った。

「彼は、御親切に道案内して下さったのです。さも無ければいきませんよ」
少しの間、気まずい時間が流れた。

「巧みに案内したようですね？」とフォン・ブリューニングは言った。

「はあ、難しい波がありましてね。あの辺そうですね？ でも六マイル短縮できるのです。ーそれにシャルンホーンは。でも実際は短縮できず、間抜けにも座礁してしまっただけです」

「ああ！」彼の興味を引き始めた。

「でも問題無かった、僕は十分内側にいたのです。潮が高いとあの砂地は難しい。僕たちあそこを通過して戻って来ましたから」

（「僕たち、毎日座礁しているんです」私は諦め声あきらめで言った）

「『メデューサ』が先に行ってしまったのはそこですか？」とフォン・ブリューニングは妙な顔でデイヴィスに訊いた。私は、彼の顔つきを何とか解釈しようとした。

「あの船はもう気が付かなかったんです。霧が濃くしていましたから。ーそれに多少先行してましたしね。止まる必要ありませんでした。座礁からは何とか抜け出しました。潮はまだ満ち続けていたので。でも僕はそこに錨を下ろして一晩泊まりました」

「どこですか？」

「内側でホーヘンホルンの下側ですね」デイヴィスは簡単に言った。

「何の下側だって？」

「ホーヘンホルンですよ」

「話しを続けて。クックスハーフェンで待って居なかったのですか？」

「実はそれが分からないのです。そちらには行きませんでしたから。」中佐はどんどん不思議に思う様だった。
「船舶運河経由では無いという意味です。ちよつと気を変えて、次の日は風が東だったもので。砂洲を抜けてクックスハーフェンに行くには風が全く駄目だったろうと思いました。でもアイダー川にはちょうど順風だったのです。そういう経路でバルト海にいったのです。結局は同じ行先ですからね」
また沈黙があった。

「うまいぞ、デイヴィス」と私は思った。彼は話しを、曖昧な事を言わずに、非常にうまく伝えた。誰にでも同じ様にこう言ったに違いないと思った。反駁はんぱくできない証拠を握られていない時はである。
中佐は笑い始めた、突然、楽しそうに。

「もう一杯いかがですか？」彼は言った。そして私に、

「全く、貴方の御友人は楽しい方ですな。彼には作り話をするのは不可能でしょう。大変な思いをしたのですよ」
「いや、それは問題無いんです」と私は言って、

「どうもその方が好きなんです。ついこの間、ホーヘンホルンの裏側で強風だというのに停泊したんですからね。港より安全で衛生的だとかのたもうて。私を船に乗せたままですよ」

「昨日ここに連れて来たのはどうしてなんでしょうね。イギリスに帰るにはいい風でしたでしょう？ それ程遠くもないし」

「今回は、案内無しなんですよ」

「魅力的な娘さん連れのねーおっと」

デイヴィスは顔をしかめ私を睨にらんだ。私は今度は慈悲深く、話題を変えた。

「それにですね」私は言った。

「僕たち錨とチェーンをあそこに置いてきてしまったんです」と言っただけ自分の罪を告白した。

「まあ、ブイがついているので、出来るだけ早く拾い上げた方がいいでしょう」フォン・ブリューニングは気楽に言った。

「そうでないと、他の誰かがそうするでしょうね」

「そうだよ！ カルザース」デイヴィスは熱を込めて言った。

「次の潮でここを出よう」

「急ぐことは無いさ」私はいった。半分は戦術、あとの半分は陸にいる方が楽なので。椅子の上に背を延ばして

座るのは、ある種の贅沢だ。臭うストーブを耳の処におき、猿の様に縮こまり、膝の高さのテーブルに屈み込んで
いるのは、どんな高尚な理由の為とはいえず：贅沢は素敵^{ぜいたく}なのだ。

「この辺の人たちは素朴で正直ですよ」と私は付け加えた。こう言っている内にワングアオーゲの深夜の訪問客
を思い出した。フォン・ブリュニングは我々をテストするつもりだろうと想像した。グリム（もし彼が訪問者な
ら）は危うく逃げたした事を報告したはずだ。我々がそれについて黙っているのは、我々の疑いを示す。私はこう
考えると大失敗をしたかと思ったがまだ時間あった。私は牡牛の角を掴んだのだ。中佐が返事が出来る前に言った。

「おい、デイヴィス、ワングアオーゲの奴の事を忘れていた。錨が盗まれるかも知れない」
デイヴィスは呆気^{あつけ}に取られているようだったが、フォン・ブリュニングは私の方を向いた。

「僕たちはこの島の辺に泥棒がいるなんて思っていなかったのです」私は言った。

「しかし、この間の夜、もう少しで捕まえる処だったんです。ヨットが留守だと思っただけ」

私はその事件を可能な限り面白可笑しく、細かく語った。我々のホストは面白がり、そして島の人に代わって謝る
様に言った。

「かれらはいいい奴らです」彼は言った。

「だが生まれつき盗みの本能があるようです。彼らの祖先はこの辺りで難破した船からのもので生活して

きましたから。子孫も盗みに弱いでしょうね。ワングアオーゲ灯台が出来た時、彼らは政府に対して、完全に良心
から補償を歎願^{たんがん}したんです。湾は良く照らされ、棚^{たな}ぼたが減った。だが浜にヨットが着けてあって、持ち主が上陸
となると昔の熱がまた出るかも知れない。熱だけではなくて、本当に錨のブイを見たりすると……」

私は『難破』という言葉が気に掛った。これは別のテストか？ 分からない。でも遠慮するより、厚かましい方が
安全だろう。そして未来のトラブルを防ぐかも知れない。

「どこか西の方に、宝をつんだ船が難破しているそうですね？」私は訊いた。

「僕たちはワンゲログ（私の始めての不正確な発音）で聞きました。会社が探索しているとか」

「その通り」中佐は全く当惑せずに言った。

「お聞きになったのも不思議じゃありません。この辺では他に大して話す事ありませんから。それはユイスター
リーフにあるんです。ユイスターの先の砂洲です。フランスのフリゲート艦、コリーヌでハンブルグからルアーブル
に向かっていました。千八百十一年で、ナポレオンがハンブルグをパリみたいにしっかりと押さえていた時ですね。
それは百五十万相当の金塊を積んでいてハンブルグで保険に入っていました。四尋の処に沈み、崩壊そしてそこに

宝は眠ったままです。

「引きあがられたことが無いのですか？」

「ありません。保険業者が失敗、破産しました。そして難破船はお国のロイドの物になりました。七十五年まで彼らの資産でしたが、金塊引き上げに至らなかったのです。実際五十年間一度も触られたことも無く、場所自体がやや怪しくなりました。砂が材木一本まで埋めてしまつてね。権利は色々の手を経て、八十六年にスウェーデンの企業に移りました。新しい装置を持ってきた、潜り、浚渫^{しゅんせつ}をし、掘って沢山の骨董品や材木を拾い上げたのですが、その後破産しました。さらに、二つのハンブルグの会社を取り組んだのですが失敗しました。何人の命も失われ、多分何百万という金も。そして金塊は未だどこかにあるのです。」

「それで今、何をしているのですかね？」

「最近地元の小さな会社が出来ましてね。メンメルトに本部があるのです。すごく忍耐強くやっていますね。ブレーメンの技術者が発起人で、ノルダーナイとエムデンの何人かが資本を出しています。ところで、我々の友人ドールマン氏も大分出資している様ですね」

私は眼の端でデイヴィスの正直な顔が、話題がドールマンにおよび、困惑しているのが分かった。

「彼の話しに戻っちゃいけないですね」笑いながら私は言った。

「僕の友達にフェアじゃなくなる。でもこれは興味深い。いつか、金塊を引き上げられるのですかね？」

「それが重要な点ですな」とフォン・ブリューニングは謎めいた眼をしていた。

「非常に困難な作業なのです。難船は完全に分解してしまつて、金塊は一番重い物だから、もちろん一番深いところへ沈んでしまった。場所によっては浚渫が役立たないし、潜水夫達は砂を掘って出来る限り運び上げる必要があります。強風が吹けば仕事が半分は駄目になるし、この二週間程の天気みたいだと、仕事の邪魔になります。」

今朝ですよ、この監督に会つたのは。たまたまこの港にいますがね、展望についてはお先真つ暗という感じでしたな」

「なるほど、ロマンチックな投機ですね」と私は言った。

「何とか、投資に見合う結果になればいいんですがね」

「そうですね、引き上げられるといいですね」と中佐は言い、

「実は私も多少のシェアを持っているんです」と付け加えた。

「あ、そうですか。何かまづい質問でもしませんでしたか？」

「あ、大丈夫です。私が話した事など世間が皆、知ってますからね。でも、ご理解されると思いますが、この様な

件については無口でいるべきですから。大きな掛けですね、権利も確実とは言えないし。この件で訴訟がありましてね。私の投資は心配してはいません、ま、最悪でも大した損とはならないので。でもこの酷い海岸でも興味は持ちますからな。此方にくる時は、時々は覗いています」

「まったく酷い海岸ですね」と私は心から合意し、

「でもデイヴィスを合意させるのは無理でしょう」と言った。

「ここは航海には素晴らしい場所だよ」とデイヴィスは、懐かしそうに風模様の灰色の北海を見ながら言った。彼はもう少し、下らない話をして、我々のバルト海や河口での冒険航海へと移っていった。

フォン・ブリュニングは極めて都会的な魅力と能力を使って、我々を尋問した。彼は我々が腹をたてそうな事は全く聞かない。そのため、訊かれたことに素直に返事するしか無い。そのため、毎日の動き、出来事が極めて自然な方法で引き出された。我々が話している内に、私は殆ど隠すべき物が無いのに驚いてしまった。そして、開けっぴろげに話そうと決めて置いたことに感謝した。私のドイツ語の能力がリードしデイヴィスがついて来た。しかし、彼の性格が実際には我々の本質的強味だった。彼の熱心さの発露と、大好きな趣味について語ろうとする時の言葉の格闘を聞き、私はこのことに気付いたのだ。彼のいつもの言葉は最も耐えがたいドイツ語に置き換えられる。しかし説得力があり、それは彼が彼だからなのだ。

「貴方ような人がイギリスには沢山おられるのですか？」とフォン・ブリュニングは一度訊いた。

「僕みたいなですか？ 勿論――沢山」デイヴィスは言った。

「ドイツにももつと居るといいと思いますね。ここでは、どうもヨットで遊ぶだけなんです。半分は陸にいて、飲み、だからだし、乗組員を雇い、手は汚さず、白いズボン。九月の中にはもう係船してしまう」

「あまりヨットを見かけませんでしたね」とデイヴィスは礼儀良く言った。

私は、自分について全くデイヴィスの振りはしなかった。自分の根本的性格を誤魔化さず、ドイツ人は正しいと言い、乗組員なしの航海の怖ろしさ、無慈悲な船長の虐待などを、内心面白がりながら話した。

私がフレンスブルクでの最初の夜を話している時の、デイヴィスの縮み上がった顔は見ものだった。これでようやくデイヴィスに借りを返せると思い、容赦はしなかったからだ。彼は私の冗談を男らしく耐えていたが、『魅力ある娘』をからかったのを許す気が無い事は彼の態度で、充分、分かっていた。

「貴方はドイツ語がお上手ですね」フォン・ブリュニングが言った。

「ドイツに住んだことがあるのです」私が答える。

「専門家になるためでしょうね？」

「ええ、」と先を考えながら答えた。

次の質問に「公務員」と答える積もりで用意していたが、しかし再び（ひょっとしたら、病的に）罨にきづいた。私の上司からの手紙がノルダーナイに来ているか？ 名前は知られ、監視されている。開封されたかも知れない。何と、気楽にやってきたことか！

「どの様なご専門ですか？」

「外務省勤務です」疑惑を感じさせるが、そうなのだから仕方がない。

「なるほど、政府の仕事ですか？　いつまでに帰らないといけないのですか？」

これが我々の今後の計画についての質問の始まりだった。私は未だ用意が出来ておらず、まずいと思った。私には二つの、相いれない方法が頭の中でぶつかっていた。しかし、手紙の中身が知られているかも知れず、これをどうするか。だが、『切羽つまった時は本場の事をいう』と言うのは、一番確実だと分かり始めていた。

「間もなくですね。一週間位の内に。でもノルダーナイに手紙が来ている筈なんです。そうすると、延長できるかもしれません。デイヴィスがそこ宛てに返事を貰えばいいと言ってくれたのでね」私は笑いながら付け加えた。

「確かに」フォン・ブリュニングは冷淡に言った。明らかに冗談が通じなくなり始めた。

「でも、余り時間が無いでしょう？」彼は付け加えた。

「船長に命令でもしないとね。イギリスまでは長旅だし、今はもうヨットの季節には遅い」

私は急がされていると感じた。

「あ、ちよつと違うんです。」私は説明した。

「彼は、急いでいないんです。彼は自由人です。そうだよ、デイヴィス？」

「何んの事？」デイヴィスは言った。

私は残酷な内容を翻訳した。

「その通り、」デイヴィスは多少の悲哀を込めて言った。

「もし、私が彼を置いていっても問題無いのです――有能な船乗りの部類に入ってますから。彼はゆっくりと島廻りをして、座礁とケツジを繰り返しながら、ま、クリスマスころに着けばいい」

「あるいは、最初の風が吹いたらドーバーに向かつてね」と中佐は笑った。

「全く、それでもいい。つまり僕たち急いでいないんです。計画も立てないし。それにイギリス直行ですけどね、最初程弱虫じゃ無くなりましたが、しかし、限度という物がありますな」

「全く変わった船乗り仲間と言わねえですか。デイヴィスさんはどう思います？」

「僕はこの海岸が好きなのです」とデイヴィスは言った。

「それに、少しは鴨猟もできると……」

彼は神経質になっていて、自分を失っていた。私は、もう狩猟用武器と手柄をからかっていた。そしてこの話題はもう持ち出したく無かった。鴨は口実に過ぎず、事を面倒にするかもしれない。私は、余計な制約は特に避けたかった。

「猟については」と我々の友人は言った。

「貴方達お二人に、アドバイスを差し上げましょう。秋も深まったので、確かに沢山いますよ。（九月は獲物がなかったでしょう、デイヴィスさん。前回お会いした時、その事をお尋ねでしたよね。）でも、今でもまだ素人には難しい。真冬の天気なら子供でも獲れますがね。でも鳥はまだ元気でね、猟には技術がいるんです。地元の船を使わないと。それに地元の人間が。（貴方の船の前に乗せればいい。）それに真面目にやらないと。本当に猟がお望みなら、信用できる連中を紹介……」

「あ、そんな事までお願いしては……」困っているのが声にでてしまった。

「僕たちで、楽に見つけられます。ワンガーオーゲの男が……」

「ああそうですか？」フォン・ブリューニングは笑いながら口をはさんだ。

「そうですね。フリースラントの連中を知らないんですよ。申し上げたように、彼らは純真です。でも、多少の役得を欲しがるのです」（私は、この部分、デイヴィスに翻訳した。）

「ずっと難破船からくすねて来て、今では鴨にも敏感なんです。魚よりもうかりますから。見知らぬ連中は密猟みつりょうしてると思ふんですな。雇ったガイドはきつと、時間とか場所でちよつとした間違いをするでしょうね」

「ちよつと態度が変わったと言つてなかつたかい、デイヴィス？」と私は割り込んだ。

「だからさ、フォン・ブリューニング中佐は親切におっしゃるけど、猟に決める前に、僕の計画もちゃんと考えようよ？　まずノルダーナイに行つて、手紙を受け取り、それから決める。ところで、中佐、もうお会いできないでしょうね？」

「いえいえ、私は西に向かっていますし、ノルダーナイに寄ると思います。もしそこにいらつしやるなら、

船をご案内しますよ。ブリッツをご覧いただきたいですね」

「どうも有難うございます」デイヴィスは心配そうに言った。

「どうも有難うございます」私は出来るだけ急いで言った。

このあと間もなく、我々のお茶は終わった。

「じゃ皆さん、そろそろ帰らないと」我々の友人は言った。

「エセンスに行かないといけないので。夕方の潮でブリッツに戻るのですが、その時はお二人とも忙しいでしょう」

不思議な会談であったが、さらに不思議な事が起こった。我々がドアに向かった時、フォン・ブリューニングが私に合図した。デイヴィスを先に生かして立ったまま残った。

「一言だけ内密にお話があるのです、カルザースさん」と低い声で話した。

「お節介だと思わないでしょうか、私は貴方の友人を心配してお話します。ドールマン家の事です——国家の状況はご存知ですよね？　あまり、勧めないほうがよろしいでしょう」

「どうも、しかしこれに関しては……」私は言った。

「ちよつとした心配です。彼は素晴らしい人ですが、もし何か——お分かりでしょうが——余りにも正直で単純すぎて。貴方は彼に影響力を持っている。そして私は、それを期待すべきと思うのです」

「私が熱心な訳では無いのです」と私はいった。

「ドールマン家には会ったことがありませんし。貴方の友人だと思ったのですが」と眼を真つすぐにみて付け加えた。

「まあ、知り合いですが」彼は肩をすくめ、

「私は皆を知っていますから」

「どこがまずいんです？」と直球を投げた。

「穏やかに、カルザースさん。私は単に親切心で、貴方達、見知らぬ若い外国人にお話しているのです。

貴方は、私が思うに、思慮深い。だから申し上げたのです。でもこれもお教えしましょう。我々はドールマンの事を殆ど知らないのです。彼の生まれとか前歴とかです。彼は半分スウェーデン人だと思います。プロシヤ人ではあり得ない。三年前にノルダーナイにやって来て、金持ちの様で、色々な商売に絡んでいます。この辺をご存知無いですか？　貴方が思うより沢山機会があるのです。海水浴場の開発、この島の土地の話とかね。不法行為？　あつ、それはありません。でもちよつと変わった人で、やや奇矯な習慣を持っていますね——でも、申し上げた通り、あまり

良く知らないのです。ちよつとご注意を、それだけです。行きましょう」
これ以上訊いても無駄だと分かった。

「ありがとう、覚えておきます」私は言った。

「だからね」彼は通路を歩きながら言った。

「もしアドバースを聞く気があるなら、『メデューサ』を訪問しない方がいいですな」私を見つめて微笑んだが眼は笑っていない。

頭の中で、「どの位知っていて、どういう意味ですか？」という疑問が沸騰したが、何も言わず、自分の若さを感じた。

外に出てデイヴィスに合流したが、彼は今後の状況に眉をしかめていた。

「こんな所に来てしまったせいだな」彼は私に言った。

「ここに何日も足止めされるかもしれん。ディンギーで引っ張るには風が強すぎるし、水道が狭すぎて帆走できん」フォン・ブリューニングは新しい提案を用意していた。

「どうして、気付かなかったかな？」と彼は言った。

「私のランチで引っ張ってあげますよ。六時三十分までに用意して置いて下さい。充分な水深がある筈です。

部下がロープを投げます」

断れるものでは無かったが、自分がまた個人的に管理されるのは嫌であった。宿で寝ることも消滅してしまったし。デイヴィスも大歓迎している訳では無い。引っ張るとは案内が付く事で、彼にはもう充分過ぎたのだ。

「彼は原理的に引っ張られるのが嫌いでした」私は言った。

「全く彼らしい！」もう一人は笑い出した。

「じゃあ、決まった！」

馬車が宿屋の前のドアに、フォン・ブリューニングを待っていた。わたしは彼がエッセンスで何をするのか興味があった。エッセンスは四マイル奥の、この辺で一番大きな街だ。

「そこで仕事があつて、」彼は自分から話した。

「密漁の件があつてね。オランダ人が我々の海域でトロール漁をしているんですよ。私の仕事でねー警察ですよ」これは深い意味があるのだろうか？

「イギリス人を捕まえた事は？」私は無理に訊いた。

「いや殆どありません。お国の人はこんな所まできません。遊び以外はね」彼は我々に会釈をし微笑んだ。

「ベンザーシールじゃ魚も捕れないでしょうね」私は笑った。

「退屈な午後になりそうで、残念ですね。それで、ボートを留守に出来ないのは分かっています。デイヴィスさんに訊いてもどうしようも無いことも。でも、貴方はどうです。一緒にエッセンスに行ってフリースラントの街を見学するのは。様子がわかりますよ。フリースラントの印象が良くないでしょう」

私は、デイヴィスと一緒にいて砂洲の上でも歩き、夕方の出帆を心配すると言って誘いを断った。

「それでは、その時まで。六時半までには用意完了ですよ」

彼は飛び乗って、馬車はがたがたと音をたてて、泥道を進み、橋を渡りそして侘しい土地に消えた。

第十七章 愛情と愛国心

「彼は警察を連れて来るために出かけたのかな？」デイヴィスは陰気な顔で言った。

「違うだろうね」私は言った。

「あの税関役人に捕まる前に船に戻ろう」

数は減ったが無表情なフリースラントの連中はまだ『ダルシベラ』を眺めていた。わが友グリムは甲板の前の方で煙草を吸っているのが見えた。黙って船に乗り込んだ。

「まず最初に、メンメルトってどこだ？」私は言った。

デイヴィスは海図を引っ張り出して「ここだ」と言ってソファアに寝ころんだ。

メンメルトの位置について、読者は地図を参照されたい。ユイストの南、エムズ三角洲に、ノルトランドと言われる砂地が隣接している。その西の端は満潮でも海の上にある。その結果、○の字型の島ができブーメランの様な形をしている。二マイルの長さだがほんの百五十ヤード程度の幅しか無く、妙に対称な形だが、一個所だけ膨らんでいてそこは四分の一マイルある。

イギリスの海図では、南の灯標以外、そこには全く何も記されていない。しかしドイツの海図には、島の膨れが始まる処に建物がある。これが明らかに本部である。

「こんな所に住んでいるのか！」名前を見ただけで寒気がする、と私は思った。グリムが陰気なのは当たり前だ。しょっちゅう気分転換する訳だ。しかし、その場所の利点は明らかだ。そこは、この孤立した地域のなかでも

飛びぬけて孤立している。しかし、難破船の残骸には近い。場所は聞いた通りユイスターリーフの外側二マイルの所だ。利点の最後は、そこはどんな潮の状態でも近づける。エムズ河口からの六尋の水道が、その南に向かって伸びていて、そこから東に支流が流れ南側の突起近くを遮る。そのため、便利で深い停泊地が得られ、海からの強風も遮られる。それがメンメルトで、私が海図から機械的に様子を見て判断したものだ。その間、デイヴィスは無頓着、無言で寝ころんでいたが、私には、興味を持つ振りをしていたのは明らかだった。

私は何が我々の間に存在しているか完全に理解していた。しかし、私の方から何かすべきとは思わなかった。一つは、古いやつだが、私にも不満があった。そこで私は自分のソファに座り、ノートに宿屋での会話の要点を私には忘れない内に書き止め、何か結論を引き出そうとした。

しかし、沈黙が続き、馬鹿馬鹿しくなってきた。私は自分のプライドを風に吹き飛ばし、テーブルにノートを置いた。

「ねえ、デイヴィス」と言った。

「ドールマンさんの事をからかってごめん」(返事無し。)

「そうしなければならなかったんだ」

「ここへ来なければ良かったんだ」彼は硬い声で言った。

「上陸なんかするからだ」(微笑せざるを得なかったが、彼は私を見ていなかった。)

「言われた通りにされ、連れてこられ、管理され、クックの旅行客みたいに手配済みだ。僕には君がどうしようとしているか分からなかった――余りにも深すぎでね、しかし……」私はこの言葉にかちんと来た。

「おい、僕は出来る限り頑張った。君が話をややこしくしたんだぜ。何で鴨の話なんか繰り返したんだ」

「僕たち、あれから抜け出せた筈だ。どうして問抜けみたいのに全て話してしまうんだ――手紙、外務省、『コーモラン』、難破、それから……」

「全く分かっていないな。罫があるのが見えなかったの？　僕は仕方なくあはしたんだぜ。僕たちは全く用意しなかった。だからうまく行っただけだったんだ」

デイヴィスは眼くら滅法突っ込んで来た。

「水道だの探索だのしゃべって、あれだけでも滅茶苦茶なのに……」

「でも、君も同意したじゃないか！」

「君に降参するよ。もう探索は続けられないな」

「でも難破船の話がある」

「難破船なんて糞くらえだ！　あれはみんな口実だよ。そうでなくて、あんなに話すもんか。この辺の水道はまだ調査が……」

「水道なんかいいよ！　僕たち、勝手に動きたいのは分かっていた。でもノルダーナイにはいつかは、行かなきゃならん。それにドールマンがいらないなら……」

「どうしてドールマンさんのことをしゃべった」デイヴィスは言った。

我々は、無意味な非難合戦をしてしまい、大事な話しの出発点の廻りをどうどう巡りした。デイヴィスがいつもと同じでは無く、この問題の本質に到達しない限り彼も戻って来ないのが分かっていた。

「おい」と私は言った。

「君が僕をここに引き出した。君を助けるために。君がいうには、知恵があつてドイツ語が出来るからだ―それにヨット好きだからだ（これを言わずにはいられなかった）。しかし、本当に僕が必要になったとたんに、背中を向けて僕を批判している」

「いや、僕はそんなつもりは無い」デイヴィスは言った。

「申し分けない。僕は心配したのだ」

「心配はわかつている。でも君の責任だ。君は僕に対してフェアじゃなかった。この話しには君が話そうとしない裏がある。僕は無理強いしなかった。いつか僕を信頼してくれると思つたからだ。君は…」

「僕がフェアじゃなかったのは知つている」デイヴィスは言った。

「結果は分かつたよな。我々の手はもう自由では無い。ドールマンの事を何も言わなかつたら愚かだ。彼が君を難破させようとしたというのも同じ様に愚かだ。僕たちが合意した話しは最善で一番安全なものだ。そして君は素晴らしくうまく話した。しかし、二つの理由から、あの娘のことを話さざるを得なかつた。一つ目は、彼らの話題となつた時、君は混乱し我々全体の立場を危険にさらした。二つ目は君の話した。安全ではあるが、良く言つても疑わしい。君自身の話しでも、ドールマンが君を良く扱わなかつた―まあ、無作法とでもいうかな―のが分かる。君はそれに気が付かなかつた振りをしたがね。だから、君にはそれを解消する動機が要る、友好的に再訪する理由がね。僕がそれを言つた、というよりフォン・ブリューニングに言わせるように仕向けたのだ。」

「結局、どうして再訪が必要なんだ？」デイヴィスは言った。

「おいおい…」

「でも、君が僕をどんな酷い立場にしたか分かつているの？　まるで卑劣漢ひれつかんじゃないか」

私には分かり、彼の絶望が僕に伝わると、自分も卑劣漢となつた気がした。しかし、誰の責任であろうと、我々は馬鹿馬鹿しい状況に追い込まれてしまったのを感じ、あの退屈な劇に出演している気分になった。誤解が製造され、注意深くそのままにされ、見物客は結末に達する前に飽きてしまう。ステージでは出来るが、我々はこの結末が必要だった。

「酷く申し訳ない事をした」と私は言った。

「しかし、僕に全部話してくれてればと思うよ。今、それを話す気はないかい？　ただ単に、事実を並べただけでいいよ。僕は感傷は嫌いだし、それは君もだ」

「僕は人に説明するのが非常に下手なんだ」デイヴィスは言った。

「こういう事は……」

私は待った。

「僕はあの娘が好きだった――すぐくね。」

我々の目が一瞬会った。我々二人の様な、情熱を隠してしまう連中の間で、言わねばならぬ事は全部通じるだけの時間だ。

「そして彼女は――父親から離れている。それが僕の優柔不断の理由だ」急いで付け加えた。

「シュライにいた時、半分しか話さなかった。僕はもっとオープンに話し、君にアドバイスを求めるべきだったのは分かっている。だが僕はそうしなかった。僕は我々の探している物が見つかり、うまく行くとずっと期待していた。この部分に近寄らずに勝てると思っていたんだ」

私は、彼の水道の考えについて、ようやく不思議では無くなった。確信の上に作られたので、二重に強固にされたのだ。

「でも、何が起り得るか知っていたのだよね」私は言った。

「シュライではドールマンと『方^{かた}をつける』と言っていた」

「知っている。彼の事を考えると気が狂うんだ。他の事をわすれてしまう」

「それがブルンスビュッテルでも起こったんだね？」あそこで聞いた話を思い出した。

「そうだ」

「デイヴィス、僕たちはもう秘密を持ってはいけけない。僕は思い切って話すよ。君は彼女を誤解していないと言うのは確かい？ 君が言う――僕は喜んで信じるが――ドールマンは反逆者で殺人者という話し」

「殺しの話しはどうでもいいよ」デイヴィスはいらいらして言った。

「それが何の関係があると言うのだ」

「じゃ、反逆者。これはどうだ。でもこの場合、僕は彼の娘を疑う。待て！ 僕に言わせろ。控えめに言っても彼女は便利に使える。彼女は君を励ました――君がそう言ったからね――その水道と一緒にいく事をね」

「止める、カルザース」デイヴィスはきっぱりと言った。

「僕は君が親切で言っているのは分かる。だが無駄だ。僕は信じている」

私は少しの間考えた。

「その場合」私は言った。

「提案があるな。ここを脱出したら、イギリスに真つすぐ向かう」

（「ね、フォン・ブリューニング中佐」私は想った。「貴方のアドバイスを無視しませんでしたよ」）

「駄目だ！」デイヴィスは叫んだ。僕の顔を見、睨みつけて。

「そんな事したら、おしまいだ。何が懸かっているか考えて見ろよ。反逆者の事——ドイツと結託している。何てこった！」

「結構」私は言った。

「続行に付き合う。だが事実には向き合う。ドールマンをつぶす。だが、彼女を傷付けずには済まない」

「可能性は無いと言うのか？」

「ある訳ないだろ。少しは考えてみる、お前！ それに向き合う。そして次の点。彼らを再訪しなくて良いと思うのは馬鹿げている——十対一で我々は再訪する。成功したいなら。彼の行動が僕たちの疑いの大元なんだから。それに僕達は彼が本当に誰だか未だ知らない。僕たちはノルダーナイに直行することになった。でもそうで無くても、探索したり詮索して何かいい事があるか？ 非常に疑問だ。僕たちは監視されているのを知っている、例えばまだ疑われていなくてもね。それが僕たちの十分の九の力を削いでしまう。水道の事？ 僕たちを本当のヨット乗りだと思っても、僕たちに暗記させると思う？ それがそんなに大事な情報なら。それに、戦時の価値——これは僕は否定しない——以外に彼らは、本当にこれの元凶なのか？ でも、これはすぐ話し合うことにして、大事なのは、ドールマン一家にあった時どうするかだ。」

デイヴィスは眉毛に汗が玉になっていた。私は拷問をしている様な気がした、だがこれは他に方法がない。

「君を難破させた事を責めるか？ 僕たちの探索は終わりだ。僕たちは友好的に振る舞う必要がある。君は今日いった話しをする、そして彼が信ずることに賭ける。もしそうなら結構。信じなくてもそうは言えない、だから僕たちにチャンスがある。時間を稼ぎ、友好的にすれば彼を捕まえておける」

デイヴィスは顔をしかめた。しかし私はさらにネジを締めた。

「彼ら二人ともに友好的だからね、勿論。前そうだった。あの娘がすごく好きだった。まだそういう風にするんだ」

「その地獄みたいな理屈は止めろ」

「じゃ止めてイギリスへ帰るかい？」私は異端審問官^{いたんしんもんかん}が言う様に、再び訊いた。『もう十分か？』返事なし。続行。

「少し話しを簡単にすると、君はまだ彼女が好きだ」私の獲物を激高げっこうさせた。

「いったい、何が言いたい、カルザース！ 僕が彼女が好きだと言うのを――彼女の潔白を――取引に使う……！ 何てことだ。どういうつもりだ？」

「違う、違う、それじゃ無い。そこまで下劣でも馬鹿でも君を知らないわけでもない。もし彼女が父親の性格を知らず、君が好きならば――君は彼女が好きだ――そして君は君だから――おい、頼むよ！ お前、現実を見て、気が付けよ！ だが、僕のいうのはこれだ。彼女は、君が思うような人か、そうなれるか？」

僕たちが正しいとして、彼の立場を想像して見よう。彼は、この世界の最も恥ずべき存在で――こうなった、不名誉か過去があり――ドイツの金で働いている。僕はとにかく、君が惨めにならない様にしたい」

私は『もし君が警戒すれば、僕たちのチャンスが増す』と付け加える所だった。しかし、全く無益な言葉だと思い、止まった。何という計画を私は示したのか！ だが、あのような相手に対しては、心をそそり、しかもフェアな案でもある。困難な逆流を何度も、反対の潮流で生ずる渦の様に利用して、この難しい海を乗り切ってきたでは無いか。

しかしデイヴィスはデイヴィスだ。これにも終わりがある。彼の信頼と単純さに私は恥ずかしくなった。そして悲しく残酷なのは、正に彼の性格が最後の拷問となり、愛情と愛国心の戦いとなって鋭く彼を責め立てている。後者は彼の主要な生きる目的である。そして今ここに彼のチャンスがある――もしこの戦いの辛さを測れるならば……最後の発作の時だ。彼の肘はテーブルの上にあり、震える手は額を支えている。手を離した。

「勿論、続ける。他に方法がない。それだけだ！」

「彼女を信じるのだね？」

「君が何を行ったか覚えておく。何か方法があるだろう。それに僕は――もうその件については話したくない。難破の件はどうなった？」

これ以上の議論は無駄である。デイヴィスはこの話題を頭の中から消そうと苦勞をしていて、私も同じ様にした。とに角、空気は綺麗になったのだ――我々は友人だ。あとは、今朝の話しを基にして、主要な問題に取っ組むだけだった。

私が思い出せる、あの微妙な会話の全ての言葉を私はデイヴィスと一緒に見直した。彼は自分が直接関わっていなかった事について、不完全にしか理解していなかった。そして、見直す内に私にはフォン・ブリューニングのあの言葉の並びが、いかに賢明に二つの場合とも、矛盾しない様に構成されているかを知った。

もし我々が危険の無い旅行者の場合、かれは楽しいホストであり、話し好きで助けを惜しまない。もしスパイならば彼の戦術は同様に応用できる。彼は見かけの率直さで我々を出し抜いたのだ。彼は我々がいざれ見つけ出す点について何も隠さなかった。そして同時に我々を知り、動きを管理するための工夫を忍ばせた。そして悪意を持つている者にのみ分かる警告を発した。我々が無意味で危険なゲームをしていると分かれ、思い止ませるためだ。しかし、ある点では我々は有利だった。それはデイヴィスが言った、彼のホーヘンホルンの座礁いぶかの話した。謎に満ちた、我々の質問者は、その事件を知らなかったのを明らかにし、その状況の邪悪な性質を訝いぶかるであろう。ちよつと詳しく訊き始めれば、デイヴィスの話は瓦解してしまつたろう。しかし、そこに我々の強味があつた。デイヴィスが気付かないのに、敢えて疑問を持たせる事を訊けなかつたのだ。

実際、私は中佐のその怖れが、我々に対する全体的な態度の下に隠れていたと感じた。そして、それがグリムがこそこそと真夜中にやって来て以来、私の中で育ってきた疑いを確信させた。この海岸の秘密と微妙な性質は非常に重要で、出来るだけ注意を引きたくなく、侵入者に対して公然と行動を起こすのは最後の手段であり、反論の余地が無い陰謀の証拠なのだ。

さて、我々の手がかりである。二つの異なった考えに導くものが一つずつあると思う。どちらも曖昧さが優つてはつきりはしない。しかし、我々が海図を見ている時、私の想像をたくましくすると、その内の一つ、メンメルトの疑問は見る見るうちに細かさ、勢いを増して来た。

フォン・ブリュニングが極めて簡単に明かした、フランス船の難破も、彼が何らかの関心を持っているのも事実ではあるが、計算された、我々の疑惑に先手を打つための物であろうと私は判断した。つまり彼は、我々が彼とドールマン、さらに多分グリムとも関係付けている事を知っていて、三人ともメンメルトに共同で関係しているのに気付く筈と考えたのだらう。

ここまでする事実に関するものだ。一方、彼が我々に信じさせたい構造については、私は完全な虚構だと思った。彼は、我々が嗅ぎつけそうな色々な秘密の大元は埋もれた宝にあると印象付けたかつた

私は読者があの抜け目の無い示唆を十分理解したかどうか知らない――秘密が必要なのは、大きな金額が懸かっている点と、権利についての曖昧な点があるため――彼は注意深く、権利はイギリスの会社を通過したと教えてくれた。彼が意味したのは、『もし夜中に訪問者があつても驚くな。この辺の海岸をうろつくイギリス人はロイドのエージェントと疑われるのだ。』と言うことだ。巧妙な仄めかしで、それを聞いた時には、謎ほのに関して我々が

思いつかなかった、新しい平凡な解釈だと思ったのだ。しかし、それはただの過ぎゆく解釈で、私は今は全く信じていない。

実際の処、それは全てを説明するか、全くしないかである。我々が基本的仮定に固執すると――デイヴィスは九月に、死の罠におびき出された――実は、何も説明しない。それは余りにも空想的で、商業的企てがそのような極端な方法を取るかというのとは考えにくい。我々は南太平洋諸島にいるのではなく、ロマンスに踊らされる人形でもない。ヨーロッパにいて、ドールマンだけでは無く、ドイツ帝国海軍の将校とも関わっている。特に後者が、そんな手段に至る商業的企業に関係するとは思われない。彼がそんな悪党と関係しているのは、それだけで十分衝撃的であるが、しかし動機が国家に関するものならば説明できる――個人的な金儲けでは無くて。

いや駄目だ。この考えを受け入れるには、全ての探求は最初から最後まで、でっち上げとせねばならない。

デイヴィスの暗殺未遂は彼の思い違いか妄想で、これまでの構造は、その基礎が消滅してしまう。『それで……』と読者が行っているのが聞こえる。『どうしてそれが妄想なんだ？ 君は、いずれにせよ、いつも懐疑的では無いか』

その通り。でも、一瞬ともためらった事など無いと、これは本気で言っておこう。シュライフィヨルド以来沢山のことが起こった。私は、死の罠のメカニズムを観察した。デイヴィスと、この荒れた二週間、一緒に闘ってきた。彼の海員としての能力について、信頼は増すばかりだ。従って事件の解釈は、彼の公正な海洋に対する判断に基づいており、信頼できる筈だ。

最後に、私は無意識のうちに想い、今日の彼の口から分かったが、彼の考えも行動も、誠実な心による個人的考慮に完全に支配されているのだ。

それではメンメルトの意味は何であるのか？ 発端はエムズ河口に注意が引きつけられたことである。この先はメンメルトに隣接している。我々は今までエムズ川を考えに入れてこなかった。言い訳をすると、三つの大きな河口に比べて、重要だとは思えなかったからだ。河口は大きな排水量で喫水の深い船が、ハンブルグ、ブレーマーハーフェンの港、そして海軍のウィルヘルムスハーフェンのドックまで航行できる。その内の二つ、エルベ川とウエーザー川は、全帝国の最大の商業流通を担っている。一方エムズ川は、二級程度の大きさの街の流通経路だ。地図を見ればすぐに分かる。他の三つと個別に比較すると、広大な堂々とした河口が見えるだろう。長さが三十マイル、北海に面する広さは十マイルだ。あるいは全海岸線の約七十分の一だ。この外側は砂洲で邪魔をされ、中心はボルカム島で塞がれている。しかし二つの深い水道が入港に使える。

これらの水道は広大な砂洲を抜け、一つになり幅が三マイルに広がり堂々とした流れとなって本土に繋がる。しかし、残念な減退をする。航行可能な水路は砂洲となり縮み、中央に地面が出現し、棚状の渚が本土への簡単な交通を妨げる。この場所だけでも大きな港湾都市が作れる位だ。エムズの作るすべての港は潮流の影響を受ける。オランダ側のデルフセイル港は引き潮では地面が現われ、ドイツ側の主要なエムデン港は閘門と一マイルの運河が必要だ。

だがこの欠点も単に相対的なものだ。その価値はエルベ基準でなければ、重要な川である。エムデンは活気に溢れ発展している港である。喫水の浅い船ならば、ずっと内陸まで航行可能で支流や運河（特にドルトムントでラインに接続するもの、これで接続は完了）を経由し広大な地域に結びつく。戦略的には、さらに見過ごせない理由がある。それはドイツの海洋への大きなゲートとなっていて、最西端に位置しイギリスやフランスとは最短距離、オランダとは隣接している。フォーク状の三角洲は二つの大きく開いた浜辺となり、特徴的な小島の防壁、砂洲がドイツの海岸線となっている。この海岸線は帝国の大きさに比べ余りにも短く、デイヴィスがいつも言う様に『どんな短い海岸でも重要』である。軍艦はこの砂洲の裂けめを突破し、少ない弱点をつき、本土を危険にさらす事が可能だろう。波頭の設備はそういう客には全く問題にならない。難しい操船も抑止力とはならない。最大級の戦艦でさえ、驚くほどの距離まで本土に近づけ、巡洋艦や軍用運搬船はエムデンまでも突入できる。デイヴィスがしょっちゅう指摘するが、エムデンは運河経由、ヤーデでウィルヘルムスハーフェンに繋がる。運河は戦略的に造られたもので、砲艦や商船の航行ができる。

さて、メンメルトには外側の防御の一部となるもので、先の細くなった三日月は東側の海岸を直接押さえる。その為この海岸の防御に関連する島となっている。ここよりも最適な基地の設置場所はない。自立し、孤立しているが保護されていて、交通可能だーユイストやボルカムに優っている。それに、高度な機密活動を隠したいのなら、水道の反対側近くに埋まっているという難破船と金塊というのは、何とうまい口実ではないか！

メンメルトにはサルベージ活動の基地がある。浚渫や潜水を伴うサルベージは、必要な偽装にぴったりだ。それは水中の作業であり、最も重要な港防衛、機雷、魚雷と同様である。全ての細部が暗示している、『小さな地元の会社』『ブレーメンからの技術者』（私は誰だろうと思った？）、フォン・ブリューニングの多少の関わり、等これらは彼の訪問の目的を示すものだ。資材や設備がウィルヘルムスハーフェンー海軍ドックーから運ばれているのも然り。

考えて見たが、デイヴィスの想像は揺るぐことなく、私の方が揺れるばかりだ。彼は反対されない限り折れることはない、そして反対は十分ある。難破船のサルベージというのは秘密を守るのに十分な偽装か？ それは沢山の人間が知っている―潜水夫、タグボートの乗組員、そしてあらゆる従業員。商業秘密と言うのは、しばしば同様に困難な場合も保たれる。国家機密もそうではないか？

「どうしてエムズで、エルベでは無いのかね？」彼は訊いた。

「多分」私は答えた。

「エルベも同じ様な秘密を持っている」

我々の知る限り、ノイウェルク島は、もう一つのメンメルトではないか。あの地域を航行している時には、自分達の考えた推論に気を取られ、その様に観察して見なかった。

それに、我々は自分達の能力を買いかぶりすぎてもいけない。我々は素人で、湾岸防衛の専門家では無い。

そんなにも曖昧な状況で、良く考え抜いてこれまで進んできたのを否定するのは、自分達の幸運と争うようなものだ。心の痛む結論が後者の議論にあり、それについては私の新たな熱意の為、眼を閉じた。

素人なのに、我々は自分達の証拠を使い、防衛に関する性格な情報を得られるだろうか？ 私は、デイヴィスがこれを強く感じていたのを知っている。それが彼のメンメルトに対するぬるま湯的視点を、彼自身が気付いている以上に説明する。

彼は、以前にもまして『水道の推論』に固執し、それが彼の妙な才能で有利に運べる、ある種機会を与えるのに気付いていた。しかし、彼はそれが現在では怪しい事を認めている。もし沿岸航行の情報がそれ自身で犯罪なら、我々はこのにはいない。

「何かそれに関係している筈だよ！」彼は固執した。

第十八章 帝国の護衛

メンメルトを考えると、私はもう一つの考えを除外することになる。フォン・ブリューニングとの会話の間、少なからぬ困惑を感じた点、彼が繰り返し、錨とチェーンを出来るだけ早く拾い上げるべきだと助言したことだ。それは我々をベンザーシールと本土から追い払いたいのだろうと私は考えた。最初はその助言を我々の正直さ（読者に理解して欲しいと言った様に）をテストしているのだと取った。またグリムの真夜中の訪問で生じた疑惑を、もみ消すための間接的方法でもあろう。しかし、これは私の考えすぎかも知れないと思ったが、我々のこの後の計画の件が突然発生、どういうコースを取るか決めかねた時、この事を考えた。そしてフォン・ブリューニングが我々の船を夕方、引き出してくれると言ったときに又戻ってきた。

私が陸での仕事の事を訊いた時、彼は我々を早く追い出したいのだろうと思っていた。と言うのは、彼がここに上陸したのは『ダルシベラ』の乗組員を調べるだけでは無いかも知れないと思ったからだ。そして彼は極めて率直な説明（怪しげな二重の意味を持つ）をし、エセスンに行って見ないかという招待もした。しかし『ギリシャ人に気を付けろ』⁷⁹という原則の元、私は直ちに策略を感じた。最も連れ出され、拘束されるという類のものではないが。しかし我々がここにいる数時間の内に発見しそうな物があるとすると、出発までの間、観察力の鋭い二人を取り除くのは賢い計略である。

デイヴィスはそれらを馬鹿にし、私は、ほんの少しの興味をこの目立たない小村に感じたが、それは残念ながら、主として陸にいられるという熱望によるものだ。この点については、彼の容赦なく厳格な訓練も改造出来なかった。しかし、小さなチャンスでも投げ出すのは軽率である。三時だった。私は、狭い空間で考え続けると、頭脳が腐り始めると考えた。私は、外で戦略会議をやらうと提案し、オイルスキンを着込んで外へ出た。空は鉛色の土手の様に硬くなって見え、風が冷たい雨を飛ばしていた。外の砂洲に潮が満ちて来る音が聞こえたが、岸壁はまだ高く、『ダルシベラ』や他のボートは黒いドロドロした物の上に座り込んでいた。現地の連中の興味もようやく静かになった。誰も土手（私にはそれを岸壁と呼べない）には居らず、黒い暴風雨帽の頭から、煙の筋が巻ついているのが『コーモラン』の前の方に見えた。

『コーモランの荷物を見せて貰えんかね』と私は自問した。我々はベンザーシールを黙って見つめた。

⁷⁹ ウェルギリウスのイリアッドにある言葉。 Beware of Greeks bearing gifts.

「ここには何も無いよね？」私は言った。

「ある筈がない」デイヴィスが言った。

「堤防はどうか？」と私は突然閃いた。^{ひらめ}

土手からは、海岸線がずっと続いているのが見える。それは言った通り堤防になっている。

この堤防はブロックで固めた巨大な築堤で、小さな規模ではあるが、クックスハーフェンの近くでエルベ川にあるのとよく似ている。その上からは大砲が突き出しているのが見えた。

「ねえ、デイヴィス」と私は言った。

「この海岸は侵略可能だと思う？　つまり、この辺だよ。あの島の裏側さ」
デイヴィスは頭を降った。

「僕も考えて見た。何も無い。世界中で上陸が最もし難い処だ。ブリッツが停泊している近くよりこっちには、どんな船でも近づけない。四マイル先だ。」

「でも、君は海岸の一インチでも重要だと言ったよね？」

「うん、だが水だよ」

「まあ、僕は堤防が見たい。歩いて言ってみよう」

私の即席の推論はその上に足を踏み入れた途端消え失せた。最も原始的な構造物で――他の何千ものエセックスやオランダにあるのと同じ――頭に狭い道が付いていて、我々は一列で、風の中をバランスを取るため腕を腰に宛てながら歩いた。下は片側が砂、反対側は並んだ沼沢地^{しやうたくち}で、時々排水溝で囲まれた牧草地が広がっている。半マイルも行ったあと、我々は土手から降り、内側の近道をエセス通りまで戻った。迷路見たいな道で、大体は直角にまがり、小さな厚板の橋をかけてある。我々はこれを渡り、まもなく私が話した川にぶつかった。このため、村にもどるには、すっかり回り道をせねばならず、静かに郵便局、あるいはおしゃべりな局長を避けた。それから、堤防を逆の方に行って見たが、潮が満ちてきている砂の上の水路に阻まれ、そのままヨットに戻った。誰も我々の動きを全く気にもしていない様だった。

道に戻る途中、我々は最後の疑問について話した。

「どうしようか？」

殆ど、何も言うことが無かった。我々はここを今夜には去り（エセスの警察でも現われないかぎり）、そしてノルダーナイに直行することになっている。さもなければ、フォン・ブリュニングの指定する『信頼できる』

男の監視のもとで鴨猟だ。それ以上は――曖昧であらゆる種類の困難が待つ。

ノルダーナイでは私の手紙に束縛されるだろう。もし開けた形跡があるならば、そして帰って来いという内容なら、あと一週間か、あるいは居続けて疑いをまねくかだ。

ドールマンはいない（フォン・ブリュニングによると）が『多分早く戻りそう』である。でもどの位早く？ ノルダーナイの先にメンメルトがある。どうやって秘密を探ろうか。それが私に引き起こした熱気は、屈辱的無力さの前に萎えつつあった。『コーモラン』の乗り組み員が海に出る支度をしているのを見ると、私の外交手腕に對する辛辣な批判と思えた。その上、馬鹿げた堤防の探索に對してもだ。全て言い、実行したあとは我々はまるでフォン・ブリュニングの子分で、グリムにも逃げられた。彼らは僕たちに成功させてくれるのだろうか？

潮は港の中に勢いよく流れ込んできて、チョコレート色の泡が渦巻いている。それがベンザーシール全体に満ちると、前回同様シェンケル氏が親分となる。だからと岸壁へと歩き、泥穴が港に変貌する短い重大な間、船積みを見る。船長の蒸気カッターはすでに浮いている。船員は側灯やエンジンで忙しい。我々も又、そんなにも素晴らしい護衛付きで出帆することが知れると、興奮は高まった。再び、我が税関の友はサインのため書類を広げた。親切なフリースラント人の群衆は、郵便船の大男の双子に引き連れられ、我々のデッキに群がり、彼ら流の混乱の中、出航の用意をした。再び、我々は宿屋に連れていかれ、アドバイスの嵐、警告そしてさよならの乾杯に圧倒された。戻って『ダルシベラ』が浮いているのを見ると、フォン・ブリュニングが丁度到着し、以前同様に快活で愛想よく、天候と泥を呪い、デイヴィスをからかった。

「使わないから、メインセイルを畳んで」彼はいった。

「スピーカーオーゲまで、曳航してあげよう。この風ではあそこしか停泊出来ないからね。島の下側でブリッツの近くだ。丁度、夜中には風の吹く向きになるね」

事実とは全くその通りで、提案は極めて適切であるが、デイヴィスの微かな抗議は冷やかしの声でかき消された。

「それにちよつと考えて見たがね」中佐は最後に言った。

「よければ、君たちと一緒に行こう。その方が楽しそうだし、濡れずにすむからね」

三人が『ダルシベラ』に乗り込むと、終わりがやって来た。引き綱が取り付けられ、六時三十分にランチは首輪の中に飛び込んだ。我々が友好国を訪問した大使の様に、これ以上無い、心からの歓声の中、栈橋からこそこそと出発した。

スピーカーオーゲまでの五マイルを行くのに一時間以上かかった。『ダルシベラ』は強い向かい風では大きな荷重であり、何も言わなかったが、デイヴィスはあからさまに我々のタグボートの能力を疑っていた。彼はすぐに舳先から私のところに来て、オイルスキンを着込み、全てのロープが整理され、メインセールが畳まれ、羅針箱が点灯され、帆を張るかあるいは錨をおろすかが直ちに可能となるまで休むことは無かった。我々の客はこの用心を非常に面白がって見ていた。彼は最もいたずらっぽい気分であり、デイヴィスに冗談の雨を降らせ、私にからかいの同情を見せ、巨大なコンパスを笑い、自分で深さを測り、測定をわざと間違えて驚かし、彼の部下が素面かを疑っていた。

私は、下で暖まりながら、話してもしようと言ったが、彼はデイヴィスが引き綱を切り、夜中にどこか安全な砂の土手にいる事になるかも知れないと言って断った。デイヴィスはこのからかいを無視した。彼の仕事が終わると舵を握り、帽子を被らず曳航に気を付け、航路や、細々とした事に注意し、今の我々の形勢を考えていた。私は葉巻を持ってきて背を風と水しぶきに向け、二人して彼に向き合った。そういう具合に残りの航海は過ぎ、

フォン・ブリュニングは私かキャビンのドアに寄りかかり、デイヴィスに冗談を、私に軽妙で魅力的に話しかけた。我々の歳の差が許す、ちよつとした父親気分で、私のドイツ時代、行った場所、知り合った人々、知っている本、それから人生について話した。特に、未だ訪れた事は無いが、行ってみたいイギリスの若者の生活も話した。

私は彼の気分に合わせてながら、できるだけ話した。好漢のように任務を果たし、我々の皮肉な立場の恥ずかしさを笑い飛ばしたが、敗北と無力感による麻痺した気分からは抜け出せなかった。さらに、不思議な気分が湧いて来た。私が持っている手腕と判断力が、この過酷な海の厳しさの前にすり抜けていくのだ。一方、デイヴィスは、私には良く分かったが、引き綱に叱られた程度では覚めない、私とは全く逆の魔法にかかっていた。私が羅針箱の明かりで、彼の顔を見ていると、キールからシュライフィヨルドまで航海したあの夜と同じ満足と決意の表情に代わっていったのだ。彼には私よりもずっと根源的な問題があるのだ。私は、冒険のきまぐれな相棒だが、冒険は彼の物であり、それが彼に取ってこの地上で全てなのだ。彼は潮風に吹かれながら困惑を洗い流し、彼のすべての靈感の、決して裏切らず尽きない源——海——を信頼して話をしているのだ。

「彼は、幸せそうに見えるね」と船長は一度言った。

私は、そうだとぶっきらぼうに答えたが、その言葉にどれほど自分が苛ついてしまったかを思い恥ずかしくなった。

「私が言った事をおぼえているよな」私の耳に付け加えた。

「うん、でも僕はそうして見たい。どんな感じですかね」

「危険だ」私はそうだろうと思った。

ブリッツの船体が見え、一分後にはケッジが水を跳ね飛ばし、ランチは後退し側に並んだ。

「皆さん、お休み」と我々の船客は言った。

「ここは十分安全だ。朝、十分も走れば錨が拾いあげられる、もしまだあれば。そしていい西向きの風が吹く――イギリスの方にね。もし、もう少しこの辺にいるつもりなら、私が近くにいる限り助けてあげるよ。獺でもなんでも」我々は有難うと言ひ、握手をし、彼は去った。

「とにかく、彼はとてつもない奴だ」とデイビス言ひ、私も心から同意した。

制約の多い、油断出来ない生活がすぐに再開された。我々はある意味『十分安全』であるが、綱と二十ポンドの錨はもし風向きが代わるか強くなると、あまり安心はできない。不測の事態が発生した時どうするか決め、天候が良くなりそうで、星が見え始めた真夜中まではデッキ上の見張り番を続けた。晴雨計は上昇し、我々はキャビンに入り、言わば帝国政府の羽の下で眠ったわけだ。

「デイビス」と私は、それぞれの寝台に潜り込むと言った。

「ノルダーナイまでは一日だね？」

「風が良く、外側を通って直行すれば、そこまでかからない」

「明日はそう思うと思っていいいのかね？」

「恐らくね。まず錨を拾ってから。お休み」

第十九章 ルビコン川

冷たく湿った明け方で、晴雨計は上昇し、風は北東からの微風になっていた。我々のしわの寄った濡れた帆は、殆ど役に立たず、ランゲオーゲの油っぽい様な盛り上がりまで、よろよろと進んだ。

「霧で無風」デイビスは予測した。

我々が横を過ぎる時、ブリッツは活気を帯びていて、直に海へと蒸気を上げていった。砂洲を越えると、西に向きを変え、霞みの中に見えなくなった。

あの小さな錨ブイを、変化のない灰色の荒野で、どう見つけたかを説明する時に、私は申し訳ないと感じるべきである。私が覚えているのは、デイビスが船を操り、ボートフックでようやく掴むまでの間、ひっきりなしに紐を巻き上げただけである。そして気が付いたら、ブイはデッキの上にあった。ケーブルが間もなく引き上げられ、遂にあの錆びた怪物にたどり着いた。長い事、どろどろの中に使っていたため、いつにも増して面倒だった。

「大丈夫。これで何処へでも行ける」とデイビスは言った。

「ノルダーナイだね？ そう決めた筈だけど」

「確かにそうだが、結局、ランゲオーゲの内側を通って行くのが、一番短距離だと思っていたんだ」

「そんな事は無いよ」私は強調した。

「潮はもう引き始めているし、十分明るく無い。『分水界』を越す、知らない航路だぜ。座礁した方が安全っていうところだ」

「分かった、外側を行こう。用意」ゆっくりと向きを変え、開けた海の方に進んだ。私は事実を記録するが、陸は全く無く、あの忌々しい杭しか見えないので、実際、デイビスは彼の好きな処へ行けた。

「あの水道を行かないなんて、勿体ないとおもうがね」デイビスは溜息をついた。

「『コーモラン』が監視できない時間なのに」（我々は今朝はあの船を見かけなかった。）

また不毛な議論となるのが嫌だったので、私は水深を測り始めた。グリムは当面の仕事を終えて、ノルダーナイとメンメルトに向けて最短距離で進んでいるに違いないと思った。我々は程なく外海に出て西へ向かった。追い風を受け、島の砂山は風下側に見える。風は止んで、唯の空氣の揺れになり、我々は、長い水面にゆっくりと揺れているだけとなった。早く進もうと躍起（やっき）になっていたので、風が凪（なみ）いしてしまうのは非常にまずいと思った。二週間にわたる、得る処の無いうろつきを、目的のためには十分にやり過ぎたとおもっていたのだ。下に行って、本でも

読もうと思ったが、センターボードのところから水が汚く吹き出し、デッキに上がった。

「もう少し、早くいけないのかい？」私は爆発してしまった。私は、沢山のキャンバスが上の方に張ってあるべきで、スピナカーやフライングジブとか何とかは無いのかと思った。

「スピードレースをする気は無いよ」デイビスは短く言った。彼は忠実に船を『推し進め』てきたのだが、ちよつとした一吹きと静寂が一日つづき、午後に二時間ディンギーで引つ張つてようやくランゲオーゲまで来て、日暮れ前に西側にあるナメクジ型のバルトラム島の背後の停泊地までのそのそ進んだ。私は、そのまま海を夜じゅう進むべきだと思ったが、それを言う勇気が無く、デイビスはアキュマーエーの海岸を、満潮にのつて抜けていく口実ができて喜んでいた。天候は時間が経つにつれ、徐々に晴れていった。しかし停泊し錨をおろすと十分もしない内に白い霧が立ち、海の方から巻き込む様にやって来て、飲み込まれてしまった。デイビスはすぐにディンギーに乗って出ていき、帰り場所を知らせるため霧笛を鳴らす必要があった。その音で我がホストである周りの海鳥を起こしてしまい、彼らは頭上を文句を言いながら飛び廻り、悲しみに沈んだ身には奇怪な見えないコーラスのように響いた。

二十日の明け方もまだ霧は厚く立ち込め、ようやく八時頃に猫の手ほどのすきまが南から見え始めた。バルトラム背後の水道を、潮が分水点を過ぎる前に、杭を目印にして横切るのに丁度間に合った

「今日は遠くまで行けない」とデイビスは達観して言った。

「それに、この手の事はいつ起こるか分からない。秋のいつもの高気圧だー晴雨計は三十五を指したまま安定している。あの嵐が、いつも荒れる秋分の頃の最後の奴だったんだ」

今日、我々は当然の様に内側のルートを通った。それが今となつてはノルダーナイ港への一番の近道だ。土手でほぼ完全に遮断去れているような、北海でも最も通り難いと言われるウィヒターエー經由と殆ど同じ複雑さだ。

この種の航海で私はいつも混乱してしまうが、さらに霞みがかかってしまうと、完全にうろたえてしまう。方向を決めようとすると目がくらんでしまう。そこで私は水深測定に専念、別の仕事とは座礁した時のあのきついケツジを使うことだった。二時前までに、二回休み。その内の一時間は無風のまだらな霧に突っ込んだ時だ。もう一回は数分休んでいると、デイヴィスが、

「ノルダーナイが見える」と言った。雑草に覆われたゆつたりとした坂を上に乗せ、まだ引いて行く塩で濡れた、砂丘の集まりが見えた。これは最近目にした何百もの砂の丘と同じ形をしていたが、私には、新しい、独特な意味

を伴っている。

いつもの「深さはどう？」という言葉で私は夢想を破られ、「風下に操舵」で覚醒した。我々は浅瀬でタックをした。（風は我々に向いていた。）

デイヴィスが突然言った。

「あの船が前にいるのかな？」

「ガリオットの事かい？」私は訊いた。

私は、はつきりと半マイル先、ちょうど視覚の届くところに、あの見慣れた船を見分ける事ができた。

『『コーモラン』だと思う？』私は続けていった。デイヴィスは何も言わなかったが、自分の仕事がおざりになつていた。

「約四」と言つた私の言葉には気付かず通り過ぎ、一度底を引つ掛けたが、流れのせいで通り抜けた。すると突然、

「錨用意、投下」そして我々は追つて来た狭い水道の真ん中辺に止まった。私は自分だけで、メインセイルを固定、ヘッドセイルを仕舞い込んだ。

私がこれを完了した時、デイヴィスは双眼鏡で風上を眺めていて、驚いたことに、彼の手は酷く震えていた。こんな事は、波に洗われる土手で手首を間違えて返すと、死を意味する様な時でさえ見た事がない

「どうした？ 寒いのか？」私は訊いた。

「あの小さな船」彼は言つた。私も風上を見ると、小さな白いものが遠くにくつきりと見えた。

「小さなでっぱりと三角帆。あれだ。間違いない」デイヴィスは自分自身に、緊張のあまりどもつて言つた。

「誰？ 何？」

『『メデューサ』のデインギーだ』

彼は見つめたまま、双眼鏡を私に渡すと言うより押しつけた。

「ドールマンか？」私は叫んだ。

「違う、あれは彼女のボートだ。あれにいつも乗っている。彼女は僕に――僕たちに……」

双眼鏡の中で小さな白い点は優美な小さな帆となり、軽い追い風に乗って走っていた。川の角度に寄つて、船体が隠れ、また再び視界に現れた。誰かが船尾に座っていて操船していた。帆によって殆ど隠れているので、男か女か私には分からなかった。

みっちり二分間——二分の長い不安を孕んだ時間——我々は黙って見続けていた。湿った空気はレンズを曇らせたが、私は眼に宛てたままでいた。デイヴィスを見たくなかったからだ。とうとう私はデイヴィスが深く息をするのが聞こえ、背筋を延ばし、かれの特徴的な『フム』を聞いた。そして船尾の方へ素早く向かい、ディンギーのとも綱をほどき、ヨットの横に引き寄せた。

「君も一緒に来て」と言つて、飛び乗り、オール受けを取り付けた。(彼の手は再び安定していた。)

私は笑い、ディンギーを押し出した

「僕はそうして欲しいんだがね」と彼は怒つて言った。

「僕はここにいるよ。ちよつと片付けてやかんを掛けておく」

デイヴィスは、半漕ぎして止まった。

「彼女はこの船に来るべきじゃない」

「そうしたいかも知れない」私は示唆した。

「冷たい日だし、国からは遠く離れている。ごく当たり前の礼儀だよ」

「カルザース、」デイヴィスは言った。

「もし彼女が船に来て、彼女はこの件とは無関係だという事を覚えておいて欲しい。彼女から聞き出せるものは無い」

もし私が大喜びでなかったならば、デイヴィスに小さな小言を言っていらいらした事だろう。とうとう、良きにせよ悪しきにせよ、ルビコン川を渡ったのだ。

「これは、今回は君の問題だ。好きな様にしたらいいだろう」私は言った。

彼は、凄^{ひそ}い勢いで漕いで行つた。『全く彼のままで』と私は思った。帽子を被らず、霧で露にまみれ、着古したオイルスキンコート(ボタンが一個)、灰色のジャージ、灰色の毛のズボン(深海の漁師のズボンの様な)、そして長いブーツ。彼の対極にあるタイプ——カウズの遊び人——が、瞬間、私の眼に浮かんた。彼の顔は——それから判断するだけだが、自分のジレンマの二つの角を、オールを握るように、掴んでいる事を示していた。

私は二つの船が出会うのを見ていた。三百ヤード程向こうの、当たり前のコースで会うだろう。だが、トラブルが起こつた。最初にヨットが引つ掛かり斜めになった。『座礁した』と思つた。ディンギーはまだ、前に走っている。そして同じ様に引つ掛かつた。両方から、オールがたてる大きな水しぶきが静かな空気の中に浮き、そして静かになった。分水点の頂上、単調で、どろどろの物理的なルビコンは、まだこれから越えねばならない

のだと思われた。しかし、こんな事はなんとでもなる。二艘のボートはクリークの北側に向かった。二つの人影はそれぞれ、とも綱を持って水際に降りた。デイヴィスは砂を大股で歩き、娘は――今は私にも見える――彼の方に進んでいた。そして私は下へ降りて掃除をする時だと思った。

地上の何を持ってきても、『ダルシベラ』のサロンをこ婦人のための、応接室に仕上げる事はできない。私には、ぼろ布と床ブラシで、出来るだけ掃除するのが精一杯であった。散らかったパイプ、海図、放り出された衣服、それからどれほど整理しても、散らかるものを、棚とロッカーに詰め込んだ。ごちゃごちゃになった本棚を整理し、ストーブを点け、テーブルには白い布を掛けた。

恐らく二十分位経ったと思うが、私が天井の煙の落ちない、まだらを擦^{こす}っている時、オールと声が外に聞こえた。私はぼろ布を前部の部屋に放り込むと、手を思い切りこすり、階段を昇った。我々のディンギーが側に着く処で、デイヴィスがオールを漕ぎ、灰色の帽子を着け、緩い防水ジャケットと暗い色のサージのスカートの若い娘が船首に座っていた。スカートは見事な程、形が整っていて労働者風のゴム長靴がその下に覗いていた。その靴は形を変えればデイヴィスが履いている物に良く似ている。彼女の髪の毛は、彼の様に、霧が結露して玉になっており、彼女の茶の入ったピンクの皮膚は陰気な背景の中で、眼を見張る色調と思われた。

「彼はそこに居ます」とデイヴィスはいいい、『我が友人、カルザース』という言葉がこれほど楽しく聞こえた事は無かった。それに続いた『ドールマンさん』の調子はずれの具合も始めてだった。四つのシラブル全て間違った発音だ。

二つの誠実なイギリス人の眼が私を見上げていた。誠実なイギリス人の手――これは島国の幻影か？　そうかも知れない。しかし私は執着する――茶色のしつかりした手――いや、いや、それ程小さい訳ではない、感傷的な読者よ――がわたしの手を握りしめていた。もちろん私には、人種的な直感以外に、彼女がイギリス人だと信じる強い理由がある。しかし、仮に全く理由が無くとも、とに角ドイツの剽窃^{ひょうせつ}をお祝いするのだ。話した時の彼女の声の調子から、子供の時からドイツ語を話してきたのだと分かる。言い回しやアクセントは完璧だ、少なくとも私のイギリス人の耳には。しかしドイツ人としての生まれつきの響きが欠けている。

彼女は乗船した。最初は時間と天気 of 空虚な話があり、しかし皆そんな話しはやめようと思っており、すぐに終った。誰も、本当に遠慮すべき事は話さなかった。私の場合、会ったばかりで未知の人であり、話す価値がない。そこで私は当たり前の、キャビンの中でのお茶を誘った。だが私はデイヴィスとの間の約束を考え始めた。

「それじゃ、ほんの少し」彼女は言った。

私は手を差出し、引っ張り上げた。彼女はデッキと装備を見廻して大いに興味をそそられた様だ――息を飲む、飢えた興味だ――触って理解する。

「前にこの船をみましたよね？」と私は言った。

「以前はヨットに乗っていませんでした」彼女は答えた。

これを聞くと、妙だと思った。しかし、九月のノルダーナイでの時について、私はデイヴィスから細かい事は、ほんの僅かしか聞いていない。

「もちろん、あれが不思議だったんです」と彼女は突然ミズンマストを指しながら言った。

「何か違いがあると思っていましたわ」

デイヴィスはとも綱を巻き付け、今はミズンマストの出自について説明している。これは面倒な手順で、聞いている方の注意はじきにそれから離れ彼の話しになった――すでに彼女の興味の半分は彼についてだったので、結果は傍観者にとって見極める最高の機会となった。非常に短かったが、私は機会を逃さなかった。彼女の秘められた後悔、心からの苦しみ……は私が皮肉な馬鹿で、どうしてこれを予想しなかったのかと思った。そして、新しい状況を見ると心が沈んだ。これを認めるのを恥じだと思わない。私はデイヴィスが好きで、この探索に熱心だったのだ。

彼女はデイヴィスに対する企てには、全く関与した事が無い。気付かずに使われたか、あるいは強制されたか？もし後者の場合、彼女は我々が探っている、その秘密を知っているのだろうか？それは最もありそうもない、私はそう判断した。しかし、デイヴィスとの約束の重要性を理解したので、それを守るため私は外交的武器を捨てる事にした。つまり、明確またはかなり明確に後退する、つまり、直接あるいは間接にも、そこから情報を手に入れようとする努力を止めることだ。もし、彼女の会話やそぶりから、どういう状況か分かった場合、それは我々の責任とは言えない。デイヴィスは私が知っている以上の事を既に知っていた。

我々は何分かデッキの上に居て、その間、彼女は熱心に構造や艀装^{ぎそう}、耐航性などを、職業的洞察^{どうさつ}と個人的興味を混せて、聞いていた。

「あの日、一人でどうやって切り抜けたのですか？」と彼女はデイヴィスに突然訊いた。

「ああ、全然平気だった。」が答えだった。

「でも、友人がいる方が遥かにいいね」

彼女は私を見て、そして――ああ、デイヴィスの為なら死んでもいいとその時、あの場で思った。

「父は、貴方は大丈夫だと言いました」と彼女は確信を持って言った。

ちよつと確信が強すぎると私は思った。そして話しはロープだとか滑車だとかに移り質問を続けた。彼女はコンパスを見つけて、感心し、あの忌々しいセンターボードの落とし機構には妙に魅了されたようだ。これはイギリス流かというのが決まった質問だった。

しかし、表面的な自由さにも拘わらず、我々みな内気でぎこちなかった。下に降りるのは歓迎すべき気分転換で、もし我々があのサロンから自然なユーモアを感じないなら、とても人間では居られない筈だ。最初に私が降りてお茶の用意をし、その間彼らはイギリスの救命ボートの理論について意見を闘わせていた。間もなく、彼らも降りてきた。彼女は入り口のところに屈み、子猫の様に優美に降り、センターボードを収納する邪魔者を取りぬけて右舷のソファアーに座った。おずおずと廻りを覗き、我々の原始的な構成と汚れた住環境を見て好奇心が大喜びに変わった。リップピンジルの備えつけてある洞窟のような窪みを調査し、棚の鴨用猟銃やガラクタを触り、船首部屋をこわごわと覗き込んだ。

我々の窮屈な姿勢から、情けない食器の数と状態、パンの『ヨツト的』（他に適当な言葉が無い）状態――ベンザーシールで買ってきたあと、この環境に放り込んであるだけ――全てを、面白がった。実情が暴露され、お湯が沸くまでの間に、強風とそこへ行った時について質問があった。この話題は我々には危険性を伴うのだが、彼女は何も特別な意味を感じて無い様である。

フォン・ブリュニングの名前がでても、彼女は全く何の感情も示さなかった。それどころか、彼女は無邪気な話し方から、彼の話題については感情を殺した冷静さとなったのは明白だった。

「貴方が最後にここに、入らした時、あの人も私達のところに来ましたよね？」彼女はデイヴィスに言った。

「あの人はしょっちゅう来るのです。時には、父と一緒にメンメルトに行きますわ。メンメルトをご存知？」

そこで、古い沈没船からお金を拾い上げているのです」

「勿論ですわ。父はその会社の取締役ですの。フォン・ブリュニング中佐も出資しています。私も一度潜水機に乗ったことがあります」

私は「本当！」と口の中でつぶやきデイヴィスはパンを熱心に切っていた。彼女は我々が静かなのを、誤解したに違いない。デイヴィスが黙っていると彼女は話しを止め、ほんの少しの傲慢さを思わせる様に背筋を延ばした。

私は、この一時的な誤解によるコメディを大声で笑おうかと思った。

「金塊をみたの？」デイヴィスは真面目な顔でやっと言った。

何か言わなければならず、黙っていると負けを認めることになる。しかし、私は彼に言わせたかった。メンメルトには僕ほど関心がないのだ。

「いえいえ、泥と材木だけですわ。―あ、忘れてた―」

「会社の秘密を話しては駄目ですよ」私は笑いながら言った。

「フォン・ブリューニング中佐は金塊の事など話す筈がありませんから」（これは『自己矛盾』^{むじゆん}だなど思った）

「そんな心配は無いと思います」笑いながら答えた。

「あなた方は旅行者ですもの」

「そうですね」私は控えめに言った。

「単なる、旅行者ですからね」

「ノルダーナイに入らっしゃいますの？」と素朴な心配をした。

「デイヴィスさんは…」

私はデイヴィスを見た。これは彼が答えるべき事柄だ。

堂々と彼は、ぶっきらぼうなドイツ語もどきで答えた。

「あ、もちろん行きます。お父さんにもまたお会いしたいですね」

この時まで、私は彼の最終判断に確信が持てなかった。ベンザーシールでの話し以来、私は彼の鼻先を、回転している丸砥石とじしに押し付けている感じがしていた。この明快ではつきりした単純な言葉は、私が想定したすべてを上回った。私はこの言葉で、自分の意識を取り戻し、彼の心は私より遙か先を見ていると感じた。さらに私が考えなくても見なかった二重の目的を持ち始めた。

「父ですか？」とドールマンフロイデンドールマンさんは言った。

「そうですね、喜ぶと思いますわ」

彼女の声には自信は無かった。眼は遠くを見、心配していた。

「彼は今、御在宅では無いのですよね？」私は訊いた。

「どうしてご存知ですか？」（ちょっとした娘らしい混乱。）

「あつ、フォン・ブリューニング中佐ですね」

私は、この訪問はある種の勝手な行動で、お父さんが認めない類のものと言うのは、最初から明々白々であると付け加えてもよかった。私は『話しませんから』と、言葉に出さずに言い、これは伝わったと思われる。

「デイヴィスさんには、最初にお話しましたの」と彼女は続けた。

「すぐに戻って参ると思いますー実際、明日ですーアムステルダムから手紙がありました。父は私とハンブルグで別れてから、ずっと出ております。もちろん、父はあなたのヨットが戻った何て知りません。父はデイヴィスさんはバルト海にいらっしゃると思っっている様でした。季節も遅いですからね。でも、もちろん、よろこぶと思いますわ」

「『メデューサ』は今、港ですか？」デイヴィスは言った。

「ええ、そうです。でも私達はそのに住んではおりません。私達、シュワンアレーの家におりますーつまり、義母と私です」

彼女は細かい事を付け加え、デイヴィスは航海日誌に、住所を真面目な顔つきでメモした。この形式が、どういう訳か、我々の状況の秩序を回復した。

「明日、ノルダーナイに行きます」彼は言った。

この間にも、やかんは楽しそうに沸いていて、私はお茶を入れたーココアと言うべきか。メニユーを我々の客に敬意を評して変更したのだ。

「本当に楽しいですわ！」彼女は言った。

そして常識的に、我々はこの三人の若く、飢えた船乗りによる即興のピクニックを始めた。このような事はもう無いかもしれないー『今という瞬間を楽しめ』⁸¹

しかし宴会は祝われなかった。ベルシャザルの酒宴⁸²の様に壁に文字がある。超自然の刻銘では無く単に印刷した名前だ。イギリスの苗字で、タイトルとイニシャルが安っぽい金文字で古い本の背表紙に書かれている。我々の居心地のいい集まりを静かに、冷笑しながら見ていた。破壊は突然やって来て過ぎていった。その時私はどうしてそうだったかの前兆さえ分からなかった。しかし、今、思うと、こんな様子だった。

我々の客は、右舷のソファの前の端に座っていた。壁に近いところである。デイヴィスと私は向かい側である。壁の向こう側、我々の頭越しに本箱が見え、その中身は、覚えていると思うが、私がほんの三十分前に、全く

⁸¹ 原文では、*carpe diem*。ホラティウスの言葉 *carpe diem* と同じものと思われる。

⁸² レンブラントの絵画。千六百三十五年頃の作品。ロンドン、トラファルガー広場に面した国立美術館に所蔵。

どんな結果を産むか考えずに、注意深く整理した。

些細な事、多分デイヴィスが航海日誌を取り出した事が、彼女の注意を他の本にも向けることになった。ココアを飲んでいる時、彼女がタイトルを読み、背表紙を触り、デイヴィスののだらしない本の扱いをからかっているのが聞こえた。突如、静かになったので、私が眼を上げると彼女の顔つきが驚き、悲しんでいるのに気付いた。彼女はデイヴィスを見開いた眼と半分開いた口で見つめ、額がどんどん赤くなって行った。夢遊病者が眼を覚まし自分が何処に居るか分からず、恐怖を感じているという顔だ。

彼女の心は半分どこか遠くに行き、過去の怖ろしい夢を理解しようと努力している様であり、後の半分はここに在って吐き気を催す現実に縮みあがっている様だった。彼女はそうして、恐らく十秒も経つたろうが―彼女は勇気のある娘だった―自分を取り戻し、廻りを慎重に見廻し、妙な雰囲気デイヴィスに向かい話した。

もうこんな時間になってしまつて、帰らなければ―ボートが安全では無いかも知れないので。そして立ち上がり、いやむしろソファ―からすり抜けた。何しろ立ち上がるのは無理だから。我々は礼儀知らずの無骨者の様に呆気にと取られていた。デイヴィスはやつと、

「どうかしたの？」と普通の英語で言い、あとはぼうっとしてしまつた。

私は最初に回復し、ココアがまだ残っている事、時間、霧も無い事を不器用に言つた。

答えようとして、彼女の冷静さが失われ―可哀そうな娘よ―わき目も振らず、怪我をした動物の様に、全てのおぞましい状況がパニックを加速する様にキャビンから逃れようとした。

ソファ―から離れる時、テーブルの端を傾けココアをスカートの端にこぼした。戸口の上に頭を強くぶつけ階段をよろよろと駆け上った。私は彼女の直ぐ後ろにいたがデツキに出た時にはディンギーの綱を持って引つ張っているところだった。誰も何もできない内に、彼女はディンギーに飛び乗り、オールを掴んでいた。ここで、とんでも無いことが彼女に起きた。ディンギーは我々ので、だれかが一緒に行つて戻さなければならぬ。

「デイヴィス、送っていつて」と私は言つた。

「いいえ、結構です」彼女はどもり、

「もしよろしければ、カルザースさん。貴方の番です。いえ、私が言いたいの、私は…」

「君行け」デイヴィスは私に英語で言つた。

私はディンギーに乗り込むと、オールを渡すように促したが、私を見ている風は無く、デイヴィスがキャビンに

忘れていったジャケットを渡すとボートを漕ぎ出した。我々どちらも、普通の謝罪をして、状況を変えようとはしなかった。彼女がそうするべきだった。だが、最後の言い訳は、余りにも勇敢だが情けない位に気まずく、私は恥ずかしさで背中が震えた。彼女はさらに状況を悪化させてしまい、デイヴィスはそれ以上話させなかった。

「アウフ ヴィーダーゼーエン」彼は簡単に言った。

彼は頭を振り、握手をしようとしなかった。漕ぎだし、デイヴィスは向きを変えようと、さっさと下へ降りた。もう泥だらけのルビコン川が邪魔をすることが無かった。潮は十分上昇していて、砂は水の下だった。私は、もういちどオールを取ろうとしたが、彼女は気付きもせず漕ぎ続けた。私は彼女の船の所に着くまで単なる無言の客だった。こぎれいなギグ⁸³で海軍仕様で小さなリーボード付き、スプーンバウ⁸⁴である。それはもう浮いていたがロープと小さな錨で支えられ、全く危険は無く、彼女はそれを引っ張り始めた。

「ほら、全く危険はありませんよ。」と私は言った。

「でも、私はもう居られないのです。カルザースさん、ちょっとお話ししたい事があります。」（私は来たと思った。また、フォン・ブリュニングの警告通りだ。）

「私はたった今、大失態を犯しました。明日、入らっしゃらないで下さい」

「なぜ駄目なのですか？」

「父には会えません」

「お父様は帰ってくると、おっしゃいましたよね」

「ええ、明日の朝の汽船で。でもすごく忙しいのです」

「お待ちしますよ。何日かは、都合がつけられますから。それに手紙を取りに行く用があるのです」

「私のせいで、遅らせては行けません。ようやく天気もよくなったのですから。イギリスに楽に帰れるチャンス逃してはいけません。季節も……」

「僕たち、決まった計画無しなんです。デイヴィスはちよつと獵もしたいらしいし」

「父は、時間が取れないのです」

「貴方には会えますよ」

⁸³ 商船、軍艦に積載される幅の狭いボート

⁸⁴ リーボードは船の風下側に設置された、船が風下側に向かないようにするためのもの。スプーンバウとは、船首の船底がスプーンのような形をしたもの。

私は鈍感な振りをして、頼み込んだ。この混乱してしまった娘と闘いたくは無かったが、探索が懸かっているのだ。我々は、何があるかと、ノルダーナイに行き、遅かれ早かれドールマンに会わねばならない。会わないという約束は出来ないのだ。フォン・ブリューニングに約束した覚えは無いし、彼女にも約束しない。ただ一つの方法は、デイヴィスとの約束（今の、この馬鹿げた失敗で、緩んだ筈だ）を破り、話して、彼女と同盟が結べるか試すのだ。彼女の父親に反抗させて？ 私は責任から尻込みし、失敗した時の被害を考えたら彼女の行為による、ある失敗の被害を。彼女はラグスルを茫然と、力なく上げ始めた。我々の二つのデインギーは船尾の方にゆっくり動いている。

「父はそうしたく無いかも知れないのです」 彼女はそれほど低く、震える口で言ったので、私には殆ど聞き取れなかった。

「父は外国人があまり好きでは無いのです。残念ですがデイヴィスさんに、会いたく無いのです」

「でも、あなたも、お父様が……」

「あの船にお邪魔してはいけなかったのですーそれを突然思い出して。でもデイヴィスさんにはそう言えなかった」

「分かりました、彼に伝えましょう」と答えた。

「そうなんです。あの方は私達に近づいてはいけませんのです」

「彼は理解すると思います。勿論非常に悲しみますが、しかし」私はきっぱりと、付け加えた。

「彼が、正しい事をするというのは、何も言わずに信頼できますよ」

そして、これが彼女を満足させられるか祈った！ そして、祈りは通じた。

「分かっています。さよならを言っていますでした。そう言っ下さいますか？」 彼女は手を差し出した。

「一つだけ」と私は握手しながら、付け加えた。

「お会いしたことを、お父様におっしゃらない方が良いと思いますが？」

「その通りです。何も知られてはいけません」

私はギグの船縁が離れるままにし、彼女が席を固定し風上に向かって一、二回タックをするのを見届けた。私は『ダルシベラ』に向かって全力で漕ぎ戻った。

第二十章 小さな茶色の本

私が戻るとデイヴィスはキャビンのテーブルの所に、本の山に囲まれていた。本棚は空で、その中身はカップの間や床に放り出してあった。二人とも、同時に話し始めた。

「いったい、何だったんだ？」

「彼女、何て言った？」

私は、譲って、まず私の話を簡単にした。彼は黙って聞き、持っていた本でテーブルを叩いた。

「それはさよならでは無いよ」彼は言った。

「でも、不思議じゃ無いな、これを見ろよ！」彼は小型の本を差し出した。この本はよく知っていたが、中身は良く知らなかった。前の章で書いたが、デイヴィスの本箱は、『潮流表』、『水先案内』などを除くと、二つの種類に分かれる。一つは海戦で、もう一つは彼の趣味である小型ヨットでの航海である。後者については六、七冊あり、ナイツの『バルト海の鷹』、カウパーの『航海』、マクミレンの『ダウン チャンネル』と後は知られていない冒険航海ものだ。我々の生活は、本を読めるような状態ではなく、私は暇な時にちよつと覗いて見ただけである。

この本の内容は——いや、それ程細かく紹介しない方がいいだろう。しかし、それは古くて目立たず、かなり古臭い布の、安っぽい装丁で、書名は、イギリスのある河口についてのヨット乗り向けの案内書であることが分かる。白い、一部が欠けたラベルを見ると『3d.』⁸⁶とある。一、二回は眺めたことがあるが興味を持った事は無い。

「それで？」黄色くなったページをパラパラさせながら訊いた。

「ドールマン！」デイヴィスが叫んだ。

「ドールマンが書いた」

私はタイトルページをめくり読んだ。

「海軍大尉 M— 著。R.N.」

名前そのものからは何も分からなかったが、理解し始めた。デイヴィスは続けた。名前は背表紙にもある——そしてそれが彼女が最後に見た物だ」

「でもどうして、それが分かる？」

「そいつの顔が載っている。全く、前に一度も見なかったなんて！ 口絵を見ろよ」

それは旧式な挿絵で、出来も良くない。精細度を欠き仕上げも良くない図版だが、安っぽく不完全な処理にも拘わらず、写真から作製したものと分かる。どこかの森の前に錨をおろした小さなヨットで、持ち主がシャツの袖をまくり上げて立っている。よく引き締まった、がっちりした男で、若く、中背でひげは無い。顔は特に目立つとは思えない。ポートレートは小さすぎて、もしあるとして、表情は固定された『写真的』なものである。

「どうして彼だとわかる？ 彼は、灰色のひげを生やしていて五十だと言ったよね」

「頭の形だ。あれは変わっていない。頭の上のが広がっていて平らだろうーま、くさびの様な形だーそして高い、切り立った額をしている。それは分かり難いのだがね」(これらの点はあまりはつきりしない、しかしデイヴィスの言う意味は分かる。)

「背の高さや体型も合っている。日付もおよそ正しい。下を見て」

絵の下にはヨットの名前と日付がある。表題のページにある出版社の日付と合っている。

「十六年前だ」デイヴィスは言った。

「彼は三十ちよつとに見えるだろう？ そして今、五十だ」

「これから考えて見よう。十六年前、彼はまだイギリス人だった。英国海軍の将校だ。そして今はドイツ人。この時からのどこかで、何か悲痛が起こったー不名誉、脱走、亡命ーのだと思う。いつだ？」

「ここに来て三年だそうだ。フォン・ブリューニングが言っていた」

「ずっと前だよ。彼女はドイツ語を子供の時から話している。彼女の歳はどう思うー十九か二十？」

「そんな処だろう」

「仮に、この本が出帆された時、四歳だとして見よう。破滅はその後ではない筈だ」

「そして、それ以来ドイツに隠れていた」

「これは有名な本なの？」

「他のは見たことがない。古本屋で三ペンスで買った」

「彼女はこれを見ていたと言うんだね？」

「そうだ、確かだ」

「九月には、この船に来た事はない？」

「無い、二人とも招待したけれど、ドールマンは応じなかった」

「でも、彼は、彼はこの船にきたんだろう？ そう言ったよね」

「一度だけ。最初の日朝食と一緒に食べた。あ、そうか！ 分かった、彼はこの本を見たと言うんだね？」

「それで色々説明がつく」

「全部、説明がつく」

一、二分、我々は深く考えに耽^{ふけ}った。

「本当に全部だと言うのかい？」私は言った。

「その場合、すぐに船を出して全て忘れてしまおう。彼は過去を持った可哀そうな奴に過ぎない。その秘密に君はぶち当たった。彼は怖れで半分気が狂い、君を大人しくさせようとした。でも君は復讐したいとは思っていない。すると、我々には関係無い事だ。勿論、彼を破滅させられるが、その価値があるかい？」

「君は、その積もりなんか全くないのだろう。」デイヴィスは言った。

「しかし、何故そう言うかは分かる。有り難う、君。僕の意味は『全て』じゃない。彼はドイツ人と陰謀を企てている。そうでなければ、どうしてグリムが僕たちをスパイしなければならぬ？ それにフォン・ブリューニングの尋問もね。僕たち、彼が誰で、何をやろうとしているか探りださないと。そして彼女についても――彼女について今、どう思う？」

私は、心から自分の謝りを認めた。

「無実で、全くこの事を知らない」が私の結論だった。

「父親の反逆的企てを『知らない』だろう。でもはつきりと気付いている。何しろ彼らは過去を隠したい、イギリス人の亡命者だから」私はこの他にも言ったが、それはどうでもいい。私は言った。

「このデイレンマが、更にとんでもなく酷い事になる」

「デイレンマは全く無い」デイヴィスは言った。

「ベンザーシールで君は言っただろう。僕たちは彼女を傷付けずに、彼を傷つける事は出来ない。僕に言えるのは、そうせねばならないということだ。僕たちが彼女のディンギーを見た時、あの時しか逃げ出すチャンスは無かったんだ。あの時は酷い瞬間だった」

「結局、彼女は手がかりを一つか二つくれたよね」

「僕たちの責任とは言えないだろう。彼女がこの船に来るのを断るのは、僕たちの事を教えるのと同じだ。それに彼女が残した証拠が決めてしまった。彼女はそれで傷つく必要は無い」

「彼女は どうするだろう？」

「父親にくっ付いていくと思う」

「で、僕たちはどうする？」

「まだ分からない。分かる訳ない？ 事情次第だな」とデイヴィスはゆっくりと言った。

「しかし、要点は、僕たち二つの目的がある、どちらも同じ位重要——そう、同じくらい。何てこった——彼をくじいて、彼女を救う？」

僕たちは黙ってしまった。

「それはかなり大変な命令だな」私は言った。

「君は、この瞬間に僕たち多分最初の目的を達成したと気が付いている？ もし、このまま家に帰り、海軍省に直行して、僕たちの調べた事を示せば、結果はどうなると思う？」

「海軍省！」デイヴィスは、いい様の無い軽蔑を込めて言った。

「それにスコットランドヤードにも。敢えて言うが、どちらも我々の男が欲しいだろ。彼らを取り掛かっても取り除けないというのは可笑しい。それに、ここで何が起きているか探し出すか、この小さな海岸に注意を集めさせると、さらなる秘密を不可能にしてしまう」

「彼女に父親を裏切らせ、逃げ出させるというのは問題外だ！ それに僕たち、まだ十分知らない。彼らは信じないかも知れない。それにどう考えても、卑怯な手段だよ」

「それで決まった。」私は急いで答えた。

「事実をもう一度見直して見たいんだがね。いつ彼女に会ったの？」

「あの最初の朝だ」

「彼女はその前の晩、サロンには居なかったのだね」

「居なかったし、彼も何も言わなかった」

「君は、次の朝、もし彼が訪問しなければ出帆する筈だった」

「そうだ、言っただろう」

「彼は、娘と一緒に航海する様、君を説得するのを許したという事かな？」

「そうだと思う」

「しかし、彼は操縦している間、娘を下にいかせた？」

「もちろん」

「彼女はついさっき『父は貴方は安全だと言った』と言った。今日君は何を彼女に言っていた？」

「砂の上であった時の話した。（ところで、これは偶然では無い。彼女は問い合わせをしていて、ワンガーオーゲでヨットを見かけた船長から僕たちの事を聞いている。そして、こちらの方に来ていた。）彼女すぐにあの日の事を訊いた。そして、かなり気まずい感じで謝り始めたんだ。クックスハーフェンで待たず、無礼をしてしまったとね。彼女の父親が、ハンブルグにすぐに行く必要があると分かったと言ってるね」

「でも君はクックスハーフェンには行かなかった。その事を話した？ 正確に、君は何を言ったのだい？ 重要だぜ」

「彼が、娘に何て言ったか知らなかったの、僕には凄い苦境だった。だから僕は曖昧な事を言ったんだ。そうしたらフォン・ブリュニングの質問と全く同じ事を訊いたんだ。『シャルンホーンの辺りはすごく海が荒れていなかったか？』って」

「彼女は君がショートカットをしたって知らなかったのか？」

「そうだ。彼は敢えてそんな事を娘に言わなかった」

「彼女は自分達がショートカットしたと知っていたの？」

「そうだ。それは隠しきれない。丸窓から見た海の様子で分かったと思う、それに時間とかで」

「でも『メデューサ』が風上に向いた時、彼は君について来いと叫んだよねー彼女は何が起こっているか分からなかったのかな？」

「そうだ、明らかにわかってない。いいかい、彼女は何て言ったかなんて聞こえない筈なんだよ。あの天気で、キャビンの中でね。僕は彼女に確認する事が出来なかった。でも彼女が何を考えたかは明白だった。つまり、風上に向かう理由を全く逆に理解したんだ。父親はショートカットするため、僕は彼について行かない様にするため」

「だから、彼女はクックスハーフェンで『待つ』というのを強調したんだな？」

「もちろん、僕の方が時間が余計にかかるからね」

「彼女は企みには全く気付いていないと言う事？」

「全く気付いていない。それは僕には分かる。とに角、僕は生きてここに居るんだからね」

「でも、彼女はあの日航海に誘った事を悔んでいたという事だね。そしてちゃんと着くまで待っていないかった事を」

「そんなところだ」

「それで、クックスハーフェンについては、君は何と言ったの」

「何も。僕は、彼女にそこに言ったと理解させ、見つからなかったのも、船舶運河を使う予定を変え、バルト海へアイダー川経由で出たと言った」

「じゃあ、ハンブルグからの帰りの航海は？ 一人で？」

「いや、義理の母親がついて来た」

「ブルンスビュッテルで問い合わせたって言っていた？」

「いや、多分言いたく無かったんだと思う。それに必要ないからね。アイダー川経由という事で説明がつく」
私は、考えて見た。

「彼女は君がショートカットを通ったと思った事がないのは確かかい？」

「確かだね。でも、今は分からない。あの本があるのを見て、凶行を想像したかも知れない」

「もちろん、そう想ったろうね。でも僕は別の事を考えていたんだ。今、二つの説が流通している訳だ。君がフォン・ブリュニングに言った本当の話し。つまり君が『メデューサ』について言ってショートカットした話し。そしてドールマンが娘にした話し。こちらでは君はシャルホーンを通って行った。これは明らかにドールマンの話しだー君が溺れたりして、調査があつた時に話す筈の物だ。もし真実が見つかったら、彼の部下に誓わせる内容だ」

「しかし、彼は、僕が生きて帰ったと知ったら、あの作り話を撤回しないといけない」

「そうだ。だがその間に、彼が君の生還を知る前にフォン・ブリュニングに会い、あの事件の真相を知りたいとしよう。もし僕がフォン・ブリュニングなら、『ところで、君がバルト海に誘いだした、あの若いイギリス人はどうしたかね？』と訊くだろうな。ドールマンは彼の話を、フォン・ブリュニングは我々の話を聞いているので、嘘をついているのを知り、君を溺れさせようとしたと気付く」

「それが問題になるかな？ 彼はもうドールマンは悪党だと知っている筈だ」

「僕たちは、そう考えているが、間違っているかも知れない。僕たちはまだ、彼らドイツ人に対するドールマンの立場を知らない。彼らは、ドールマンがイギリス人だとさえ知らない事もあり得る。あるいは知っているけれど、本当の名前や過去は未知というのも有り得る。君の話しがどんな影響を彼らの関係に与えるかは予想できない。

でも一つだけはっきりしているのは、僕たちは出来る限り、現状維持をするのが一番大事だと思う。あの日の危険をできるだけ小さく見せて、彼の主張に沿う様にしてね。君の話しと彼の話しが合わない、現状維持が出来なくなる。不一致は彼を罰する（これはどうでもいいかも知れない）だけでなく、僕たちが疑われる」

「何故？」

「つまり、ショートカットが余りにも危険で、君をそこに連れ込んだことを認めないとすると、君が凶行を疑う怖れがある。それこそ我々が避けたい仮説だ。僕たちはそう言う仮説を否定しても益の無い、単なる旅行者と思わせたい。秘密など探していいとね。」

「それで、どうしようと言うんだ？」

「これまでの処、僕たちはかなりうまく立ち回ってきたと思う。フォン・ブリューニングをベンザーシールで誤魔化せたでしょう。そして僕たちの方針をその仮定のもとに考えるのさ。その場合、僕たちはドールマンに出来るだけ早く戻って来たことを見せないといけない。そして、彼が何か始める前に、考え直す時間をやる。そこで……」

「でも戻ってきたら、彼女が言うよ」デイビスが遮った。

「そうは思わない。僕たち、今日の午後の事を秘密にして置くと合意したんだ。彼女は今後僕たちに会う事は無いとおもっている」

「彼女は、父親は明日の朝の船で帰ってくると言った。どう言う意味だろう？ どこからの船で？」

「分かった。反対側の本土、ノルトダイヒからだ。ノルデンからそこまで鉄道があり汽船で島まで繋がる」デイビスは言った。

「何時に？」

「君のブラッドショウがあつたな——これだ。『冬季八時三十分、九時五分着』」
「すぐ出かけよう」

最初は潮と乱闘したが、分水点を越してしまうと水道は通り易くなり、霞^{かすみ}はだんだん晴れていった。灯台が砂丘の中、島岸に見え、暗くなる前に尖塔や町の屋根がぼんやりと見え始めた。黒い長い栈橋が南側に向けて突き出している。一マイルも無くなった頃に風が無くなり、錨を下ろさざるを得なかった。その夜の内に目的地に着くつもりだったので、潮が流れるのを待ち、ディングーでヨットを引っ張った。こうしている内に、ちょうど昨日の様に霧が突然出てきた。その時私が引っ張っていたが、もちろんすぐに止まった。デイビスはコンパスと水深を頼りに行けるからと、舵のところから進む様に大声で言った。そして最後には、大体九時頃に、五尋の停泊地に安全に錨を下ろした。少し偵察しただけで、そこは東側の栈橋の近くだと分かった。ちよつと機敏な海員の名作業と言っていいだろう。

我々の錨がからからと降りるまでは、全く何の音もしなかった。すると、波止場の方から、くぐもった声が叫び、じきにボートが手探りでやって来るのが聞こえた。それは礼儀正しい、眠そうな港の管理官で、我々の詳細をおざなりに訊いたが、『ダルシベラ』の前回の訪問を覚えていた。

「行先はどちらですか？」彼は訊いた。

「イギリス――ま、その内にですが」デイヴィスは言った。

その男はちよつと馬鹿にした様に笑い、

「今年は無理でしょうな」と言った。

「霧が来週までも続くだろうね。いつもそうなんだよ。それに嵐もね。ここに君たちのヨール⁸⁷を置いといた方がいいよ。税金は一ヶ月ほんの六ペンスだからね。」

「考えて置きましょう」とデイヴィスは言った。「お休み」

男は幽霊の様に厚い夜の中に消えた。

「郵便局は開いていますか？」私は彼の背中に訊いた。

「開いていない。あした八時だ」という声が霧の中から返ってきた。

我々は興奮していて、落ち着いて夕食を取れず、平穩に眠れず、仕方なく計画と推測しか出来なかった。この時に至り、我々はお互いを完全に信頼して話せる様になった。デイヴィスは最後の障壁を取っ払い、彼の本心を私に見せたのだ。彼はあの娘を愛し、国を愛している。単純な二つの情熱が、当面、彼の全ての道徳的包容力を使い尽くしてしまっていて、無理やりの解釈と言ったものが入る予知が無い。つまり、名誉と妥協という声が彼の耳にやかましく響き続け、一つの情熱を、もう一方と比較するという何の結果も産まない拷問に苦しんで来た。両方とも正しく、どちらも諦める訳にはいかない。もし事実が、和解不可能となつて現れた時には、事実の方が悪いと⁸⁸しかいい様がない。両方とも満足させるか、どちらも満足させない方法しか残らないではないか！

もし、彼の気持ちまで理解出来ないならば、私は心を持たない犬同様と思わねばならない。しかし本当の事を言うと、私はこの際の難題をうまく解決して見たいと強く思ったのだ。私もデイヴィスの二つの難問に何かこじつけの解釈を探すことには飽き飽きしてしまって、その日の午後分かったことに勇気づけられ、我々の探索に

⁸⁷ 小型帆船。

⁸⁸ 原文は tant pis pour les faits.

これほど引きつけられたことは無かった。不誠実と言われたくないので、私は現状を一つの視点からだけ見ていた振りにはしない。私がロンドンから出て来た頃、自分の考えは非常に俗物的で、誰もたった三週間でこの気質を变えることは出来ない。私はデイヴィスに言いたい放題を言ってきた、無法者の娘を愛してしまった事に対する、ある種の社会的事実を冷酷に強調し意地の悪い満足感を持ったのだ。

私は、それを事実だと言うが、自分で考えた末の確信からでは無く、単に暗記したものの繰り返しに過ぎず、彼は私の御託を冷静に聞いて来たのだ。それなのに、私は彼自身の解を見境も無く取り上げようとしてきた。もしデイヴィスの解が我々の冒険に、現代の冷静な若者より中世の武者修行者向きの、気の狂った騎士道精神の風味を添えるなら、何と言うかー有り難い事に、私は冷静過ぎず、まだ十分若いのだ。私の性格はともかく、たくましい想像力を使ってその精神を捕まえた。しかし、多分性格もいるかも知れないな。ギャラハッド⁸⁹は何処にでもいる訳ではないが、並みの連中も彼から勇気をもらい、あの『十倍の強さ』を何も言わずに信頼すべきだろう。だが、ロマンチックな理想を、現実的なプランに落とし込むのは非常にむずかしい。

「逆向きに議論しないといけないと思う」私は言った。

「最終段階はなんだろうか？　つまり、それが他のことに影響する筈だからね」

答えは一つしか無いードールマンを秘密もろとも捕まえ、そして娘と全てを、ドイツから脱出させる。こうする以外に我々の設定した二重目的は達成できない。疑問だらけの中で、どんなに難しくとも、最低限の条件を見つけると言うのは、どれほどの喜びか！　これを最終目標として、これから逆に考えていった。最初に頭に入れて置くのは、敵がどれほど沢山いて、また強力だとしても、我々の明白な敵はドールマンである点だ。

争点は我々と彼だけが知っているべきである。もし、我々が勝ち、『彼の企み』が分かれば、我々は何としても自分の成功をあのドイツ人の友人から隠さねばならない。そして、彼が裏切る前に引き離す。（読者は、この状況を気楽に認めるてしまうのは楽天的過ぎると思うかもしれない。）

次の問題は、どうやってドールマンが何者かを探ることだが、これはずっと難しい。もっし、ドールマンの正体を発見しなければ、これは最強のクルミを割るようなものだろう。しかし、発見したのでこれから色々考えつく。我々がこれまで、急いでまとめようとして来た二つの方法ー二人が、その時々、および別々の動機で、シーソーの様に比較して来たーが一つにし易くなった

⁸⁹アーサー王伝説中の、円卓の騎士の一人。

一つは、独自に調べる方法、もう一方は、ドールマンから秘密を知恵か威しおどを使って訊き出す方法である。今の我々のモラルでは、最初の案は諦め、二番目の案を採用することにした。

独自調査の見込みは以前に比べ、微塵みじんも改善されていない。考えられるのは二つの推論しか無く、水道理論とメンメルト理論である。前者は証拠をを補強するものが無くしぼみ、後者もどうも怪しくなったように見えた。ドールマンさんに関しては、サルベージは明らかに彼女に信じ込ませたためであり、これ以上の意味は無い。彼女が父親の反逆的陰謀はんぎやくてきいんぼうに加担していないのが明々白々なので、難破船事業は、例えば彼が関わっていたとしても、重要ではなくなる。

しかし、メンメルトがドールマンの活動領域だとすると、彼女がその領域に詳しいのはちょっと面食らわせるものがある。つまり、気楽に潜水機で潜もぐったと話したり、潜水結果は秘密になっていると仄めかしたことだ。それにも拘わらず、グリムがメンメルトに向かった事もあり、またそれが唯一の具体的手がかりなので、この推論は捨てがたい。現実には納得できる反論は、我々は知られ、監視もされており、メンメルトを調査し、その重要性を知るのは極めて難しいという点だ。もし、何か重要なものがあるならば、我々に見せてくれる筈もなく、試み、失敗すればそれで終わりである。デイヴィスのと私の間の全ての誤解の最後のものが解消したのはこの点についてである。

ベンザーシールでは彼は自分で認める以上に、私のメンメルトについての議論に影響されていた。しかしあの時は（私は仄めかしたが）彼は過激な偏見を持っていた。水道理論は、ある種宗教的信仰になってしまつて、二重の救いをもたらすと考えていた。ドールマン家を避け、彼の達人の領域に達した方法の成果を示すことの二つだ。一方、水道理論から離れ、海軍の防衛基地の偵察ていさつと言う案を、彼は怖れ信じようとしなかった。彼が心配したのは、方法のモラルの問題では無い。心は平時の外国の軍事力のスパイであり、良心に背かぬ様、活動方法の見かけつくりを繕うなどの、根本的事実に驚くには、彼は遥かに頭脳明晰めいせきすぎたのだ。

彼にとって、外国の軍勢力とは反逆者ドールマンである。これが彼の信ずるもので、勇敢に受け入れ、最後まで持ち続けた。このことは、メンメルト理論が必要とする行動に尻込みするという風に表現された。自分の性格と力の限界を知っていたのだ。そして、彼の揺るがぬ常識が、毛嫌けがいするものを見抜いたのだ。ここまでが、独自調査に関わるものだ。

一方、他の方法の取る道筋は、今はもうはっきりしている。デイヴィスはノルダーナイでの紛糾に直面する事を、

もう恐れていない。あの日、幸運にも我々はドールマンを攻撃する新しい、有力な武器を手に入れた。それがどの位、強力かは我々はまだ知らない。我々は彼の過去についてほんの少しを知っただけで、彼の政府との正確な関係までは知らない。しかし我々は彼が誰であったかは知っている。この知識を基に話せば、残りを絞りだすことができるのでは無いか？ もちろん手探りをしながら、彼自身の行動を助けとして、最後には強く打ちかかり、全てをその一振りに賭けることが出来るのでは？

それが、今夜のところの我々の計画である。後で、寢床に入ってから、あの小さな茶色の本について思い出し、蠟燭をつけ取って来た。前書きによると、海軍勤務中の二か月の休みを使って書き、この本がスポーツマンに参考になるのを期待するとある。書き方は素朴で、しかし学術的できびきびしている。土手や砂洲の記述のおさえた味わい以外、著者の個性と言うものは無く、これはデイヴィスを思わせる。それ以外は退屈で、実際、私の睡眠に役だった。

「やって来たぞ」とデイヴィスが言った。

次の日の九時だった。十月二十二日、我々はデッキの上に居て、ノルトダイヒからの汽船を待っていた。天候に変化は無い―同じ様な身に染みる寒さ、晴雨計の指示は高く、変わり易い空気の動きだけだ。しかし朝は、海からの煙の様な一筋、二筋の霞み、北の地平線に押し付けられた乳白色の霧がある以外は、素晴らしく晴れていた。

港は我々の前に開けていて、非常に広く、文化的に見えた。二つの長い栈橋に挟まれ、それらは我々の停泊地（リフガットと言う）の方向に約半マイルも伸びている。知らぬ人はそれを深く、幅があると取るかもしれない。

しかしそれは、勿論幻想で単に今、満潮なのである。デイヴィスは、その四分の三は泥で、あとは浚渫された、西側の栈橋沿いの水道であると知っている。何艘かのタグボード、浚渫船と蒸気を上げた定期フェリーはその方の栈橋に停泊し、ガリオットの小さな群れは反対側にある。

これらの他にはガリオットの作りだが、他がだらしのない女ならば、女王の様に輝いている船がいた。ワニスで塗装された側面や柱はオレンジ色に日差しを浴びている。これらに、純白なセイルカバー、きらめく真鍮と砲金が彩をそえ、それがヨットであることが分かる。私は、双眼鏡で既に観察したが、船尾に『メデューサ』と読める。何人かの乗組員がデッキを掃除していて、水の跳ねる音やデッキ箒の擦れる音が聞こえる。

「彼らには、僕たちが見えるさ」デイヴィスは言った。

その点に関しては、世界中が我々を見る事ができる―勿論入港してくる汽船から見えるのは当然だ。我々は安全基準ギリギリの近さで栈橋に並行して停泊し、横の通路を水兵の一団が歩いていくのが見える。タグボードよりも大きくはない定期船が南から近づいて来た。

「彼が来ることを知らない筈なんだからね」私は言った。

「下に降りよう」

天窓の側、我々の『馬車小屋』キャビントップは小さな長方形の側窓が付いている。我々は左舷側の窓を綺麗に拭いて、ソファアーに膝をついて何が起こるか見ていた。

汽船は外輪を後進させ我々の船を、甲板排水溝までローリングさせる程の水を跳ね飛ばした。乗客は非常に少ない様だったが、定期船が栈橋に横付けされる間、誰もが『ダルシベラ』を見ていた。デッキの前の方には何人かの籠をもった行商の女、郵便配達、ホテルのウェイターかも知れないひよろひよろした女がいて、後部デッキに

はコートと柔らかいフェルト帽の男が、二人並んで立っていた。

「あそこだ」とデイヴィスは、緊張した囁き声で言った。

「背の高い方だ」

だが、背の高い方は、デイヴィスが言った時に、急に向きを変えデッキハウスの後ろに歩いて行った。私は瞬間、灰色の顎鬚あごひげとせり立つ日に焼けた額を葉巻の煙の後ろに見た。私は捻くひねれているかもしれないが、本当の処は、彼はどうでも良く、背の低い方の男に氣を取られていた。彼は手すりのところにいて考えぶかそうに、金色の鼻眼鏡越しに『ダルシベラ』を注視していた。血色が悪くしわのよった年寄りで、太い黒い眉と、白髪交じりの口ひげ、あごには真つ黒な藪やぶだ。鼻が最も特徴的で広く平らで、しわのよった頬との境が無い位に見える。鼻先は下に軽く曲がり、巨大な葉巻の方を向いている。それは我々の方を向いていて、今、発射したばかりの鉄砲のようである。悪魔のように悪賢わるがしこく見え、内側を向いて微笑んでいると言えるかもしれない。

「あれは誰だい？」と私はデイヴィスに囁いた。（囁く必要など無いのだけど、本能的にそうした。）

「知らん」とデイビスは言った。

「おい！ 船がバックし始めたぜ。あいつら上陸しなかった」

何個かの包みや郵便袋が投げ出され、瘦せたウェイターと二人の行商の小母さんが通路を過ぎると棧橋に立ち、通路はすぐに跳ね上げられた。私は一人か二人、他の人たちが、氣付かない間に上陸したと思うが、最後に、今まで見なかった男が前デッキに飛び降りた。

「グリムだ！」二人とも同時に叫んだ。

汽船は汽笛を鳴らし、後ろ向きに回転し停泊地に入り、去って行った。暫くすると棧橋に隠れたが、煙が北海の方に向かって示しているのを見ていた。

「これはどういう事だろう？」私は訊いた。

「街に近いどこか別の棧橋あるのだろう」デイビスは言った。

「上陸して、君の手紙を取りにいこう」

我々は、その朝、長く大変な身支度をして、棧橋まで漕いでいく間、お互い内氣になっていた。大分しわの寄った青いスーツに普通のカラー、そして茶色のブーツ姿だ。私はデイヴィスが、多少とも、まともな服装をするのは、この二年の間で始めて見た。例え、シーズンオフとは言え、当世風の海水浴場では配慮が必要である。

それに我々は友達を訪問するのだ。我々はデインギーを鉄の梯子につなぎ、棧橋の上から、昨日の晩の尋問者が『港湾長』と書かれた小屋の戸口の前で煙草を吸っているのを見つけた。簡単な挨拶の後、汽船の事を訊いてみた。答えによると、今日は土曜日で、ユイストに向かったと言う。その他、ホテルはあるかい？『四季』がまだ開いているとか…。

「ユイストだって！」歩きながらデイヴィスは言った。

「何故、あの三人はユイストに行くんだ？」

「僕には明白だと思えるけど。かれらはメンメルトに行く途中なんだ」

デイヴィスは合意し、僕たちは懐かしそうに西の方、海の上のわら色の縞を見た。

「何かの会合か？」デイビスは言った。

「そう見えるね。多分『コーモラン』もこの辺に停泊しているよ」

港の一番端の方、ガリオットの群れの一番外側にいるのを、直に発見した。二人の男が帆を直していて、僕たちは彼らの顔を良く見ておいた。

街は太陽を一杯に浴びているのに、墓場の様に静かで、癒しの光が遅すぎた死んだ蝶の様であった。豪華なカジノのある人気のない公園を抜けポーチコには椅子やテーブルが積み上げられていた。キオスクやカフェ、窓が板で塞がれた白い大きなホテル、市場、そして野卑で浅薄な処を抜けて郵便局に着いた。そこは開いていて、私は手紙の包みを受け取り、地元の時刻表を買った。それによると、汽船は毎日ノルダーナイ経由でボルカムまで行き、週に三回ユイストに寄る（天候が許せば）。今日の帰りの便はノルダーナイに七時三十分予定である。それから『四季』までの道を訊いた。

「君の原則がどうであろうとね、デイヴィス、僕たちは、金で買える最高の朝食を取るからね！これから今日、一日がある」

『四季』ホテルは北の浜辺に面した遊歩道の所にあった。期待に答える様に、照明されている看板に『冬季訪問客、身体障害者対応』などがある。大きなガラスに囲まれたレストランで、平穏な海が前に広がる中、最高の朝食を取った。ウェイターを下がらせ、長い香りのいいハヴァナ葉巻をくゆらせながら、手紙をのんびりと見た。

「いい外交手段を何と無駄にしているのか！」と私は最初に思った。非常に細かく見ても、何も開封された形跡は無い。勿論、細かく調べたのは明白なホワイトホールからの公用郵便である。（驚いたことに二通あった。）

日付の順に、最初の十月六日の手紙にはこうあった。『カルザース君。もう一週間延長してよろしい、敬具、…等』

二番目の手紙（『緊急』の印あり）は私の家の住所に送られたものが、転送されてきた。それは十月十五日付けで、その前の手紙の内容を取り消し、ロンドンに直ちに「戻れ」と言うものだった。『君の休みを短縮して申し訳ないが、大変忙しく、現在人手不足である……等』。事務的な追伸があつて、今後不在の時は、滞在先のもう少し正規で正確な情報を置いて行かれない、とあつた。

「残念だけど、この手紙は受け取れなかった！」と言い、デイヴィスに渡した。

「帰らないよね？」と、見ながら彼は言つたが、尊大な公用の紋章の下に、お偉いさんの手稿を見て、畏怖の色を隠さなかつた。そうしているうちに、封筒の隅に裏書を見つけた。『心配するな、チーフの空騒ぎだ。――』。

私は直ちに封筒を破り捨てた。

世の中には、内輪の神秘というものがあつて、それを明かすのは不作法で不忠、これは親友にも話せないのだ。その他の手紙については書く必要が無い。あるものに微笑み、ある物には赤くなり――今はとんでもなく遠い世界からの声である。その間、デイヴィスは海外新聞を熱心に読んでいて、一行一行、一字一字辿り、言葉の意味をいらいらしながら私に答えさせた。

「おい！」彼は突然言つた。

「いつもの事だ。あのサイレンが聞こえた？ 北の水平線に霧が発生、海岸に向かってゆっくりと、しかし確実に進んでくる」

「何か問題かい？」

「僕たちはヨットに戻る。霧の中に放っておくわけにはいかない」

戻りながら、多少の買い物があつて、必要な物の店を探している内にシュワンアレーに出たので、その位置を記憶した。

我々が港まで戻る前に霧はもう立ち込め、濃い塊となつて路を攻め上つてきた。幸いにもトラムの線が棧橋の入り口まで続いている。そうでないと我々は路に迷い時間を無駄にするところだった。時間は、現状では非常に貴重である。間もなく我々はディングーを繋いだ梯子への、ランドマークである港湾事務所にぶつかった。同じ事務官が現れ、包みを放り込む時親切に、とも綱を持っていってくれた。彼はどうして『四季』の歓楽街から戻ってきてしまったか訊いた。ヨットの面倒をみるためだよ、もちろん。そんな心配は無いよ、彼は反論する。霧の間は何の交通も無い。霧もこの時間に来てしまうと、居続ける。もし晴れたら、ヨットを見張つてやるよ。我々は感謝し、それでも船に帰る積もりだと言つた。

「もう、ちょっとさがすのが難しいよ」彼は言った。

距離は長くて八十ヤードであるが我々は科学的方法を使わざるを得なくなった。昨日の夜にデイヴィスが東の栈橋に接近するのと同じ方法である。

「栈橋から直角に漕ぎ出せ」彼はいった。

私はその様にし、デイヴィスは漕ぐ間に深さを、彼のオールで測った。二十ヤード出たところで、底を見つけ、それは浚渫された水道のこの時間、この場所の幅を示している。そして右に曲がり、泥の土手との距離を

取りながら、ゆっくりと前に進み（どんな事があるうとも、盲人が歩道を叩きながら歩く様に）、時々それからちよつと離れるというのを『ダルシベラ』が見えるまで繰り返した。

「半分は運だな」とデイヴィスは言った。

「コンパスも持つてくるべきだった」

我々は栈橋にいる男と大声を交換し、自分達が着いたと告げた。

「いい訓練になる、ああいう奴はね」船に乗り込むとデイビスは言った。

「第六感があるんだろ」私は言った。

「あの方法でどの位遠くまでいけるの？」

「分からない。もう一回やって見よう。ここで一日中静かにしていられん。この水道を探索しよう」

「メンメルトに行つて見たらいいんじゃない？」私はふざけて言った。

「メンメルトか」デイビスはゆっくりと言った。

「そうか！　そう言う手があったな！」

「おい待てよ、お前！　冗談だよ。死の十マイルだよ」

「もつとだ」デイビスは上の空で言った。

「そんなに距離は無いぞ——今、何時！　十時十五分、四分の一引き潮——何を話していたっけ？　昨日の夜、

計画をたてたよね」

彼を見ると、驚いた事に本気だ。私は自分の想起した方法の素晴らしさに大興奮した。彼の技量に対する信頼は、私の第二の天性となっている。この事の理屈をすぐに考えてみた、卓越性、完全性、機会、もし奇跡的にもこの機会を掴み使えたら。

何かがメンメルトで今日、進行中だ。我々の男はそこに行った。我々はここにいる、十マイル離れ、窒息しそうな、目隠しする様な霧の中にだ。我々がここにいる事は知られている――ドールマンとグリムが知っている、

『メデューサ』の乗組員が知っている、『コーモラン』の乗組員が知っている、棧橋の男が、気にしようがしまいが、知っている。しかし、彼らの誰もデイビスを、私の様には知らない。誰かこんな事を一瞬でも……？

「ちよつと待つて」とデイビスは言った。

「二分くれ」彼はドイツの海図を引っ張り出し、

「正確に何処に行ったらいい？」

（『正確に』！ この言葉は私を途方もなく楽しませた。）

「工事事務所さ、もちろん。これしかチャンスは無い」

「分かった、聞いて――ルートは二つある。ユイストを廻り外海を通り、そして南を回り込む――一番単純だが長距離だ。事務所はメンメルトの南の端にあつて、メンメルトは長さが約二マイルだ」

「それだと、どの位遠いのかね？」

「充分、十六マイルだな。そして僕たち殆どの航路を砕ける波の中、島の近くを漕ぐ必要がある」

「問題外だな。それにもし晴れたら何処からでも見える。汽船が通った道だ。戻る時に使う。僕たちは内側を砂の上を通つて行く必要がある。でも、僕は夢を見ているんかね？ その道を見つける可能性があるのかい？」

「あつても不思議じゃない。でも君は障害に気付いてないよね。時間と、引き潮だ。満潮は大体八時十五分。

今は十時十五分であの砂地は水から出ている。僕たちはゼーガットを横断して、あの杭のある水道を行く必要がある。メンメルトバリエだ。ぶつけると、そこで動けなくなる――インチも動けなくなる――そしてそこを過ぎたらあの『分水点』を遅くならない内に越える。これは怖ろしく酷い道だ、僕には分かる。ディングーでさえ両側の低い水を越えるのに一時間以上かかる」

「『分水点』まではどの位の距離なの？」

「何てこつた！ 何をしゃべっているんだ？ 着替えろ、着替えるんだよ、お前！ 着替えながら話そう」

（彼は靴や服を脱ぎ捨て始め、私もそうした。）

「その端まで少なくとも五マイル、曲がりをいれて六だ。一時間半、思いつきりボートを漕ぐ。チェックいれて二時間。身体は持つか？ 君が殆ど漕ぐからな。それから、さらに六から七マイル――多少楽だ。そして、それから――そこに着いたら何をするんだ？」

「それは僕にまかせろ」私は言った。

「君は僕をそこへ持って行けばいい」

「晴れたらどうする？」

「着いてから？ 良くない。でもそのリスクを取ろう。途中で晴れても、このルートなら問題無い。何マイルも島から離れている」

「どうやって戻る？」

「どうせ満潮になる、もし霧が続けば――霧の中、暗くても大丈夫？」

「暗くても、これ以上難しくはならん。コンパスと海図を見る光さえあれば。ビナクルランプの光を調整しよう――いや停泊灯だ。カミソリを取ってくれ、そして十分間何も言うな。その間に、考えて、そしてディングーに積んでくれ――（何てこった！ でも音を立てずに。）――何か食い物とウイスキー、ボートコンパス、測量錘、停泊灯、マツチ、小型ボートフック、引っ掛け錨とロープ」

「霧笛は？」

「要る。それと笛も」

「銃は」

「何のため？」

「鴨撃ちに行くんだよ」

「分かった。オール受けをぼろ布で消音だ」

私は、デイビスが海図を調べるままにした、そして静かに自分の仕事にかかった。十分後、彼は階段の処で僕を手招きした。

「終わったぞ」と囁いた。

「さて、行くか？」

「考えをまとめた、行こう」私は答えた。

私が比較した全ての得失を言葉に表した訳ではないので、これは単におおよそ正しいにすぎない。私を駆り立てたのは衝撃力であるがそれは一つの理由に基づく。多分、迷信じみたところがある。それは、この探索が霧の中

90 コンパスを見る時につかったランプ。

で始まったので、霧の中で終わるのも悪くは無い。

十一時二十五分前に音もたてずに漕ぎだした。

「船の流れに任せよう」デイヴィスは囁いた。

「潮が栈橋を通過させてくれるよ」

我々は『ダルシベラ』を離れ、ヨットは見えなくなった。それから五分程話しも動きもせずに居て、栈橋の杭を通る潮のガラガラという音が近づき、過ぎて行った。

デインギーは動いていない様に見えた。空中の気球が、空気の流れに押されているのに、乗っている者には、雲に対して止まって見えるのと同じだ。実際は我々にはリフガットを抜けてゼーガットに入って行った。デインギーは軽い水の盛り上がりで、揺れる。

「今から、漕げ」とデイヴィスはひそひそ声でいった。

「大きなストロークで安定に。特に安定にだ――両方の手に等しく力を入れて」

私は船首の腰掛に座り、彼は向かいの船尾シートに腰かけ、ちょうど差し向かいだ。左手は後ろにあり、舵を握っている。右手の人指し指は膝に置いてある小さな四角い紙を押さえている。これはあのドイツの海図から切り取った一部だ。僕たちの真ん中にある、ボートの中央の腰掛にはコンパスと時計が置いてある

これらの三つの物――コンパス、時計、海図――の間を、彼の眼は忙しく移動した。時々、私が一定の速度を保っているかチェックするため、舷側の飛び散る泡を鋭く見る以外は、見上げもしなければ、外も見ない。

私の義務は彼の自動人形となる事だ、つまり人間推進装置でその回転数は航海士によりチェックされ、データとして使用される。私の腕はツインプistonの様に定速で無ければならない。腕のエネルギーは汽船の様に制御される。それは実現が難しい理想状態だ。複雑な人体は全て、神が与えた感覚に頼ろうとし、感覚（私の場合視覚）が役に立たないと、機械的正確さを保つのが難しい。最初は一定間隔で『左』『右』という言葉が、舵の立てる泡の音と一緒に聞こえてきた。

「これじゃ駄目だ、舵を使いすぎだ」デイヴィスは見上げずに言った。

「漕ぎながら聞いて。コンパスが見えるか？」

「前に行く時見える」

「時間を掛けて、慌てるな。だが前に来る時、いつもよく見ろ。コースは南西、半西だ。君は反対を読む。北東、半東だ。そして船尾をそれに合わせろ。ラフだが舵が楽になる。そうすると、僕の手が必要な時使える」

私は彼の言う通りにした。大変だったが、進行は段々とスムーズになつて来て、彼は全く話す必要が無くなった。今は、左舷の遠くの方から、シチューなべが立てる優しいところと言う様な音――これは波の碎ける音だ――とオール受けのきしむ音のみだ。一度静寂を破って「すごく浅い。右のオールが砂に引っ掛かった」と言ったが、「話すな」とデイヴィスは言った。三十分ほど経つと、彼はもう一つの作業の音を加えた。

錘が一定間隔で「ぽちゃん」という音を立て、紐を引っ張っている時は尻で舵を取った。最初は紐が少ししか出ていかなかったが、それは更に減った。再び底をうった。横を見ると海藻が見える。突然、彼は深い測定値を得た。ディングーは浅い水が小さなボートにいつも引き起こす抵抗から、自由になり前の方に勢いよく飛び出した。同時に私はスムーズな表面の泡の様子から強い潮流に入つたと分かった。

「ブーゼティーフ」とデイヴィスは呟いた。

「強く漕いで、そして時計の様に安定に」

百ヤードかもう少し、私はオールに屈みこみ船の速度を上げた。デイヴィスは六尋の計測値を得ていたが、突然深くなった時の様に水は砂洲になり――十、六、三、一、ディングーは座礁した。

「結構！」デイヴィスは言った。

「後ろに下げて！ 右だけを漕ぐんだ」

ディングーは回転し、船首をZZZZに向けた。

「両腕同時に！ もうコンパスを心配しなくていい。単に漕いで、命令を待て。ちよつと危ないのが来る」

彼は海図をどかし、錘を席の下に蹴り込んだ。水の垂れている紐の上に膝をついて、深さをボートフックの手元側を使って測り続けた。一フィート毎に印が着けてある太目の棒で、以前もこういう使い方をした事がある。すぐに私は、『危ない』ところに到達したのに気付いた。ディングーは猟犬が臭いを嗅ぎつけ歩き回る様に、急に向きを変え、回転した。

「止める」彼は突然言った。

「引っ掛け錨を投げろ」

私は言われる通りにして、流れて少し揺れながら、流れに乗った。デイヴィスは方向をコンパスで確認した。それから三十秒程、考え続けるだけだった。私が最も驚いたのは、彼はこれまで、一瞬とも霧の中を覗かなかつた事だ。無駄な動き（視界は半径五ヤード程度）だが、私には、漕いでない時、そうしないでは居られなかった。彼は決心し、我々は再び進み始めた。今度は真つすぐで矢のように早くだ。水はボートフックよりも深い。彼の顔から、

何か危ない方法を取っているのが分かった。その成否はボートのバランスに……。再びボートが泥に接触、芸術家の喜びが彼の眼の中にあつた。すこしバックし、西に向かった。ようやく彼は霧の中を見つめ始めた。

「あれだ！」とうとう彼は言った。

「オール停止」

普通の、上向きの杭が霧の中から音も無く現れ、彼はそれを掴んでディングーは止まった。

「三分休憩。中々いい時間だ」

十一時十分だった。私はビスケットを少し食べ、ウィスキー一口飲んだ。デイヴィスは次の準備をしていた。

我々はメンメルトバリエの東側の流出口まで着いた。ユイスト島の裏側を東から西に流れる水道だ。ユイスト島はメンメルトの南端とは直線で結ばれる。あの時は、どうしてそこへ着けたか理解出来なかった。読者は海図の点線と私の物語を比べれば分かるだろう。簡単な説明を付け加えておこう。デイヴィスの方法をいうのは、まずブーゼティーフと呼ばれる水道を横ぎって、反対側まで行く。ここはメンメルトバリエの流出口の南側（潮流が北向きに流れる場合での視点）から、離れた点だ。そして北に戻りながら出口を探す。『危険な点』はイツツェンドルフフラットが深く食い込んでいるために発生する。広い口を持った行き止まりとなる処で、デイヴィスはバリエ自身と、危うく間違えるところだった。あれほど深い窪みの縁に沿っていく時間は無く、上側の唇を見失う危険を犯しながら、それを全速力で横切ったわけだ。見失えば、外海に流される（小さな誤差が蓄積するため）、あるいは縁に沿って迷い続けることになる。

次の三マイルは全行程の内で一番きわどい部分だ。そこには『分水点』があり、長さも深さもはっきりしない。さらに全航路の急所、つまり水路が分岐する場所がある。我々は西に向かう枝流を取るが、他の流れは北西に向かう。今は時間との勝負になる。そして急所を乗り越えなければならぬ。さらに分水点を越すまでは潮の流れは進行方向と逆だ。潮の流れは一番大変な時で、浅すぎてショートカットが出来ず、水道の土手の位置を示すには深すぎる。また、曲がり方が細かいのでコンパスも役に立たない。

「休憩終わり」とデイヴィスは言い、我々は進んだ。

杭はこれからずっと右側にある筈だと、安心した気分になっていた。我々の右側だ。経験から知ったが、全て水道は海岸と島に並行に流れ、杭は水道の北側に等間隔に配置してあった。デイヴィスほど自信のない者は、この杭を疑いなく信じ、一つの杭から次へと手探りし、貴重な時間を費やす訳だ。だがデイヴィスは我が友『杭』を、

奇行を含めてよく知っていた。そして自分の触った感触を優先した。これでいくら霧があらうと、問題は起こらない。もしたまたま見かければ、我々は水道のどちら側にいるかがわかる。しかし、少し進んでからは、この偶然得られる情報さえ犠牲にし、杭のない南側に移動、深さを測りながら、言わばイツツェンドルフフラットを手すり代わりにして舵を取った。後に彼は、こうせざるを得なかったと言った。『危険な点』を考えると、そこでは杭によるラインが集中し、取返しのつかない間違いを犯す危険があったのだ。我々が進んでいる枝流は南側のもので、それは南側の土手を使うことを意味し、杭による目印は危険な点を通り過ぎるまでは無くなる。

一時間の間、我々の緊張は頂点にあった。私は肉体的に、彼は精神的に。私は、小さなチェックが頻繁にあるため、安定したオール動作が出来なかった。右のオールは泥や海藻に引っ掛かり続け、逆向きの砂洲による流れが、進行を妨げた。一度など、二人とも泥の中、ディングーの横に立って押し続けた。そしてまた、まごまごと進む。私は霧のため混乱し、時間や場所が分からなく、感覚のない操り人形がリズムもメロディーも無い狂った曲に合わせて、手足をばたつかせている感じだった。デイヴィスが座ったまま、右手をリズムミカルに前後に振り続ける姿は、私同様の狂った時計仕掛けの様だが、こちらの狂気は指図しながらしゃべるのだ。そしてボートフックを回転する様に振り回すると、私は熱にうなされて幻想を見る気がした。探りを入れている昆虫の触角、障碍者が廻す歩行器のクランク、気の狂った登山家のストック。彼らは椅子にすわったまま、幻の『分水点』目指して、昇りつづけるのだ。

そんな気持ちの背後には、二つの強迫観念があった。『急げ』と『方向を間違えた』だ。後者についてはロンドンの霧の中のリンクボーイ⁹¹を考えれば分かる。そいつはいつも自分が間違えていると思う方へ行くのだ。私は一度デイヴィスに『僕たち反対向きに漕いでいる』と叫んだのを覚えている、私の左のオールが何かにぶつかっていたのだ。『馬鹿な！』とデイヴィスは言い、『渡り切った』。私は幻想だと思った。

だんだんと、私は正気に戻っていった。状況が良くなった為だ。悪風でなにもいい事はなく、潮のせいで、我々は完全に失敗するかも知れなかった。一つだけ助かったのは、潮が減るにつれて、水道が分かり易く明確になってきた事だ。そして、コンパスもボートフックもどちらも不要になり始めた。水道の泥の縁がすぐ近く、我々のいつも右側に見える様になってきたのだ。『危険な点』は遙か後ろに過ぎ、北側の縁を辿っていける様になった。後は力のある限り漕ぐことで、そうしないと川が干上がってしまう。

91 霧や暗い道で、歩行者の為に松明を持つ付き添い。

何と言うレースだったことか！ 全く、ホメロ斯的だ。人間と神々との戦い——神と言うのは自然の力の擬人化ではないか？ 例え『引き潮の神』がオリンポスの神の中にいないとしても、彼は強力な神なのだ。デイヴィスは自分の位置から動き、オールを漕いだ。我々の合わさった力でディンギーは目覚ましい速度で、横の土手に波を放りつけながら進んだ。私の手の平は、布で保護していたにも拘わらず豆だらけで傷んだ。ペースは私の力と息を上回った。

「休まないで持たん」私はあえいだ。

「大変なのは、もう終わったと思うよ」デイヴィスは言った。

我々はディンギーを完全に止め、彼はボートフックを横の泥に刺した。それはゆっくりと船尾に移動していった。私の混乱した頭でさえ、その意味が分かった。

「三フィートで、流れは順方向だ。充分流れに乗った」彼は言った。

「僕が漕ぐから、ちよつと休んで何か食えよ」

一時数分過ぎで、我々には、彼の計算だと、まだ曲がりを入れて八マイルある。

「でも、それは単に筋力の問題だ」と彼は言った。

私はデイヴィスの言葉を信じ、タンとビスケットを食った。筋力については、我々どちらもコンディションは良くない。彼はまだ元気だが、私は気落ちしていて、それは発作的に出した力が、あの死に物狂いの力走になったただだからだ。霧については、一回以上薄く、僅かに明るくなって晴れそうに見えたが、その度にまたキルトの様に厚くかかった。

『二回目の休憩』と記してある点（デイヴィスいわく、大体ただしい。）と、そこから西に向かう水道の航路に注意して欲しい。そこから広く、深くなつて行き大河の様になつて行くのが分かるだろう。そしてそれは最後にはエムズ河口へと合流する。さらに、北側の境、今は水面上のノルトランドサンドの端は、一個所中断があるだけでメンメルトに繋がり、ずっと杭が打つてある。すると、なぜデイヴィスが後の問題を軽く考えたかが分かる筈だ。彼が見せた芸当に比べれば、子供の遊びの様なものだ。彼はいつも、杭から眼に見える余裕を取るが、疑問を感じたら近づく訳だ。実際——点線を見て欲しい——彼は、それから二回、大胆に離れている。一度目は単に時間を節約するため、二回目は、一部は時間だが△と記してある、面倒な場所を避ける為である。そこは杭の打った川と、自分が作る三角州が平らな土手を遮っている。

この最初の離脱の時——短いがもっとも素晴らしい——彼は僕に漕がせてくれ、自分は航路の微妙さに没頭していた。二回目の時と、一回目と二回目の間、彼は時々海図を見るため中断しながら自分で漕いだ。我々は長い、

計算されたストロークに変え、早い速度で進んだ。この間殆ど一言も話さず、平らな水面を大きなストロークで抜けた後、デイヴィスが突然言った。

「さあ、どこに着けよう？」

砂山が目の前にあり、頭には杭が一本刺さっていた。

「ここはどこ？」

「メルトから四分の一マイルだ」

「何時？」

「大体三時だ」

第二十二章 クアルテット

彼の離れ業は成し遂げられた。そしてその瞬間、何か虚脱状態の様になった。

「一体、何のためにこんな処に来たんだ？」彼は呟いた。

「ちよつとめまいがする」

私は彼にウイスキーを少し飲ませ、それで元気になった。そして嘔きながら、幾つかの点について決めた。

私一人だけ上陸する。デイヴィスは一人では行かせないとこれに反対した。彼の常識とは非常に反するのだが、世間一般の常識がこれを決めた。二人は一人より見つきり易い。私はドイツ語が良く分かる。もし誰何されたら、ぶつきらばうな言葉で誤魔化して逃走が可能かも知れない。私の毛糸のオーバーオール、海ブーツ、オイルスキンコート、暴風雨帽を目までかぶれば、霧の中ではフリースラント人に見えるだろう。デイヴィスはディングーを見張っている。だがどうやってディングーに戻ろうか？ 砂の端を辿って自分だけで何とかしようと思ったが、長い笛の音を聞いたなら霧笛を鳴らす事にした。

「ポケットコンパスを持っていけ」彼は言った。

「それを使わずに海岸から動くな。それを安定させる為、地面に置く。この地図の切れ端を持っていけ——便利になるかも知れん。だが、事務所が分からない事はない。どの位長くいる？」

「どの位時間がある？」

「潮が満ち始めた処だ——三十分位前から。あの砂地（彼は眼で示した）は一時間半後には沈む」

「それで充分だろう」

「あまり走るな。この辺は急だからな。向こうの方は緩くなるかも知れん。歩いて水を渡り始めたら、絶対僕が見つからないからな。大騒ぎをするはめになる。時計、マッチ、ナイフを持っている？ ナイフを持っていない？ 僕のを持っていけ。ナイフ無しで絶対どこかに行くな」（彼の海員としての常識だった。）

「ちよつと待つて。僕が遅くなつて、ここに来れない時に会う場所を決めておこう」

「遅れるな。我々がいないのが知れる前にヨットに帰るんだ」

「でも、僕は隠れて暗くなるのを待たないといけないかも——霧が晴れるかも知れない」

「僕たちは、こんな処に来て、馬鹿なんだろうな」デイヴィスは陰気に言った。

「ここみたいな場所には、落ち合う処なんて無いんだよ。地図で見る限り、ここが最高だと思いがね——大きな

三角形の標識灯の記しがメンメルトという字の上に書いてあった。

「そこを通っていくよ」

「分かった、行くよ」

「グッドラック」デイヴィスは微かな声でいった。

私は踏み出すと、ぬかるんだ緩い坂を五、六フィート昇り、硬い濡れた砂地に着いた。左側にバリエのゆっくりした波の音を聞きながら歩き始めた。カーテンが僕とデイヴィスの間に降り、私は一人だった——一人、だがしっかりと砂地を足の下に感じ、ぞくぞくした。それは乾いた土地に繋がり、どこで、何が起ころうとも、私は自分の気転を最大限に使うのだ。霧を切り裂いて元氣よく進んだ。

あれはなんだ？　すぐに立ち止まり、聞き耳を立てた。左側の海の上から、霧でこもって、しかし耳にははっきりと三回の、ベルか銅鑼の二回打ちが聞こえた。時計を見た。

『船が錨を下ろした』と自分に言った。『午後の見張り時の六回のベル』。バリエはここでは深い停泊地だと知っていた。東エムズに入る船が、霧を避けるために停泊するのは充分ありうる。私が再び歩き出そうとすると別の音が同じ位置から聞こえて来た。今度はラッパの音である。そして分かった——軍人のみがラッパを吹く——それならブリッツがここに居るのだ。それに極めて自然だ。私はそう考えて進んだ。砂は乾き、私から海は遠ざかった。黒い海藻のリボンがあった——満潮の印だ。

右に何歩か注意深く歩くとマラム草の茂みに触った。ここがメンメルトだ。地図を取り出し、記憶を確かめた。間違える筈が無い。左に海を見て右に向かつて進まないといけない。海藻のリボンに沿って、それを見ながら草の端を音を立てない様に歩いた。突然、私は大きな鉄の棒に躓くところだった。気持ち悪いポリプの様に、錆びた鉄の棒が、私の上と周りに出現した。

『一体これは何の蜘蛛の巣だ？』と考え、それをよけた。私は強大な三脚の基盤のところに迷い込んだ。不気味な脚は支柱で固定され、さらにお互い同志も補強されている。天辺は霧で見えない。標識灯を思い出した。

百ヤード先に進むと、私は再び膝について必死に聞き耳を立てた。どこから小さな音が聞こえる——声、ボートの竜骨のギーギー言う音、口笛のメロディー。これらは真つすぐ前から聞こえる。少し左にそれる、海の方だ。汽船がいる証拠の音を聞いた——小さなものだ、蒸気のもれる音が小さい。右の方からは何もまだ聞こえないが、そこに事務所がある筈だ。

私は自分の基地から攻撃する準備をし、コンパスを地面に置いた――*ZZZ*。大体のコースを決めた。（『南―東―南―東と帰る』。私は子供が勉強する様に繰り返した。）それから私の二つの味方の一つを放棄した―海だ。そして霧の中を進んだ。

『これはゲームだ』自分に言った。『誰も来るとは思わない。誰も自分を知らない』

急いで十ヤード位進んだ。草が無くなり柔らかい砂に変わった。至る所に足跡がある。障害物が現れたので注意深く進んだ。錨、積み重なった錆びたケーブル。そしてボートの底が上向きになり、その上に汚いミアシヤムの⁹²パイプ。ここで立ち止まり耳をそばだてた。色々な方向から音が聞こえる。同じ口笛（今は私の背中）、思い足跡が前方に、そしてどこか離れた処から―五十ヤード先と感じた―喉にかかる声の会話。同じ方向から、つんとする安物の煙草の臭いがして来た。ドアが音を立てた。

私はコンパスをポケットに入れた（『南―東、南東』と考えながら）、パイプを歯の間に挟んだ（うう！ 酷い臭いだ！）、暴風雨帽を深く被^{かぶ}つて、音のしたドアの方に前かがみに進んだ。前の方で、「カール・シッカー」と呼んだ。私が足音を聞いた男が、近づく「カール・シッカー」と言った。私も、背を向けながら「カール・シッカー」と出来るだけ粗野に、喉から声を上げた。足音は私のすぐそばを通り抜け、肩越しに一瞥^{いちべつ}すると、私によく似た服装の、しかし暴風雨帽ではなくアザラシ皮の帽子を被った若い男だった。歩いている時にコインを手の上で数えている様だった。海岸から呼ぶ声が聞こえ、口笛は止んだ。

私は皆の通り道にいる事に気付いた。ここで会うのは危険がともなう。私は不安を感じながら脇へ寄った。通路は話し声と、ドアの開け閉めの音の方に通じるが、私にはこれだけが事務所に関しての案内だ。

突然、そして私が想定していたよりもずっと早く、目の前に壁があるのを、見る前に、感じた。見ると、トタン板で囲んだ低い建物の側面だ。偵察するために立ち止まるのは絶対必要だ。しかし話している連中は私の足音を聞いたかもしれない、どんな事があっても不審者が手探りしていると思わせてはならない。私はマツチを擦り―二本―重々しくパイプを吸い込んだ（私は工夫がこうするのを見たことがある）。そして、音を頼りに壁の様子を探った。煙草のかすがパイプに突き刺さっていて、酷い臭いの煙が出て来た。その時ドアがボタンと言った。他の名前―

92 海泡石。パイプの材料によく使う。

忘れてしまった―が呼ばれた。長方形の建物の端にいと考えた。アルダーシヨットのバラックの様なものと想定した。ドアは私の左側の角にある様だ。何人もの男達が集まり、一人づつ入って行くのだろう。音を立てて唾を吐き出すと、右側に向かってトタンの壁沿いに歩き、角を廻り、ゆっくりと進んだ。途中には、生活に必要な表示が見えた。洗濯たらい、水桶そしてタイルの張つてある、開いたドアへの通路。私は二番目の建物の角に気付いた。同じ様にトタン張りで、最初の建物に並行、こちらの方が高そうだが、軒までしか見えなかった。ここを曲がって、もつと価値のありそうな部分を探ろうとしていた時、最初の建物の窓が、私の前の方で開くのが聞こえた。

残念ながら、私の言い方が曖昧になってしまっている。そこでその場所の概要を図にして示そう。一部は見たが、他は想定である。(A)は私が開く音を聞いた窓。そこからは手が突き出すのが霧の中で見えただけで、なにかを放り出したようだ―煙草の吸い殻か？ 手は綺麗で、金の指輪をしていたが、瞬間見えただけで引っこ込み、窓は閉められた。

私の図はある視点からは、はっきりしている。窓はドア(B)と同じ部屋に付いている。それはドアが開き閉まったのを私の向かい、建物の反対側に聞いたからである。私は、あの部屋を覗いたら興味深いだろうと気付いた。『ゲームをするのだ』と自分に思い出させ、数ヤード、忍び足で戻った。そして、何食わぬ顔で、あの酷いパイプを吹かし、中をゆっくり覗きながら落ちて通る過ぎた―中にいる連中は誰も私を気にしていないのがわかり、さらにゆっくりと覗いた。

私が想像した通り(霧と時間から)、中には人工的照明があった。私の記憶写真はこんな感じだ。小さな部屋でワニスで仕上げた縦の壁に事務所風のしつらえ。右側の隅には経理部で使う様な机。グリムが高いとまり木に、横顔を私に見せ、金を数えながら座っている。向かいには頑丈だが、ぎこちない感じの、海員の服を着て潜水用ヘルメットを持った男がいる。部屋中央には縦の机でその上には何か大きくて黒い物が乗っている。机の近くには私に背を向け、顔を机と潜水夫に向けた二人が、だらりと椅子に座っている―フォン・ブリューニングと禿げた黄色い頭の老人(疑いも無く、汽船で来たドールマンの連れ)。他の椅子、背を窓に持たせかけて、ドールマン。

それがシーンの主要な構成だ。細部については、再度の探索が必要だった。身をかがめて私は、猫の様に窓の下ドールマンの椅子の後ろあたりまで、そつと戻って来た。そして非常に注意深く頭を上げた。私が心配したのは、

⁹³ Aldershot。ハンプシャーにあるイギリス陸軍発祥地。現在は、博物館がある。

部屋の中のたった一つの眼である。それはグリムの眼で、遠くの方にいるが、私にほぼ向き合っている。私は、すぐにグリムの眼がドールマンの背中に隠れる位置を取り、そして注意して見始めた。そうしている内に冷たい汗が額に浮かび、背筋がぞくぞくするのを感じた。恐れや興奮のせいではなく恥ずかしさからだ。と言うのは、疑いも無く誠実なサルベージ会社の会議を覗いているのだ。支払い日で、取締役が仕事の成果を受領しているだけで、それが全てだ。

ドアの上には帆を張った、二層のデッキをもった軍艦の古い版画があり、壁には海図と軍艦の建造図がピン止めしてある。難破した船の遺物が沢山ある。ストープ上の棚には錆びに包まれた大砲の玉の小さなピラミッドがある。壁のあちこちには腐食した旧型のピストルと六分儀の一部らしい物が釘で止められている。部屋の隅の床には小さな古錆びたカロネード砲と砲架一式がある。床はに材木の山があり、薪では無く、まぎれもない難破船の部材で、沼に埋もれた木のように真つ黒で、長年の泥があちこちに着いている。しかしこれらは、どうでもいいもので、私を驚嘆させたのは材木の山では無く、その切れ端の様だが、彫刻を施した材木で幾つかのおおきなボルトが付き、机の上に乗っているものだ。明らかに強い興味の対象となっている。

潜水夫が現れ、身振りで文句を言っているのが分かる。フォン・ブリューニングとグリムは反論しているが、潜水夫は何度も首を振った。ようやく型をすくめ、敬礼すると部屋を出た。彼らの動きを見て私は頭を頻繁に下げたが、だんだん自分が見つかるかどうか、意に介さなくなる所だった。自分の理論の弱い処が全て集まって来ている―ベンザーシールでのデイヴィスの反論、ドールマンさんの無邪気な話し、ここに容易（相対的に）に到着出来たこと、越さなければならぬフェンスが無かったこと、こじあける鍵もなかったこと、ドールマンや彼の友達、グリムがメンメルトに行くのが誰でも分かること、そしてこの支払いという日常仕事を見た事だ。

数分の内に私は疑問の深みから懐疑の深みへと沈み込んだ。私の機雷や魚雷、潜水艇は何処にあり、そして帝国の陰謀の主は何処にいるのだ？ 結局金塊がこのさもしいミステリーの大元なのか？ ドールマンがは唯の普通の犯罪者なのか？ 積み上げてきた証拠の山は揺れ動き、その上の私は揺れ動いている。『馬鹿になるな』、か細い理性の声が言った。『四人いるだろう、待て』。

さらに二人の従業員が次々にやって来て、給料を受け取った。一人は火夫、もう一人はやや偉そうでタグボートの船長といった処か。後者との間で難破材について別の議論があり、この男も、結局肩をすくめることになった。彼が部屋からでると、集まりは終了と見えてグリムは台帳を閉じ、私は膝について小さくなった。椅子の並べ替え

が始まったからである。同時に、建物の反対側から、私に男達が海岸の方へ、話しながら、つばを吐きながら去っていくのが聞こえた。

すぐに誰かが部屋を横切つて私のいる窓に歩いてくるのが聞こえた。酷い落胆をしながら、四つん這いのまま、こそそこそと逃げ、立ち上がつて壁にぴたりと張り付いた。安全になったらすぐに、南東の方に、こそそこそと逃げだすつもりだった。だが次に聞こえた音が電気ショックのように私に突き刺さった。それはカーテンリングが擦れる金属音だった。

考えるよりも早く、私は元の位置に戻り、木綿のカーテンから覗ける位置を探した。それは一枚布で、隙間もない。しかし、真つすぐにかかつておらず、何か、人間の肩の様なものに押されて私の方に膨れていた。ドールマンだー前と同じ位置にいた。私は何を言っているのか殆ど聞こえず、気も狂わんばかりだった。かれらは別にわざと小声で話しているのでは無くー内輪の話をする時の普通の話し方ーガラスとカーテンが言葉を消してしまっていた。それでも、私はその内、概要が掴めて来た。フォン・ブリューニングの声ー彼の声だけ以前、聞いたことがあるーはすぐに分かった。彼は机の左にいる。そしてドールマンの声は彼の位置から分かった。三番目は厳しいしゃがれ声であの年老いた紳士、分かり易くするため、早すぎるのだがベーメ氏と呼ぶ事にする。それはグリムの声としては歳を取り過ぎていて、権威の響きを持っていた。それに厳しい質問の時に聞こえてきたのだ。三つの文が全部聞く事ができた。「それはいつだ?」「それ以上行かなかったのか?」「それと「長すぎ、問題外だ」である。ドールマンのは、一番近いのに一番聞き取れなかった。

声は頑固で単調だが、背中のカーテンの妙な動きは何だろうか? かれの手は後ろにあり、カーテンを掴んだり、捻^{ひね}つたりしているのだ。「居心地が悪そうだね、我が友よ」と言うのが私のコメントだ。突然、首を後ろに反らしーカーテンの膨らみで分かったー私が全部聞き取れる大きな声で言った。

「分かりました、今日の夕食に彼らに会わせましょう。二人を招待しましょう」

(私が、慌^{あわ}てて、時計を見たとしても驚かないだろうー私が述べた事を書くには時間がかかるがーだが時間は未だ四時十五分前だった) 彼は何か霧の事を付け加え、椅子が軋^{きし}んだ。急いで屈むとカーテンリングの音が聞こえ、「まだ濃いままだ」というのが聞こえた。「君の報告だ、ドールマン君」とベーメは短く言った。ドールマンは窓を離れ椅子をテーブルに近づけた。他の二人も引き寄せ、テーブルについた。

「チャタム」とドールマンは行先でもアナウンスする様に言った。それは鋭い音で始まり、聞きやすい単語だ。

どの位私が驚いたか想像出来るだろう。『先月、君が行ったところだ』と自分に言った。地図が、がさがさ音を立て私は彼らがその上に居んでいるのが分かった。ドールマンは何かを説明した。しかし、私の我慢の限界が近づいていた。何の言葉も聞こえて来なかったのだ。地面に座り込んで、何かいい手は無いか考えた。ドアの所に忍んで行つて見るか？ 危険過ぎる。屋根に昇つてストーブの排気孔から聞くか。やかましいし、そんなこと出来る訳がない。窓の上半分に付いている金具を試して見た。これは垂直に動く、二つの窓の内ですぐに容易な方だ。駄目だ。ゆっくりと押して見たが動かないし、力を入れすぎると突然動くだろう。デイヴィスのナイフを取り出し、刃先で窓枠と外枠の間に隙間を作ろうとして――駄目だ。しかしナイフは海事用で大きな刃先とマールンスパイク⁹⁴が付いている。

この時、中のドアが開き、そして閉まった。私の右の隅の角の方に近づいて来るのが聞こえた。私は一刻も無駄に出来ないとは思つたが、並行して建っている大きな建物の角を廻つて静かに立ち去った。(深いフリースラントの土に感謝。) 誰か、私には見えない男のブーツが、タイルの音が響くまで通り過ぎ、板に反響した。『グリムが自分の部屋に入った』と推量した。貴重な時間が過ぎていく――五――十一――十五。部屋にずっといるのか？ それに分からないと戻れない。十八――彼は部屋から出て来る！ 今度は私は男が過ぎた処で、大胆にすぐ、以前の所に向かった。姿ははっきりとは見えないが、抱えている白い紙が光った。彼は再び以前の部屋の中に入った。

今ようやく私は、懷疑^{かいぎ}的になったのを克服^{こくふく}したと感じた。『もし、これが重要な秘密会議なら、どうして歩哨^{ほしやう}を置かないのか？』 答えはたった一つしか無い――彼らだけの企み。我々がこれまで会った皆の様に、従業員たちも何も知らないのだ。このサルベージ会社(大した知恵を使つてないと思つた)の本当の目的は秘密会議を開く口実を作るためなのだ。『何故カーテンを降ろす？』 地図があるからだ、間抜けめ！

私は窓の所に戻つてきた。だが低い単調な秘密の話は、全く聞こえない。しかし、諦めるつもりは無かつた。幸運と霧が私をここへ持つてきたのだ。状況の連鎖により、この四人の男から秘密を^{たたか}聞い取る意志と機会を持つ、多分たった一人の男なのだ。

マールンスパイクだ！ 下の窓枠は敷居の浅い窪みに落ち込む。私はナイフの先を、窓枠と敷居の隙間に差し込んで、ゆっくりと力を増していった。ナイフが^{こじ}挺になるので、何分の一オンスという力の加減ができる。

94 先が尖ったもので、ロープをほどく時などに使われる。

窓枠は殆ど抵抗無しで持ち上がり始め、気が付かない位の高さずつ動かし、窪みまで、それから更に半インチ上位まで持ち上げた。これは、中の声にはっきりした効果があり、ピアノのソフトペダルを離れたようである。支点の都合でこれ以上持ち上げられないが、私はこれ以上の賭けを止め、自分の手で得られたものを使うのだ。

湿った敷居に頬を、耳を隙間にくっ付けたところで、また希望が沈み込んだ。我が男たちは書類を見ながら――紙を触る音がした――机の廻りに集まっていた。ドールマンの報告は明らかに終わっていた。それにどうせ彼の声は良く聞こえない。グリムの声は時々、フォン・ブリューニングとベームの声はしょっちゅう聞こえる。前と同様、後者のみがか理解できる言葉となって聞こえる。残念ながら、この作品の悪役どもは、ドラマチックな効果や私の興味など、全く考えていない。彼らのよく知っている内容に没頭し、ほのめかしたり、省略したり、そして決まって技術的なのだ。聞き取れた沢山の言葉を私は知らなかった。残りは、大体の処、アルファベット、統計的数値、深さ、距離そして一、二度は時間である。アルファベットは頻繁に出てきて、私に理解出来る限り、暗号のキーとなっているらしい。それに関連する数値は殆どが小さく、小数点が付いている。最も私をやきもきさせたのは、普通の名詞の少なさだ。

私が聞いた事を読者に報告するのは不可能である。余りにも混沌としていて、私の記憶にも印象が残っていない。私に出来るのは、どんな切れ端が残り、不明瞭な分類をしたかのみである。文字はAからGまでで、私の一番よく分かった、連続した情報はベームが書類を早く読んだ時のものだ。文字に注釈を付けながら、Gから逆向きに、以下の様に言ったと思う。

『G…完了』『F…悪…1.3(メータ?)…2.5(キロメータ?)』『E…三十一…1.2』『D…三週間…三十』『C…』等々だ。

別の時に彼はこのリストを、アルファベットだけ読み、グリムが簡潔に答えた――数値だと思うが確かでは無い。何分間か、ペンの走る音と、意味の取れない呟きしか聞こえなかった。しかし、この堆肥の山から、私は五つの真珠を拾い上げた――私が知っている四つの名詞と名前だ。名詞は『シュレップポータ(タグボート)』『ワッサーティーフェ(水深)』『アイゼンバーン(鉄道)』『ロツツェン(航海士)』。名前は、聞きやすい音の『エセス』である。

二、三回窓から離れ窮屈^{きゆうくつ}な首を楽にし、その度に時計を見た。時間との競争でここまで漕いできた様に、時間と

競争しながら、聞いているのだ。我々は夕食に招待される筈だ。だからその招待を受けられる時間までにはヨットに乗っていないといけない。霧はまだ濃く立ち込め、ずっと暗いまま、しかもこれから更に暗くなる。彼らはどうやって帰るつもりだ？ どうやってユイストから来たのだ？ 我々は先に帰れるか？ 時間、潮と距離の問題——私には向かない面倒な計算だ——が本来他に向けるべき注意をそらしていた。4.20—4.25—今は4.30過ぎた。デイヴィスは土手は潮に隠れると言った時間だ。標識灯の処で待つ事になりそうだが、そこは汽船への道に余りにも近すぎる。そして時々は声が聞こえてくる。四時三十五分頃だろう、中からもう一度椅子を動かす音が聞こえた。そして誰かが立ち上がり、書類を集めて行った。他のだれかが、立ち上がらずに（だからグリムだ）ついていった。一分程部屋の中は静かだったが、その後始めて誰かが単純なドイツ語の話し言葉で、引つ掻く音もさらさらする音も無く言った。

「待たなければならんな」

私は考え待った。

「彼は来ると言い張っている」ベームが言った。

「アッハー！」（フォン・ブリューニングの驚きと抗議の声）

「私は二十五日と言った」

「何故？」

「潮の具合がいい。夜汽車だ、もちろん。グリムに用意させろ——」（フォン・ブリューニングの聞き取れない質問）

「駄目だ、どんな天気でもだ」

フォン・ブリューニングの笑いと幾つかの聞き取れない言葉。

「積載量半分、一つだけでいい」

「会うのは…？」

「駄だ」

「さて、霧の様子はどうか」

これで本当に終わりの様だ。二人の男は立ち上がり、足音が窓に近づいてきた。私はそれが持ち上げられると飛びのき、窓の音に隠れて、安全なところに戻った。フォン・ブリューニングは呼んだ、「グリム！」。窓が開いているため、私の通って来た道に戻るのには危険すぎると判断した。二つの内の大きい方の建物をを廻って行くしか無かった——果てしない距離に思われた——そうしている間に、コンパスで決めたコースの『南—東』も無効になって

しまうのが分かっていた。南京錠が掛かっているドアの前を通り、角を二回そして空虚な霧の中へ出た。コンパスを出して計算するため、安定させた。『これまでは南―東。私は東に離れた―東はもう来てるだろう』そして私は離れた。誤差は四点、草むらと深い砂を抜けて。

浜辺は私が考えたより大分先の様だ。私は心配になり、コンパスを何回が見て不思議に思った。そしてようやく迷子になった事に気付いた。しかし私には、再度探して、事態をさらに悪化させるのを避けるという理性はあった。そして二つの悪のうちの被害の少ない方、笛を最初は小さく、次に大きく吹いた。大きな霧笛の音が私のすぐ後ろで聞こえた。私はもう一度笛を吹き、命からがら走った。霧笛は時々鳴った。三、四分の内に私は浜に出て、ディングーに乗り込んだ。

第二十三章 戦術変更

一言も話さずに岸から離れ、浜辺から見えなくなるまで漕いだ。霧の中から、声が呼びながら近づいて来た。

「答えろ、ガリオットの振りをするんだ」デイヴィスが囁いた。

「おい。ここはどこだ？」私は叫んだ。

「メンメルト沖だ。何処に行く？」返ってきた。

「デルフツイル」デイヴィスが囁く。

「デルフツイル」私は怒鳴った。

錨を：で終わる言葉が返って来た。

「潮は東に引いている」とデイヴィスが言った。

「静かに座ったままだ」

もう何も聞こえて来ず、何分か流されていった後、デイヴィスが言った。

「どうだった？」

「手がかりが一つか、二つ。それから夕食への招待だ」

手がかりは後にまわし、招待の話が先だ。私はその緊急性について話した。

「彼らはどうやって戻る？」デイヴィスは言った。

「霧がこのままだと、汽船は絶対遅れるぜ」

「何も当てにできない」私は答えた。

「小さな汽船がああ事務所の近くにあった。霧は晴れるかも知れない。どれが一番速い？」

「この潮だと、ノルダーナイにコンパスを使って直線だな。土手の上には水があるよ」

彼は全ての準備をしていた、ランプは前もって点けてあり、コンパスはセットされ、我々はすぐに出発した。彼は船首側のオールを持った。そこは船首を制御しやすい。ランプとコンパスは我々の間だ。薄闇は暗闇に変わって行った――窒息する様な、糊のような闇だ――だが我々は、小さく息苦しい橙色の光の中に座り、揺り動きながら、道のない不毛の海を躊躇せず飛ばした。疲れと緊張を消すため、私は自分の手がかりを反芻し、聞いた全ての言葉の断片を記憶に刻み込もうとした。

「あの七文字は何なんだ？」一度デイヴィスに話しかけた。（△からの△まで考えて）

「ごめん」返事が無いのに気付いて、付け加えた。

「星が見える」が私の次の言葉だった、そして長い間をあけて

「見えなくなった。また見える！ 右の船尾の方だ！」

「あれはボルカムの灯だ」デイヴィスはやがて言った。

「霧が晴れ始めた」

西からの冷たい風が我々の顔に当たり、霧が来た時のように素早く、飛ばされていった。大きな塊が星のある天球から掃除された様に剥がれ、西の方は夕焼けでまだ明るく、月の出始めた東を赤くし始めた。ノルダーナイの灯台は前の方で光り、デイヴィスは小さな光のプールから、疲れた眼を離すことが出来た。「畜生！」この幸運に感謝してデイヴィスが言ったのはこれだけだ。私も全く同様だ。霧の中なら、ディンギーの中のデイヴィスは汽船と勝負できるが、晴れてしまつてはハンディキャップが無くなるのだ。

七時十五分前だ。

「一時間で帰れる、もし頑張れば」彼は二つの光から大体の計算をした後、宣言した。

彼は私に、必ず船尾に見る様にすべき星を指した。そして私は再び、ひりひりする手の平や、痛む腰に仕事を始めた。

「七つの何とかと言うのはなんだ？」デイヴィスは言った。

「この辺で七と言ったら何を意味する？」

「島だよ、もちろん」デイヴィスは言った。

「それが手がかりかい？」

「かも知れない」

それから最も不思議な、談笑が始まった。二人で覚える方が一人よりいい。私だけでなく、彼の記憶に早く記号を刻み込むほど、安全な記録となる。そこで息を出来るだけ節約するため、私の話を切れ切れに話し、彼の息切れの間の質問に答えた。そのため、私は星に惑わされずにすみ、二人は疲れすぎを忘れた。

「チャタムでスパイ、悪党？」彼はガラスを爪で擦る様に言った。

「どう思う？」私が訊いた。

「軍艦も、機雷も、要塞の話し無しか？」彼は言った。

「ない」

「エムズ、エムデン、ウィルヘルムスハーフェンも無しか？」

「ない」

「移送手段の話しも無し？」

「ない」

「結局――僕が正しい――と思う――何か――島の後ろの――水道に關した――話しだ」

という訳で、擦り切れた信念がよみがえった。私については、それとぶつかった言葉というのは、一番深く沈み込んでいたものだった。

「エセンスは、ベンザーシールの後ろの町だ」私は抗弁した。

「ワッサーティーフエ、ロツツエン、シュレップボーテ」デイヴィスは唾を飛ばした。

「キロメーターアイゼンバーン」これは私から、そして続いた。

こんな対話を書き綴ったなら、読者の呪いを受ける事になる。言わなくても分かると思うが、我々はじきに企ての中身はまだ謎のままだという事に気付いた。一方で、新しい臭いが沢山ある。そして疑問はすでに形を成し始めていた――この方向に進めるか、それとも昨夜の決定に立ち戻り、我々が取りあえず持っている武器で攻撃するのか？これは急いで決める必要がある。沢山の緊急の一番新しい奴だ――この忙しい日に、緊急というのに終わりが無いのか？緊急となる理由は私には分からないが、今夜の夕食までに準備完了とすべきなのは確かだった。

そうこうする内にノルダーナイに近づいた。ゼーガットを横切り、我々の下にある最後の潮に乗り、前方西側の栈橋に見える赤い光を見て、少しづつ力を弱めた。しかし私は休むつもりはなかった。機械的に身体を動かしている方がいい位に疲労していた。

「船尾に光」私は重苦しく言った。

「二つ――白と赤」

「汽船だ。だが南に向かっている」デイヴィスは言った。

「今は三つだ」

綺麗な宝石の三角形――トパーズ、ルビー、そしてエメラルド――我々の後ろに安定している。

「東に向きを変えた」デイヴィスは言った。

「頑張れーユイストからの汽船だ。いや、何だ！ 小さな。あれは何だ？」
我々は頑張り、汽船が追い抜いていくと宝石は輝きが減った。

「楽にしろよ」デイヴィスは言った。

「あの光を知っていると思うーブリッツのランチだー間違いないに漕いでいるのを見られない様にしよう。
港に向かってすこし漕げ。」

彼は正しかった。そして夢の中の様に、我々をベンザーシルから引っぱり出した、同じ小さな船が急いで
バタバタしているのが見えた。「僕たち、今度こそ終わりだ」と考えたのを覚えている。逃げ出そうという罪の意識
が強く、フォン・ブリューニングの『警察』という、古い言葉が私の耳に響いていた。しかし、船は追いつくと絶望
に沈む前に、さっさと行ってしまった。

「ボートの後ろに三人いた。どうしようか？」デイヴィスは言った。

「ついて行く」と言って、力なく漕いで見たが、櫂は水の上を滑った。

「もう少し待とう。どうせ遅れているのだから。もしヨットに行けば、僕たちは上陸していると考えよう」と
デイヴィスは言った。

「僕たちの陸の服装がー放り出してあるぜ」

「君、彼らと話ができるか？」

「いや、しかしやるしかない。少しでも疑われたらおしまいだ」

「オールをよこせ、君。コートを着るんだ」

彼はランタンを消し、パイプを点け、そしてゆっくりと漕いだ。私はその間、船尾に置いてある、たるんだ山に
座り、最後の意志の力を使って疲れた肉体から精神を解放しようとした。十分かそこで棧橋を廻ると、そこには
ヨットのマストが空に突き出していた。ランチもその横にいるのが見え、デイヴィスにそう言った。私は煙草をつ
け、情けない努力をしながら口笛を吹こうとした。デイヴィスも続けて『ホーム、スイート、ホーム』らしい
メロディーを発したが、彼は音楽は全くだめだった。

「おい、彼らは船に入っているぞ。キャビンに灯りが点いている」と私は言って、

「おい！ 誰だい？」と近づいた時に叫んだ。

「こんばんわ、皆さま」とボートフックでヨットを押しやりながら、水兵が言った。

「フォン・ブリューニング中佐のランチであります。中佐がお会いしたいと申しております」

我々が答える前に、『ダルシベラ』のデッキから『帰って来たか！』という声がして、ほの暗いなかに、フォン・ブリューニングの姿が、階段から現れた。下の方では何かバタバタしていたが、中佐は元氣な挨拶で殆ど隠しおおせる処だった。その間に階段がまた軋きしみを立て、ドールマンが現れた。

「デイヴィスさんかね？」彼は言った。

「やあ！ ドールマンさん」デイヴィスは言った。

「元氣でいらっしますか？」

我々はヨットとランチの間に浮かんでいた、と言うのを説明しておかねばならない。ランチの水兵がヨットを少し横に動かしたのだ。ランチの側灯は我々の頭の上で後ろにあり、緑色の光で斜めに『ダルシベラ』のデッキを照らしていた。我々とディンギーはその影に隠れていた。最も良く計算された条件でもこの、私がいつも恐れていた瞬間――デイヴィスとドールマンの会談――を好都合に確保する事は出来なかったろう。前者はオールを短くしたところはまだ船の中に座っていて、半分ヨットの方を見、彼の顔を見上げていた。彼の顔の特徴は後者には全く見えない、そしてあの容赦ない緑の光線は――人間の人間に与える素敵な効果をよくご存知だろう――ドールマンの顔をすっかり照らしていた。

それは私が始めて近くで見る明瞭な眺めで、ほんの短い間、デイヴィスの方に向けた微笑む緑と黒の仮面に、迷信的嫌悪けんおを感じた。私の背後にある陰鬱いんうつな気分にとってこれは贅沢ぜいたくな楽しみとも言えよう。

強い光の気まぐれの一つは、顎鬚あごひげと口髭くちひげを抹消、あるいは突き抜け、唇と顎あごの形を明らかにすることだ。そして特に微笑んだ時には、性格の欠陥を最もはっきりと現わしてしまう。メロドラマの様な脚色をし過ぎると責められても、偏見に満ちた妄想が結果に影響すると異議を唱えられても、私には出来ないものがある。私にはあの瞬間に感じ取った、悪意ある裏切りの印象と下劣な熱情を決して見逃すことも、強調して戯画ぎが化することもできないのだ。もう一つの光の気まぐれは、自著の口絵に印刷された、若くひげの無い肖像の正体を明らかにしてしまった。さらに、最も拒否したい気まぐれは、昨日我々と一緒だった優しい若い娘に良く似ていると思わせたことだ。

もうたくさんだ！ こんな不愉快な書き方はやめよう。実際は、この邂逅かいこうについては、身震いすると言うより、全く笑いたくなくなってしまうのだ。つまり、こうしている内に、三人目の勝手に訪れた客が、ぜいぜい言いながらステージに登場したのだ。全く悪魔そのものの様に、秘密のドアからあの超自然的ライトの中へ。実際の犯人は弁明を聞く側に廻り、彼ら三人は、裁判に出頭した非行少年の様に揃そろって並んだ訳だ。

もちろん、この展開は充分有り得るのだ。ドールマンはその朝、港であのヨットを見かけ、メンメルトの帰りに夕食に誘いに寄ったということだ。誰もヨットにはおらず、上陸していると思ったので、デイヴィスにメッセージを残す積もりでキャビンに入った。彼の友人の『主幹技師』ベーム氏も、ここまでやって来た小さな船を見たく、またデイヴィスが勝手に見学しても気にしないことを聞いている。デイヴィスは、どうぞどうぞと言ひ、ちよつと飲み物でもいいかと言ひ。いや、いや、それは結構ですが、今晚、ドールマン邸で夕食でもどうですかと誘う。デイヴィスは喜んでと言ひ、しかし先に着替えねばならないと言ひ。ここまでは我々に主導権がある。しかしここで、三人の内で、完全に気の置けないつもりの方のフォン・ブリューニングが『攻撃的言動』に出る。

「どこに行っていたのかね？」と彼は訊いた。

「霧が晴れたので、その辺を一廻り」デイヴィスは言った。

多分彼は、その誤魔化しで検閲をすり抜けられると思ったのだろう。しかし彼が話している間に、怖ろしい事に、もれて来た光がオール受けに巻いたぼろきれの上で遊んでいるのに気付いた。我々はこの余計な証拠を取り除くのを忘れていたのだ。そこで私は付け加えた。

「鴨を追っかけてね」と猟銃を持ち上げて、光がそれに反射するようにした。自分の声がかすれて、遠くに聞こえた。

「いつも鴨だね」とフォン・ブリューニングは笑い、「駄目だったんだらう？」と言った。

「駄目だった」とデイヴィスは言った。

「日暮れ後はいいタイミングの筈だけど…」

「ええっ！ 潮が満ちて、土手は水の下だらう？」

「何羽か見かけたんだ」デイヴィスはぶすつと言った。

「ねえ、君たち若いスポーツマンの諸君。暗くなつてから灯りをつけず、錨をおろしたボートを急いで離れるとはね。わたしが、船に乗ってつけたんだよ」

「あ、どうも。ランプを持って行ったので」とデイヴィスは言った。

「獲物を照らすつもりかね？」

我々は、気まずく笑い、デイヴィスは 素晴らしいドイツの言い方『使えるかも知れない』を実践したのだ。幸いにも、これ以上には発展しなかった。僕たちは良く言つて緊張した立場にあり、長引かせる訳には行かなかった。

ランチを横に付け、フォン・ブリューニングの軽薄で無頓着を楽しんでいた侵入者達は、がっかりした感じで英国土から離れた。

そういう具合で、私はかなり心配だったが、ベーム氏が船を移動中に、勇気をだしてデイヴィスに囁いた。

「ドールマンに、着替える間、この船に居てくれるように頼んで」

「なぜ？」かれは囁いた。

「いいから、やれよ」

「ドールマンさん」デイヴィスは言った。

「着替える間、ちよつと居ませんか。色々とお話があつて――支度が出来たら、一緒に行けばいいでしょう」ドールマンはランチにまだ乗つて居なかった。

「喜んで」と彼は行ったが、その後怪しい沈黙が続きフォン・ブリューニングが言った。

「一緒に行こう、ドールマン。邪魔しないでおこう」とぶつきらばうに言った。

「キャビンの中だと、本当に邪魔になるよ。君がかれらと居たら夕食にありつけなくなる」

「今は八時十五分だ」とベーム氏は幌の下の方から不平を言った。

ドールマンは譲つて、失礼すると言い、ランチは去つて行った。

「僕は分かった気がする」デイヴィスは、僕をディングーから引つ張り上げ、あるいは釣り上げながら言った。

「でも、ちよつと危険だろう？」

「反対すると思つたんだ。ただ確認しなかった」

キャビンは全くもとのままだった。陸の衣服は散らかつたまま寝台の上にあり、一つ二つのロッカーは半分開いている。

「あいつら、ここで何をやつたんだろうな？」デイヴィスは言った。

私は、真つすぐ本箱に行った。

「これを見て何か思う事があるかい？」ソファアに膝をつきながら言った。

「航海日誌が移動している。端にあつたのは確かだ。」デイヴィスは言った。

「それはいい。他には？」

「おい！――ドールマンの本はどこだ？」

「ここにあるよ、だが元あったところじゃない」

僕は読んでいたんだ、覚えてる？ 昨日の夜じゅうね。朝になって他の本同様、見える様にしまった。今、その本は他の本の後ろ、斜めになっていた。これは誰か慌てたんだ。とに角、中に押し込んだんだ。

「それを、どう思う？」とデイヴィスは言った。

彼はカクテルを取り出した。そこで我々は十分間、ソファア―身体をのぼして、完全に休憩を取った。

「彼らはドールマンを信頼していない」私は言った。

「僕はメンメルトでさえ、それを目撃した」

「どうして分かる？」

「第一に、彼らは君と僕のことを話していた。彼は一生懸命弁明していた。とんでも無い臆病者だ。ベームは厳しく追及していた。再び、最後に部屋を出た時、グリムがついて行った。絶対、彼の監視に送り込まれたんだ。彼がいない時だよ、外の二人が待ち合わせの日を二十五日夜に決めたのは。それに今だ、君が誘った時だ。

僕が想定した通りに事がすすんでいる。フォン・ブリュニングと、彼を通してベーム（『ブレーメン』からの技師）にね。あのショートカットの話しを聞いて、君の命を狙ったと疑っている。ドールマンはそれを言う筈はない。

モラルを別にしても、それはすごく必要だと思ったからねーつまり、好奇心の強い外人では無く、君が本当に危険だと悟ったんだ。これで彼の動機が分かったろう。だが彼らは未だ知らない。その本の位置が証拠だよ。

「彼が突っ込んだのかい？」

「見えない様にするためにね。彼らが隠す理由など、全く無いからね」

「じゃあ、僕たち、進んでいるな」デイヴィスは言った。

「それは彼らが、本当の名前を知っていることを示す。そうで無ければ、突っ込む必要はいらる？ だが彼らは、ドールマンが本を書いた事も、僕がそれを持っていることも知らない」

「とに角、ドールマンは、彼らが知らないと思っている。それ以上は言えないな」

「彼は僕の事をどう思っているのだろうーそれに君も？」

「それがポイントさ。十対一で彼は疑惑で酷く苦しんでる方に賭けるね。五分でも君とだけ話せて、自分の立場とショートカット事件の君の話しを聞いたら、どんな金だって払うよ。だが彼らはそうさせない。彼らはドールマンが僕たちに何を話すか、そして僕たちがドールマンに何を話すかが知りたいんだ。君とドールマンの再会は興味深いからね」

「このふざけた服を着て出かけるか」デイヴィスは呻いた。

「外で水を浴びるよ」

何か思い切った事をやらないといけない。私もデイヴィスに習ったが、水浴びには妙な時間だった。

「今、何が起ったか分かったと思う」暖かいキャビンの中、粗末なタオルで身体を拭きながら私は言った。

「彼らは、蒸気ボートでやって来て留守なのに気付いた。『メッセージを書いて置くよ』とドールマンがいう。『勝手な連絡は困る』と彼らは言う（あるいは、考える）。『我々も一緒に行く。ついでにこの蜂の巣を調べよう』。そして下におり、ドールマンは何を一番始めに探すべきか知っていて、あの呪わしい証拠を見つける。彼らは、

気楽に他のもの同様、本箱を見る――例えば、航海日誌を見る。彼は隙を見て、自分の書いた本を隠す。だが、僕たちが外に現れた時、もとに戻す事が出来ない。そうすれば、疑惑を持たれるからね。そしてベームが彼を先に行かせた、こんな感じだ」

「まあ、それは分かった」デイヴィスは身支度を中断して言った。

「でも、彼らは、僕たちが今日何をしていたか疑ったかな？ おいまずい、カルザース。あの切り抜いた海図だ。ラックの上にある！」

「リスクを取って、はったりをかけよう」私は言った。

私はデイヴィスに、あの日彼が常識外れの事を成し遂げたのに気付かせたく無かった。帰りのボート漕ぎや私の活動を別にしても、あの曲がりくねった十四マイルを目隠しで行ったのは、大胆過ぎて、ありそうも無く、全く彼らの想像もしない冒険だと思っていだろうか。しかし、それでもフォン・ブリューニングの冗談には冷や冷やし、もし、僕たちの探索を彼や彼らが少しでも想像したら、テストする方法はいくらでもある。それに対抗できる程、僕たちは厚かましくないだろう。

「何を探している？」デイヴィスは言った。

私はカラーを付け終わり、カラーぼたんを付ける途中で、今朝買った時刻表を調べ始めたのだ。

「二十五日に、誰かが、夜の汽車でどこか来るんだ」と私は彼に思い出させた。

「ベーム、フォン・ブリューニング、グリムがその誰かと会うんだ」

「どこで？」

「鉄道の駅だ！ 何処だか知らない。彼らは、それは言わなくても分かるみたいだ。でも、それはどこか海岸べりだ。ベームが『潮が丁度がいい』と言ったからね」

「エムデンからハンブルグの間、どこでも当てはまる」

「いや、もっと限定される。どこかこの近くの筈だ。グリムが行く事になっている。彼は今メンメルトにいる」
「これが地図だ……エムデンとノルトダイヒがウィルヘルムスハーフェンまでの海岸の駅だーいやカロリーネン
シールまでだ。でもそれはかなり東だぜ」

「それにエムデンは遠くの南だ。すると、ノルトダイヒとしてみるか。でもこの時刻表によると、六時十五分以降は汽車が無いよ。『夜』とは言えないだろう。二十五日の満潮は何時だ？」

「えーと、ここは今夜八時三十分。ノルトダイヒも同じだ。二十五日だと、十時三十分から十一時の間だな」

「エムデン、九時二十二分にレーアとその南の先から来る汽車がある。それと十時五十分以北から」

「また霧を当てにしているのかい？」デイヴィスはからかった。

「いや、でも僕たちの計画をどうするか知りたい」

「この、地獄の監査が終わるまで待ったら？」

「待てない、悲しむことになるよ」

私は、計画を考えていて、駅のこととは平凡な事実では無かった。しかしデイヴィスに提案したくは無かった。準備が出来ようと出来まいと我々はおかけねばならない。キャビンはそのままにし、何も変えなければ、何も隠さなかった。その方が、また探されるかも知れないが安全だと考えた。しかし私はいつも通り、日記を自分の胸ポケットに入れ、二通のイギリスからの公用手紙がその中に挟まっているのを確認した。

「君はどうするつもりだ？」私はディンギーに乗るといった。

「『君は彼女に……』という問題だろうな」とデイヴィスは言った。

「今日の外出は、今後はもう出来ない。昨日の決定に戻るべきだと思うー僕たちは、ここにまだちょっと居ると言ってくれ。獏というしかないだろうな」

「それに、彼女か？」

「皆、知っている。そしてドールマンに内密に会って、攻撃するチャンスを待つ。今夜では無い。僕達、君の手がかりを考慮しないといけない」

「考慮かい？」私は言った。

「随分、遠慮した言い方だな」

我々は鉄の梯子の所に来たが、冷たい横棒に触って、気乗りしない堅苦しさを感じているのに気付いた。横棒は、

私の傷ついた手の平には熱い鉄の様だった。岸壁に着いた時、遅れていた汽船が丁度着く処だった。

「でもね、おい！ 今日の夜でもいいかも知れん！」デイヴィスは、棧橋を私の真似のできない速度で歩き始め、言った。

「落ち着けよ」私は抗議した。

「考えて見ろよ、全く賛成できない。僕は、今日はチャンスが倍になった日だと思う。でも、戦術を変えないとリスクも倍になる。僕達、すごい蜘蛛の巣に絡まっている。僕はこの監査が気に入らない。言い出した、あのベーメの狐が怖いね。招待されたという事実だけで、立場は良くない。ベンザーシールでフォン・ブリューニングが警告した通りになっている。逮捕という気配を感じる。彼らとドールマンの間には切れ目がある。だがそこに僕たちのくさびを打ち込むのは、デリケートな事だ。今夜は無理だ。彼らは見張っていて、チャンスが無いだろう。それに、何と言っても、僕たち充分知らないよな？ どうしてイギリスを逃げ出し、ドイツに寝返ったか。引き渡すべき犯罪かも知れない、でも違うかも知れない。彼が無視したらどうする？ あの娘がいる。彼女は僕たちの行動を制限する。もし彼がそれを嗅ぎつけ、僕たちの弱みを握ったら、それで終わりだ」

「何を考えて居るんだ？」

「僕たち、彼をドイツから引き離したい。だが彼はここでの地位を諦める位なら、なんでもやるだろう。彼が、君を殺そうとしたことを見ればわかる。だから、今日の結果を無駄には出来ないと思わないか？」

我々は公園を通っていた。私はちょっと休む為にベンチにちょっと座り、枯れた葉を踏み破った。デイヴィスは立ったまま、砂利を蹴っていた。

「僕たち、二つの大事な手がある」私は続けた。

「二十五日の会合というのがその一つ。それとエセスという名前がもう一つ。考えていても永久に分からないだろう。だから、それらを使って行動すべきと思う」

「どうやって？」デイヴィスは言った。

「僕たち、サーチライトの下に居るんだぜ。もし捕まったら……」

「君の案——うわっ！——僕の案と同じか、それ以上に危険だ」こむら返りが起こり、いきなり立ち上がり、私は答えた。

「僕たち、別れなければいけない」私は歩きながら付け加えた。

「僕たちは、一撃で、彼らに僕たちが無害だと証明し、新たに始めるのだ。ロンドンに戻るよ」

「ロンドンへ！」デイヴィスは言った。

我々はアーク灯の下を過ぎていて、彼のうろたえが顔に出ていた。カムチャッカと言ったのと同じだ。

「まあ、そこは、今、僕が居る筈のところだしね」と私は言った。

「そうか、忘れてた。で、僕は？」

「僕が居ない時に何かしちやあまずい。ヨットをここに係留して――適当に過ごすさ」

「その間、君は？」

「ドールマンの過去を調査して、他の誰かになりすまして戻り、手がかりを追及する」

「君は早く動かないと」デイヴィスはぼんやりと言った。

「二十五日に間に合う様に出来る」

「君が言う『調査』と言うのは」彼は自分の前を真つすぐ見て続けた。

「他の誰かに追わせるという意味じゃ無いよね？」

「彼は大きな獲物だよ！」私は言わずには居られなかった。

私は時々、彼が無私の人生観に頑固すぎるのに苛立っていたのだ。

「あいつは僕たちの獲物だ。誰にも渡さない」デイヴィスはきっぱりと言った。

「秘密は守るよ」と答えた。

「一緒にやろう」彼は言った。

「君がいないと、へまをやる。どうやって連絡を取る――実際に会うのか？」

「それは後で考えればいいと思う。闇夜に飛び降りるようなもんだけど、暗ければ見られないからね」

「カルザース！ 僕たち何を話しているんだ？ もし彼らが少しでも、僕らが今日どこに居たか疑って見ろよ。」

そして君はロンドンへ行くと言う。彼らは、僕たちが秘密を嗅ぎつけ、それを利用するつもりと考えるよ。

それこそ逮捕だね」

「悲観論者だなあ！ ポケットに書面の証拠があるだろう――公用の帰国命令の手紙、今日受け取ったんだ。」

それで、誤魔化しが一つ減るんだ。あの手紙は開けられたかも知れない。もしその気になってやられたら、

分かりやしない。怪しいと思ったら本当の事を言う！」

「スパイの世界でどの位通用するのかね」デイヴィスは考え深そうに言った。

我々は電灯の光の下、ひと気のない通りを歩いた。私は鉛の足を引きずり、彼は前かがみで、腕を振りながら

元気に、いつもの彼の陸歩きの特徴だ。

「それで、どういう風にするかね？」私は言った。

「シュワンアレーに来たぜ」

「気に入らないがね、君の判断を信用するよ」と彼は言った。

我々は歩く速さを落とし、前もって合意して置くべき重要な何点かについておさらいした。僕たちが邸の門に立った時、

「日にちについて、はっきりした事を言うなよ」と私は言った。

「ここに居られなくなる様な事は言うなよ。少なくとも一週間はヨットもそのままだね」
そしてベルを鳴らし、ドアが開くまでの最後の言葉は

「僕が、何を言っても気にするな。何か妙な事になってきたら、船を軽くしなければ」

「軽く？」デイヴィスは囁いた。

「ああ、へまをやらない様に気をつけるよ」

「こむら返りが起こらないといいけどな」私は、齒の間から呟いた。

デイヴィスがこの邸にやって来たのは、これが始めてである。

男の使用人がドアを開け一階の部屋に通された。我々が入るとピアノの音がとまり、香水と葉巻の混じった匂いがしてきた。デイヴィスは僕の前に入っていったので、彼の肩越しに最初に気付いたものは、女―この香水の主―であり、彼が通るとき、ピアノから振りむいた。彼を馬鹿にした馴れ馴れしきで上から下まで見、私はすぐに、酷く腹を立てた。彼女は、色も形もはっきりした夜会服を着ていた。ある健康的な美を持っているが、必ずしも生まれつきとは思われず、育ちの悪さははっきりしていた。次に見たのはドールマンで、ブランドーグラスを置き、やや驚いた様に低い椅子から立ち上がった。

フォン・ブリュニングは隅のソファアに座って葉巻を吸っていた。同じソファアに彼と向き合って居るのは―もちろんだが―クララ・ドールマンだ。しかし、何と環境で人の様子が変わるのか、と思った。

その他、部屋は、けばけばしく飾られていて、ストーブによる暖かさでむっとしたのに気付いた。デイヴィスはドールマンの所に直行し、商売相手に対するように握手した。それから、敵と対面する私を放り出し、ソファアの方に向きを変えた。

「ええと…」とドールマンは言った。

「カルザース」と私ははっきりと答えた。

「私は、さつき、デイヴィスと一緒にボートに乗っていました。でも紹介されなかったと思います。今もまた、忘れてしまいました」とデイヴィスの方を見ながら、やや冷淡に加えた。

デイヴィスはドールマンさんに挨拶すると、彼女とフォン・ブリュニングの方を力なく見ていた―舌を縛られたぎこちなさという絵だ。(中佐は僕の方に頷くと、あくびをしながら伸びをした。)

「フォン・ブリュニングが貴方の事を話していました」とドールマンは、私の見たものを無視して言った。

「でもお名前がはっきりしなくて。でも、堅苦しい事は抜きでいいでしょう。」

彼は突然、陰気な笑い声を上げた。彼は赤くなり、私は、興奮し易いのだと思った。しかし、通常の光の下では、ある威厳があり、楽しい驚きである。目立つ頭の形は、知的能力を思わせ、正気を越えた、停止することの無いエネルギーを感じさせる。

「そうですね」と私は言った。

「デイヴィスから沢山お話をきいています。それにフォン・ブリュニング中佐からも。もう古い友人という気がします」

彼はちよつと疑わしい眼を私に向けたが、ピアノが気をそらせた。

「さあ、皆さん」香水の女性が言った。

「ベームさんが夕食をお待ちですよ」

「私の妻をご紹介しますよ」とドールマンが言った。

これが、あの義母なんだな。明らかにドイツ人だと付け加えてもいい。私は軽く、頭を下げるとデイヴィスと同じ、あからさまな値踏みねぶをされたが、私には好印象を持ったと見えて、明るい微笑みで終わった。さらに、ごく普通の挨拶や紹介があった。デイヴィスは義母の所に連れていかれ、私は娘の方に、ドキドキしながら向き合っていたが、突然問題がさらに複雑になったと思った。私は、勿論、昨日の邂逅かいこうを全く無視するつもりで、彼女もそうすると想定していた。そして、彼女も確かに、無視し、まったくの初対面の振りをした。また（他の連中が見ているので）、何らかの合図を送ろうともしなかった。しかし、私は次の瞬間、罌に落ちたのではないかと考え始めた。彼女は話さないと約束したが、どういう条件の元であろうか？

その時のシーンが見える。霧のかかった平地、こぎれいな小さなヨットと可愛い若い女性、露つゆの降りた花の様だ。酷い怖れで真っ青になり、萎しおれて、三人は今後会ってはならないと、私の名誉に訴えている。彼女と我々の利益のため話さないと約束した。そして、その暗黙の条件を、私は曖昧あいまいに拒否したことになった。

その条件は背そむかれた。彼女の責任でも我々の責任でもないが、確かに背かれたのだ。彼女は我々に反して、父親を助ける自由があるのか？ 私を困らせたのは彼女の変化で——無礼にならずに説明可能か？——その筈以上に、環境に適応している。装い、姿勢、マナー（僕たちは些細ささいな言葉を交わした）が他の女のスタイルと近すぎる。ある意味、彼女は私の最初の認識に近づいたのだ。私が口に出して、デイヴィスを激怒させた、著しい偽装をまとった姿だ。

この事に気付き酷く困り、敢えて言う、私はデイヴィスがやったように間抜けに思えた。さらに外の空気から突然、閉じた暖かく墮落した雰囲気、目眩めまいを感じモラルが減退、闘う力を削いだ

フォン・ブリュニングの微笑は、嘲笑あざわらっている様で私はたじろいってしまった。振りむくと、ベーム氏の眼が私を見つめており、そのうずくまった形は隣の部屋に続く、折りたたみドアのようだ。ナプキンを手にとって、彼はそのシーンの中に偉大な博愛はくあいという感じで収まっているが、極めて抜け目なく見える。私は、微かな赤い筋が白い禿げた頭に現れるのに気付いた。私も同じ部分でしょっちゅう苦しめられてきたのだが、私の場合、その元はキャビンドアである。

「この人が、もう一人の若い探検家だよ、ベーム」フォン・ブリューニングが言った。

「デイヴィス君が、かれを一月前にかどわかったのだ。いじめ、飢えさせて従わせているのだ。残っているのは一緒に溺れることだね。酷い目にあって来たんだよ」

「酷い目はもうおしまいですよ」私は言い返した。

「反乱を起こしたんですー脱走したんですーそうだね、デイヴィス？」

私は、デイヴィスがドールマンさんをぎこちなく見つめているのが眼にとまった。

「え、何だって？」彼はどもった。私は英語で説明した。

「カルザースは家に帰るんです」と彼は酷いドイツ語でいった。

誰も少しの間、何も話さず、フォン・ブリューニングでさえ冗談がすぐに出てこなかった。

「夕食は食べないのかしら？」と女主人が我慢できなそうに言った。そして、我々は皆、折りたたみドアに移動した。

これまで、殆ど形式的な事がなく、食堂では更に少なかった。ベームは再び、食欲旺盛に食べ始め、残りは適当な席に座ったが、一応の順序は認められる。ドールマンはテーブルの短い方の端に、デイビスを右、ベームを左にして座った。ドールマン夫人は向かい側で私を右に。フォン・ブリューニングが左だ。七人目の登場人物、ドールマンさんは中佐とデイビスの間で私の反対側だ。

使用人は現れず、自分達で面倒を見た。私は各種素晴らしい料理とワインの沢山あった事の曖昧な記憶しかない。誰かがシャンペンを注いでくれて、私は食欲に飲みほしたことを白状しておく。果汁からエッセンスを引き出した技術者、それを実らせた植物そして、暖めた太陽に祝福あれ。

「どうしてそんなに急に帰るんだね？」フォン・ブリューニングがテーブルの向こう側から言った。

「ここに手紙を取りに来ると話しませんでしたっけ？今朝受け取ったんです。他のに混じって仕事に戻れと言うのが有りました。勿論、従わないと」（私は、堅苦しい沈黙の中だった）

「面倒だったのは、手紙が二通ありましてね、もし二日前に来てたら最初の手紙だけ受け取る筈で、それは延長許可だったんです」

「随分、良心的だね。分かりやしないだろう？」

「ああ、でも二通目には、緊急とあったんです」

また、気詰まりな沈黙があったが、ドールマンが話した。

「ところで、デイビスさん」彼は始めた。

「私は、謝らないといけない。あの…」

これは私の関心事では無いし、これに興味を持たない方がいいので、ドールマン夫人に向かって霧の文句をいった。
「ずっと、港にいらったのですか？」彼女は訊いた。

「それじゃ、なぜ家にいらつしやらなかったの？ デイビスさんはそんなに恥ずかしがり屋なの？」（興味それとも悪意？）

「そんな事はありません。でも私の方が…」私は冷たく答えた。

「僕たち、ドールマンさんがお出かけだと聞いていたんです。それにここに来たのは手紙を受け取るためですから。それに住所も存じませんし」

私はクララを見たが、彼女は楽しそうにフォン・ブリューニングと話していて、我々のちょっとした話しは聞いていない。

「誰に訊いても分かりまわすよ」と夫人は眉毛を持ち上げながら言った。

「そうでしょうね。でも朝食後には霧がかかって―霧の時ヨットを放って置くわけには行きませんか」と、堅実なヨット乗りとして言った。

フォン・ブリューニングはこの話を聞きつけた。

「それが君の格言だったら、私は卒倒するね」彼は笑った。

「君は海岸の方が気に入ってるんだろ」

私は眼で抗議した。『貴方の警告に、私が従ったら面白くないでしょ』もちろん私の言い訳は彼と、ドールマンさんに宛てたものだ。私が話した女性がそれを気に入らなくても、私の責任ではなからう。

「それじゃ、一日じゅう、惨めな小さいキャビンに居たの？」彼女はさらに訊いた。

「一日じゅう」私は臆面も無く言った。

「それが一番安全ですから」

そしてまたドールマンさんを率直に、真つすぐに見た。我々の眼が合って、彼女はすぐに伏せたが、その前に私には分かった。もし、顔の下に苦しみが隠れているとしたら、今のがそうだ。彼女は話していない。私は、夫人を不思議がらせたようだ。白い肩をすくめ、その場合にはなぜ、大事なボートを敢えて離れ食事に来たのかと言った。もしフリースラントの霧を彼女の様に知っていれば―ああ、私はそこまで神経質では無いと説明した。それに陸で

「お願いですから、その話は止めてくださいな！」彼女はしかめっ面で言った。

私は、半分聞きながら同情し、張り詰めたもう半分で右側の進展状況に耳を傾けた。私はデイヴィスが真つ只中に

いて、ベームが見ている中、楽しくないのは良く分かったが、男らしく闘っていた。「私の責任で……」——「突然のスコール」——「極めて安全」幾つかの言葉を聞いた。そんな様子だったが、心配な事に何かの図面をパンくずとナイフで書いていた。話題は気まぐしところに落ち込みそうだったが、突然私の右側の隣人のベームが私に向いた。

「貴方は、明日の朝イギリスに向けて立つのかね？」と言った。

「ええ」と答えて、

「八時十五分の汽船がある筈ですが」

「それは結構。一緒に行けるね」

「貴方もイギリスに行かれるのですか？」私は、すぐく不安になって訊いた。

「いや、いや、私はブレーメンだよ。しかし我々はおそろいまでは一緒に——アムステルダム経由でしような？」

レーアまでですな。楽しいだろうな」

私は、残忍な楽しみを彼の声に妄想した。もうそう

「大変に」私は同意した。

「ここには、短期間だけなのですね？」

「いつもと同じだ。月に一回位、メンメルトの仕事を見に来る。夜はドールマン君とチャーミングな家族とすごすんだ」(彼は横眼で見た。)

「そして、**帰る**」

私の次の手が正しいか間違いか、知る事はできないが、強い本能に従って言った。

「メンメルトですか、もつと話して下さいませんか。フォン・ブリュニング中佐からは大分聞いたのですがしかし…」

「彼は、控えめだったろうね」とベームは言った。

「一番面白そうなところで止めてしまいました」

「私の事を話しているのかね？」フォン・ブリュニングが加わった。

「私はメンメルトの事をもっと知りたくてしようがないと話していたんです。そうだろう、デイヴィス？」
「ええ、そうだっけ」デイヴィスが私の無鉄砲さに仰天して言った。でも気にしなかった。二人の意見が合い過ぎない方がいい。

「歴史の話は沢山しましたが、今どうなっているかが知りたいですね」三者連合は笑った。特にドールマンは大笑いだ。

「えーとね、」フォン・ブリュニングが言った。

「私はきみに、いまどうなっているか知らない方がいい理由を教えたよな。そして君は黙って聞いた」

「今度は私を黙らせる気だ」ベームが耳障りに笑った。

「ちよつとお待ちください。言い訳しましょう。中佐は怪しげなだけでなく、不正確ですよ。ドールマンさん、お願いします。貴方の方が適任者です。彼にベンザーシールでお会いした時、デイヴィスが彼に、貴方が邸にいるか訊いたんです。彼の答えは『いない』でした。いつ帰りますか？ 多分、その内。でもいつだか知らないんですよ」

「彼はそんな事をいったのかね？」ドールマンは言った。

「まあ、僕たち三日後にノルダーナイに着きました、そしてその日に戻られたんですよ。でもメンメルトへ行かれた。また、謎のメンメルトです！ でも前よりもっと不思議なのは、貴方とベームさんの他に……」

「何と言う洞察力！」フォン・ブリュニングが笑った。

「フォン・ブリュニング中佐ですよ。彼のランチで僕たちを訪ねていらした。皆さんメンメルト帰りで！」

「それで、君の言いたいのは？」フォン・ブリュニングが言った

「ベンザーシールにいた時——三日前ですよ——いつドールマンさんが帰って来られるか知っていらつした筈です。今日、メンメルトで約束があつたんですからね」

「それを、君に隠したかったという訳だね？」

「そうです、だから私は知りましたがっているんです。あなたのせいですよ」

「どうも、そう見えるね」馬鹿にする様に謙遜けんそんして言った。

「ま、グラスに注いで、一杯飲みなさい。なせ私が君を騙だまだましたいんかね？」

「それが知りたい。ねえ、白状しなさい。今日、何か大事なことがメンメルトであつたんでしょう？ 何か金塊に關係する事が？ 調査ですか、分類ですか、それとも重さですか？ あ、分かった！ 本土に秘密に運んでいるのでしょう！」

「今日は、それには向かない日だよ！　だがお手柔らかに、カルザース君。どこの誰が、我々が金塊を見つけたと言ったんだね」

「えつ、言いませんでしたっけ？　聞いたとおもったのに！」

「その方がいい！　正直が一番だね、若い捜査員君。しかし私は、何の職権も無いから言えないんだ。ベームさんに訊いた方がいい。わたしは単なる傍観者だからね」

「でもシェアをお持ちだ」

「ああ、それを覚えているかい？　（彼は何でも覚えているー）そう、多少のシェアだ。だか専門知識は無い。ベームが技術顧問だ。助けてくれ、ベーム」

「私は専門知識を持っていないとは言えんな」とベームは真面目なユーモアで言った。

「しかし責任は無いんだ。ドールマンが会社の会長だからな」

「そして私は」ドールマンは煩く笑っていった。

「株主に意見を訊かないとね。私は株主の利益を守る義務があるからね。こういう秘密に関しては注意し過ぎる事は無いのだ」

「ここに合意する人が一人」私は言った

「他の人を代表できませんか？」

「拷問で無理強いだ。撤回するよ」フォン・ブリューニングが言った。

「気にすることは有りません、カルザースさん。」ドールマン夫人がいった。

「貴方をからかっているのです。でも私がヒントをあげましょう。女は秘密が守れないのよ」

「ああ、」私は勝ち誇った様に言った。

「そこに行かれたんですね」

「私？、とんでも無い。私は海が大嫌いなんです！　でもクララは行ったことがあります」
皆がクララを見た。彼女は素朴にうろたえ、私と彼女の父親を見た。

「そうですか？」と私は、もう少し真面目に言った。

「でも、彼女に自由行動は出来ないのでは？」

「完全に自由だよ！」とドールマンが言った。

「少し前に、一度だけ行ったことがありますわ」彼女は言った。

「でも、金は全く見ませんでした」

「警備されている」私はいった。

「失礼。私の意味は、貴方は唯、見ていいものだけをご覧になったのではということです。それにフロイラインは専門知識も責任も、そしてシェアもお持ちでは無い。彼女の責任分野はチャージングなところで、金銭的秘密では無いですからね」

「私、貴方を助けるため、ベストをつくしましたからね」と継母は言った。

「皆僕たちに反対だ、デイヴィス」

「カルザース、やめろよ！」とデイヴィスは英語で言った。

「彼はしつこい」フォン・ブリューニングが言い、暫く間があいた。明らかに彼らはもっと引き出そうとしていた。

「まあ、これで結論がでそうですね」私は言った。

「これは面白い。どういう意味で？」フォン・ブリューニングが言った。

「私に分かり始めたんですけどね、ベンザーシールで僕たちをからかったんでしよう。覚えている、デイヴィス。彼が僕たちの行動にすごく興味を持ったのを。探検好きの僕たちがメンメルトに引かれると心配したんでしようね」

「言っておくがね、これは最も腹黒い恩知らずですぞ。私は特に君たちには親切にしたつもりだ」

「まったく、その通り。特に鴨猟！ 貴方の言う地元の間人はどんなに都合が良かったでしょうかねー我々にも、貴方にも！」

「続けて」中佐は平然と言った。

「ちよつと待つて下さい。考えてますから」そして、全く私は、燃えるような額に手を宛てて、気まぐれで始めてしまった、この誘惑的だが危険な嘘話^{うそばなし}をいつ止めるか、必死になって考えていたのだ。やり過ぎると完全な露見^{ろけん}を招き、早すぎると余りにも中途半端だ。

「あの方は、何を話しているのですか？ いつまでこの馬鹿馬鹿しいミステリーを続けるおつもり？」

ドールマン夫人が言った。

「私は、この夕食会の事を考えていました。どうしてこういう話になったかについて」私はゆっくりと言った。「特に問題無いと、思いますが？」とドールマンは言った。

「勿論有りませんよ！ 即興パーティーはいつも、一番楽しいですからね。特に今回はすばらしく即興的ですから。ああ、やっと話しの始まりが分かりました。メンメルトで話題になりませんでしたか？ どなたか、何か

提案をなさったとか……」

「君は、そこに行つて居た様な話しをするね」ドールマンが言った。

「この酷い氣候に感謝なさるんですね。行ける訳がありません」と私は笑いながら言い返した。

「でも、私が言ったように、貴方方のうちのどなたかが——どなたでしょうね。中佐では無い事は確かですが——」
「どうしてかね？」ベームが言った。

「説明が難しい——直感ですかね——彼が賛成して下さいしたのは確かだと思います。それにドールマンさんでも無いと思います。彼はもうデイヴィスをご存知ですし、いつも責任ある立場ですから。結局、ベームさんという事となりますね。明日の朝お立ちだし、僕たちどちらにも会った事が無い。僕たちを夕食に誘おうと提案なさったのは、貴方ではありませんか？ 監査のために」

「監査？ なんとまあ、とんでも無い考えだな」ベームは言った。

「でも、否定はできないでしょう！ それにもう一つ。港で今——これはまずい——これは言い過ぎで、失礼になつてしまう」私は楽しそうに笑った。

「言つてしまいなさい。君の幻覚が脇道にそれているぞ」

「どうしてもとおっしゃるのなら。でもこれはちよつとデリケートな事です。僕たち、皆さんが船に乗っているの
で驚いたのをご存知ですよ。そこでベームさん、貴方はいつもあんな小さなヨットに興味をお持ちですか？

残念ながら、僕たちのヨットの検査は、あまり快適では無かったと思います。」私は、船のドアの横木に出会った、彼の額の上の象徴を見た。皆が大笑いを始め、特にドールマンが一番喜んだ。

「だから言つたろう、ベーム」彼は言った。

技師は冗談を、何とか怒らずに受け止めた。

「どうも謝らないといけませんな」と渋々いった。

「構わないですよ」デイヴィスは言った。

「彼は、構わないんです」私は言った。

「私が傷つきましてね。デイヴィスを疑った事なんてないでしょう？ 誰もできません」（誰が疑えるかね？
この点私は正しい）

「ポイントは、私を何だと思ひになりましたか？」

「多分、いまでも、我々が何者と考えているかという事かね？」フォン・ブリュニングが言った。

「ほほう！ まだ疑っていらしゃる。私を追い込まないでくださいな」

「どこへ？」

「まあ、私がロンドンに戻ったら、ロイドに行きますね！ 権利上の若干の不備があるのを知っています」
記憶に残るほど静かになった。

「皆さん」ドールマンが大げさな顔でもっともらしく言った。

「我々はこの、手ごわい若者と合意を形成する必要がありますね。どうでしょう？」

「私をメンメルトに連れてって下さい」私は叫んだ。

「それが条件です」

「メンメルトに連れていけ？ でも明日イギリスに向けて発つのだろう？」

「そうすべきなのですが、でもその為ならもうちょっといます」

「君は緊急だと言ったろう。どうも君の良心というのは、都合がつくようだね」

「それは私の問題です。メンメルトに連れて行って下さいますか？」

「どう思います、皆さん？」

ベームは頷いた。

「我々、どうも賠償金ばいしょうきんを支払わねばならない様だね。それなら、秘密を完全に守るという条件でどうかね」

「勿論です。皆さん私を信頼して下さい。でも全部見せて下さらないと――約束ですよ――残骸さんがい、事務所とか」

「全てを見せよう。もし君が潜水夫の服が嫌で無ければね」

「勝利だ！」私は、得意になって叫んだ。

「僕たち、点を取ったぜ、デイヴィス。それで、皆さん、私に関する限り、冗談はこれで終わりです。せっかくの皆さんの親切な御提案ですが、私は明日、ベームさんの庇護ひごのもとイギリスに発ちます。もし、私の都合のいい良心がご心配なら（皆さん、私が風見鶏どりだと思っているので）ここに、私が受け取った手紙があります。私は、地味な、しかし信頼できるイギリス政府の公務員で夏休み途中に、暴虐ぼうぎやくな上司に呼び戻されてしまったのです」（私は、手紙を引っ張り出し、ドールマンに渡した。）

「ひよつとして、英語はお得意じゃ無いかも知れませんか。でもベームさんはお読みになれると思います」
ベームに、日付、消印、中身を気が済むまで調べさせている間に、気付かれずに、私の美しい隣人――頭がくらくらすると言っていた、無理もない――の方を向き慰めようと思った。この時、非常に驚いた事に、デイヴィスが口を

挟んだ。^{はさ}

「私がメンメルトに行きたい」と彼は言った。

「君が？」フォン・ブリュニングが言った。

「これは驚きだな」

「でも、ここにはいないつもりじゃないの、デイヴィス」私は抗議した。

「いや、ここに居る」デイヴィスは言った。

「そうすると言ったろう。君が見捨てて行くんだから、僕はどこか見物するよ」

「一人で航海出来ない振りをする必要はないぜ」フォン・ブリュニングは言った。

「二人の方がずっと面白いので、他の友達を誘って見ますよ。その間にメンメルトを見たいですね」

「残念ながら、言い訳に過ぎないね」私は言った。

「鴨猟もしたいしね」デイヴィスは赤くなりながら、食い下がった。

「僕はずっと、そうしたかったんだ。中佐も助けてくれるとおっしゃいましたよね」

「もう逃げられませんね」私は笑った。

「全く、逃げ場が無いな」彼は、平然としていた。

「しかし、本当にデイヴィスさんに助言しますが、もし今シーズン中に家に帰りたいなら、今のいい天候を

使わないと」

「良過ぎです」デイヴィスは言った。

「風の方が好きなんです。もし、友達が都合がつかなければ、航海はやめてヨットをここに置いて、来年戻ってきます」

無言の通信が同盟者の間で交わされた。

「あのヨットは私が面倒を見るよ」とドールマンが言った。

「明日、君の友達と出発したらいいだろう」

「どうも、でも急ぐ必要は無いのです」前よりも赤くなってデイヴィスは言った。

「僕はノルダーナイが気に入った——貴方のディングーでまた一緒に航海出来るかもしれません。フロイライン」と口を滑らせた。

「有難う」とあの、昨日聞いた、乾いた低い声で彼女は言った。

「でも、もうヨットには乗らないと思いますー寒すぎです」

「そんな事は有りませんよ！ 気持ちがいいですよ」とデイヴィスは言った。

しかし、彼女はフォン・ブリュニングの方を向いて、もう聞いていなかった。

「出かけたら、メンメルトの事教えてよ、デイヴィス」と私は、彼がすげなく断られたのをそらす様に笑った。しかしデイヴィスは心の内を吐露し、恥ずかしさを忘れ、私がいつも見ている、穏やかで、頑固な表情で娘を見つめていた。それが、あのデリケートな話題の終わりで、あとは陽気になって行った。

私はどんな時でもいいワインと陽気な乾杯に無関心ではない。しかし、できる限り控え目にしたのは、注いでくれなかったからでは無く、もちろん、招待してくれた人たちの性格に気を使い、遠慮したからでも、全く無い。私は大得意になっている振りをしたが、デイヴィスは遠慮し、少ししか食べず何も飲まなかった。

いずれにしても、彼はそのような事には頑固で、粗末なパラフィンの匂いのする糧食を、世界最高の夕食と思うのは、私にはよく分かつている。

一方、人知により発明された、最高の頭脳強壯飲料きょうどうつういんりょうを無駄にしない様、私に注意したのは、非常に包括的なものだった。私は、いいカードを持っているのに、安いカードで策略する様に、メンメルトの事を巧妙に処理した。しかし、今日の事で我々の対抗相手が安心するなどとは思って居なかった。彼らは私に勝たせたのだ。つまり、彼らが見せたより、よく私の手の内を知っていると思う。

一方、私は全ての戦いで、敵の困難を過小評価したり、自分の物を過大評価するのは、致命的だという原理を信じている。

それらの内の主要なものー抗争の興奮で千倍にもなるーは、間違った一撃への怖れだと思う。例えば、ナットを壊すのに大型ハンマーを使うことだ。破壊には、注目を集めるリスクが伴い、私は確信するが、注目は秘密の死を意味する。従って、彼らが策略に気付いたとしても、そして僕たちが帝国の策略を嗅ぎつけたと分かったとしても、僕たちが間違った臭いに引き寄せられていると思っっている限り、安全だと考えていた。つまり僕たちが、メンメルトだけが、疑惑の元だと考えている間だ。

もし必要なら、私はメンメルトだけが疑惑の中心と見るようにしたと思う。フォン・ブリュニングの地位を考えると、メンメルトと結びつくのが不思議なのは認めるが。そして、海事好きのデイヴィスに、難破船の仕事とは、実は海防の仕事だと示すべきだったかも知れない。もし彼らがさらに、正にあの日に我々がメンメルトに行こうと

したと疑っても、立場は悪化するものの絶望的では無い。その上、我々が実際に出かけ、盗み聞きしたと仮定しても、逮捕されるまでは、私は単に否定するだけだ。

正確にどの位近くまで我々が迫ったか、私は正しく知る事はない。しかし我々は端を揺すつたと信ずる理由がある。主題は私にはもう充分で、この後の敵対する勢力の間の底に流れた動きを追跡したのは、過ぎ行く光の様なものだ。

それなのに、当時のシーンを回想して見ると、あの夜のヨーロッパじゅうのこの七人程、人間心理学の研究者に豊かな材料を提供したものは無いだろう。崇高な野心と恥ずべきもの、下劣な怖れと気高いそれ、憐れな心の苦しみ。我々は大まかにそれぞれの陣営に属していたが、ある二人が完全に一つの陣営に在ると言う事が無かった。誰もが、何らかの仮面を被っていた。例外は私の左側の女性で、自分の幸福以外では、遠慮なしにフォン・ブリュニングと養女を親密にさせようとしていた。ベームとフォン・ブリュニングでさえ、完全に一つの陣営中とは言えない。モラルの距離を考えるとデイヴィスと私は何マイルも離れていた。ドールマンとドールマンの娘の間には、二つの極端な情熱を調和させようと誓った、生きて呼吸しているシンボルが座っていた。彼は、私にはとても出来ない平衡を保った。彼の目的は名目上私と同じなのに。

私にとって、彼は中心となる人物だ。かれにこそ、注意を向けるのだ――隠れた力を不名誉に發揮しながら、偉大な能力を浪費し、売りわたし、自分の一番の弱点を見極めてきた。注意を向けるのは、彼が我々か自分の仲間のどちらを怖がるか、後悔や恥辱を感じ得るのか、さらなる犯罪を計画しているのかだ。

娘は偶発的に関わったのだ。最初の驚きの後、私は充分早く、彼女も他の人の様に偽装しているのに気付いた。彼女は人を騙し続けるにはあまりにも無邪気で、私は昨日のことはよく覚えていて。私は彼女のなり切った性格を利用せざるを得なかった。しかし、彼女に関して自分のモラルの高さは自由自在だというのは、自虐的すぎるだろう――ワインと興奮が私の良心をあそこまで落としたのだ。

私は彼女が今まで以上に綺麗だと思った、そして時が過ぎると、私は皮肉にも油断をしたのだ。彼女のこの家庭生活と、窮余の策を取るまでに追い込まれ（衝動からか、デイヴィスを考えてか）、彼に反発し、退けたのに、私は思った程驚か無かった。それは、昨夜我々が取る事にしたコースを正しいとするこの上ない理由になるかも知れないからだ。我々は、目的を騒音も醜聞も無しに達成、つまりドールマンを無力化、しかし彼が裏切った同僚からの逃走を助けると相談していたのだ。

デイヴィスにとってその男は、もし完全に抽象的存在で無くとも、公共の利益のため踏みつぶされるべき有害虫にすぎない。一方、娘は道義のない連中の中で、不吉な将来が想定され、彼の激情の源となっている。他の出演者はどうか？ ベーメは私に取って、我々が基礎を壊している筈、そしてドイツ人生得の系統化された力の表象だった。フォン・ブリュニンングについては個人的なものが一番大きい。今晚は私は無感覚だったが、彼がクララ・ドールマンと話し、笑っている間、父親の素性を知る彼の本心は何かと思わざるを得なかった。これは私に追跡が出来ず、またそのつもりも無い点だ、そして有り難い事に、今は問題とならない。しかし、より多くの事実を知った時には、落ち着いて判断できようが、頻繁に同じ議論に戻り、私には理解不能な非論理的な道經由で同じ結論に達する。私は彼が気に入ったし、今もなのだ。

我々は時間についてはスポーツマンとして振る舞い、彼らが僕達を判断するまで二時間以上待った。煙草の煙と暑さで私が再び目眩を感じた時、こむら返りの気配が、人間の限界を感じさせた時、私は立ち上がり帰ると言った。私は朝早く発たねばならないので。私は、さようならをはっきりと言わなかったが、ドールマンが、とにかく私には一番心がこもっていて、良い占いの結果を得たと思った。ベーメはまた明日と言った。フォン・ブリュニンングは、同じ港に帰る筈だが、まだお休みをいうのは早いと言って、僕たちにさよならを言った。

「私達を説得なさりたいんですね」私は、陽気さの最後の一滴をふり絞って言った。

我々は再び、銀色のしんとした夜の道にでた。あの油っぽい梯子をふらふらしながら下りた。キャビンに降り、そのままソファアールにひっくり返って寝てしまった。深く、必要な眠りでブリッツのランチがやって来て、手錠をかけ、縛り上げて運んで行っても、私は何の迷惑も感じなかったろう。

第二十五章 私の引き返し

「じゃ、さよなら」デイヴィスは声を上げた。

「さよなら」汽笛が鳴り汽船のフェリーは、デイヴィスを棧橋に残して、徐々に進み始めた。彼は帽子を被らず、古いノーフォークジャケットと汚れた灰色のフランネル姿だ。フレンスブルク駅で始めて会った時と同じだ。今度手には包帯をしておらず、しかし苦しみ、悲しんでいる様だ。目の周りには黒っぽい隈があり、彼に何とも言えないペーソスを感じた。

「お友達は元気がありませんな」と私の横に座ったベームが言った。冷たい空気にまるまる着込んでいる。静かな、太陽の無い日であった。

「私もですよ」とぶつぶつ言ったが、それは全く文字通りの真実だ。私は半分眠っていた。頭は重く、身体は痛いし、風呂に入っておらず放蕩の後と感じた。

デイヴィスにとって私は、ロンドンなどにいるべきではなかった。粘り強くおだてて、寝台から引っ張り出し、鞆をつめ、お茶とオムレツ（それにはどういう訳か、すごく気を付ける）、そして出発の為に面倒を見たのはデイヴィスである。

私が二杯目のお茶を飲んでいる時、彼はカビをブラシで落とし、ロッカーの中に一ヶ月の間埋葬まいそうされていた、私のフェルトの帽子のへこみを、後悔し、氣にした様子で直した。

一つだけ自分の意志を示したと思うのは、鞆の中身だけだ。

「海用の衣服と、オイルスキン他入れてくれ」私は言った。

「要るかもしれないから」

相談を良くして置かないと、それこそ命に関わるかも知れないのだが、それ処では無かった。デイヴィスはせがむ事も文句も言わず、単に恐る恐る、どうやって会い、連絡をとるか訊いた。それについて私は全く考えていなかった。

「二十六日頃、注意してくれ」私は、弱弱しく言った。

キャビンが出る前に、彼は鉛筆書きの紙切れをくれ、私が日記に挟むのを確認した。

「汽車の中で見てくれ」彼は言った。

ベームとつき合いきれないので、デッキの上の意味も無く歩き、ゼーガットからビューステイフを廻った時、昨日、目隠しで通った処を探して見た。しかし、満潮で何マイルも水が続く、何も読み取れず遠くは霞かすみの中だ。

間もなく私はサロンに降りて行つてストーブの処に屈み、紙切れを取り出した。読みにくい子供っぽい字で、煙草の灰で汚れた次のメモがあった。

(一) 君の旅程。ノルトダイヒ 8.58、エムデン 10.32、レーア 11.16 (ベームはブレーメンに向け乗り換え)、ライン 1.8 (乗り換え)、アムステルダム 7.17 p.m. アムステルダム発 フーク 8.52、ロンドン 9 a.m.

(二) 海岸駅―彼らのランデブー (質問) ノルデンの可能性? (通過 9.13)―そこまで潮流による川が有り。二十五日の高潮、10.30 から 11 p.m. ノルトダイヒではあり得ない。汽船向け浚渫された水道有り。従つて『潮が都合がいい』は適用されないだろう。

(三) 他の手がかり (タグボート、航海士、深さ、鉄道、エセンス、何かの七)

(質問) 北海海岸の陸と海による防衛計画?

海―七 島、七 海峡 (西エムス含む)、殆どところが深度が浅い (君が言つた)。タグボート、航海士 いつも言う通り、島の背後のパトロール。

(質問) ランデブーとは水道視察のため?

本土側―鉄道参照 (地図はコートのポケット) フリースラントを一周するループ。海岸から数マイル内側。

(質問) 軍隊の通信網に使える。軍勢を脅威のある点どこにでも早く送れる。

エセンス 基地? ループの真ん中の上。フォン・ブリュニングがベンザーシールで僕たちをやつつけた。

チャタム D はドイツとの戦いに備え軍備計画をスパイ。

フォン・ブリュニングはこちら側で海軍の計画。

ビュルマーはどこから来る? (質問) ブレーメンに行つて彼の調査をする?

私は馬鹿みたいにこの文書を見て領^{うなず}いていた。全く馬鹿のようでビュルマーは場所なのか名前なのか考えていた。そして居眠りを始め、急に揺れたので目を覚ます。恐ろしい事に紙が床に落ちていた。パニックになって、それを隠しデッキに出る。ノルトダイヒの近くに來た。ここは、本土の土手で囲まれた干拓地から放り出された様な、荒涼とした栈橋のなかでも最も荒涼としていたところだ。

ベームと私は一緒に上陸した。私がアムステルダムまでの切符と言つた時、彼は私の横にいて、オランダ国境の乗り換え駅、ラインまでの切符が渡された。汽車の中では、彼は私の向かいの席の隅に座り、インドの偶像の様に見えた。

『あんたの役割は何なんだ？』

ぼんやりしながら考えた。話すには眠すぎて、背を延ばして腕組みして座りあの大事な手帳を抱えて、時々彼を見るだけだった。とうとう闘いを止め、上着のぼたんをしつかりと止め、彼に詫びて背を向け横になり、ポケットを下にして寝た。

彼は私の鞆をくまなく探す事ができ、私は敢えて言うが、そうしたと思う。だが、ここからラインまで、四時間の間、私は二回しかはつきりしていなかったたので、本当はどうか分からない。

最初はエムデンで我々二人とも乗り換えた。ここで、混雑しているプラットフォームをかき分けて歩いている時、ベームは何人かに丁寧に挨拶された後、追従的な男に捕まって逃げられなくなった。この男の様子はいつでもいいが、会話は重要だった。運河の話をした。どの運河の話しか、名前は省略されたので、私には分からない。後になり、そのコースからエムズに繋がる接続路だと分かった。ポイントは、話題が運河だったことだ。その時は、まだ育たない土に落ちた実だったが、後で芽を出すことになる。人込みにまぎれながら進み、間もなく別の客車で、今度はベームの付き添い無しで眠った。

二回目はレーアだった。私は、自分の名前が呼ばれたのに気付き目を覚ますと窓の処にいた。彼はここで乗り換えなので、さよならを言いに来たのだ。

「ロイドに行くのを忘れんようにな」

彼は私の耳にこう言った。

私は力なく微笑み返したのだと思う。私は非常に元気が無い時で、この皮肉な些はとても手に負えるものではなかった。だが、工作員は自由になった。『自由』というのが最後の意識で、また眠った。

最後に乗り換えたラインの後でさえ、やたらと眠気が続き、午後遅くなってからようやく力が戻ってきた。汽車はカタツムリの様に駅から駅へのろろ進んだ。ある旅行者が教えてくれたが、ラインで三時間待ち、急行に乗ればほぼ同じ時間にアムステルダムに着ける。あるいは、もっとずっと前、エムデンからレーアで二時間待てば、同じ急行にラインで乗り換えられるとのことだ。こう言う方法にデイヴィスは気付かなかったと思ったが、ベームの都合に合わせられたと推量した。彼は私が後の汽車で来るのが嫌だったに違いなく、さもないと、自由に動け、途中で引き返したり、追跡してブレーメンにも行ける訳だ。

スピードは実にひどく、しかも遅れもあった。ヘンゲロー到着が遅れ、アペルドーンでは三十分遅れた。私は、

アムステルダムでの乗り換えを心配する処だった。そうすると、大分面倒になる。しかし、無氣力を克服すると、我々の位置と今後を考えに入れ始め、最初に極めて違う考えが浮かんだ。

ロンドンに着く心配はドイツを離れるなという考えに飲み込まれた。自分と国境との距離を惜しみ始めた。これは、何が緊急かという問題だ。今日は二十三日。ロンドンに行くと、アムステルダムからの時間を入れ、最低でも四十八時間はここを留守にする事になる。移動に夜二日、日中が一日、ドールマンの過去の調査にもう一日。フリースラントの海岸に二十五日の夜に戻る事は、可能ではある。

ノルデンに午後七時にいる事は出来そう。もし『ランデブー』がその場所なら。しかし、何と言ったばた騒ぎだ！ 遅れは考慮されていないし、身体 of 休憩も入っていない。ある男の過去の調査が始まる――他の人も影響されるかも知れない。人は注意深い、官僚主義が躓^{つまず}かせる。情報を知っている男は昼食で外に出ている。田舎に帰っている――長い週末だ。何々さんにお会いになりますか、それとも言付けなさいますか？ 私は、あの公務員の働き方を知っている――それも、内側からだ！ それに海軍省だ！ 私は、門前払いされ、その夜にドイツに急いでいるのが見える。二日が無駄になり、何も得られず、何の地元の事情を調べる間もなくノルデンに着く。そしてそこでも又、取りつく島も無い。いつも霧を当てにはできないのだ（デイヴィスが言った通り）！ エセンスは他の手がかかりだ、そして『ビュルマーを探す』――これには意味がある筈だ。だが時間が必要、私に時間があるのか？ ノルダーナイでどの位デイヴィスは持つか？ 昨日の夜を考えると、そう長くはない。それに、彼はそこで安全か？ 熱の出そうな夢を思い起こす――デイヴィス潜水服を着ている夢、痛ましい空気の供給事故――やめろ、ナンセンスだ！ 正気に戻ろう。

もし彼がいなくなったら？ もし私がロンドンで手間取ったら？ 恥ずかしさで一杯になりながら、岸壁でのデイヴィスの思いに沈む顔を見、恐ろしい絶叫『あいつは僕たちの獲物だ。誰にも渡さない』と私の『秘密は守るよ』陰気な声が聞こえた。ロンドン行きは全くあり得ない。

もし私が、情報提供者に会ったとしても、捜査権もなければ信頼される理由もない。全く無い、あるいは全ての話をするか。ホワイトホールに私がいるだけで秘密が漏れるかも知れない。国に戻れば、私は人目につく――裁判所に呼び出されるかも知れない、良くても噂の中での逃亡か。『最後にノルダーナイで目撃された』、『今朝、海軍省で架空の中尉の話で大騒ぎ』。駄目だ！ フリースラントへ戻れというのが正しい。一晩は休まねばならない、――これは必要だ――シートにくるまり、羽毛ベッドで。一晩の快適な長い睡眠、そして回復してフリースラントへ、

我々のやり方で、我々の武器だけで仕事を終えるのだ。

こう決心してすぐそうしようと思ったが、アメルスフォールトで降りるよりもいい事を考えた。北へ戻る前に、自分を変えて置こうと思ったので、人口の多い方が気が付かれにくいと考えた。それにアムステル川の近くの完璧な宿屋の完璧なベッドを思った。結局その方が安くつく。そんな訳で、八時半過ぎには、先に言った宿屋でロンドンの新聞の前でコーヒーをすすっていた。それはいつに増して面白く、またドイツの雑誌は『自分達にない悪を憎み』どれもこれも、毒気のあるイギリス嫌いで煮えたぎっていた。九時にはユダヤ人街に行き、悪名高い海員用安物服屋で値切っていた。九時半には次の様な不徳な電報を上司に打っていた。『申し訳ない。ノルダーナイに行けず。延長許可と思う。連絡先はパリ、ルーブルホテル』。十時には私は完璧なベッドの中、身体を思いきり伸ばし、有頂天だった。次の朝八時二十八分、唇の上に、今までなかった涼しさを感じ、身体も心も今までに無く元気で、ドイツ行きの三等車の中にいた。若い海員姿でジャケットに帽子、毛布を掛けていた。

変装は難しくは無かった。口髭を落とし、ベッドの中で急いで朝食を取り、布の帽子とコートを着て旅支度をした。私は駅でホテルのポーターを帰し、赤褐色の包みを取り出し、コートを取り替えてからクロークに荷物を預けた。赤褐色の包みの中には海用ブーツと下着、それから幾つかの必需品を入れたオイルスキンがあり、全体をタールを浸み込ませたロープで縛った。それは頭の上の棚にあり（頑丈なステッキも）それが私の荷物だ。その中に入っているもの――どこから買って来たかと思うとぞとする――は私のつまらない職業と、隅から隅まで辻褄が合う。国境の税関検問所で検査される事は充分に有り得るからだ。私の北部ドイツ版ベデカーはジャケットのポケットに入れた。

もし質問されたら、私はイギリスの海員で、国境までの切符と、船に乗り込むためエムデンに向かっていると、その場限りの答えを用意している。それ以上、正確な行動計画についてはこれから考える。しかしただ一点は確かだ。二十五日、明日夜、ノルデンにいます。ノルデンはノルトダイヒの七マイル南の小さな街である。昨日、キャビンの中で、私が急いで港町を地図で探している時、ノルデンの事は考えて見なかった。と言うのは、町は海に面しているとは見え無いのだが、デイヴィスは私が寝ている間に気付いた訳だ。私はようやく彼の鉛筆書きのヒントが鋭いのを理解した。地図では、やっと見える程度であるが、彼が言ったクリークとは南西の方に向かってエムズ河口に繋がる。『夜汽車』は完全に条件を満たす。クリークの満潮はデイヴィスが見積もった通り、二十五日の夜は、十時半から十一時だ。そしてノルデンに着く夜汽車は南からの十時四十六分しかない。これは良さそうだ。

私が咄嗟に思いついたエムデンは多くの理由で比較にはならない。例えば、夜九時から朝の一時まで三本、汽車があるのだ、曖昧になってしまいノルデンほど決定的では無い。

そこまではいい。しかし、それまでの間はどのようにして居ようか？ デイヴィスの『質問』に答えるためブレーメンに行つてベームを追う？ これはすぐにやめた。それは他のが失敗した時の行動だ。現時点ではそれは、もう一つの騒ぎを意味する。ブレーメンはノルデンから鉄道で六時間だ。私は限られた時間の中、汽車の中で必要以上に多くの時間を使う事になり、さらに他の変装が必要だろう。それに私はベームについては若干の新情報を握っている。エムデンの駅で汽車がスピードを落とした時、昨日の事を思い出した。彼は以前、潜水艦の技師だと私は知っていた。そして私は運河が彼の新しい仕事領域だと知った――あまりはつきりしないが、一日でこれ以上調べられるだろうか？

するとエセスが残りの今夜はここに行こうと決めた。夜八時過ぎまでかかる面倒な旅だが、そこからノルデンまでは汽車で一時間だ。

そしてエセスで、何をしようか？

一日中、私はミステリーの中心に光を当てようとしていた。日記、記憶、想像、地図、時刻表そしてデイヴィスの汚いメモ、これらは捕まえ処の無い要素である。時々私は驚いて夢想から覚めると、無気力なオランダ人の農夫がパイプを加えて訝^{いぶか}しそうに見ていたりする。

私はドイツ国境ではもっと気を付けた。デイヴィスのメモは直に暗記した。私は彼がストーブにあたりながら、自分の場所で窮屈に、あの手で書いているのを想った。眠気に逆らい、ぼんやりとマツチを沢山擦り、私は寝台でいびきをかいている。うっかりと気が散つて――私は知っている――茶色を帯びたばら色の顔、露の着いた髪、灰色の帽子の夢を見る、メモには書いてないが。私は、彼の消えない『水道理論』への信念に微笑んだ。それにはようやく、彼が無視してきた『本土側』に触れてあるからだ。

結果は確かに面白いが、私は説得力に欠けると思った。ドイツの文書中に、そのような方法による北海沿岸の防衛計画があるのは充分考えられた。七つの島と七つの浅い海峡（しかし、それらの二つ、エムズの双子の支流はそれ程浅くはないが）は検討に値する仮説だ。それは水道理論に非常に良く合う。その本質的利点は私も理解していた。私のいつもの反論は、我々の論じ方に充分近づかない点だ。エセスを頂点とする半島を巡る鉄道の環も、同じ理由で反論できる。全ての軍事的海岸線をもつ国家は防衛のための秘密の動員計画を持つと思う。しかし、

それらは通り過ぎの旅行者には見つけれられない。人目を盗んで探し回る訳には行かないからだ。又、わざわざ、メンメルトの様な行きにくい会合場所を選ぶ理由も無いだろう。

別の弱点はドールマンだ。ドールマンがイギリスに行き、スパイをする。ドイツを含め、全ての国はスパイを使っている。汚いが必要な道具だ。しかし彼は、こちら側の主要共謀者とそれ程近い関係にある。裕福で、影響力があり、地元の問題に力があるドールマン――彼が普通のスパイでは無いのは明らかだ。

そして私は、ここにデイヴィスの大まかなスケッチに躊躇を感じる。手がかりを論理的結論まで突き詰めるのに、何と言うか、気乗りがしていないのだ。彼はドイツの海岸防衛計画を言う。次にドールマンはスパイで、ドイツとの戦時を想定した、イギリスの計画を狙っていると言う。そこで終わりだ。だがどういう種類の計画だ？

明らかに（彼の理論が正しいとして）ドイツ海岸の攻撃計画で、深い海での戦略に反するものだ。でもどういう種類の攻撃だ？ また、彼の言う鉄道の環の解釈が正しければ、あの人里離れた海岸地域への攻撃や侵略は極めて困難だ。彼もしょっちゅう言う様に、蜘蛛の巣の様な砂洲や浅い海で防御されているのだから。

私の考えはベンザーシールでの疑問に戻って行った。『この海岸は侵略可能なのか？』。彼は否定するし、我々が堤防や干拓地を見た限りでは何も分からなかった。彼は今、事実を口に出す事から尻込みし、我々が否定した空想に逆戻りしているのでは？ 私は疑惑で、すっかりじらされてしまった。

ここで、少し私の旅の余談を記しておこう。ラインで汽車を乗り換え、北に向かい、ドイツの船員になった。アクセントの欠陥は殆ど問題にならない――船乗りは数か国語を話す。それにイギリスの船乗りがエッセンスをうろつくとか好奇心をかきたてるだろう。昨日は景色には気をつけなかった。今日は何かヒントが得られそうなもの全てに気をつけた。

ラインからエムデンへと、我々はエムズの谷を降りていく。最初はにぎやかな町や、肥沃な牧草地だが、北に行くに従いヒースの生えた湿地や泥炭地になる。悲しい土地だが、一番まじに見える時だ。その状況を記すと、天気は早朝は冷たく、霞みがかかっているが、日が昇るに連れ穏やかに、明るくなった。しかし新聞によると、気圧は低下していて高気圧は大西洋からの気圧に押されてしまっている。

エムデンでフリースラント地方に入り、汽車は大きな運河を渡った。そしてその日の二十回目（オランダで沢山の運河を、ドイツに入っても少なく無い数だ）を渡った時、私は自分自身に言った。『運河、運河。ベームがどう関係するのか？』。夕暮れだったが、見たことの無い船を見るには充分だった。実際、魚雷艇だが、一方の側の杭に

係留されていた。すぐに、『北海案内』のエムス・ヤーデ運河の項に、軍用船を通せるほど深くウィルヘルムスハーフェンとエムデンの間の戦略的な目的、フリースラント半島の拠点^{せんりやくきょてん}を結ぶために使用されるとあったのを思い出した。フリースラント半島の戦略拠点^{せんりやくきょてん}を結んでいる訳だ。私は、向かいの農夫に訊いたが、それはエムズ・ヤーデ運河だった。デイヴィスは忘れたのだろうか？ 彼の、不完全なスケッチが大分強化される筈なのに。

エムデンの本屋でポケット版のフリースラント測量図を買った。これは以前使用したのに比べ、大変おきなスケールとなっていて、そして私が誰にも見られていない時、いらいらしながら運河のコースを調べてみたが、残念ながら、すぐに熱がさめてしまった。エムデンから北、私の見たものを確認するため、その地図を使ったが、夕闇がおりる中、ヒースや沼地、一度は大きな輝く湖が現れた。時々広い耕作地がある。水分の多い土地が続き、水溜まり、川、数えきれない排水路や排水溝がある。

深い森林も記入してあるが、それはもっと内陸部である。ノルデンを七時に通過し、丁度暗くなった時だ。私はクリークを探して見たが、実際それを駅に着く前に渡っていた。川底は殆ど水が無く、はしけが地面の上にあるのが見えた。ここはエセンスへの乗換駅でもあるので四十五分程待たなければならぬ。そして東に向かい最北端の荒地を抜け、時々村の駅に止まった。五ないし六マイル海から入った処を通っていった。

このあたりを通っていた時は、暗いコンパクトメントの中で、殆どの間一人でいた。そこで今までの考えの糸をまとめ、中心がエセンスとなるケーブルにまとめて見ようとした。ベデカーによれば、『人工三千五百人、肥沃な農業地帯の中心地。美しい教会あり』となる。

エセンスはベンザーシールから内陸に四マイル入った処だ。私はあの日ベンザーシールでの全ての状況を見直し、フォン・ブリューニングがどう私を丸め込んだかについて考えた。彼はエセンスに自分自身で向かい、私の考えを非常に良く読んで、実際一緒に行って見ないかと誘ったのだ。そして私は、彼の賢さを警戒して断ったのだ。ちよつと待て。もし行つたとしても、非常に良く面倒を見てくれて、私は何も重要なものを見ない様にしよう。従つて、秘密はエセンスの壁に大きく書いてないものだ。それはベンザーシールとも関係するのか、それともその間の土地に関係するのか？ 私は測量図を、明るくするためと揺れを少なくするため、立ち上がって再び見た。

エセンスからベンザーシールに向かって北に道がある。点とチェス盤の四角を抜けて行くが、凡例によれば前者は沼地で、後者は耕作地だ。何か他の物にすぐ気が付いた。それはベンザーシールに向かって流れる川だ。港でみた、泥の多い川あるいは排水路だとすぐ分かり、水門または『シール』を通過する。ベンザーシールは

これから名前をつけられた訳だ。しかし、私の注意を引いたのは、それは考えていたものよりも大きそうに見えるからだ。海図は海員に目標となるもの以外は、本土の地理を無視しがちだ。海図ではこの流れはコルク抜きネジ、子豚のしっぽの様な記号で書かれていた。測量図では暗い青の線で書かれていて、『ベンザー・ティーフ』と名が振られ、もっとはっきりしたコースが記入されている。曲がった部分は角度がはっきりし、ある所では、人工的と思われる、直線となっている。頭の中にある混乱した糸、つまり運河の糸は、同情する様に刺激を発し、電流が流れる電線のようなと思った。

両方の席に足を乗せて立ち、地図をさらにランプに近づけて『ティーフ』のコースを南に辿った。それはエセンスに向かう道から斜めになって離れ町の西、一マイル位の処を通過し、鉄道の下をくぐる。そのあと、じきに東向きに方向を変え別の南西に向いた青い線に合流する。『エセンスーウィットミュンデ運河』とある。しかし、この運河は近くの町、ウィットミュンデまでの半分位で突然終わる。

その日始めて、本物のインスピレーションを感じたと思った。あの小さい水深と短い距離、何分の一メートルとキロメートル、これはベームの口からメンメルトで聞き、デイヴィスは外側の水道だと想定したものだーこれは運河の事では無いのか？ ベンザー・シール港ではしけを見たのを思い出した。宿屋で地元の連中と話した時の、郵便局長の大げさなおしゃべりの断片、仕事が増えていること、レンガや穀物がが内陸から島へ運ばれていることも思い出した。誰か他の人ーワンガーオーゲの八百屋だったか？ーからはリゾート地として、島の仕事が拡大していると感じた。また別の情報源ーフォン・ブリューニング自身からだードールマンが島の開発に関わっていることを聞いた。このはっきりしない関係があり、エムス・ヤーデ運河に魚雷艇を見た。

この考えが浮かんだのはドーナムとエセンスの間だった。そしてまだ私がそれに集中している時、ちょうど九時、目的地に汽車が着いた。何人かの乗客に混じって十分ほどエセンスの石畳を歩くと、我々が、あんなにも頻繁に海から見た教会の大きな塔が、月の光の中、そびえたっているのが見えた。

第二十六章 七つのシール

私が見つつけられた、一番粗末そうな安宿を見つけて、私は荷物を下ろし、ビール、パンとヴルストソーセージを頼んだ。主人は私の想像通り、フリースラント方言を話し、そのため中々理解し難かったが、私のドイツ語のアクセントを全く気にしなかった。彼は中々立派な男で親切に心配してくれた。

「宿泊するか？」

「いや、ベンザーシールに行く」私は言った。

「そこで泊まり、朝の郵便船でランゲオーゲ島に行く」（私は、我が友、二人の双子の大男と彼らの仕事を忘れてはいない）

「島の人間じゃないのか？」彼は訊いた。

「違う、だが俺の姉がそこで結婚している。一年船に乗って、戻ってきたばかりでそこへ訪ねて行く」

「ところで」私は訊いた。

「ベンザーティーフでは、どんな具合だね？」

彼は肩をすくめ、これで終わりだと思ったようだ。

「ウィットムントへの延長は？」

「まだ工事中だよ」

「じゃ、ランゲオーゲの方が先になるかね？」

「ああ、あいつら、そう言ったけどな、こんな話し、自分でも信じていないのさ」

「でも商売にはいいだろう？ エセンスは荷物を『ティーフ』から送れるしねーどの位船がでているの？」

「何艘かのはしけが増えた程度さ。レンガ、材木、石炭とかね」

しかし、彼はこれ以上知らない。

「アクティージェゼルシャフテン（会社）は悪魔の発明さ。一握りの奴らがつるんで土地だの契約だので金をもって行くんだ。株主はごまかされ、腹を空かせるだけだ」

「なるほど、そうかも知れないなあ」私はこの偏屈な時代遅れをなだめた。

「俺のランゲオーゲの姉さんはドールマンで男から宿屋を借りていてね。凄い土地持ちだっていつてるね。

そいつのヨットを一度見た事があるーピンクのビロードと電気が付いているってさ」

「ああそいつだ」と主人は言い、

「何人かいるよー何か外国人だとか。サルベージもやってる、ユイストの方でね」

「ま、あいつには俺の貯金は渡さんがね」と笑ってそこを出た。そして通りがかりの人にドーヌムへの道を訊いた。
「線路に沿って行きな」と言われた。

南西からの暖かい風を顔に受け、羊の様な雲、半月を頭の上に見ながら私は歩き始めた。ベンザーシールでは無くベンザーティーフへ向けて。それはドーヌムへの道のどこかで横切るはずだ。線路のすぐ側の溝や柳がある、丸石を敷いた道を一マイル位行つた。そして橋があり、その下が『ティーフ』で、実際小さな運河である。道から、わだちの多い小道がそれて行きその片側に通じる。簡単な側線が線路から分岐、その反対側に下っている。

私は少しの間、パイプを点け、欄干らんかんに腰を下ろした。誰も気にしない様なので、非常に注意深く、左岸を北の方へと偵察を始めた。坂は柵で囲まれた、鍵のかかった門があつたー簡単に乗り越えられたが、橋を廻ってそこから見た方がいいと考えた。囲いは小さな石炭置き場で、ただそれだけだ。山のような石炭が月の光に光っている。半分積んだはしけがそばに泊まり、誰もいない事務所があつた。私はこそそと砂っぽい川沿いの道を進んだ。誰もいない。周りは地図の通り、湿地と耕作地だ。柳、ぼんやりした牛の姿、邪魔されずに吹く低い風の音。

一、二度は驚いた鴨の鳴き声。

間もなく、暗く静かな農家が現れた。向かい側の運河の中には何艘かの空のはしけがある。私はこの内の一艘に乗り込み、ステッキで右側の水深を測つてみたーたった三フィートである。魚雷艇は私の予想から消えてしまった。その川は二艘のはしけが楽にすれ違うだけの幅しかない。別の農家が現れた、あるいはそう思った。さらに何艘かのはしけが暗渠あんきょに係留されているが、何も目立つ物は無い。それを頭に入れて、線路のウィットムント側を探索しなければならぬと思ひ戻つた。既に多少、落胆していたが、期待を失つた訳では無い。

道と線路の下をくぐり、私は再び川沿いの道を行き、半マイル程で森にぶつかった。そこに開いた場所があり、柵で囲まれた、材木置き場らしい処へ出た。ここでは私は私はズボンを脱ぎ、ぬかるみを歩き再びズボンをはいて柵に登つた。(小屋があつたが、中の連中は明らかに寝ていた。)私は材木置き場に出たが、木材の山と蒸気動力の鋸がある。しかし単なる材木置き場以上のものがあつた。用心深く、開拓地の縁の木の影響を進むと、妙にメンメルトのそれを思わせる、トタン製の長い建物があつた。その下、運河の近くに暗い構造物の枠組みがあり、それは半分完成した船の在庫だ。近くには似た物、しかし完成に近いものがあつたーはしけだ。舗装した船架がここで水に沈み、運河は広げられ係留場所あるいは船の引き上げ場所となつていて、七、八艘のはしけがある。

私は別の柵を乗り越え、さらに三マイル程歩いたと思う。そこで、今日の泊まる場所とその先の問題に気付き立ち止まった。今は真夜中過ぎで、殆ど新しい情報を得ていなかった。私はレンガ敷の場所に出たが、その少し後は、運河はまだ運搬の為には使われていないという証拠が積みあがるだけだった。段々狭くなり、その改修の跡があちこちにある。一つの場所では、運河から反れる、ダムのような掘り下げがあり、明らかに急すぎる曲がり無くするためである。道は酷くなり私のブーツは泥だらけになった。突然終わっている青い線を気にしながら、これ以上進むのは無意味だと考え引き返した。一時半かそこらにノックをしたのは、浮浪者でも気違いでもない真面目な旅行者だと、エセンスのいらした宿屋の親父さんを納得させる話しを考えながら。

しかし、材木置き場に近づいたところで、もっとずっと実際的方法を思いついた。そこにただで、簡単に泊まれるのがあるではないか。ひっそりした場所のはしけに入り込み、その日の寝場所を調べた。既に見た他のものと同じ様な形であるが、本質的に軽量だ。というのは推進装置が無く、乗員のための区画もない。船体すべてに荷物が詰め込める。船首と船尾に十フィート位のデッキがあつて、柱や係船柱が付いている。他は広い運河に囲まれた井戸と言つてもいい様なものだ。すべて頑丈な作りで、詰まらないはしけにしては、いい形態をした優美なデザインで船首がしっかりと切り立っている。そして他の船を見ると、船尾も綺麗な形である。つまり、私の様な無知な陸の人間にでも、この船は運河向けに設計されたのではなく、もっと荒い海向けだというのが明白である。またその必要がある。島までは、数マイルの浅く、外洋から守られた海を行くが、突然の強風時には荒れた大波に叩かれるのを、経験で知っていた。ただし、私が、この点を気にしていたと考えてはいけない。私は確かに、限定的には前進していたが、まだ想像力はうなだれていた。さもなければ、はしけを単に都合のいい隠れ家としてでは無く、多分、もっと具体的に調査すべきだったのだ。船尾デッキの下には大きな帆布が丸めてあり、その隅は結構な毛布代わりとなり、私の包みは枕となった。昨日の夜からは大分酷くなったが、スパイは二日間も羽毛のベッドを期待してはいけないなどと、哲学的な事を考えた。それにここは『ダルシベラ』の棺桶かんおけしんだい寝台よりも換気がよく場所も広く、それほど硬くもなかった。

快適に収まると、私はマッチの灯を何回か点けながら地図を見た。この三十分程で、この運河は幾つかの内の一つだと、私には分かり始めた。エセンスとベンザーシールに集中していたため、忘れていたが他にもシールで終わる町があり、地図上には同じコルク栓ネジで書かれている。さらにベームの深さと距離の数値は、からのまで、七つに分類されていた。最初のマッチで村を全て思い出した。シールという言葉が海岸線に繰り返し現れる。

ベンザーシールの四マイル東はノイハルリングーシール、その先はカロリーンシールだ。四マイル西にはドルヌマーシールそしてその先にネスマーシール、ヒルゲンリーダーシールだ。半島の北側だけで六個所ある。エムズに向きあう西岸にはグレートシール一個所しかなく、ノルデンのずっと南だ。

一方、ヤーデに面した東側には、少なくとも八個所、非常に短い区間に集中してある。少し考え私は、この後の方は外す事にした。これらはエセスとは関係無く、商業用通路としては、まったく存在理由が無いのだ。この面から、北側の海岸の六個所のグループとははつきり異なる。北側の見地からは、島を結ぶチェーンであり、本土側の中心は殆ど正確にエセスなのだ。未だ七つにするには一個不足し、仮説のため孤立したグレートシールを追加していたが、すべての村で川は、ベンザーシールの様に口を閉じられている。七つの全ての処から点線は海に向かい、潮汐の大きな砂地を横切り島に向かっている。七つの部分の背後、本土上には鉄道が環の様に敷かれていて、一つのシステムとしてまとまる。しかし、多数の細かな違いもある。どれもベンザーティーフの様に深く、決定的ではない。どれも後背地にベンザーティーフほどは深く達してはいない。長さも、曲がり方も異なる。さらに、ヒルゲンリーダーシールとグレートシールの運河は鉄道までは全く届いていないようだ。一方、ワンガーオーゲ島の向かいのカロリーンシールには専用支線がある。

この謎の七を考えている内に、マッチが次々と消えていき、とうとう迷いながら寝てしまった。ただ明日、ノルデンに帰る道、もつとこの整備中の運河——本当にこれが整備中ならば——を調べようと決心していた。その夜の私の夢に出て来たのは、連携する強力な要塞と、荒廃した小島の砂丘に潜む、隠された砲兵隊だった。サンゴ礁の様に極めてゆつくりした、秘密の働きで作られ、はしけに死の積み荷を乗せ、人目を忍び、あろう事がグリムに似た男に操られる。

私は夜明けに起き（天気は穏やかで、にわか雨）、そこを離れ、道に戻る途中で何人かの工夫にあった。彼らはお早うと言い私を見つめた。橋のところで立ち止まり、どうすべきか大分迷った。沢山のすべきことがあり、時間は余りにも少ない。全ての問題が七倍された様に思われた。さらに合計は倍、倍と増えた——陸の七本の青い線、海の七本の点線、近くの七つの島。

一度私は、今の変装をさらに一歩進め、ランゲオーゲに渡ろうかと考えたが、それはランデブーを取り逃がす事になり、それは出来ないと思った。

いずれにしても、まず朝食を取る必要がある。一番いい方法であると同時に、新しい土地を知るためドーナム

まで歩く事にした。そこで私はノイエスティーフという、海岸線上のドーナマーシールに繋がる青い線を見つけた。それが済んだら、別の青い線がネットセマーシールに繋がるネットセに行ける。これらは全てノルデンに向かう道にあり、いつも後ろに線路がある様に進み今夜ノルデンに行く訳だ。最終列車（私の時刻表による）はノルデンに七時十五分に着き、これには、ハーゲ駅で七時五分に乘ればいい。

六マイルを急いで歩き、非常に腹を空かせてドーナムに着いた。道路と鉄道はずっと並行していて、大体半分位の処で左側にちっぼけな川がさらに合流した。地図によるとノイエスティーフの上流部分である。ウナギの様にぐにやぐにやと曲がったり、倍の幅になったり、菅や葦で塞がれたりし、とても航行出来るとは見えない。とうとう沼沢地の方に曲がっていき、視界から消え、ドーナム近くで再び、しかし大分立派になって現れる。

鉄道が渡るところには、側線は用意されていない。川は町の東側を流れるが、ここから側道が現れ、積み上げた岸壁も最近建設されたものだ。岸壁沿いに赤いレンガ作りの建物があり、倉庫の様に見える。まだ屋根はなく職人が足場の上にいた。さらに腹がへってきた。

もう少し賢かったなら、カウンターでスナックでも買って満足すべきだったが、熱いコーヒーが飲みたかったのと、手がかりを探したくて、エセンスで同じ実験をしようと思い、粗末なビール酒場を探す事になった。でも今回はあまり付いて無かった。酒場は本当に目立たない処にあったが、経営者は単純なフリースラント人では無く、怪しいならず者の様で、ずるそうな眼と、墮落した顔つきで、客の興味に最も迷惑そうな態度を見せた。最後に止めを刺したのは、彼も私と同じ様な帽子を被り船乗り上がりだったことだ。もし、そいつを最初に見たならさっさと逃げ出したのだが、だらしない女が最初に応対し、私を見せるため、主人を引っ張り出したに違いない。泥だらけの靴とズボンを説明するのに、私はエセンスから歩いて来たといい、それ以降は即興の嘘で固めるはめになった。もたもたと、同じ手口を踏襲して、今度は、姉はバルトラム島に居る事にして、島に渡るため、ドーナマーシール（バルトラムの向かい側）に行くことにした。

これは、やまを賭けることなので、私は地元を知っている振りはやめ、始めてここにやって来た事にした。ドーナマーシールの賭けは幸運であって、ガリオット船のフリーがバルトラムまであった。だが酒場の主人はバルトラムを知っていたか、あるいは知っている振りをして、私の姉は聞いたことが無いといった。それを聞いて、私は神経質になり、そいつが私を最初から、殆どの商船乗りよりはましな格好をしていると思っているのがわかり、さらに悪い事に、急がせた時に、軽率にも金鎖と印鑑のついた金時計を内ポケットから引っ張り出してしまった。

彼は私に急ぐ必要は無いと言い、ドーヌマーシールの潮には間に合うと言った。そして私に強い酒を勧め色々訊き始めた。その、粗野で媚^こびる様な調子からその経歴がわかってきた。ある時期、その男は解雇された海員を食い物にする、ドックの当たりにうろつく、あの悪辣^{あくらつ}な鮫に違いなく、しばしば元は船員で彼らの仲間の弱みを良く知っている。

そいつは、今私を掴んでいる。残念なことに、彼のかつこうの餌食だと証明してしまい、さらに悪い事に金の時計と一杯の財布をもっているのだ。これ以上に都合が悪い、あるいは危険な事が私に降りかかるとは思えない。この連中は給仕やコンシェルジュの様に国際的で、言葉に敏感で国籍を嗅ぎつけるのに長けている。実際、私の国籍を見た様でアメリカ訛りの少しある、かなり達者な英語で挑戦して来た。想像上の姉に縛られ、私は、勿論嘘に固執^{こしつ}し、イギリス船に長かったので、アクセントを拾い上げたとか、下手な英語を話して見せた。同時に、こいつは失礼な奴だと態度に見せ、金を払って外に出てこれを振り払った――訳には行かなかった。とんでもない！ 彼はドーヌマーシールに行く道を教えると言つて道をついて来た。

そして彼が、早い時間なのに一杯飲んでいたので、敢えて男と喧嘩^{けんか}する様なことは避けた。この私をすでに充分知りすぎているだけでなく、いつさらに引き出すか分からないのだ。そこで、私は軟化し、機嫌を取りジンを奢^{ちか}り逃げ出すつもりだったが――悲惨な事になり、さらに他で一杯飲む先例となってしまう。この平和なドーヌムでの恥^ちずべき行い、自分の友達だと紹介した時の恐怖に喜んで顔をかくすところだ。そして彼のイギリス人の友人として、自分を卑下しながら腕組みをして、港の方に三マイルも歩いていった。

そいつの悪意のある気まぐれで、我々は英語で話す事になり、しかしそれは幸運に転じた。私は水夫ドイツ語など全く知らないが、なまかじりの水夫英語ならカトクリフ・ハインとキプリング⁹⁵で知っていた。これらを即興で使い、いかかわしい混ぜこぜ英語――殆どが呪いと冒流^{ぼうりゅう}――を使って架空の航海を作り上げた。勿論、彼は世界のあらゆる港を知っていた。だが幸いにもどれも、何度も飲んだシユナップスのため際どい事にはならなかった。

それにも拘わらず、あらゆる面から恐るべき挫折であった。道はノイエステーフとは逆方向だったので、時間を無駄にし運河を調べることも出来ず、それには海に着いた時に出くわす始末だ。そこでは二つの口に別れて、どちらも閘門があり、二つの『泥の穴』の港になっている。ベンザーシールの複製の様で、どちらも家の塊がそばにある。

⁹⁵ Cutcliffe Hyne. イギリスの小説家でアトランティス大陸物で知られる。

私はドーヌマールシールの停船所に直行し、同行者に港のボートを見て来るまで待つようお願い、もちろん言うまでもないが、彼の処には戻らなかった。

私は簡単に左側の港を眺め、ハッチが閘門を通過するのを見て（満ち潮だ）、一番外側の堤防まで出来るだけ早く歩き、登り、西に向かって、冷たい雨の中を海の方に行った。あの憎むべき邪魔者じゃまものが、私が消えたのに気付く位素面しらふになった時、引き起こす騒ぎを心配しながらだ。

安全と思った頃に、砂に飛び降り走れなくなるまで走った。それから堤防を背にして自分の荷物に腰を下ろし、多少とも雨をよけた。平地から海が引いて行き、小さな湖にやせ細り、積み重なった雲が島の上を渡り、それらのうす暗い形が霞み、見えなくなった。私が閘門を通るのを見たはしけは、ランゲオーゲの方に向かってタグボートと、煙の切れ端に引かれよたと進んでいった。

もう昼間の探索は中止！これが私が最初に決めた事だ。あたかも国中が変装したイギリス人の報告で沸き返っている様な気分になった。私は夕暮れまで隠れていて、鉄道に戻りノルデン行きの汽車に乗る。そして、一時的に活動休止とし、ランデブーの事を考えると、新しい疑惑に襲われた。昨日はノルデンこそランデブーの場所だと全く疑わなかったが、それは七つのシールが目立つ前だった。今はノルデンという名前はそれを支えるものが無く、納得出来なくなってきた。何故なのかと考える内に、突然、全ての北部の線上の駅は、『ノルデン』より内陸にあるとは言え、湾岸の港（ま、その類）で連絡される『港駅』と思い始めた。ノルデンには潮の上って来るクリークがあるが、エセンスとドーヌムも『ティーフ』または運河がある。『潮が使える』という言葉文字通りに取って来てしまつて、何と馬鹿なのだろう！、どこに、最も陰謀者がやって来そうなのかーノルデンというのは純粹に仮説なのだ。私の最新の観察により極めて重要になった、七個所にまたがる包括的地域の中のシールのどこかでは無いのか。

答えは一個所しか無いのに、私は途方もない落胆を感じた。七か所のランデブー地の可能性ーノルデンを入れると八個所だ。どこに行くべきか？時刻表と地図を取り出すと、希望もついて来た。結局、事態はそれ程酷くないかも知れない。すぐに計画を変更する必要は無い。もっとも、深刻な不確実性とリスクはもたらした。

ノルデンは未だ目的地である。しかし主として乗り換え駅としてであり、港としては二次的である。有り得るランデブー地点は八個所であるが、最寄り駅としては五駅に減るのだーノルデン、ハーゲ、ドーヌム、エセンス、ウィットムントーすべて一つの線上の駅だ。東から、西へ向かう汽車は無視できる。夜汽車と呼べるものは無く、

最終は今朝私がこれに乗ろうと決めたものでノルデンに七時十五分着だ。西から東については、一本だけ考えればいい、つまり昨日私が乗ったものだ。ノルデン発七時四十三分、エセンス着八時五十分、そしてウィットムント着九時十三分だ。この汽車は、私に付いて来た読者はお分かりであろうが、エムデン、そして南からの別の列車に連絡する。さらに、私は今気付いたが、ハノーバー、ブレーメン、そしてベルリンからの列車にも連絡する。読者は、私が七時から七時四十三分までノルデンで待たねばならなかった事も覚えていよう。

従って、ノルデン駅プラットホームで、私が東から着く筈の七時十五分から、ベームと彼の未知の連れが東に向かつて出発する七時四十三分の間待てばいい。その半時間が陰謀者の少なくとも二人を見極める時間なのだ。私は、彼らが乗る列車に乗り彼らの降りるところで降りる。もし、彼らを全く見つけられない時は、ノルデンがランデブー点なので、十時四十六分まで待つ。

その間、夕暮れまで静かにしていると問題無い。しかし、一時間程休んだ後服も脚も濡れてしまい追って来るものも無いので、外に出て見たくなった。明るいうちは村や道を避け南西に野原を横切った―淋しい、面倒なコースで水の染み出る沼地や膝までの排水路を通り、農夫に出会わないように回り道をし、堤防や柳の影でこそそこそ何回も身体を伏せた。私の知ったごく僅かの事は、前の探索結果と整合がとれる。ネッセマーシールから始まるハーケティーフを横切ったが、それも運河の性格をもち、私が見たネッセの南の所ではまだ初期段階だった。分岐路は工事中で、川を少し下ると、別のはしけ製造所があった。七個所の四番目のヒルゲンリーダーシールについては時間が無く、全く見ることが出来なかった。七時にはハーゲ駅にいたが、はしけの寝床を離れて以来、合計二十マイル近く歩いたので、非常に疲れ、濡れ、そして足が痛んだ。

ここからノルデンまでは汽車で十分の距離で、その間ライ麦パンと、燻製のウナギを食べ、靴とズボンから泥を落とすのに使った。駅に着くと疲れは消え、重要な二十八分が始まった。かさばるマフラーを上につけ張り上げ、ジャケットの襟を立て、私は上りのプラットホームに急ぎ、大胆に切符売り場に行った。そこですぐにフォン・ブリューニング―平服のフォン・ブリューニングを見た。背が高く、頑強で、端正な顔立ち、綺麗な茶色の顎鬚なので間違えることは無い。彼は、切符とコインを手にして、売り場から離れるところだった。私は四、五人の列に並び、彼が立ち去るまで、人の影とパーティションに隠れた。彼が買った切符の駅を聞いていないので、全ての場合を考え、ウィットムントまでの四等切符を買った。私の顎をマフラーに隠し、うす暗い、酒場と待合室を兼ねた部屋が一番暗い隅を探した。そこはドイツの面倒な習慣で、列車の用意ができるまで、旅行者が囲いこまれるところだ。

フォン・ブリュニングは、帽子を眼の下まで被り、葉巻を啜えて、別の隅に座っていた。ボーイが黄褐色きかつしよくのミュンヘンビールのジョッキを持ってきて、それをすすりながら観察した。人々は出たり入ったりしたが、その平服の水兵には、誰も話しかけなかった。

十五分経つと、プラットフォームドアが開いて、騒々しい声が『ハーゲ、ドーナム、エセス、ウィットムント』と叫んだ。旅行者の一群が、プラットフォームに向かい、切符を見せた。私はビールをゆっくり飲み、最後だったが、フォン・ブリュニングは私の眼の前で、葉巻の煙が私の顔にかかって来た。私は肩越しに彼の切符を見たが、駅名は分からなかったが、それをチェックした駅員が二つの音節を呟くのを聞いた。覚えていた駅名を思い出し、エセスだと分かった。今はそれが分かれば充分だ。私は四等の客車に向かい、獲物えものを見失ったが、用心して最後のドアが閉められるまで窓から首を出さなかった。私が首を出した時、二人の遅れた客が急いで客車にやって来た。一人は背が高く、もう一人は中背で外套を着て毛布96を持っている。顔は分からなかったが、どちらもベームでは無い。待合室のドアからやって来たのでは無く、明らかにそれまで待っていた、プラットフォームの暗い隅からやって来た。車掌がぶつきらばうに文句をいい、彼らを車内に入れると汽車は動き出した。

エセス―この名前で驚いた訳では無い。午後の間、段々強くなって来た予感に合致する。私が、地図を見たのはこの時が最後となった。その日の酷使で、紙はよれ、印刷もはつきりしなくなっていたが、私は頭に刻み付けようとした。ベンザーシールへの道、それがベンザーティーフが海にでるまでに、どう合流するかだ。『潮が使える』時間はどうか？。デイヴィスが助けてくれないかと思いつきながら、私の日記により、ベンザーシールの満潮は大体十一時だと思い出し、およそ二時間（今日の夜は十時から十二時）港は五ないし六フィートの深さとなる。

我々はエセスに八時五十分に着く。フォン・ブリュニングが一週間前にしたように、彼らは馬車でいくのだろうか？。私はベルトを締め、泥で汚れた靴をバタバタさせ、ミュンヘンビールが飲めたのに感謝した。ベンザーシールから何処へ、どうやって彼らは向かい、私はどうやって追跡するか？。これらは、はつきりしない疑問であるが、何でもやる気になっていた。ボートを盗むのだって、些細な事だ。運命が微笑んでいると感じた。ロマンが呼んでいる。海さえ親切に見えた。想像力は柔軟になり、既に、麻痺まひしていた羽が動き始めたのを感じたのだ。

第二十七章 密航者の幸運

エセス駅ではノルデンでの戦術を反対にして、一番先に飛び降り、最初に出口のドアまで行き、切符を渡し、出口の近くの暗闇に隠れて待っていた。幸運はまだ私に微笑んでいた。何の車も待つてはおらず、ほんの五六人しか降りなかった。二人はノルデンで遅れそうになった外套を来た二人、そしてフォン・ブリーユニングだ。彼は最初の二人よりずっと前を行ったが、大通りへの門のところ、三人の目的地は共通だと分かった。他の乗客はエセスの街の方に向かったのに、彼らは南に向かった。これは不思議なことだと思った。つまり、ベンザーシルや海とは反対の方角だからだ。私は、荷物を肩に寄せ、彼らの後について行き、影が右に曲がったので、結果を予想せず同じ様にした。五十ヤード先で道は踏切の遮断機で遮られ、私は引き帰す時間がなかった。四人とも、汽車が通過するまでそこで足止めされ、待つことになる訳だ。実際こうなってしまう、一、二分の間我々は一塊で、お互い苦心して知らんふりをして無言だったが、私はもちろん気にしていた。

私に関しては『秘密の笑いが心の中に広がった』。遮断機があくと、三人はわざと遅れるようにしたので、私はそれを感じてさっさと進み、暫く経った後、止まり聞き耳を立てた。何も聞こえないので、注意深く戻り彼らが消えてしまったのに気が付いた。私は草の生えた小道に来て、左あるいは右の畑に続くが、誰も見えない。しかし遠くで何か話す声が聞こえた。私は周囲の様子を注意深く窺い、その道に一步踏み出したが、よく考えエセスの方に戻った。私は地図を見なくともその道が、材木工場付近でベンザーティーフに続いていると分かった。霧の中ならつけたかも知れないが、その夜は、暗くは無く、また私は自分の体力を大事にする必要があり、『潮が役立つ』という語が私には焼きついていていた。

私は時間と体力をうまく使い、最短距離でベンザーシルまで行き、彼らには曲がりくねったティーフを通らせる事にした。その視察が彼らの目的の一つであると、確信を持っていた。

曇った月に光暈こううんのかかった、澄んだ空気の荒れた夜で、九時だった。静かなエセスを過ぎ、一時間後にはベンザーシルの近くに到着、海の音が聞こえた。グリムが街の外縁で訪問者を待っている筈だと思ったので、村に着く前に道から離れ、堤防沿いに迂回うかいして海にでた。宿屋の下側の窓が暖かい光を夜の中に放ち、中では村の連中がカードを前にして集まっているのが見え、昔通り、独断的な背の低い郵便局長が牛耳っているのが見えた。高い興奮した声は聞き覚えがあり『ファイネシュナップス』を肘のところに、帽子を阿弥陀あみだに被っていた。

港自身は一週間前に見たのと全く同じ様だった。郵便船が東側の棧橋、いつもの場所に泊まっていて、メイン

セールは用意され、二人の双子の大男は手すりから唾をはいていた。大胆にも岸から彼らに声をかけ（自分が誰か見せずに）、彼らはランゲオーゲに向かって数分の内に出発だと言った。風は海に向かい、郵便は積み込み、水は丁度充分になったところだ。『乗って行きたいか？』『いや、待つことにする』。私は、待ち人がここにそんなに早く来るはずは無いと分かっていたが、ガリオットが、とも綱を解いて滑り出すのを見送った。これで、一つの偶然が無くなった。ぶらぶらしていた何人かも居なくなり、全ての港の業務は終了した様に見えた。

四十五分程の、はりつめた緊張が次に続いた。殆どの間、私は堤防と西の棧橋の間の影に膝をついていた。そこからは港の水面が観測できる。しかし時々、身体をほぐすため突撃し、だんだん大胆になった。橋を越えた道まで偵察し、閘門を動き廻り、宿屋の酒場を覗きこんだが、グリムの姿は見えない。港に浮かんでいるもの全てを調べ（数はごく少ない）、二艘のはしけに乗り込み帆布の下を覗き、誰もいないタグボートに乗り込んだ。二、三の出来の良くない手漕ぎボートも係留されていた。

これらの内、一艘だけが準備ができていて、後はオールもオール受けも無く、ボート盗みがいても、やる気を無くさせる。このボートを見ている時、最後のしかし、最もかけ離れた可能性があるのに気付いた。つまり、ボートが待っている可能性で、もしボートが待つならば、港である必要は無い。堤防の外側の砂の上のどこかで、この潮時では十分な水があるのだ。

それでは堤防に戻ろう。しかし私が途中で海の方を見ると、偶然は消滅し、確かな現実が現れた。汽船の光が港の口を目指しているのが見えた。船が棧橋の間に入って来る間にやっと優位な位置に戻ると、船のスクリュウがシュツシュツ音をたて、向きを変え一つのはしけの前に停船した。私の隠れているところから、五十ヤードと離れていない。

デッキの男がロープを持って岸に飛び降り、舵をとっている男はぶっきらぼうな指示を出した。船は小さなタグボートで、舵を取っていた男は、エンジン停止を命令すると、同じ様に岸に飛び降りた。時計を船の側灯で見ると村の方に歩き出した。その背の高さと造りからグリムだと分かる――長い防水コートを着て暴風雨帽を被っている。私は彼が宿屋の窓からの光の中を通り、運河の方に消えていくのを見た。

他の水夫が現れ、タグボートの係留を手伝っていた。そして二人は一緒に船尾に行き、私には分からない仕事を始めた。その操作はすぐに二人の水夫に引き継がれ、前部のロープを引っ張っていた男がマスト上のライトに照らされた。出ていくのは極めて危険なので、私は自分の仕事にかかった。包みを開いてオイルスキングジャケットと

ズボンを引っ張り出し、重ね着をして、今までの帽子の代わりに暴風雨帽を被った。

私は横になり――と言うより、斜めに立って――ごつごつした防波堤の壁のブロックの裂けめに足をかけ、ある種体操の模範演技の様だった。そして波は下の方で砕けている。しかし、私は伊達に『ダルシベラ』に乗って来たのでは無い。私の思考の流れは、思うに、何か次のようであった――タグボートは例の連中を乗せていく、手漕ぎボートでタグボートは追えない、従って私はタグに乗って行く必要がある、最も確実なのは乗組員に似せる事だ。

しかし、次のステップは簡単では無い。乗組員は仕事を終え舷牆に一列になりパイプを点けている。しかし、直に楽しく、しめたと思わせる身振りを始めた。どうも相談しているらしくタグボートから飲み屋、飲み屋からタグボートを見ている。一人が何歩か飲み屋の方に向かって歩き他のを手招きし、そいつは機関室の天窓越しに、下を呼びかけ、合流し、急いで飲み屋に向かった。私はこれを見ている間にもブーツを脱ぎ、すぐに腕に抱え靴下のまま泥の上を跳ねて行った。一ダース程の忍び足で、私は舵輪と煙突の間の舷牆に乗り込み、隠れ場所を探した。普通の密航者は船倉に隠れるが、ここには汽灌室^{きかんしつ}がなく、さらにそこには人がいる。宝島のジム・ホーキンスの様に便利な空のりんご樽も無い。私に見える限り――天窓を警戒して余り進む事を敢えてしなかった――デッキ上はどこにも安全な場所は無い。しかし先の方あるいは右舷、船尾に小さなボートが柱に吊つてあり船外に飛び出している。それは常識的に見て、また多分、後の使用法を予見して抵抗し難いものがあつた。とに角、待遇などは考えず、舷牆に乗り込んで、そっと私の隠れ家に潜り込んだ。滑車が少しキーキー言い、オールや座席が邪魔になつたが、のどの乾いた無断外出者が戻る前に二つの腰掛梁^{こしかけはり}の間の床板に落ち着き、必要ならば船縁から覗くことができる。

二人の水夫は走って帰って来て、間もなく声が近づいた。私はシェンケル氏がべらべらとおしゃべりしているのが分かった。彼とグリムがタグボートに乗船してきて、船尾階段を降りていった。私が覗いて見るとその近くに二つ目の天窓があり――『ダルシベラ』のより小さい――下から光が漏れていた。それからコルクを抜く音とグラスが当たる音がして、一、二分の内に彼らはまた出て来た。シェンケル氏は明らかに、船に残り楽しむとしており、グリムは彼をあからさまに追っ払おうとしていた。前者は明日の潮でいだろうと言っていたが、後者は船を出せと命令していた。そしてとうとう怒り、呪いながら潮が引き始めていると言った。彼は出発しなければならんと言ひ、事の決着をつけるため、短くお休みと言ふと、舵輪の所に行きエンジン始動を命じた。シェンケル氏は陸に降り、酷く腹を立て、もったいぶって歩いていった。その間に船のスクリーンは回転始めた。ほんの数ヤード進んだところでエンジンが停止した。短い汽笛が鳴り私が将来を考え直す前に、堤防の方から小走りの

足音が聞こえ、土手に近づきデッキに上がってきた。最後に来た奴は聞こえる位、息を切らせていて、乗り込むと厚板の上にどきっと、大きな音をたててひっくり返ってしまった。乗組員の数が揃いタグボートは港を離れたが、一隻だけでは無い。船がゆっくりと動きだすと、突然船体が強く引かれたが、回復し加速を始めた。何かを曳航している―何を？ 勿論、船尾に横たわっていたはしけだ。

私には、何がはしけに乗っているか今、分かった。それは半時間前に見ていたからだ。危険な荷物では無く、普通の家庭用石炭だ。全荷重では無い事を思い出した―船の中央にかなりの山が、動かない様に、前と後、木に支えられている。『フム』と私は考えた。『これは分かり易い。グリムは表面上、メンメルトに石炭を運ぶと言う訳だ。しかし、我々はメンメルトに行くという事なのか？』同時に、私は事務所で聞いた言葉『一つでいい―半荷重だ』を思い出した。どうして半荷重なのか？

何分間か、デッキでは盛んな動きがあった。グリムが命令を叫び、遠く離れたはしけから答えが返って来た。しかし直に、タグボートは仕事に熱を上げ、船体が力強く震えた。そして命令により船上は静かになった。私は又、杭を打った水道から出てから西に向かったのに気付いた。いい風が吹いていたが、それが左舷からの強風に変化したのだ。

私は驚の巢から覗いて見て、音を立てず、適切な用心をする限り、このボートが必要と成るまでは完全に安全だと思った。デッキ灯は無く、二つの天窓は非常に明るい光を放ち、私は側灯の後にいる。舵輪の後ろでもあり、距離については、ぞっとする位近い―十二フィートというところか、そしてグリムが舵を握っている。

ここで言うておいた方がいいと思うが、舵輪はよくある様に持ち上げられ、演壇えんだんの様な物の上にある。二、三段の階段を上り、胸の高さの板で丸く囲まれている。乗り組み員の一人しか見えず、彼は舳先の最前方で当直を努めていて、マスト頂上に点けたライトにより―曳航のため、二個目のライトが点灯されている―オイルスキンの背中が光って見える。従って、他の一人がはしけを操舵そうだしていると結論した。はしけは船首の暗い泡でそれと分かるのみだ。

乗客はどうした？ 三人、皆船尾にいる。船尾の手すりに寄りかかりながら、私に背中を向けている。一人は背が低く頑丈な身体―疑いなくベームだ。息を切らせ、床板のどきどき言う音で分かった。しかし彼がどこから出現したかは分からない。二人は背が高く一人はフォン・ブリュニンングに違いない。四人いる筈だが、三人しか見えない。四人目はどうした。『どうしても来ると言う』と言った男に違いなく、未知の上位の男でこの秘密の航海は彼

の都合と便宜の為に計画された筈だ。

そして、その男は誰だ？ 言うまでも無く、私はそれを自問した。ランデブーを嗅ぎだし、自分がそれに参加している今ほど、重要だと感じたことは無い。

『どんな天候でも』はもう一つの知りたい言葉だ。今日は、荒れた、スコールの多い夜だが風はSSWなのでそれ程寒くは無い。この海岸から沖へ吹く風で砂洲地帯の海を横切るのに大きな問題を起こさない。

我々の取っている航路について、私は、この複雑な海域の夜や霧が原因となる、麻痺させる様な不思議さに負けぬよう腹を据え、ぐるぐると廻り続ける内に二つの明滅する光の正体を突き止めた。一つは交互に赤と白が点滅、遠く、暗く、船尾に見える。もう一つは真つすぐ前で強い光で、白の明滅のみである。最初の、そして私がよく知らない光は、ワングーオーゲの灯台だと判断し、二つ目の光はメンメルト行きレースで目印となったものでノルダーナイ島の中心の光で十マイル程離れている。

私は時計を見る事ができず、厳密な時間が分からなかった。しかし我々は十一時十五分頃に出発したと思う。速く航行しており、煙突からは煙が排出され舳先の波も高くカールしていた。タグボートは強力な船で、負荷は相対的に小さいのだ。

それが大体の状況だった。私の窮地^{きゆうち}については、メンメルトでの霧に包まれた盗み聞きに比べたら百倍も危ないのに、この気の狂った冒険の危険について考える状況では無かった。危機がやって来たことを知っていた。しかしここへ連れて来た、向こう見ずの生意気さで対応し、ここを抜け出さなければならぬ。幸運は荒っぽい方法を好む。私は自分の運に賭け、見続けた。

乗客の振る舞いは妙だと思った。彼らは船尾の手すりの所にいたままで、後ろを悲しみの亡命者の様に見つめ、時々身振りを使い指さしている。低い地面の痕跡^{こんせき}はもう見えず、はしけの事を議論していると結論付けた。私が目を覚まし始めたのは、これに気が付いた時である。しかし、糸は切れるのが早すぎた。彼らはデッキの上を歩き回り始め、私は身を屈めねばならなかった。私が再び首を上げられた時、舵輪のグリムの周りにいて、身振りから理解すると、自分の時計を携帯ランタンで見たことから、コースと時間を議論している様だ。

我々は北へ向かっていて、海の膨らみ具合からランゲオーゲとバルトラムの間の、アキユマーエーの近くにいると分かった。

外海にでるのだろうか？ もしメンメルトではしけを切り離すなら、そうせねばならないと気付いた。もし私が

デイヴィスなら、人間の力ではどうにもならない、この航海のある固定された条件にもっと早く気付いた筈だ。我々は満潮の時に出発した。従って水は何処でも引いている。島の背後の支流となっている水道はゆっくりと通過不能になっている。メンメルトまでは、充分三十マイルはあり、三つの分水点を通過する。

バルトラム、ノルダーナイ、ユイストの背後だ。完全に信頼できる度胸のある船長ならば、暗い中でもこれらの一つは越えられるかも知れないが、殆どの航海は絶対に外側を通って行くだろう。私はシエンケル氏がグリムに抗議した理由を悟った。島による保護壁の後ろでは沢山あっても、開けた海で、はしけが曳航されるのを一度も見つた事が無い。実際そのような交通は保護された脇道の存在があるから可能なのだ。

グリムの専門技術と、はしけという悪夢が我々の目的地がメンメルトだと思わせたのだが、私は疑い始めた。砂地の分かり難い輪に以前我々はだまされたことがある。

この瞬間、私の考えに同調するかの様に、連絡装置が鳴りタグボートは速度を落とし始めた。私は身を縮め、グリムがはしけにいる男に、舵輪を右舷に操作し、タグボートの見張りには船尾にくる様叫んだ。次の命令で私は骨の髄まで震えた。それは『ボート下ろせ』だった。誰かが私のボートの吊り柱の所に着て、滑車を動かし始め前部ロープが若干緩み、ボートが少し傾いた。私は、ランゲオーゲまで泳ぐと、どの位遠くかと考え始めたところ強い、傲慢な声（私はその主を知らない）が鳴り響いた。『止める！ あの時ボートは不要だ。増水域など問題にならない。ジャンプできる、そうじゃないかねベーメ！』。その声は、楽しそうに笑った。『助かった！』と私は思った。『彼らがランゲオーゲまで泳ぐつもりか？』。私は安心して、息をついた。

タグボートは少しの間、増水域で無動力のまま揺れ、足音が船尾に戻った。『アハトウング』⁹⁷という叫びと笑い声が聞こえた。大きなドーンという音、沢山の擦れる音の後、我々は動き始めた。引き綱に大きな張力が加わり過ぎない様にしながら、やがて全速前進となった。乗客達はタグボートよりもはしけに乗って航海したい様だった。石炭の粉、綺麗な厚板と暖かい小部屋がある。静かになった時、私は外を覗いた。グリムは未だ舵輪を握っていて、振りむいて大事な荷物を見ながら、無表情にスポークを回していた。そして、結局我々は外海に出て行った。

左舷側に黒い泡に包まれた形が見えた。バルトラムの砂嘴^{さす}の東側である。我々がゆっくり、面倒な水域の上を風上の方に回り込むと、それは闇に溶け込んだ。我々は広い深い北海に出たが、揺れがまし、波しづきが増えたのでも分かる。ここで新たな動きが始まった。グリムは舵輪を見張りに持たせ、船尾の手すりに行き、はしけの信号

⁹⁷ Achtung, 'トーン語で「注意」。

を見て『左』、『右』という命令を舵輪の男に叫び返した。我々は風のそれぞれの向きに對して、一回、完全な円を描き、その後、海がずっと荒くなるところまで真つすぐに進んだ。そして島の海岸の波の音が聞こえる、際どい距離まで戻った。これで、明らかに試験航海と思われる物は終わった。それから乗客の移動のため、はしけを引き寄せた。彼らがデッキに上がってくると、真つすぐ下へ降りた。グリムはタグボートを決まったコースに取ると、舵輪を水夫に預け、濡れたオイルスキンをコートを脱ぎ、キャビンの天窓に放り投げると、ついて行った。

グリムが決めたコースは大体西だった。船首左舷側、二、三点離れた方向にノルダーナイの灯台が見える。メンメルトへのコースか？ 多分。だが私にはどうでも良かった。その夜、私の心はメンメルトからは遠く離れていた。それはイギリスに向けた航路でもあった。そう、私はとうとう理解した。私は偉大な光景の予行演習に参加しているのだ。多分これは、近い将来実行に移されるものだ。沢山の海上を渡るはしけが、半荷重の石炭の代わりに、一杯の兵隊を積んで同時に出發する。七つの整った船隊が、七つの浅い河川口から、帝国海軍の保護下で北海を横切り、イギリス海岸を肉薄攻撃するのだ。

寛大な読者は、私が非常に鈍感だとおっしゃるかも知れない。しかし私に反論させて頂きたい。私が書いている事象は最近のものだ。しかし、次の事を思い出してほしい。ドイツのイギリス侵略の可能性が大衆の話題になったのは、さらにこの話の後なのだ。

デイヴィスと私も決してー決してそんな事を考えた事が無い訳では無く、一、二回はそう思ってた。しかし彼単独、あるいは我々の航海中の一つの事象でも、確証を与えるものは無く、彼も火が点いて燃え出す事が無かったのだ。

最初から最後まで状況はひねくれていて、我々を間違った轍わだちの方へと、どんどん深く導いたのだ。そして考えが固定され、我々が探っていた秘密は防衛についてであって、攻撃だとは思わなかった。従て、完全な頭の宙返りが必要になったが、私は素人なのでそれは難しい。さらに、私は理解して暗い気持ちになったが、攻撃手段と言うのが不思議で、前代未聞なのだ。通常の侵略では大きな港と海上輸送艦隊が必要だが、我々の手掛かりは、そんな物を全く示さなかったのだ。

明白な方法を無視して、人目に付かない海岸線から、気付きもしない手段で、目立たない川と潮流の出口を改修、利用し、そして島の影に隠れて、喫水の浅い、はしけのアルマダを発進させ、同様に目立たず、従って警戒されていない敵の海岸を攻撃する。それが、あの余りにも大胆な、ある見方ではドン・キホーテ的な着想なのだ。今でも、私には信じきれない。しかし、それが本当に無い。一片つつ、パズルの破片は、秩序立った形を作っていく、

全体が見え始めた。「読者よ、全体の経緯はエピローグに記す。」

タグボートは夜の中を走った。スコールが我々に降りかかり、船尾の方へ音を立てて飛んでいく。バルトラムは見えなくなり、ノルダーナイの海岸は、時折の月明かりに輝いた。勝利に酔いながら、揺れるベッドにしがみつき、まだ考えてなかった事をかき回して、中身のほこりを払い、明るい焚火の材料にし、その残りが偉大な啓示のもとで、生命となり意味を持つのが分かった。

私の理解した喜びは事に関するもので、人では無かった。それは広大な国際問題に関してであり、個人にまつわる、激しい感情についてでは無い。しかし突然、自分とデイヴィスと現在の状況について呼び覚まされ、衝撃を受けた。

我々はコースを変更しているのが、廻りを取り巻く風の様子で分かった。グリムが近くに戻って来たのが聞こえ、タイミングを見て、廻りを観察した。左舷側には、ノルダーナイとその通りの、楽しそうな灯りが広がり、タグボートはゼーガットに近づいているのが分かった。船は廻って、波頭の崩れる水域を元気に進み、鼻先は南に向き風は舳先右舷からとなった。邸とヨットは私から一マイルと離れていない。そこには、この物語の三人がいる――つまり、もしデイヴィスが生きていれば。

我々はノルダーナイ港に上陸するのだろうか？ 天よ、何とすばらしいクライマックスでは無いか――私がここにいられさえすれば！ ここでの仕事は完了した。もう一步でデイヴィスに合流、そして我々の計画を成し遂げるのだ！

吊り柱の滑車を切るといふ窮余の策――この馬鹿さ加減に恥ずかしくなる――を思いついたがすぐに止めた。その代わりに、棧橋に近づく様子を一生懸命想像した。私のボートは右舷に吊り下げられている。それは棧橋と反対側になり、潮は引いている筈だ。私は到着時の忙しきの間に忍びおり、海に入り浚渫しゅんせつされた水道を何ヤードが泳ぎ横切る。泥の中を歩き『ダルシベラ』の近くまで行き、あとは泳ぐ。私は眼の中に入った塩を落とし固まった脚を延ばした：何と！ グリムは船尾から離れるのか？ 彼はキャビンに入り、水夫一人が舳先にいる：港に向けて舵をきる時だ、しかし違う――南に向けて、本土へと行く。一つの計画は挫折したが、デイヴィスの所にたどり着いたというのは、思っただけで消えなくなった。

我々の目的地はようやく疑いがなくなった。我々がいる水道はメンメルトに目隠しで行った時、横断したもので、

二日前にフェリー汽船で通ったものでもある。これはたった一ヶ所にしか通じない行き止まり航路であり、それはノルトダイヒの船着き場だ。考えてみると、全ての海岸で、タグボートがこの潮の状態に着けられるたった一個所なのだ。そこでは栈橋は右舷であり、私は、乗客が降りタグボートとはしけがメンメルトに戻るまで、この鷺の巢に縛り付けだ、そしてメンメルトでは夜明けとなり発見される。

しかし、逃げ出す手がある――何かの方法が或る筈だと自分に言い聞かせた。デイヴィスの、この不思議な地域についての知識を使い、彼の長い訓練の成果を試す方法がある筈だ。彼ならどうするだろう？ 答えは、水が引いている砂地の立てる穏やかな、聞きなれたフルフルという音だった。盛り上がった水は引いて行き、水道は狭くなる。右舷側には暗く奇怪に新しく浮き上がった砂地が長く続いている。デッキには二人しかいない。月はスコールの雲で、幸い隠れている。向こう見ずな計画を思いついた。時間だ。時間を知らねばならない！ 低く屈みジャケットで隠しながら私はマツチを擦った。午前二時三十分――潮はおよそ三時間半ひいている。引き潮は大体五時。彼らは七時三十分までには上陸するだろう。命の危険は？ 無い。照明弾を上げて救援者を呼ぶか？ 『どうしてもだ』の男と一緒に、ありそうも無い。それに誰も来られない、危険無しのだから。私の旅にはいい風といい潮が要る。グリムのコートは天窓にあり、二人とも髭が無い。

操舵手は前を向いて、難しいコースに集中している。風は完璧に吹き荒れている。私は膝をついて、吊り柱の滑車を調べた。何も不思議な事は無い。二連と単連のブロックだ（我々の揚げ綱と同じだ）。下の部分はボートに繋がり、引っ張り上げる方は吊り柱にしっかりと固定されている。しかしボートを水平に保つ何かが必要、さもないとボートは外側にころがり落ちる。これには、吊り柱に固定され、ボートの穴に通された二本の紐が使える。私は乗り出し、この紐をポケットナイフで切った。タグボートは砂丘の風下側で等喫水⁹⁸なので、多少ボートは揺れたが殆ど分らない。そして私は隠れ場所を抜け出し、船尾床板から後尾吊り柱を伝って、全ての動きに非常に気を付け、デッキの上に降りた。次の瞬間には天窓に行きグリムの長いオイルスキンコートを摘まみ上げた。（ここで、覗き見る誘惑に一瞬、駆られたが、天窓は曇りガラスで、下から固定してある。そこでコートを着て襟を立て舵のところへ抜き足差し足ですすんだ。）

機関室の天窓までいくと（つまりキャビンの天井よりずっと前）、普通に歩き始め、演壇の様なものを上り、操舵手の腕をグリムがした様に掴んだ。男は横にどき、はしけの事を何か呟き、私が舵を握った。グリムは無口な男

98 船首と船尾の喫水が等しい状態。

である。そこで私は、彼の部下を前の方を指して押した。彼は、私を調べようとは夢にも思わず――思う筈がないのだ――羊のように舐先のいつもの場所に行った。私は彼が『コーモラン』の乗組員の一人だとすぐに分かった。

私の策略は、小気味いい程簡単に進行した。我々は、ノルトダイヒの半分位、ブーゼティーフにあつて、ここは航行可能な幅がある。今の時間の潮では最大二百ヤード程ある。二つの微かな光が前方遠くに見え、一つは他の上にある。それが何を意味するかを知らなかったし、気にもしなかった。私はその光を舵の効果を見るためにしか使わず、汽船を操縦する気持ち良さを始めて体験した。幾つかの文書で操船原理を知ったが、今は何も破壊を邪魔するものは無い。

私は右舷に進んだ――こちら側を私は選択した――そして、光っている見張りの背中がちよつと動くまで、再びもう少し。彼は充分訓練された子分で『親分』を疑わずに信賴している。さあ、一杯に舵を切れ！ 私は舵輪のスポークごとに力一杯回した。見張りは警告を叫んだが、私は冷静に分かったと言うため腕を上げた。はしけから叫び声が上がった。そして私は、終わりが来た時、『一体、あのはしけはどうなるんだ？』と考えていた事を覚えてゐる。穏やかでゆっくりとした安楽死（砂は廻りを泥で囲まれている）で、私が気付く前に大惨事は襲つて来た。

我々の竜骨がバターののような物体に突入する前に、ほんの僅かの前兆となる震えがあつた。両側からの振動が次々に起こりタグボートが休み場所に入り込むと、舵輪は私の手の中で完全に固まった。

そのあと続いたパニックでは、私だけが整然と冷静に動いた、ただ一人の乗員と安心して言う事ができる。見張りは矢のように船尾に飛んでいつて、はしけに怒鳴った。グリムは慌てふためいて上がってきて――乗客がその後を付いて来た――すぐにデッキの上に出て怒鳴り呪った。私は舵輪を丁寧に譲り、彼はそれに飛びついた。しかし私は連絡装置をぶつ壊し舵輪のスポークに押し込んでおいた。タグボートは潮の圧力で傾き、風、暗闇そして雨が混乱を悪化させた。

私は煙突の後ろから後退し、船長職の服を脱ぎ捨てボートの所に行った。長く辛い座礁の経験からそれが必要だと知っていた。通り道で私は乗客の一人とぶつかり、彼を押しのけた。ところで、顔を見ると、昔の仮説を裏付けるものだった。それはドイツでは誰よりも、強要する権利を持つ男だった。

我々がボート吊りの所に行くとピストルの発車音の様なものが左舷より聞こえた――引き綱が切れたのだと思うが、喫水の浅いはしけはタグボートを通りすぎ、ゆらゆら動いて言った。新しい騒乱が起こり、『ボートを下ろせ』というグリムの声が聞こえた。しかし、命令は実行済みだ。私と、私の同盟者の乗客は、それぞれ滑車を外し

緩ませた。私はすぐに張り綱に捕まり、安定にして乗り込んだ。（タグは大きく右舷に傾き、乗り込むのに、あまり距離が無かった。我々のコースと潮の流れを見れば理由は分かる。）前の綱はフックがうまく外れたが、後ろの綱は遊びが無かった。『緩めろ』と私は横柄に言ったが、自分のナイフを探した。私の上にいた助手は従い、フックは外れた。私は、緩んだ滑車を放り出し、ボートは船を離れた。

第二十八章 二重の目的達成

正確にいつ座礁したタグボートの連中が、見解の相違を解消したか私は知らない。私がオール受けをセツトし漕ぎだした頃には潮と風に乗り、ノルダーナイの方に楽しそうに運ばれていった。その光は北の方に飛んで行く間ちらちらしていた。私は最初、何回か漕いではしけの方に行った―それは風下に向け、なす術^{すべ}がなくなっていた―しかしタグボートから見えなくなるや否や、向きを変えて自分の救助に専念した。叫び声の嵐が聞こえたが、それも間もなく聞こえなくなった。引き潮に乗って最高速！ 彼らはそこに五時間閉じ込められるだろう。道を間違える事はある得ない。私の頼りになる相棒に押され私は軽々と二マイルの道を行った。

最後に結構、ばたばたしてしまった。私の航路にリフガットが流れを注ぎ込むところで、私が首を回して、低い舷側と先の細くなったマストの『ダルシベラ』見ると、とんでも無い事になっていた。

そこに居ない！ 私がさよならを言った場所にいないのだ。

私は猛烈に漕いで、港に近づき眠っているフェリー汽船を過ぎると―天国を見た気分だ！―棧橋の横に着けているのが見えた。

「誰だ？」デツキに上ると下から声が聞こえて来た。

「シ―ッ！ 僕だ」

そしてデイヴィスと僕は暗いキャビンで、手探りでお互いを確認した。

「君、大丈夫か、大将？」と彼は言った。

「大丈夫、君は？ マッチだ！ 今何時？ 早く！」

「おい何てこった、カルザース。何をやったんだ？」（二日間の外出で、かなりすばらしい姿に見えたと思う。）

「三時十分過ぎか。イギリス侵略計画だ！ ドールマンは邸にいるか？」

「侵略？」

「ドールマンは邸にいる？」

「いるよ」

「『メデューサ』は浮いている？」

「いや、泥の上だ」

「畜生！ 僕たちは浮く事が出来る？」

「そう思うけどね、僕は場所を移動させられた」

「分かった、考える！　そして、とに角、引き出せ！　押し出せ！　綱を切って！」

何分か、大奮闘して、『ダルシベラ』を汽船の前、より深い水に泊められる処に移動した。その間に私は幾つかの事実を囁いた。

「どの位い速く準備ができる？」私は訊いた。

「十分」

「朝は何時？」

「日の出は大体七時、暁は大体五時。何処へ向かう？」

「オランダかイギリス」

「彼らはいま侵略するのか？」デイヴィスは静かに言った。

「いや、まだ訓練中だ」私は、荒々しく笑った。

「それなら、まだ待てる」

「正確には、一時間半待てる。陸に上がってドールマンをやっつける。告発するんだ。彼ら二人を乗せて連れ出す。今か、それとも永久に無しかだ。何てこった！　いつもと違うじゃないか！」（彼はパジャマを着ていた。）

「海用の服を着ろ！」

彼がまともな服を着ている間、私は事実を再び説明し始め、計画を話した。

「監視されているか？」私は訊いた。

「多分ね。『コーモラン』の奴等に」

「『コーモラン』はここにいない？」

「いる」

「乗組員は？」

「今日はいない。グリムがタグボートに乗せて行つた。僕は見ていた。それに、カルザース、ブリッツがここにいるぜ」

「どこに？」

「外の処だ――見えないか？」

「見ていなかった。船長は他に行っている。ベーメもだ。三番目の要素もだ。それに『コーモラン』の乗組員も。」

今は誰もいない。だから脱出するのは、今か、永久に無しかだ」

もう一度我々は長い棧橋と静かな通りを行った。雨は我々の背中を打っている。空中を走っていったのだと思う。何の疲れも感じなかった。デイヴィスはは時々走った。『悪党め』と呻きながら」

「僕は正しかった―ただ反対だったんだ」彼は一度以上、ぶつぶつ行った。

「いつも本当に正しかった―あの水道が全ての問題のキーなのだ。チャタム、我々のたった一つの東側の基地だ―北海基地も小艦隊も無い―クラウチとブラックウオータの端の誰も気にしない海岸に簡単に上陸する」

「乱暴な計画だと思うよ」私は言った。

「どうして？ まあ、そうだな。どんな侵略だつてそうさ。しかし徹底的だ。ドイツ的だ。他の国にはできん。すべて分かり始めた―何てことだ！ ウォツシュに上陸だ―一番近いし、ここみたいな砂地だ」

「ドールマンの様子はどうだった？」私は訊いた。

「親切だよ。でもちよつと妙で、びくびくしている。今、話すには長すぎる」

「クララは？」

「彼女は大丈夫。まで！ カルザース―いや気にするな」

我々は、邸のドアの夜間ベルを見つけ、威勢よく鳴らした。上の窓が開いた。私は、

「フォン・ブリューニング中佐からのメッセージだ―緊急だ」と呼んだ。

窓は閉まり、じきにホールの電灯が灯り、部屋着のドールマンがドアを開けた。

「お早う、X大尉―」と私は英語で言った。

「止めろ、我々は友達だ、馬鹿！」

ドアが急に閉められそうになったが、非常にゆっくりと開いた。我々が入っていった。

「静かに！」彼は小声で叫んだ。汗が彼の切り立った頭に浮かび、両頬は熱で赤くなっていた。しかし口は微笑んでいた―何と言う微笑みか。我々に音を立てずに歩くように身振りで示し（余計なお世話だ）、知っている居間へと案内した。電気を点け我々の方を向いた。

「それで？」と彼は微笑みながら言った。

私は時計を見た。もし私の手が自分の人相を示していたなら、この天の下で最も惨めな^{みじ}ごろつきに見えただろう。

「我々は多分、お互いを理解しています」と私は言った。

「説明していると時間が無くなります。僕たちはオランダかイギリスに向け、遅くとも五時には出発します。貴方達をご招待いたします。僕たちは、貴方に訴追を免除します――後で話す条件で。僕たちの船には寝台は二つしかありませんから、貴方の他にはクララさんしか乗せられません」

彼は微笑みながら、簡潔な宣言を聞いていたが、怒りがこみあげて来た様に笑いが凍り付いた。突然、彼は笑い始めた（低い、皮肉な笑い）。

「馬鹿者め」彼は言った。

「途方もない、お節介の間抜けな若造め。私は、君を片付けたと思ったよ。私を訴追しないだとか？ 五時まで待つだとか？ 五分やるからさっさとイギリスへ帰って呪われろ。さもなきやスパイとして拘留^{こりゅう}だ。私を何んだと思っているんだ？」

「ドイツに寝返った、反逆者ですね」とデイヴィスは言ったが、力が無い。我々はこの激しい攻撃に呆氣に取られていた。

「反――？ 頭の狂った、若造の大間抜け！ 私はイギリスのスパイだ。お前たちは何年もの仕事をぶち壊そうとしている――もう少しでうまく行く処なのだ」

瞬間、デイヴィスと私は仰天してお互いの眼を見合わせた。彼は嘘を付いている――誓ってもいい。しかしどうやって確認する？

「何故、デイヴィスを遭難させようとした？」私は機械的に言った。

「ふん！ 彼らが私に追い出させた。安全だと分かっていた、それに見ての通りここにいるだろ」
たった一つだけ可能性があった――彼を逃がさぬ最後の策略。

「分かりました」私はすこし考えたあとと言った。

「引き上げましょう。――デイヴィス、黙って。――僕たち間違っていた様に見えるのでね。しかし、僕たち、すべて知っていますからな」

「大声を出すな、間抜け！ 何を知っていると言うのかね？」

「私は、メンメルトでこの間メモをしていましたな」

「不可能だ！」

「デイヴィスのお陰ですよ。簡単では無かった、もちろん。だが私は充分聞きましたよ。貴方はイギリスの旅の報告をしていた――チャタムですよ。イギリス側の攻撃計画、想像上のね。疑いもなく、貴方は正しい側にいます

からね！　ベームと他の連中はドイツの防衛計画から――全部聞いたのです――七つの島とその間の七つの海峡（デイヴィスは全てを暗記している）、そして陸側では鉄道の環。エセスを中心にして陸軍を動かし、塹壕に配置する――全部役立たない、無効だ！　貴方は正しい側……」

「大きな声を出すな、害獣め！」

背を向いてドアに一、二歩近づこうとした。手はメンメルトでカーテンを触っていたように、部屋着の膨らみを触っている。彼は二度、質問しようとして、二度止めた。

「おめでどうと言わせてもらうよ、君たち」と彼はとうとう言った。さらに背筋を延ばし我々に再び向き、

「君たちは、筋違いの熱意ですばらしい事を成し遂げたようだね。しかし、既に私に話過ぎた。私は君たちを逮捕させねばならない――純粹に形式によつてね」

「どうも、ありがとう」私は遮った。

「僕たちは五分無駄にしてしまった。時間が無い。五時に出発します。形式により、貴方に一緒に着て頂きたい」「どういう意味だ？」彼は唸る様に言った。

「私は、メンメルトで貴方を出し抜いた。音量の問題はありましたがね。貴方の友人達は、貴方の知らない間に会合を決めていたのですよ。そして私は、筋違いの熱意でその会合に出席、他の件に関する実用試験に参加してきましたから。七つのシールからのイギリス侵略ですよ」（デイヴィスは肘で私をつついた。）

「ピストルはそのままにしておくべきですね。それからベルも押さない。お望みなら、逮捕させるんですね。でも秘密はもう安全な所に渡っている」

「嘘だ！」この点、彼は正しいのだが、証明は出来ない。

「そんな程度の用心もしてないと、思われるのですか？　名前は明かせませんけどね」

彼はうめき声のようなものを立て、椅子に座り込んだ。我々の眼の前で歳をとり、めそめそしそうだった。

「訴追をしないと云っていたが、それにクララは？」彼はぶつぶつ言った。

「僕たちは友達ですよ！――僕たちは友達ですよ！」デイヴィスは爆発した。

（私は突然、眼に霞みがかかり、彼がまっしぐらに歩いて行き、肩に手を置くのがみえた。）

「あいつらは僕たちと貴方を追っている。一緒に行きましょう。彼女を起こし、話して。遅すぎないうちに」
X―は彼の手にひるんだ。

「話す？　私は娘には言えない。君が言え、若いの」

彼は椅子の中に崩れ落ちてしまった。デイヴィスは私を見た。

「彼女の部屋はどこ？」

「この部屋の上だ」

「行けよ、カルザース」デイヴィスは言った。

「僕は駄目だ――引きつけを起こさせてしまう」

「僕はいやだよ」

「何を言っている、お前！　じゃ、二人で行こう」

「音を立てんでくれ」　杲然とした声が言った。

我々は縮こまっている男を置いて二階へ忍び足で上った――幸いにも、厚い絨毯敷きだ。目的のドアは半分開いており、部屋には灯りが点いていた。敷居にはほっそりした白い人影が裸足で、ネックレスも無しで立っていた。

「どうしたのですか、お父さん？」　彼女は囁き声で言った。

「誰に話していらしたの」

私はデイヴィスを押した出したが、彼は後戻りした。

「シッ！　怖がらないで」私は言った。

「私だ、カルザースだ、それにデイヴィス。僕たち、入ってもいいですか、ほんのちょっと」

私はゆつくりとドアを大きく開いたが、彼女は後ろに下がり喉を押さえた。

「貴方のお父さんの所に行つて」私は言った。

「僕たち、君とお父さんを『ダルシベラ』でイギリスに連れて行く。――今すぐに」

彼女は私の言葉を聞いたが、眼はデイヴィスの上を動いていた。

「私には、分らない」　彼女は口ごもった。震え、すくみ、そんなにも心に訴える当惑は、私には見ていられなかった。

「頼むからデイヴィス、何か言えよ」私はぶつぶつ言った。

「クララ！」　デイヴィスは言った。

「僕たちを信用してくれるかい？」

私は彼女が小さく叫ぶのが聞こえた。レースと麻布のひらひらする音がし、その娘はデイヴィスの腕の中にいた。疲れた子供の様に、しくしく泣き、小さな白い足は彼の大きな、不格好なブーツの上――ばら色の頬は粗末な

ジャージーの上にあった。

「四時過ぎだ、大将」私は冷酷に言った。

「僕は下の彼の所に行く。いうまでも無いが荷作り無しだ。ここから三十分以内にでなければ」私はぎこちなく下に不器用に降りていく（また、あの退屈な映画！）と、彼はストープに書類を乱雑に突っ込んでいた。

そこには、とろとろした残り火しか無かったが、それに気付いていない様だった。

「三十分以内に替えて」テーブルの上にあったピストルをこっそりポケットに入れ、私は言った。

「話したのか？ 君たち二人、娘をイギリスに連れて行ってくれ。私は残ろうと思う」彼は再び椅子に沈みこんだ。「だめだ。貴方が行かなければ、彼女も行かない。彼女のためにも、――三十分以内に」

私はあの三十分を簡単に書いておきたい。デイヴィスは私より早くヨットの準備の為戻った。私はその後の辛い部分に立ち会わねばならなかった。義母との問題もそうであり（単なる記録としておく）、今でも心に残るものがある。結局、彼女は思慮のある女だったのだ。

私が、その娘を次に見た時にはボートに乗る時の短いスカートと帽子で、奇跡を見る様に冷静で元気だった。だが、その娘のためには、彼を先に行かせるべきでは無かった。そして、外にでて雨をどんなに健全に感じた事か。私は二人を急かせて港に行き、油っぽい鉄の梯子（はしご）を急ぎ、はかなく小さなイギリス国土に足を降ろさせた。これが安全な故国の最初の庇護（ひご）なのだ。

港からの脱出は邪魔もされず、気付かれもされなかった。我々が棧橋の出口を廻り込んだ時、恐ろしい夜明けのきざしが、見え隠れする月の光と混じっていた。帆を巻いたまま、リフガットを下り潮流の風下側に向かった。

我々はブリッツの眼の前を通過する必要があるとデイヴィスは言った。勿論、開けた海に出るまで、デッキ上には彼だけだ。日が始めていた。水は一番低い時で、遙か南、こげ茶色の砂の塊の間に、二つの座礁した点が見えたと思う――しかし、ひよつとして単なる空想かも知れない。水は手すりを越え、デッキの上を流れながら、我々は外側の増水域を通り、ユイストの風下側、可能な限り風上に向け、必死に西に向かった。

「潮流に乗ってエムズを上り、オランダのデルフセイルへ行こう」私は急ぎ立てた。

駄目だとデイヴィスは考えた。ドイツに近すぎる。それにブーゼティーフからの潮流を横切る必要がる。ロッタム島の裏側をすり抜けた方がいい。我々はメンメルトを過ぎ、ユイスターリーフとコリーヌの埋もれた金塊の上を通った。エムズの広い泡立つ二つの河口を横切り、ロッタムまで行く。オランダ領の群島の最初の、ちっぽけで孤立した

小島だ。それは、我々の風上、舳先の方に近づいていた。

「あの島の後ろに行く」デイヴィスは言った。

「そうすれば、危険は去る。道は分かると思うが、次の海図を取ってくれ。そして休め、大将。クララと僕に任せておけ」

（彼女は殆どの間デッキにいた。頼りになるヨット乗りで、疲れ果てた私より、全くましだった。）

私は滑り易い板の上を這って行き下に降りた。

「どの辺にいる？」ドールマンは風下側のソファから起き上がり叫んだ。そこにある種、失神状態しっしんじょうたいで横になつていた様だ。

本―彼の書いた本―が膝から滑り落ち、床の溜まった油の中に口絵が浸かったのが見えた。ストーブは動いてしまい、サロンの中は汚れとゴミで酷い状態だった。

「ロッタムの沖だ」

私は言つて海図を探すため、膝立ちになった。彼の眼には、私が理解すべき表情があつたと思う。しかし、私は自分を責める気にはなれない。この三日の昼夜だけでなく、一ヶ月もの苦しいデイヴィスとの航海の緊張の積み重ねが現れ、すぐその安全と成功が、私を覆いつくしたのだ。私は海図を階段越しに渡すと、揺れる船室の中をよろめいて、予備の帆袋の上に横になった。海の嵐の様な音と揺れが私の廻りにも頭上にもあつた。私は、このあと起こつた事についてデイヴィスの言つた事を書いておこう。私が警鐘けいしょうに気付き、前部ハッチから上に上がった時には、全ての悲劇は終わり、何もできなかったのだ。

「中尉が階段を上がってきた」私は言った。

「君が下についてから間もなくだ。滑車の紐に掴まって風上のロッタムの方を、よく知つた海の様に見ていた。そして僕たちの方にひどく危なそうに歩いてきて、僕は舵をクララに任せ、手助けに行つた。下に行くように言つたが、いう事を聞かず船尾にやってきた。

「私に舵をとらせろ」彼は、半分は自分に言った。

「海は荒れすぎている―ショートカットがある」

「有難う」私は言った。

「ここは知っている」（皮肉に言つたつもりは無い。）

彼は何も言わず、僕たちの後ろについた。足を風下側の横木にかけ、驚いた事に、私の肩越しに、コースについて、極めて適切な事をいい始めた。ブイを指さし、海図では間違っている事（私の知る通り）、これは訂正するべきだとかだ。

僕たちはシルトの砂洲に着き、ロツタムとボツシュフラットの間のちょっと面倒な潮流を考え、南に向きを変える必要があった。クララはジブシートを操作していた。⁹⁹ 私は海図を見ながら舵をとっていた。（そんな時、どの位私が気を取られているか知っているだろう。）その時、海が大きく上下し、僕達は大忙しだった―そして―私がたまたま振りむくと、彼はもういなかった。彼は一、二分黙っていた。彼が最後に言ったのは（私は、殆ど気にしていなかった。僕たちは大変な海にいた。）何か『ショートカット』のことだ。彼は静かに滑り降りたんだろう…上着と大きなブーツを着ていた。

我々は、少し探して見たが、結局無理だった。

その夜、オランダ本土と島の間の迷路の様な海岸を通りながら、小さなオーストマホルンの村近くに停泊した。ヨットを驚いている漁師の手に預け、道路と鉄道で急ぎ、ハーリンゲンに行き、ロンドン行きの汽船に乗った。それ以降の我々の個人的な経緯は、世の中には無関係で、これで私の話しは終わりだ。

【編集者による】

多少火で損傷を受けているが、興味深い文書が私の書斎の机の上にある。

これはドイツ政府に宛てた、秘密メモのコピー（暗号）であり、ドイツに寄るイギリス侵略方法を具現化したものである。署名は無いが、内部証拠および、カルザース氏によりノルダーナイの邸のストープから持ち出されことにより、誰が書いたかに疑問の余地は無い。多くの理由によりこのテキストの翻訳を印刷することは問題外である。しかし私はこの概要をここに記そうと思う。

これを記す事自体、極限まで思慮を欠いた行動となるが、この種の内容について、少ない専門家の意見の傾向から判断したものである。これ以降の物語は、それ自身に語らせる。しかし、前書きにも述べた様に、我々の基本的目的は皆にこの内容を届けることである。これらの事象が発生した後に、有能かつ権威のある者により発せられた警告にも拘わらず、ドイツの危険性を下らない『お化け』と考えたがる者が少なくなく、この場合、根拠のないロマンが押し付けられたと想像しがちである。殆どの者（イギリス人もドイツ人も）は、現在、ドイツは単独で我々に対峙し、海岸に軍隊を送り込む程、強力だとは思っていない。

このメモは、単独行為を少なくとも十年は延期するが、前記の見方を否定する。当面の議論のためイギリスに對抗する三国の同盟を想定する。そして通常手段を用いた、その後の研究により疑いも無く、三国同盟はドイツ政府により、計画の採用に際し仮定されたものである。我が方は広範に分散された軍事力をもつので、イギリス上陸に成功するためには、北海の一時的制海権を確保する必要がある、しかし常備海軍が集中されかつ予備役が動員されると敗退は必然となる。

海上通運が切断されると、侵略軍の命運は極めて危うくなる。私はこの様に穏やかに述べるが、それは失敗から確実に学ぶとは思われず、従って当然、戦略の教理に拘わらず容易さの方が経験より大切だと思ってしまうからだ。

我々のデリケートな経済圏に対する、タイミングのいい、よく計画された攻撃が与える影響を、誰も計算できない。王国の工業力の中心である、豊富な賃金労働者人口を持つ北部および中部の町がこれに当たる。

この様な攻撃を想定すると、連携作戦（多分、この様なケースは容易に想像される）となるのは明らで、同盟でのドイツの役割は侵略者に特化される。

彼らは海軍力の損害無しに、最初の衝撃が完了するまで、表面上中立を保つ。我が海軍は破壊されるか、

こちらの方が可能性が高いが、辛勝により戦力が削がれてしまい、小さくても無傷の海軍力に持ちこたえられなくなる。

その時、戦力バランスを維持しながら攻撃に出る。その損害は？ 私はこのメモを見て始めて、あの大胆な作戦の全ての利点を把握した。ドイツの持つ、あらゆる道徳的、精神的、そして地理的優位性が最高に利用され、我々の全ての短所は我々に向け利用される。

二つの根源的原理がある。完璧な組織化と完璧な秘密性である。最初の点について、幾つかの一般的考慮事項がある。筆者（北海の両側の国語について、優れた話し手である）はドイツは連合王国侵略に関し、ずば抜けた実行力を持つと指摘している。

彼らは偉大な陸軍を持ち（その何分の一かで充分）、高い能率を維持、しかし、我が方に対しては、海上輸送しない限り無意味な武器を持っている。彼らは、特異な組織力を持ち、手の込んだ細部だけでは無く、全体として理にかなった包括力も持っている。彼らは、機械に考える力を与える技術力、最後の歯車まで力を伝達する力、それと同時に最高中枢に責任を集中することが出来る。海軍は小さいがその目的の為に効率が良い、建造、訓練され、そして人員を充当する方法原理を持つ——明確な役割が用意され、水兵の徴兵制度による、無尽蔵の予備役に支えられる。

彼らは陸軍と海軍の協力について研究し、訓練をしている。彼らは遠く離れた、希求する植民地や属国が無く、防衛力の分散が不要、従って自国水域に対する攻撃には、柔軟に対応できる。最後に、我が国と比較して、経済的独立性と全てのヨーロッパへの商業的陸上輸送が可能である。彼らに、失うものは少なく、得るものは大きい。

筆者はここで停止し、我が国の状況と比較するが、私は彼のポイントだけをまとめる事にする。我が国の陸軍は規模が小さく、世界中に散らばっていて、深刻な欠陥を持った方式で管理されている。我々は国家防衛について決まった考えも持たず、それを考え出す、競争力のある権威者もない。状況は未だ、文民による論争の段階だ。陸海軍の協力は研究された事も演習された事も無い。侵入撃退、考慮に値する緊急装備計画、国内防衛組織の緊急対応に関し、挙げるべき計画も無い。

我が国は偉大で、各種観点から、すばらしい海軍を持つ。しかしそれが保証しようとする物の重要性に比べると不十分であり、同様に欠陥のある制度しか無い。系統的に建設も、人員充当もされず、まったく不適當な予備役しかなく、これらは戦争発端で全て使い尽くされてしまう。志願兵の登録準備の形跡すらも無い。我が巨大な帝国

防衛および商業機能の複雑さに取り乱し、扱いにくい機構をスムーズに管理する頭脳だけでは無く、相手の目的やシステムを研究するそれも著しく欠いている。

我が国には北海に海軍基地が無く、北海海軍も北海政策も無い。最後に、非常に危険な経済状況にある。

次に筆者は侵略方法について考察し、自明なものを直ちに否定する。それは、軍や輸送部隊を一つ又はそれ以上の北海の港から送る案である。それから、特にエムデン（我が国沿岸に一番近い）を出発港とする案について議論する。私がこれに言及するのは、次の様な事を覚えて置いてもいいと考えるからだ。つまり、彼の案が採用されたので、侵略方法の言及を見たドイツの狡知な新聞は、エムデンの航路をせつせと迫り、（注意深く）欺瞞として使ったのだ。

彼の指摘によると、北海の港に対する反論は、条件の良し悪しに拘わらず、実際はあらゆる侵略方法にも当てはまる。一つは秘密を保つのが不可能になることだ――秘密漏洩は致命的だ。輸送船団の集合は、攻撃タイミングが熟す何週間も前にイギリスに知られてしまう。大きな港は国際的で、スパイ予備軍で満ちている。ドイツの場合、さらに適当な船舶が充分に無く、必要数は商船群の数の減少になってしまう。他の理由は実際の上陸点である。これらはイギリス東海岸の開かれた場所でなければならない。他の問題点は考えられてもいない。深い海に錨を下ろした輸送船から、ボートにより安全に、素早く、秩序立った軍隊の輸送および上陸は非常に難しい。非常に急いだ即興的な抵抗でも、屈辱的な大災害を与え得る。しかし、最初が一番重要な段階である。侵略者は敵地を確保し直ちに予定した線に塹壕を掘り、最初の基地とせねばならない。これが出来れば、他の手段が可能となる。輸送船を使い、機甲部隊、重火器、大量の備品を持ち込み前進できる。出来なければ、無力であり、海上輸送も決して安全になる事は無い。

そして、唯一つの論理的な案が提出される。軽量の武装の歩兵部隊を大型の海洋対応された、はしけで送り出すもので、強力なただし喫水の浅いタグボートで曳航される。これらは各種軍艦により強固に護衛される。そして可能なら満潮時に小艦隊で海岸を直接攻撃する。

この遠征はドイツの海岸の特徴を計算に入れて、完璧な秘密のもとで用意される。大きな港は、全く関係させない。はしけとタグボートが浮くだけの充分な水深があれば良く、これらにはフリースラント海岸のの七つの目立たない河川を充てる。これらには小さな港や水門が既にある。一つ例外があるが、それはノルデンの潮汐河川である。これは七つの河川の一つに入っていると考えられる。『カルザース』が想定したヒルゲンリーダーシールは、

覚えていると思うが、彼も見ることが無かったが、実際には全く役に立たず港も無い。これらの河川は改修が必要で、深くして、一般的に運河とすべきものだ。表面上は商業目的とし、夏の間のリゾート地開発目的による島々の往来を装う。

遠征部隊は七個の独立分隊から組織される――その重苦しい性格を考えると、多すぎない数である。全ての海岸線は、海の方角には島々と砂洲地帯で隠される。陸方面にはフリースラント半島の環状鉄道が、七つ川の背後の連絡路を形成する。エセンスは計画が最終段階となった時にのみ、指揮系統の現地の中心地となる。

七人の指揮官により統制される、各部隊の全ての詳細な動きは、何ヶ月も前に秘密かつ正確に、ベルリンの本部からの指令に基づき準備される。秘密が漏れる事も想定されているが、その場合防衛目的に見える様に工作されている――ドイツの動員計画の要綱はフリースラント湾岸の偵察部隊の確立であると思わせる。実際、同じ機構が使われ、その攻撃部隊への変更は可能な限り最終時点まで秘密にされる。

同様の警戒が実地作業に対しても適用される。秘密を全て把握しているのは、四人のみ（情報より、この様に計算される）である。一人は帝国海軍を代表（これは、我々の友フォン・ブリューニング）する。他（ベーム）は六つの運河の工事とはしけの建造を監督する。三人目の機能は二つある。地元労働力とでも言うべきものを組織化する――つまり、乗船補助、タグボートの乗員、そして最も重要なのが、七つの小艦隊をそれぞれ割り当てられた水道を通過し、開けた海へと誘導する水先案内である。その対象者は、海岸に精通し、社会的地位は平均的漁師や村人とほぼ同格、時期が来た時には、各作業に対応する適切な人物を選択出来る必要がある。それらの人材に關しては、必要に応じ、徴兵局が直ちに法的効力が發揮出来るとする。

三人目のもう一つの機能は、湾岸でのスパイに対する警察業務である。疑いのある事は全てフォン・ブリューニングに報告され、彼は基本的に現場から離れない。包括的に判断すると、あの陰気なグリムは非常に目的に適していたと思われる。

筆者が特定する四番目の人物はこの計画の推進者で、二つの国家間の不可欠なリンクである。彼は信頼できる情報供給を担当し、イギリスの部隊配備、上陸地に選択された海岸の水路情報、近郊で調達可能な物資、そして、占領すべき戦略的場所を提供する。彼は遠征途中中までは、主指導指揮官を努める事になっている。それまでの間（他に仕事が無ければ）彼はノルダーナイに居住し、他の三人と緊密に連絡し、商業活動を統括しそれによって、詮索好きな者の目を眩ませる。「この文書には、メンメルトについては言及がない」

筆者は『上陸地点』について述べ、これについて詳細な議論を展開する。非常に興味深いが、私には彼の視点について行けない。筆者は、これらについて、二か所に絞り込まれるとする。エッセクス海岸のファウルネスとブライトリングシーの間かウォッシュである――後者の方が圧倒的に確立が高いと述べる。

侵略に適した風向きがあったとした場合、敵の使用可能な輸送手段に対して、筆者は最も防衛が手薄な、かつ小艦隊の特性に合った場所を選びだす。それは、遠征部隊の出発地点に似た地域である。

その様な場所はウォッシュの北側のリンカーンシャーの海岸でイーストホランドと呼ばれている処である。そこは低地で海に対して堤防があり、フリージアの様に、潮が引いた時には砂洲が現れる地域である。そこには、ボストンディープスと呼ばれる、深い水道があり、東から接近するのが容易、十マイルほど、海岸と分離、並行する、ロングサンドと呼ばれる堤防が走っている。堤防は東からの海の盛り上がりに対する、自然の防波堤となっている。(この部分のみが要警戒である。) その背後のディープスは、干潮時平均三十四フィートあり、防衛部隊に極めて適する停泊地となり、海岸は防衛部隊の大砲の充分な射程距離内に入る。

ちなみに、この場合のみが、ドイツの一等戦艦が同口径の大砲を備えたイギリス海軍より有利になると記述されている。後者は重すぎて、仮に停泊地に入れたとしても、喫水が深すぎその辺りの航行が危険となる。つまり、この河口には、春の満潮時でも三十一フィートしか無い、砂洲が存在する。

前者は北海を自由に航行可能な事を前提に建造され、喫水はちょうど安全な深さとなる。一方、イーストホランドは工業地帯の攻撃が容易な距離にあり、そこに対する猛攻が侵略者の本当の目的であると、筆者は力説する。

彼は、その様な攻撃に対する準備は全くされていない(本来の軍事的意味で)と指摘する。また、ノーフォーク海岸を除くと、イーストホランドはイギリス海岸で最もドイツ海岸に近い。前述されたエッセクス平地よりも、距離はずっと短く、深さのある海で簡単に近づけ、イギリス海峡の海岸やハーウィッチより西側のテムズ河口の様に容易に航海できる。距離はボルカム島より南西、約二百四十海里、ワンガールオーゲより二百八十海里である。島の外縁で小艦隊が集合してからの航行時間は三十から三十四時間と見積もられる。

上陸が次の論点である。これは一つの潮汐の間に実行されねばならないし、可能である。六ヶ所のシールで半日ごとに、平均二時間半の水深が充分深い時間帯がある。ノルデンではさらに長い時間を使える。しかし、これらの時間は、装備の可動準備が出来ていて、時間通りに実行されれば充分なものとなる。満潮は七か所の出発点でおおよそ同じ時間となり、二つの一番離れた場所カロリーネンシールとグレートシール間で三十分の違いしか無い。

最後に、この様な遠征に関し、付随する特別なリスクについて、無造作に計算されている。

×―中尉は、彼の計画を熱心に推進しているものの、盲目的楽天さで計画してはいない。このドイツによるイギリス侵略計画には、少しでも比較出来るような前例が、近代に全くない。侵略は、どの様な試みにせよ危険な物である。だが×―中尉は、彼の計画の利点はリスクを上回り、それにリスクに関しては、どんな計画でも同様のものがあると言う。

以下×―中尉の論点である。

天候の予想にどの様な技術が使われたとしても、悪天候は遠征の妨げになろう。その通り。しかし上陸のため、輸送船からボートへの乗り換えは悪天候下では、同様かさらに大きな危険を孕む。輸送船は悪天候に耐え、待つ事が可能だが、遅延はどの様な場合でも致命的である。迷わず迅速に行動することがそのような企ての最重要事項である。

はしけには浸水、沈没の危険性は無いのか？ これは論点から外れた問題だ。結果を得る価値があるならばリスクは取らねばならない。戦場では何万人もの兵隊の命が犠牲となる。

小艦隊は航行中の魚雷艇の攻撃により士気が低下しないか？ その通り、しかしこれは輸送船隊についても同様で、こちらの場合、一発でも当たれば十倍も多くの兵隊を海の底に送り込み、救助の可能性もより小さい。いずれの場合も、護衛艦隊の効果的働きと監視に依存する。

一方文書の途中では、次のような場合が述べられている。×―中尉の知る、二人の冒険者が大成功に輝き、非常に運悪くイギリスが計画をタイミング良く知ると、軽喫水のボートの大群を送る事が有り得る。その場合ドイツの軍艦を避け、小艦隊がシールを出ようとしている間に襲いかかる事になろう。その場合、遠征は失敗に終わる事になる。しかし、そのような事は恐れるべきでは無い。向こう見ずな勇氣はイギリス海軍には充分あるが、この海域の潮流や砂洲の専門的知識は完璧に欠如している。イギリスの海図は役立たずで、この問題について、いかなる形にせよ、海軍省により研究された証拠は無い。（彼はそう報告する。）

ここで私に言わせて欲しい。私は、初期の章、彼らが大きな河口にいる頃に示された『デイヴィス』氏の視点は、全く正しいと思う。大きな問題が浮上する前、間接的に考えられたとしても『水道理論』は正しいと信ずる。これは心に止めて置くべきで、さもないと私の記述は無駄になってしまう。

結論としても一言付け加える。現在広く信じられている公理がある。つまり、イギリスの島々に対する侵略の心配は無い。もし制海権を失えば、イギリスは飢え、その方が、安く確実にイギリスを服従させられると言うものだ。これは、大雑把で無価値の公理であるが、繰り返している内に信じられることになる。それは『制海権』は勝ち取るか、永遠に失うかを暗黙の内に仮定する。つまり我々は今日、持っているが、明日は永遠に失うかも知れないと言うことである。それ処か、引き分け程度の戦争でも、海に対する力は考え得る将来、拮抗し得るであろう。我々の敵に取って、貿易経路の遮断、長い湾岸にある港湾の封鎖、中立国の物資供給による利益の妨害などで我々を二年以内に服従させるのは不可能である。この間に我々は回復し、国内資源を使って再建をし、制海権の奪還を目指すのだ。

正しい公理は、連続的侵入以外に、我々に停戦を迫る手段は無いという事だ。我々の精神は頑健であると思いたい。しかし、事実は事実であり、ここで述べた様な、連続する侵攻の結果を考えてみれば、それらは最も頑固な心にも響く。王手なのだ。

いずれにしても、ドイツでこれらの件をどう見ているか、我々は知っている。

【あとがき (千九百三年、三月)】

この本の出版準備中に、数多くの、正に、これまでに述べられた弱点や危険性への対策が政府により講じられた。国防委員会も設定されたが、この委員会が取り除こうとしている無関心と混乱について、残念な事に、極めて異常なコメントが寄せられた。

フォース川に新規の北海海軍用地が確保された――すばらしいが遅い決断で、現状の停泊地が、如何なる意味でも『基地』となるのに、十年かそれ以上かかる。北海艦隊も創設された――これも結構な対策である。しかしその艦艇は最新ではなく、上に述べた現在の状況では、主要なドイツ艦隊には全く対抗出来ないことを覚えておく必要がある。

最後に、動員委員会は志願制による予備役が望ましいと、曖昧な報告を(他の報告と共に)行った。この答申がどのような結果になるかは不明である。先ごろの、熟慮を欠いた実験の大失敗の後継とならない事を期待したい。

すべてのイギリス男子に体系的に海兵または銃の訓練をする時が来た事は明確ではないか？

この作品は Erskine Childers(1870 - 1922)による、1903年に発表された小説「The Riddle of the Sands」を翻訳したものです。ソースは Project Gutenberg です。